

# たのもと遺跡

丹生川ダム水没地区（五味原遺跡群）

埋蔵文化財発掘調査報告書 第5集

1998

岐 阜 縿

財団法人 岐阜県文化財保護センター



西区III層出土のIV期の土器

## 序

丹生川村折敷地五味原地区においては、平成5年度から8年度までの4年間に5遺跡の発掘調査が実施されました。岐阜県土木部河川課宮川上流河川開発工事事務所が行う丹生川ダム建設に伴い、埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査が岐阜県教育委員会に委託され、財団法人岐阜県文化財保護センターが担当した次第です。

本報告書は、平成8年度に調査を実施した「たのもと遺跡」の発掘調査結果をまとめたもので、丹生川ダム水没地区（五味原遺跡群）埋蔵文化財調査報告書の最終の第5集にあたります。調査の結果、特に第4集までの遺跡の調査では希薄であった縄文時代後期前葉について、住居跡や周辺の生活跡およびまとまりのある土器群・石器類などの貴重な資料を得ることができました。

五味原地区という限られた地域内での集中的な発掘調査が完了したことで、それぞれの遺跡の関連づけや対比等が、今後は重要なになってくると考えられます。発掘調査によって蓄積された資料によって、連綿と続くこの地域の縄文時代についての研究が、さらに深まることを大いに期待したいものです。

報告書の刊行にあたり、発掘調査および出土品の整理・報告書の作成に際しまして、関係諸機関・各位から多くのご指導・ご協力を賜りました。また、関係諸機関、丹生川村教育委員会、地元の関係各位の皆様からは終始多大なご支援・ご協力を賜りました。

末尾ではありますが、改めて厚くお世話になった方々にお礼申し上げます。

平成10年3月

財団法人 岐阜県文化財保護センター  
理事長 篠 田 幸 男

## 例　　言

1. 本書は岐阜県大野郡丹生川村折敷地字西田に所在するたのもと遺跡（遺跡番号21601-08762）の発掘調査報告書である。
2. 本調査は丹生川ダム建設に伴うもので、宮川上流河川開発工事事務所から岐阜県教育委員会を通して委託を受け、財團法人岐阜県文化財保護センターが実施した。
3. 発掘調査は、平成8年度に実施し、渡辺誠名古屋大学文学部教授の指導のもとに上原真昭が担当した。
4. 本書に記載した遺物の実測は次の者が主に行った。  
土器 清田由美子 田井孝子 所 洋子 荒井尚子  
石器 牛丸富士子 臨済純子 上原真昭  
土偶 古田奈緒子
5. 実測図のトレースは次の者が主に行った。  
中村映子 臨済純子
6. 遺物の写真撮影は、佐藤右文氏（奈良県在住）に依頼した。
7. 本書の執筆については、第2章第1節は清見村立清見小学校教頭岩田修氏に玉稿を賜った。第3章第3節9は古田奈緒子が執筆し、他は上原真昭が執筆した。自然科学分析に関しては、それぞれ執筆者名を明記した。編集は上原が行った。
8. 事前地形測量は（株）興栄コンサルタントに委託して行った。
9. 空中写真撮影と空中写真測量は、（株）イビソクに委託して行った。
10. 自然科学分析は、（株）パレオ・ラボに委託して行った。
11. 発掘調査および報告書の作成にあたって次の方々や諸機関からご助言・ご指導・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・順不同）  
小島俊彰 戸田哲也 谷井 彪 橋本 効 金子直行 細田 勝 田中 彰 富井 深  
大石崇史 領塙正浩 岩田 修 吉朝則富 藤根 久 藤本健三 岐阜県工芸試験場  
丹生川村教育委員会 上宝村教育委員会
12. 発掘調査作業ならびに調査記録および出土品の整理等には次の者が参加した。  
古田奈緒子 矢嶋和子 岩佐 勇 白田清子 大平 勇 白田良恵 飯塚八十子 黒田美奈子  
上村かな子 黒木明三 清水佐市 新家正次 山田博子 志多綾子 西田幸平 和座雅子  
瓜田英明 白川良平 沢之向保 白石和代 稲本 崑 坂谷正道 清水 武 倉本正幸  
藤田利光 渡瀬 保 牛丸富士子 柚村幸子 清田山美子 田井孝子 所 洋子 田村由美子  
横井さだ子 垣添敦子 中村映子 荒井尚子 大西和子 瀬戸幸子 岩中裕子 臨済純子
13. 土層および遺物の色調觀察は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準上色帖』（1993）を参照した。
14. 調査記録および出土品は、財團法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

# 目 次

## 序

## 例言

第1章 発掘調査の経緯.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 発掘調査の経過.....	2
第2章 遺跡の環境.....	4
第1節 地形・地質環境.....	4
第2節 周辺の遺跡（五味原遺跡群）.....	6
第3章 西区の遺構と遺物.....	9
第1節 基本的層序.....	9
第2節 遺構と出土遺物.....	13
第3節 包含層出土遺物.....	39
第4章 東区の遺構と遺物.....	74
第1節 基本的層序.....	74
第2節 遺構と出土遺物.....	74
第3節 包含層出土遺物.....	84
第5章 自然科学分析.....	97
第6章 まとめ .....	106
主要参考文献	

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置	1
第2図 グリッド設定図	3
第3図 遺跡付近の地形図	5
第4図 五味原周辺の遺跡分布図	7
第5図 地形測量図（調査範囲・上層断面の位置）	8
第6図 土層断面図（西区）	10
第7図 遺構配図（西区）	11
第8図 西区の遺物出土状況	13
第9図 SB1	15
第10図 灰内出土土器（SB1）	15
第11図 SB1 遺物出土状況	16
第12図 SB1 出土土器	17
第13図 SB1 出土石器(1)	18
第14図 SB1 出土石器(2)	19
第15図 SB1周辺図（焼土跡群・SX15・SX23）	22
第16図 焼土跡群出土遺物	24
第17図 SX15出土遺物	25
第18図 SX17周辺図	26
第19図 SX17出土石器	26
第20図 SX21周辺図	27
第21図 SX21（水場遺構）	29
第22図 SX23	30
第23図 SX21・SX23出土遺物	31
第24図 西区のおもな土坑・ピット	34
第25図 西区の土坑・ピット出土遺物(1)	36
第26図 西区の土坑・ピット出土遺物(2)	37
第27図 SX2 出土土器	38
第28図 西区II期の土器・IV層出土の石器	39
第29図 西区III期の土器	41
第30図 西区IV期の土器(1) 第1群 1類・2類	43
第31図 西区IV期の土器(2) 第1群 5類・第2群	45
第32図 西区IV期の土器(3) 第2群・3群・8群	47
第33図 西区IV期の土器(4) 第4群～6群	51
第34図 西区IV期の土器(5) 第8群・9群	53
第35図 西区IV期の土器(6) 第1群 1類	55

第36図	西区IV期の土器(7) 第1群2類～第2群	56
第37図	西区IV期の土器(8) 第2群～4群	57
第38図	西区IV期の土器(9) 第5群～8群	58
第39図	西区IV期の土器(10) 第9群	59
第40図	西区IV期の土器(11) 底部	60
第41図	西区III層出土石器(1)	62
第42図	西区III層出土石器(2)	63
第43図	西区III層出土石器(3)	64
第44図	西区III層出土石器(4)	65
第45図	西区III層出土石器(5)	66
第46図	西区III層出土石器(6)	67
第47図	西区V期の土器	67
第48図	西区VI期の土器	69
第49図	西区II層出土石器(1)	71
第50図	西区II層出土石器(2)・石製品	72
第51図	西区出土の土偶	73
第52図	西区の歴史時代の遺物	73
第53図	遺構配置図(東区)	75
第54図	土層断面図(東区)	77
第55図	東区の遺物出土状況	79
第56図	FP1周辺図および周辺出土石器	79
第57図	SX22周辺図	80
第58図	SX22	80
第59図	SK5	81
第60図	東区の遺構出土土器	83
第61図	東区I期・III期の土器	84
第62図	東区IV～V期の土器	85
第63図	東区VI期の土器(1)・時期不明の土器	87
第64図	東区VI期の土器(2)	89
第65図	東区VI期の土器(3)	90
第66図	東区出土土器(1)	92
第67図	東区出土土器(2)	93
第68図	東区出土石器(3)・石製品	94
第69図	東区出土石器(4)	95
第70図	東区の歴史時代の遺物	96

## 付 表 目 次

第1表 五味原周辺の縄文遺跡一覧表	6
第2表 SB1ピット一覧表	15
第3表 不明遺構一覧表（西区）	21
第4表 土坑・ピット一覧表（西区）	33
第5表 不明遺構一覧表（東区）	78
第6表 土坑・ピット一覧表（東区）	82
第7表 大型植物化石一覧表	101
第8表 放射性炭素年代測定結果	102
第9表 たのもと遺跡出土木材の樹種同定結果	105
第10表 遺構出土のIV期の土器（西区）	106
第11表 石錐計測表	111
第12表 石錐計測表	112
第13表 削器計測表	113
第14表 ヘラ形石器計測表	113
第15表 両側剝離底のある石器計測表	113
第16表 扱入石器計測表	114
第17表 二次加工のある剝片計測表	114
第18表 使用痕のある剝片計測表	114
第19表 石核計測表	115
第20表 石錐計測表	115
第21表 接合剝片（SX15）計測表	116
第22表 打製石斧計測表	116
第23表 横刃形石器計測表	120
第24表 碟器計測表	120
第25表 磨製石斧計測表	120
第26表 磨石・凹石類計測表	121
第27表 石皿計測表	124
第28表 砕石計測表	124
第29表 石製品計測表	124
第30表 石器組成表	124

## 図版目次

□絵カラー図版 西区III層出土のIV期の土器

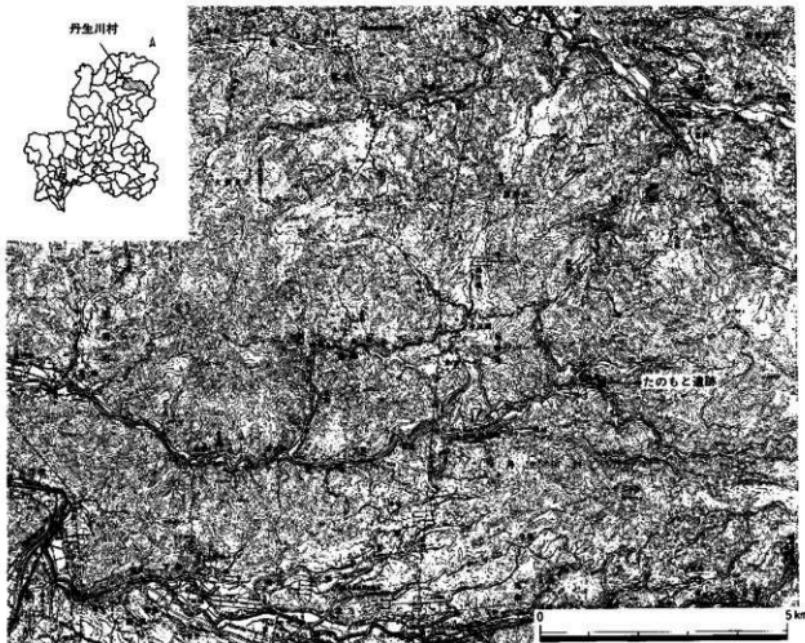
- 図版1 1. 遠景 2. 遺跡全景 3. I列北壁セクション 4. 西区作業風景  
図版2 5. 西区全景 6. SB1(検出前) 7. SB1石圓炉 8. SB1 9. 石巻出土状況(SB1)  
10. 削器出土状況(SB1)  
図版3 11. 土器出土状況(SB1炉内) 12. 焼土跡①(SX1) 13. 焼土跡②(SX11)  
14. SX17遺物出土状況 15. P 3  
図版4 16. クルミ出土状況(SX21) 17. 水場遺構(SX21) 18. 木片出土状況(F10区III層)  
19. IV期第5群5類土器出土状況(G9区III層)  
図版5 20. 東区全景 21. 東区作業風景 22. SX22 23. SX24 24. クルミ出土状況(SX22)  
図版6 25. SB1出土土器 26. SB1出土石器1・西区遺構出土石器1  
図版7 27. SB1出土石器2 28. SB1出土石皿 29. SB1出土石器3・西区遺構出土石器2  
図版8 30. 西区遺構出土石器3 31. 西区遺構出土土器1  
図版9 32. SX21出土土器1 33. SX21出土土器2 34. SX21出土木片 35. SX23出土土器  
図版10 36. 西区遺構出土土器2 37. SX2出土土器  
図版11 38. 西区II期の土器 39. 西区III期の土器1(第29図-194) 40. 西区III期の土器2(196)  
図版12 41. 西区IV期の土器1(第1群1a類197) 42. 同2(同198) 43. 同3(同2類199)  
図版13 44. 同4(第1群1a類) 45. 同5(同1b類)  
図版14 46. 同6(同1c類) 47. 同7(同2類) 48. 同8(同3類) 49. 同9(同4~6類)  
図版15 50. 同10(同5類201) 51. 同11(同202) 52. 同12(第2群203) 53. 同13(同204)  
図版16 54. 同14(第2群) 55. 同15(同)  
図版17 56. 同16(同205) 57. 同17(第3群1a類206) 58. 同18(同207) 59. 同19(同208)  
60. 同20(同1b類209) 61. 同21(同2類210) 62. 同22(同6類211)  
63. 同23(第4群214) 64. 同25(第2群330)  
図版18 65. 同26(第3・4群) 66. 同27(第5群4類215) 67. 同28(同5類216)  
68. 同29(第6群1類218) 69. 同30(同2a類219)  
図版19 70. 同31(第5~6群) 71. 同32(第7群)  
図版20 72. 同33(第8~9群) 73. 同34(第9群)  
図版21 74. 同35(第8群2b類221) 75. 同36(第9群1a類222・同1b類224)  
76. 同37(同1b類226) 77. 同38(同2a類228) 78. 同39(同1a類223)  
79. 同40(同2b類229) 80. 同41(同3b類231・232)  
図版22 81. 西区III層出土石器1 82. 西区III層出土石器2  
図版23 83. 西区III層出土石器3 84. 西区III層出土石器4  
図版24 85. 西区III層出土石器5(石皿) 86. 西区V期の土器1 87. 同2(551) 88. 西区出土の土偶  
図版25 89. 西区VI期の土器1 90. 同2(554) 91. 歴史時代の遺物1(604) 92. 同2(605)

- 図版26 93. 西区II層出土石器1 94. 西区II層出土石器2
- 図版27 95. 東区の遺構出土遺物 96. 東区遺構出土土器(611) 97. 東区遺構出土土器(610)  
98. 東区I期の土器(625)
- 図版28 99. 東区III期の土器 100. 東区IV~V期の土器
- 図版29 101. 東区IV~V期の土器(650) 102. 東区VI期の土器1(第2群2c類651)  
103. 同2(同2d類653) 104. 同3(同3類654) 105. 同4(第1群)
- 図版30 106. 同5(第2群1類~2類) 107. 同6(第2群4類・第3群)
- 図版31 108. 東区出土石器1 109. 東区出土石器2
- 図版32 110. 東区出土石器3 111. 東区出土灰釉陶器1 112. 東区出土灰釉陶器2  
113. 東区出土陶器
- 図版33 出土した大型植物化石
- 図版34 たのもと遺跡出土木材の顕微鏡写真(1)
- 図版35 たのもと遺跡出土木材の顕微鏡写真(2)
- 図版36 たのもと遺跡出土木材の顕微鏡写真(3)

## 第1章 発掘調査の経緯

### 第1節 調査に至る経緯

たのもと遺跡の発掘調査は、岐阜県宮川上流河川開発工事事務所による丹生川ダム建設に伴う緊急発掘調査の一環として行われた。丹生川ダム水没地内埋蔵文化財発掘調査の経緯については、第1集の「西田遺跡」の発掘調査報告書に記述されているとおりである。たのもと遺跡は、第2集の「カクシクレ遺跡」のB地点およびC地点や、第4集の「丸山遺跡」と同様に事前の試掘調査により確認された遺跡である。水没地内のうち荒城川右岸上流部の水田部分については、平成6年8月に小型重機を利用して、34ヵ所のトレンチを入れ試掘を行った。その結果、階段状に造成された水田の6ヵ所で縄文土器片等の出土を確認し、水田部分の地名から「たのもと遺跡」として新規に埋蔵文化財包蔵地の登録をした。開墾等によりほとんど旧地形を留めていないのが現状であったが、遺物包含層が深く遺構が残存する可能性の高い西区(1,100m<sup>2</sup>)と、比較的まとまって遺物散布が見られる東区(800m<sup>2</sup>)の2地点で発掘調査を行うこととした。



第1図 遺跡の位置

## 第2節 発掘調査の経過

発掘調査は、平成8年度に行った。4月下旬までに現場事務所設置等の準備や、地形測量および重機による表土剥ぎを行い、4月30日より現地での調査を開始した。

発掘調査にあたっての地区設定は、国土地標に合わせて8×8mの区画を設け、北から南へA～P、西から東へ1～25と番号をつけてグリッド名を表すことにした。A列北壁は、国土地標第VII系のX=23916、1列西壁は、同Y=19380となっている(第2図)。調査区が2地区に分かれていたので、16列以西(7～16列)を西区、20～25列を東区と呼ぶことにした。以下、調査経過を記述する。

第1・2週(4.30～5.10) 西区の杭打ちを終え、H・I列のI～II層の掘削から開始する。縄文晩期の土器片が出土。5月8日の午後に丸山遺跡にて2遺跡合同の調査始め式を行った。

第3・4週(5.13～5.24) H10区東西トレンチおよびH11区南北トレンチで縄文後期の遺物包含層(III層)を確認した。G9～F9区の南北トレンチでは砂礫の堆積が厚く、1m下がってもIII層は確認できなかった。I11区の砂礫層直下でSB1の石窓い戸の一部を検出した。I13区II層から土偶片出土。5月23日に東区の杭打ちを完了。H10区III層で焼土跡を検出した(SX1)。

第5～8週(5.27～6.21) I13区IIc層で縄文後期土器が一括出土(SX2)。G10区東側からI12区にかけては、重機により砂礫層除去を行った。I12区III層で焼土跡を2基検出した。

第9・10週(6.24～7.5) 雨天の日が多かった。6月27日は西区湧水のため、東区で作業を行う。SB1周辺で新たに検出した焼土跡の実測および写真撮影を行った(SX6～9)。

第11・12週(7.8～7.19) 焼土跡をさらに3基検出(SX10～12)。SB1床面より多くの石器が出土。SB1の炉内より炭化クルミ片および土器片が出土した。

第13・14週(7.22～8.2) SB1の精査を進めピットを確認した。SB1の西で玉髓フレークの集中出土地点を検出(SX15)し、周辺の平石の配置を実測した。G12区III層の斜面上で磨製石斧3本と打製石斧1本がまとまって出土した(SX17)。SB1周辺でピットを検出(P8まで)。G9区南東部III層で、縄文後期前葉の土器片が多く出土。H10区IV層より縄文前期の土器が出土。

第15・16週(8.5～8.16) G11区III層より土偶片出土。ピット掘削前のSB1の実測・写真撮影を行った。G9区はシルト層に入り遺物の出土は見られなくなった。

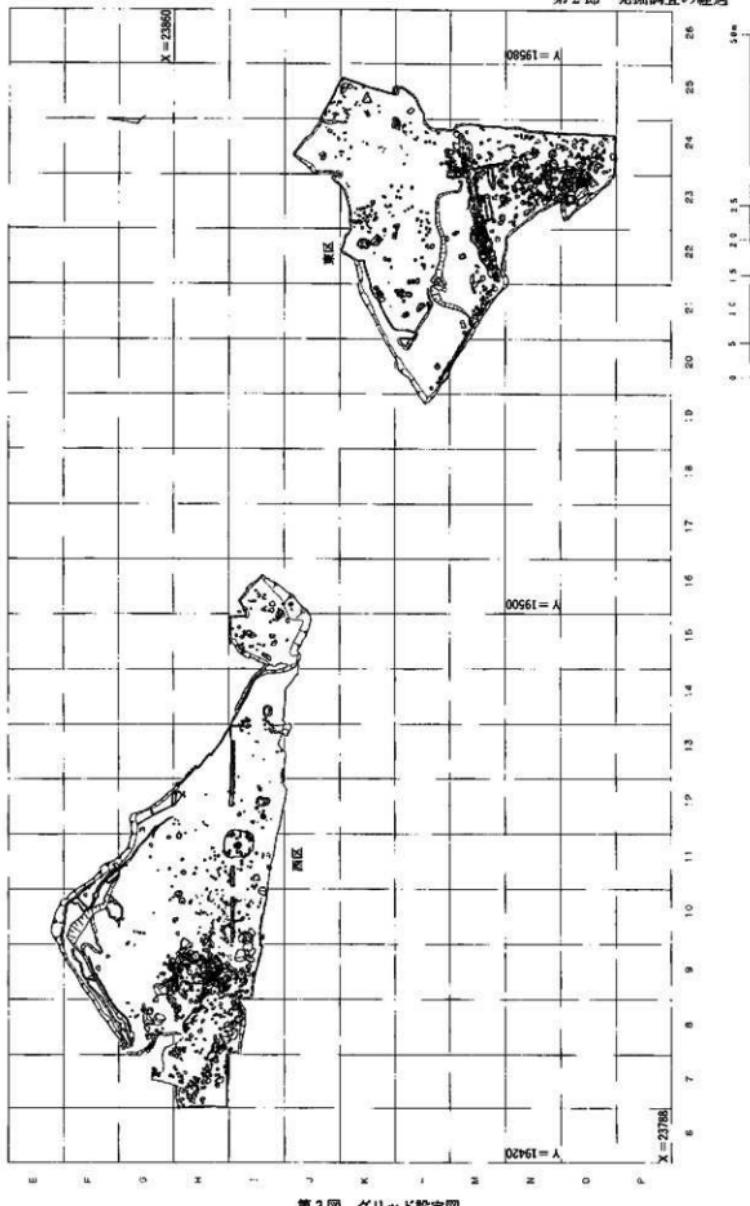
第17～21週(8.19～9.20) G10区III層より縄文後期土器がまとまって出土。8月27日より雨天が続き、西区は湧水のため作業困難となる。8月30日より東区の調査に入る。K22区III層より縄文晩期土器が出土。K25区IV層より縄文早期土器が出土。

第22～24週(9.23～10.11) L20区IV層で縄文早期の炉穴を検出した(FP1)。SB1・SX2・FP1出土の炭化材の年代測定を依頼した。L22～23でピット群を検出(P30～39)。

第25・26週(10.14～10.25) 西区の調査を再開し、G10区北側で水場遺構を検出(SX21)。10月19日に現地説明会を実施した。10月23日に空中撮影を行った。

第27～29週(10.28～11.15) SB1北側の土層観察用トレンチから縄文土器片が出土(SX23)。P56より打製石斧が2本出土。11月11日に現地調査を終え、翌12日に遺物等の引越し作業を終了した。11月15日に、SX21周辺の追加測量を行った。

以後、財團法人岐阜県文化財保護センター飛騨出張所内の国府整理所にて整理作業に入った。



第2図 グリッド設定図

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地形・地質環境

#### 1 地形的特徴

丹生川村五味原地域には、わずかに緩斜面と河岸段丘がみられ、そこには縄文時代以降の人跡が発見されている。この五味原の平坦地は、荒城川本流と主な支流である大脇谷との合流点付近に発達している(第3図)。たのもと遺跡は、荒城川本流添いに位置し、河川によって形成された地形上に位置している。

近隣では、6500年前のアカホヤ火山灰層が確認されているので、それ以前からこのような地形形成が始まっていたと考えられる。現在、この辺りの荒城川の河床では岩盤が露出していることから全体的に侵食環境にあったが、扇状地状の低位河岸段丘がみられるので、一時期は堆積物が集積するようなことがあった。荒城川流域では、低位段丘はよく発達しているが、中位段丘やこのような扇状地状の緩斜面はあまり見られない。

#### 2 地質的特徴

この付近の地質は、中生代白亜紀最後期(約6千5百万年前)に噴出した大雨見山層群中の酸性火山岩である明ヶ谷溶結凝灰岩層と、新生代第四紀更新世中期(約60万年前)に噴出した上宝火砕流堆積物の分布域である。これらの火山岩は、いずれも大規模な火砕流堆積物であり、高温で堆積して自らの熱で軽行などが溶結した、いわゆる溶結構造を有している。

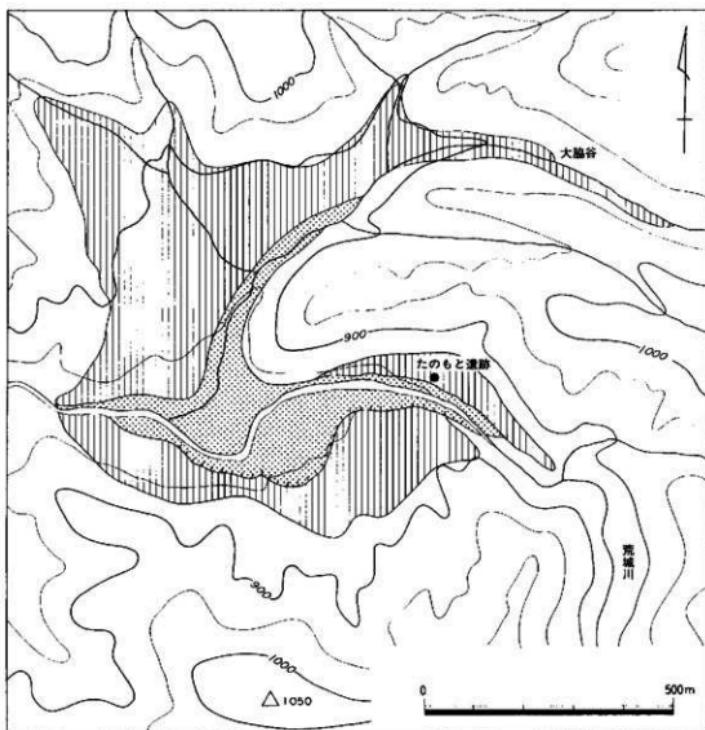
明ヶ谷溶結凝灰岩層の特徴は、笠原氏によれば、最大層厚300mであり、流紋デイサイト～流紋岩で、粗粒のカリ長石・石英・斜長石・黒雲母・单斜輝石などの鉱物を含んでいる。少し上流側には、上宝火砕流堆積物が広く分布している。上宝火砕流堆積物は流紋岩質で、斑晶は斜長石・石英・黒雲母などで、溶結構造を持つ本質レンズを多く含む。かなり多孔質で加工しやすいが、石器としては柔らかすぎるのであまり利用されていない。また、周辺には古生層の荒城川層が見られ、河川の礫中にも綠色岩、泥岩などが多く存在している。五味原グラノファイアも分布している。

このように、石器や石には、多孔質で柔らかい上宝火砕流堆積物は使用しないで、比較的硬い大雨見山層群の流紋岩類をよく利用している。

大雨見山層群の溶結凝灰岩と上宝火砕流堆積物(溶結凝灰岩)は、いずれも溶結構造をもつ、風化に対しての抵抗力の弱い岩石であることから、五味原地区の緩斜面形成の一要因になったことが考えられる。

#### 〈参考文献〉

- 笠原 芳雄 (1988)「大雨見山層群—飛驒外縁帯の白亜紀末期の湖成層と火砕流堆積物—」  
『飛驒の大地をさぐる』(教育出版文化協会)



低位丘

層状地・傾斜面

現河川

波丘崖

山地

第3図 遺跡付近の地形区分

## 第2節 周辺の遺跡（五味原遺跡群）

たのもと遺跡が所在する岐阜県大野郡丹生川村折敷地の五味原地区は、北アルプスを水源とする荒城川の上流部にある。荒城川は宮川、神通川を経て日本海に通じており、河口から五味原地区までの距離は約100km程である。集落の中心部に西田遺跡があり、その北西斜面に丸山遺跡および牛垣内遺跡、対岸にカクシクレ遺跡、上流にたのもと遺跡がそれぞれ半径500m以内の範囲に位置している。

五味原地区では丹生川ダムの建設に伴い、上記の5遺跡7地点の発掘調査が行われた（第1表No.1～7、第4図）。この5遺跡に平成元年の林道工事の際に発掘調査された上流部のなべり谷遺跡（第1表No.8）を加えた6遺跡8地点によって構成されるのが、五味原遺跡群である。この遺跡群では、限られた地域内での縄文早期後半から晩期までの人々の生活の跡を、ほとんど切れ間なく辿ることが可能である。同遺跡群の出土遺物総数は30万点に上り、遺物研究のみならず、集落の変遷や集落構造等を探る上でも重要な遺跡群である。

縄文時代の資料が充実している五味原遺跡群であるが、弥生時代、平安時代、中世、近世の各時代の遺物や遺構も断片的に検出されている。なお、村内および周辺の歴史的環境については、丹生川ダム関連の同遺跡群発掘調査報告書第4集までに詳述されているので、省略する。

第1表 五味原周辺の縄文遺跡一覧

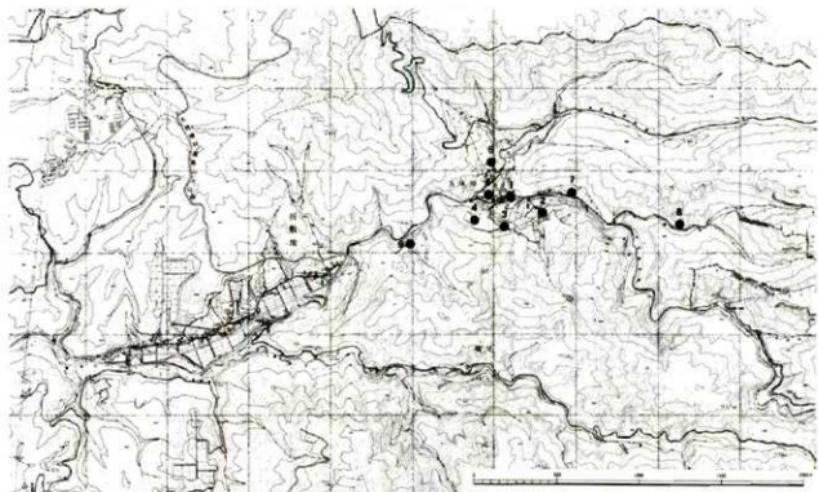
No.	遺跡名	縄文時代				調査結果		備考	
		早期	前期	中期	後期	晚期	おもな遺物	遺構	
1	西田	○	○	○	○	○	・早期、後晩期を中心に多量の土器や石器類 ・後晩期の土器や土製品	・住居跡21軒 ・焼窯集落遺構73基など	H5・6年度 発掘調査
2	カクシクレ (A地点)	△		○		○	・中期および後晩期の土器や石器類 ・各種植物遺体や昆蟲遺体	・住居跡1軒 ・水さらし場遺構など	H7年度発掘 調査
3	カクシクレ (B地点)	△		○	○	△	・中期初頭および後期後半の土器	・ビット ・石組み遺構	H7年度発掘 調査
4	カクシクレ (C地点)				○	△	・後期中葉から後葉の土器 ・打製石斧や磨石類などの石器類	・土坑 ・巨大炭化木	H7年度発掘 調査
5	牛垣内	○	△	○	○	○	・早期、中期、晩期のまとまった土器群 ・平安時代の墨書き跡	・住居跡9軒 ・焼窯集落遺構4基など	H6・7年度 発掘調査
6	丸山	○	△	○	△	△	・中期初頭の土器群 ・ナツメ玉状の琥珀製品	・住居跡3軒 ・土坑57基など	H8年度発掘 調査
7	たのもと	△	△	△	○	○	・後期前葉の土器や石器類 ・クルミヤドチなどの植物遺体	・住居跡1軒 ・水場遺構など	H8年度発掘 調査
8	なべり谷			△	△		・後晩期の土器	・未検出	H8年度調査
9	細越洞						・磨製石斧、打製石斧、石皿等の石器類		丹生川村史

\*No.は、第4図の遺跡番号に準ずる。

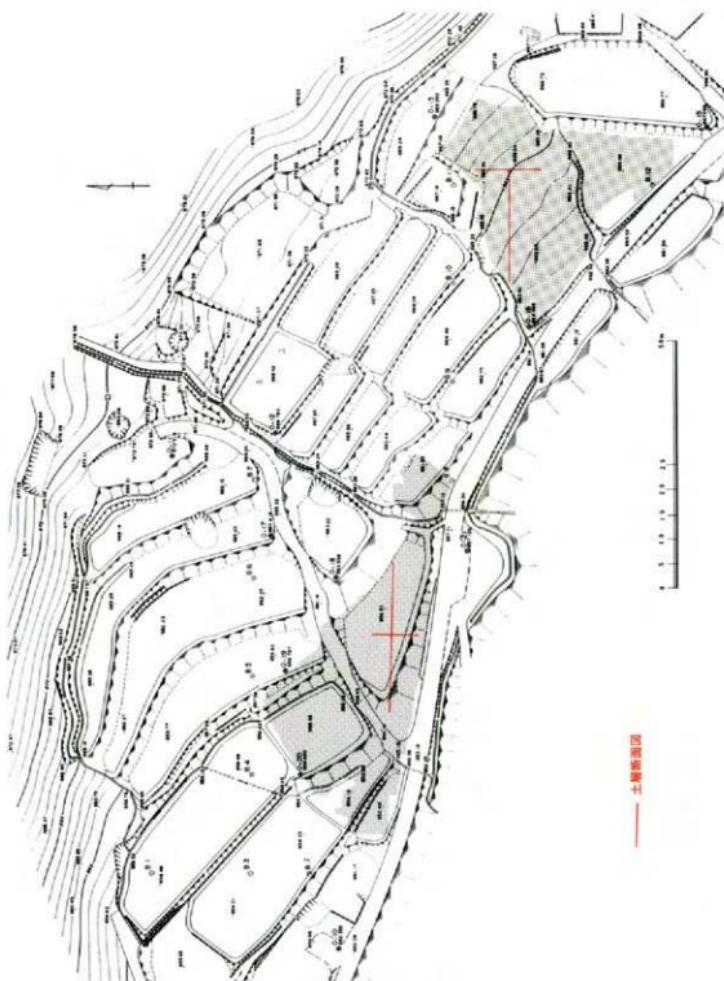
\*表内の○・△・△は、発掘調査で出土した土器を中心とした遺物の量による。



五味原遺跡群（1995年12月撮影）



第4図 五味原周辺の遺跡分布図



第5図 地形測量図（調査範囲、土層断面の位置）

## 第3章 西区の遺構と遺物

### 第1節 基本的層序

たのもと遺跡の西区は、標高860m前後の段丘上にある。水田が数段にわたって造成されており、山麓の傾斜地が削平と埋土により耕作地化されたため、現況から旧地形を見極めるのは困難であった。調査範囲は、階段状の5枚の水出部分で、特に東側の2枚の水田は段差が激しく先端ほど埋土による人为的な堆積部分が大きいと判断し、重機による表土の剥ぎ取りを行った。

第I層は、耕作土である。水田造成前の畑の耕作土と考えられる部分についても第I層として扱った。第II層は、非常に不安定な層である。縄文後晩期の遺物を含む黒褐色土中の隨所に、砂礫層の堆積がみられた。第III層は、縄文後期前葉以前の遺物包含層である。大小の礫が混じる厚い砂層の直下にあり、全般に堆積は浅めであった。第IV層は、一部に縄文時代前期の遺物を含む褐色土層である。以下第6図を参照に補説したい<sup>1)</sup>。

第I層 (10YR5/2 灰黃褐色土) 表土で、水田や旧耕作地の耕作土である。

第II層 部分的に砂礫が混入する不安定な層である。非常に複雑な堆積状況を示していたが、a～eまでに細分した。なお、前後の層がサンドイッチ状に混在する部分については、その主となる部分を優先してダッシュ記号（'）をつけて区別した。

II a (10YR4/2 灰褐色土) しまりのない砂質土である。縄文晚期の遺物を含む。

II b (5 Y7/2 灰白色土) 径3cm前後の礫を含む砂の層である。遺物はほとんどなし。

II c (10YR3/1 黒褐色土) ややしまりのある砂質土である。縄文後期中葉以後の遺物を含む。

II d (2.5Y7/6 明黄褐色土) 大小の礫が多く混じる砂礫の堆積層である。

II e (7.5YR3/2 黒褐色土) しまりのない砂質土で、3～5cmの礫を含む。

第III層 (10YR2/1 黒色土) しまりのある砂質土で、炭化物を多く含む（遺物包含層）。G10区以北では、上層のII d層との間に鉄分が沈着して硬化した層を挟んでいる。

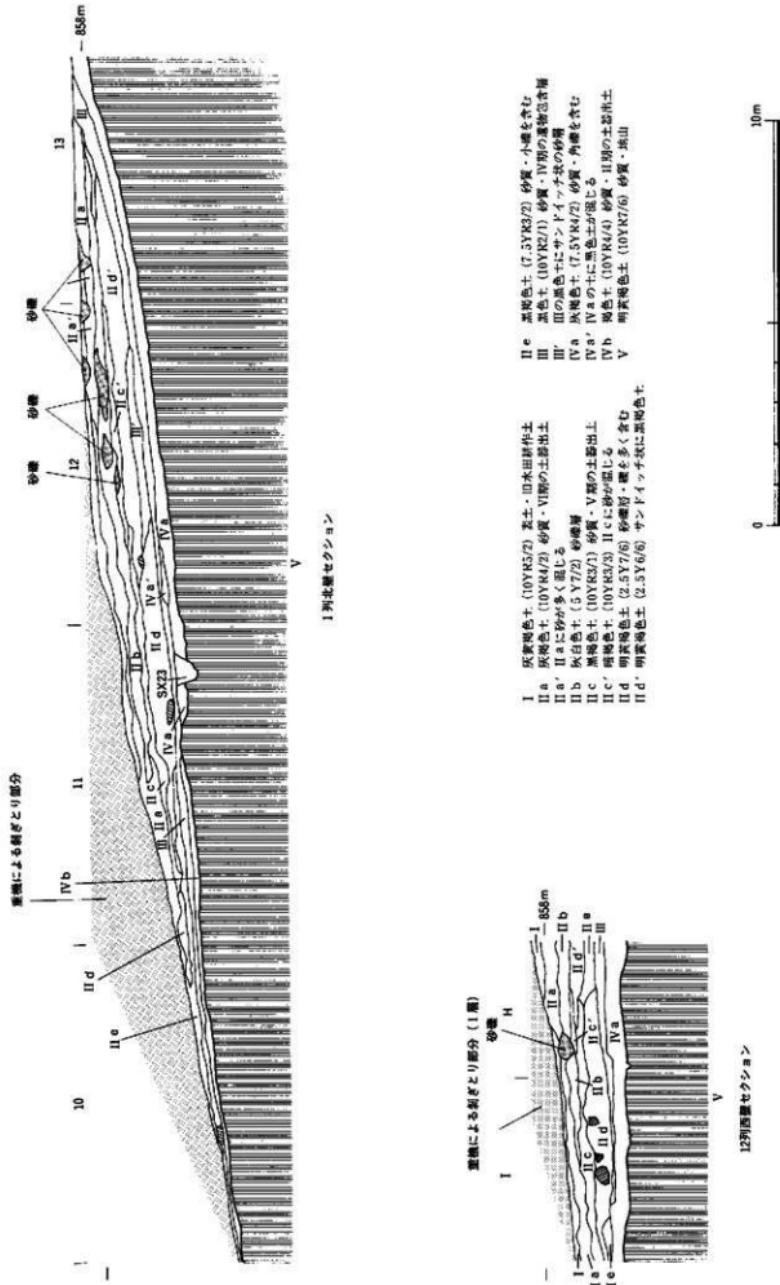
第IV層 ピンク色の角礫（火砕岩）を多く含む砂質土で、遺構検出面である。

IV a (7.5YR4/2 灰褐色土) ややしまりのある砂質土である。

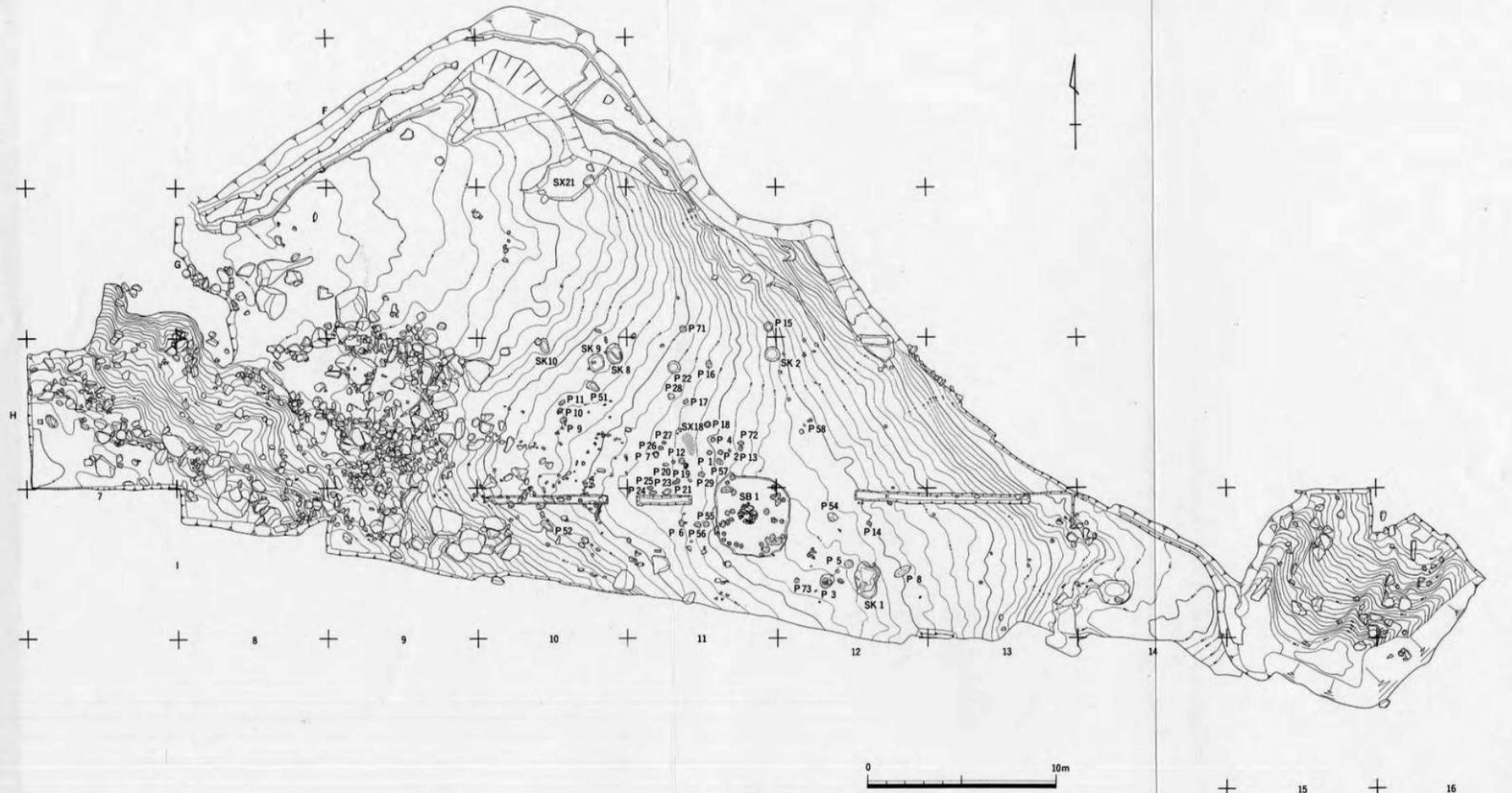
IV b (10YR4/4 褐色土) 角礫を多く含む砂質土である。縄文前期の遺物を含む。

第V層 (10YR7/6 明黄褐色) 大小の礫を多く含む砂質土で、地山と判断した層である。

1) 西区の東端（I～Jの15・16）は、間に谷を挟んだ場所にある。層序は西側と異なり、I層は表土、II層は水田造成時の埋土、III層が遺物を含む黒褐色土で、間に砂礫層ではなく西側のII～III層にあたる。



第6図 土層断面図(西区)

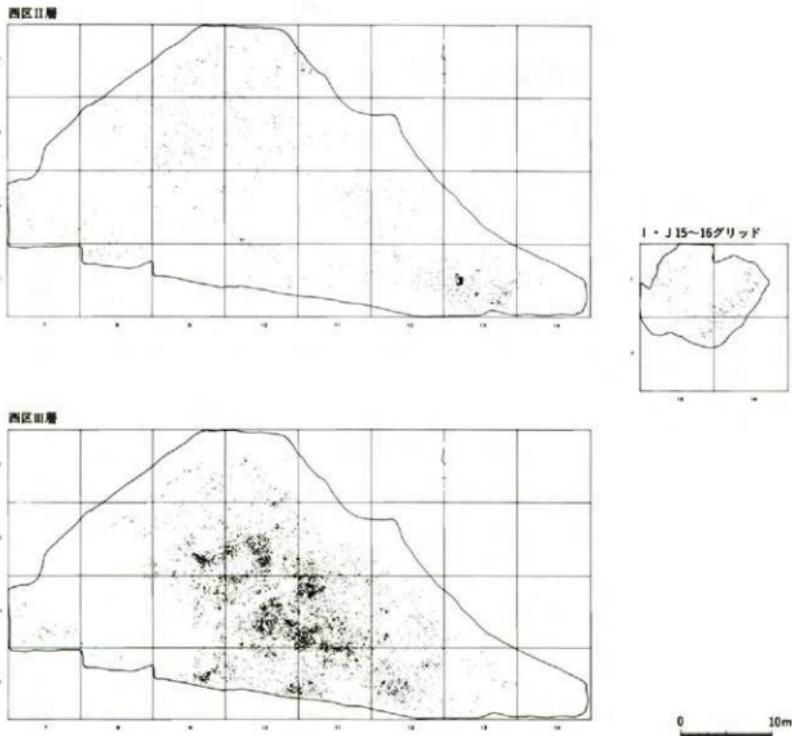


第7図 造構配置図（西区）

## 第2節 遺構と出土遺物

今回の発掘調査で出土した遺物の総数は、約32,000点である。西区からは、約22,000点の遺物が出土したが、その大部分は縄文時代のものである。西区の遺物出土状況を第8図に示した。II層からの出土遺物数は約2,000点で、前述したように不安定な層のため遺構の検出は困難であった。大半の遺物はIII層出土で、調査区の中央10~11区周辺の緩斜面上に、遺構および遺物の集中が見られた。

西区で確認した遺構は、住居跡（SB）1軒・不明遺構（SX）19基・土坑（SK）5基・ピット（P）39基である（第7図）。検出時に判断不明の遺構についてはすべてSXで処理し、その後所属時期や性格等について検討を加えた。焼土跡・遺物集中出土地点・水場遺構などがSXに含まれる。遺構番号はすべて検出順で、西区と東区が混在している。欠番も多く煩雑であるが、遺物の混乱等を避けるため並べ替えは行っていない。それぞれの地区および遺構ごとに一覧表を作成した。



第8図 西区の遺物出土状況

### 1 竪穴住居跡

#### SB1 (第9~11図、図版2・3)

SB1はI11区の北東部に位置し、その範囲は部分的にH11・H12・I12区に及んでいる。大小の礫混じりの厚い砂礫の堆積層(II d層)を掘り下げたところで、まず石窓炉の一部が確認された。覆土の堆積は浅く、遺物のはほとんどは床面に近い部分から出土している。覆土は、周辺のIII層の土と同様の砂質の黒色土(10YR2/1)で、細かい炭化物や炭化材の破片を非常に多く含んでいた。石窓炉の北側の床面直上で検出した炭化材の<sup>14</sup>C年代測定値は、3,860±120yrBPであった(第5章)。

住居の規模は、長軸4.4m、短軸4.1mで隅丸方形を呈する。第IV層を掘り込んでいたが、確認された壁の深さは5~15cmと浅い。中央に方形に組まれた石窓炉がある。規模は100×95cmで、周辺の石のほとんどが被熱により赤く変色し、割れて散乱していた。石窓は二段構造で、炉の内側の大きさは42×32×23cmである。炉内より炭化したクルミの殻(10g)と縄文土器片が出土した。

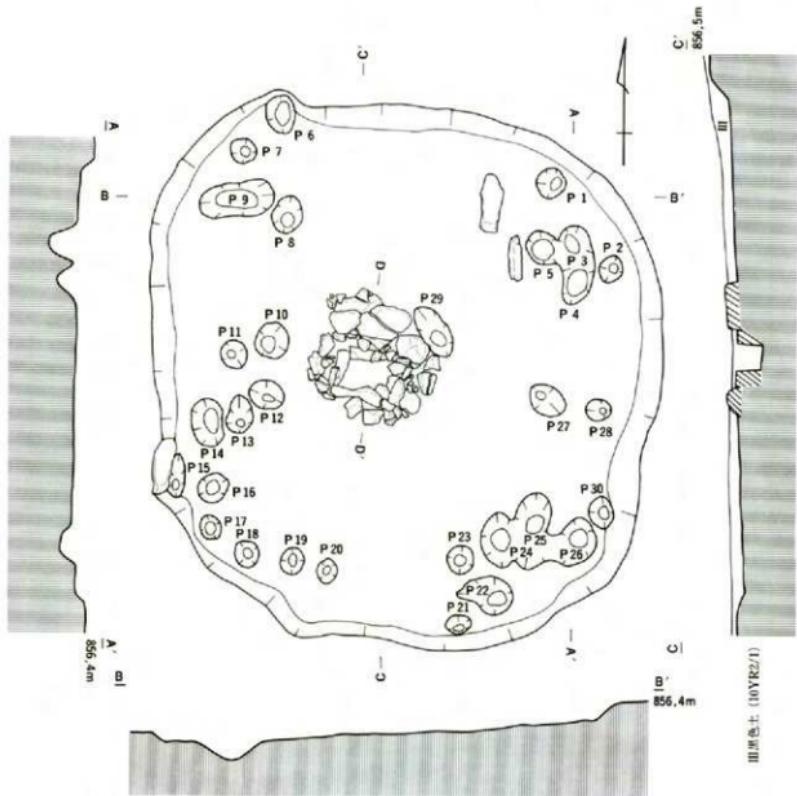
ピットはP1からP30まで確認したが、すべてが本住居跡に伴うものであるとは判断できない。その位置や埋土および深さ等から、P1・P3・P6・P8・P18・P22を主柱穴と推定した。石窓炉の形状や柱穴の位置および周辺の遺構の配置等から、入口は北側と推定される。なお、中軸線はN-7°-Eであった。

出土遺物は、縄文土器片257点、石器類70点である。縄文土器片はほとんどが小破片で、住居の時期を特定する上で重要な有文土器の出土は少なかった。おもな出土石器は、石錐6点、石錐3点、削器1点、両極石器2点、打製石斧3点、横刃形石器1点、磨石・凹石類10点などである。住居跡の西半分、特に炉の北西部分(P8周辺)に遺物の集中が見られた(第11図)。

#### SB1の出土遺物(第10~14図、図版6・7)

第10図の1~8は炉内より出土した土器片である。炭化したクルミの殻を含む黒色土が下層の灰褐色土に変わる境目あたりで出土したもので、二次焼成を受けている。1~7は隆線の両脇がナデにより断面三角形に仕上げられた微隆起線によって文様を描く土器の胴部破片である。8はやや外反する口縁の土器である。地文は縄文で、口縁部は無文である。

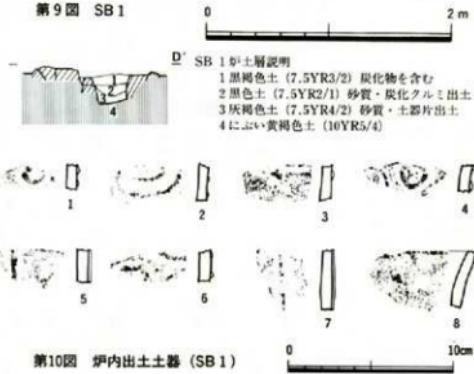
第12図の9は包含層出土の破片と接合して部分復元された土器の口縁の一部である(第33図-214)。口縁端部にハの字状の刻みを巡らせ、波頂部を弧状沈線で仕上げている。外反する器形で、波頂部から胴部にかけて刻みのある隆帶が2条垂下している。10は刻みを有する低い隆帶で文様を描く土器の口縁である。波状口縁の波頂部に刻み付きの装飾がみられる。11はやや外反する土器口縁部で、無文帶の下に原体不明の圧痕がみられる。12は口縁部に沈線文のある土器である。13~15は沈線文の土器の胴部破片である。16は沈線間にRLの縄文を充填する土器の胴部破片である。包含層出土で復元された口縁部が内屈する鉢と同一個体と考えられる(第33図-218)。17~23は微隆起線文の土器の胴部破片である。21は橋状把手を持つ大型の壺状土器の一部である。I9区III層でまとめて出土した破片と接合し復元できた土器である(第31図-204)。24~27は無文部分の胴部破片である。28~29は丸い刻みのある隆帶で縁取られた土器の口縁部である。30~31は無文土器の口縁部である。32~40は地文に縄文の施された土器の胴部破片である。縄文は33~37がRL、32~38~40がLRである。全体に器厚5mm前後の薄手のものが多い。41はP6出土の胴部破片、42~43はP26出土の無文の口縁部とRL



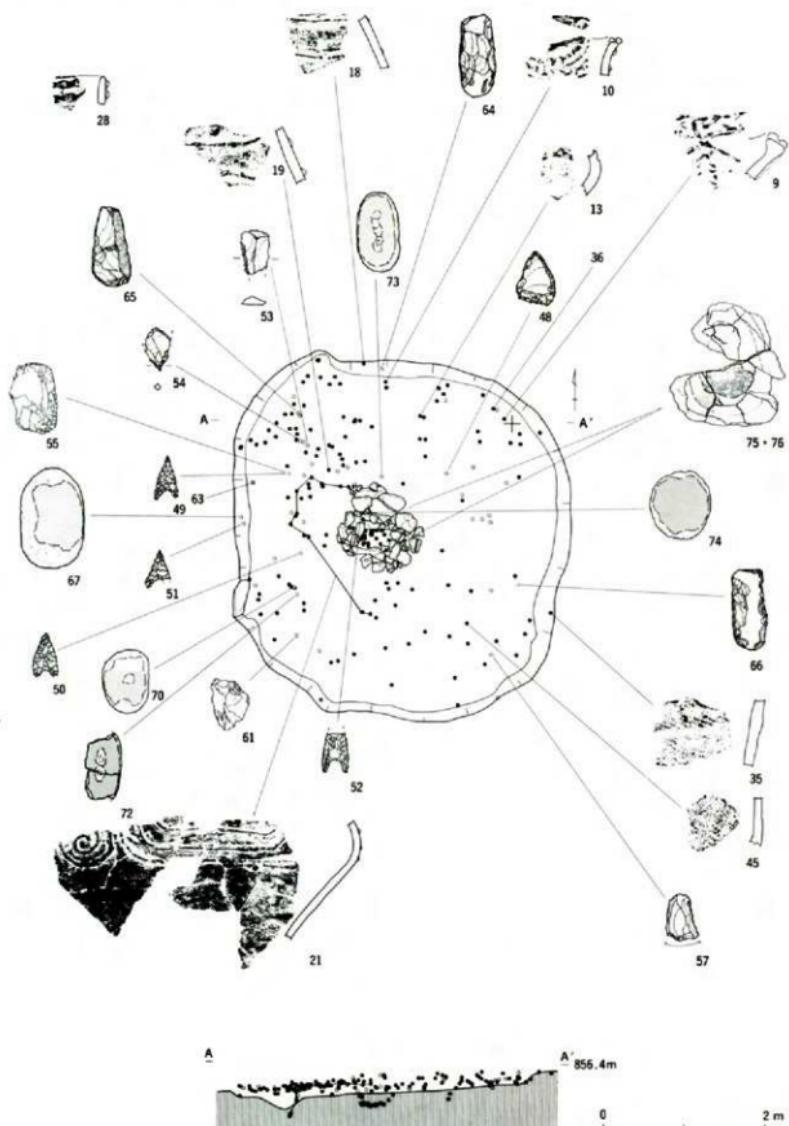
第2表 SBIピット一覧表

No	Pno.	直径×高さ×厚さ	土	遺物
1.	P1	24×19×27	1 黒褐色土 (Cf-2 黒褐色)	
2.	P2	22×18×18	1 黑褐色土 (Cf-1 黑褐色)	縄文土器片2
3.	P3	30×24×27	1 黑褐色土 (Cf-1 黑褐色)	
4.	P4	24×21×18	1 黑褐色土 (Cf-1 黑褐色)	
5.	P5	32×24×21	1 黑褐色土 (Cf-1 黑褐色)	縄文土器片2
6.	P6	32×24×21	1 黑褐色土 (Cf-1 黑褐色)	縄文土器片2
7.	P7	21×20×24	1 黑褐色土 (Cf-1 黑褐色)	縄文土器片2
8.	P8	30×25×20	1 黑褐色土 (Cf-1 黑褐色)	縄文土器片2
9.	P9	30×25×20	1 黑褐色土 (Cf-1 黑褐色)	縄文土器片2
10.	P10	30×25×20	1 黑褐色土 (Cf-1 黑褐色)	縄文土器片2
11.	P11	27×20×28	1 黑褐色土	
12.	P12	20×24×18	1 黑褐色土に点状黒褐色	
13.	P13	20×24×18	1 黑褐色土	
14.	P14	39×25×22	1 黒褐色土 (Cf-1 黑褐色)	縄文
15.	P15	32×12×12	1 黑褐色土	
16.	P16	22×22×18	1 黑褐色土	
17.	P17	20×18×18	1 黑褐色土	
18.	P18	22×20×20	1 黑褐色土 (Cf-1 黑褐色)	
19.	P19	24×20×11	1 黑褐色土	
20.	P20	20×19×18	1 黑褐色土	
21.	P21	24×24×12	1 黑褐色土 (Cf-1 黑褐色)	
22.	P22	42×34×10	1 黑褐色土 (Cf-1 黑褐色)	縄文土器片1
23.	P23	24×22×10	1 黑褐色土 (Cf-1 黑褐色)	
24.	P24	43×32×10	1 黑褐色土 (Cf-1 黑褐色)	
25.	P25	40×28×17	1 黑褐色土	
26.	P26	40×32×16	1 黑褐色土	
27.	P27	32×22×8	1 黑褐色土	
28.	P28	21×20×18	1 黑褐色土	
29.	P29	43×22×36	1 黑褐色土 (Cf-1 黑褐色)	
30.	P30	24×20×20	1 黑褐色土	

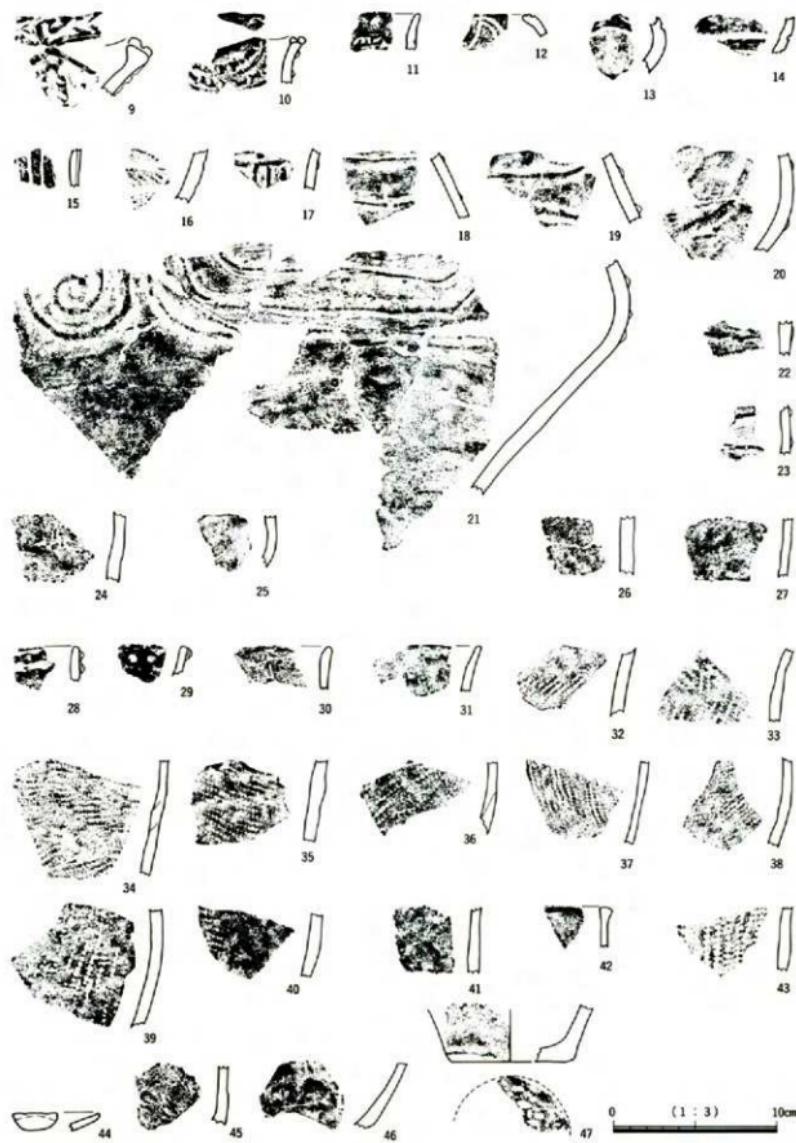
第9図 SB 1



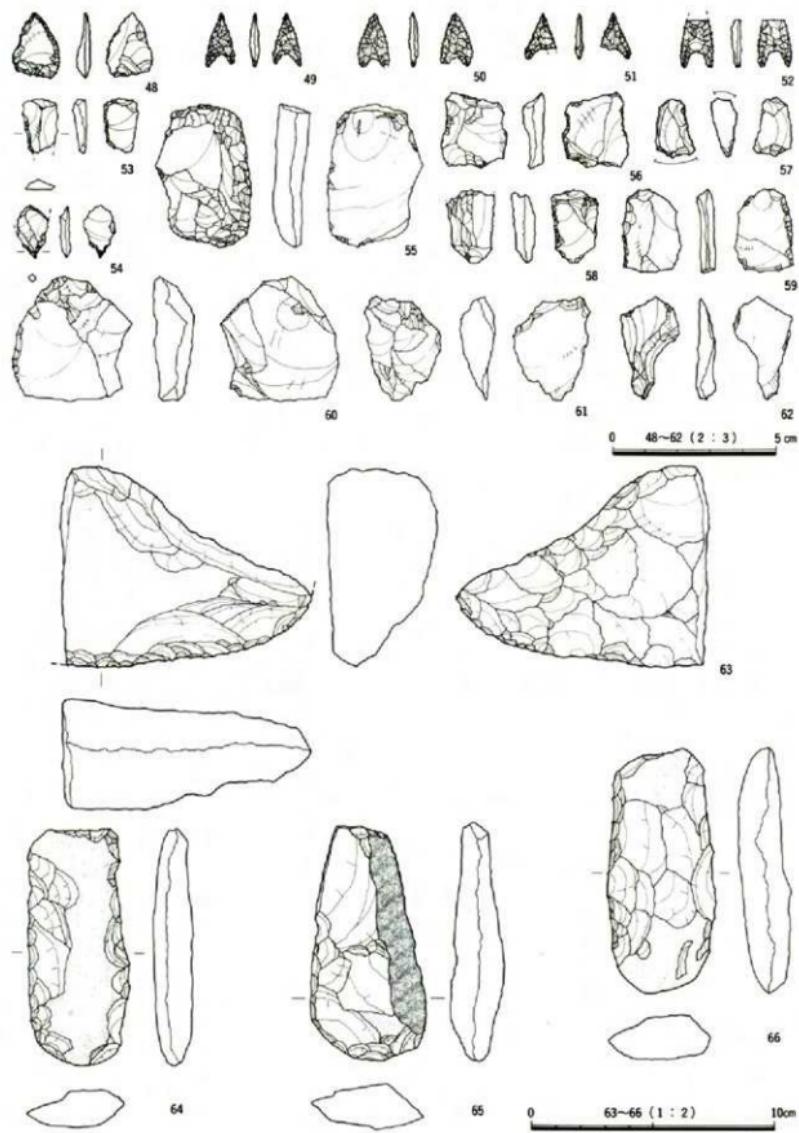
第10図 炉内出土土器 (SB 1)



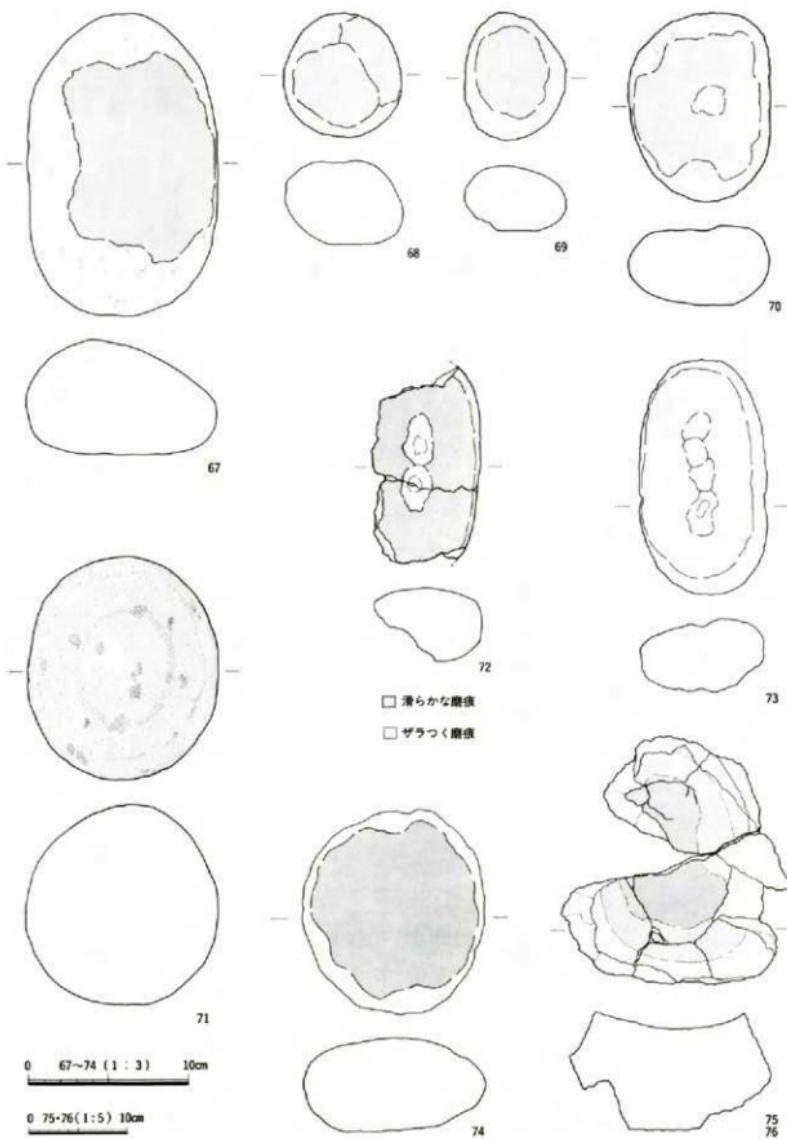
第11図 SB 1 遺物出土状況



第12図 SB 1 出土器



第13図 SB 1 出土石器(1)



第14図 SB 1 出土石器(2)

の縄文が施された胴部破片である。44は無文のミニチュア土器である。45~47は底部付近および底部の破片である。47は地文に RL の縄文を施す土器で、底部の網代圧痕は磨耗している。

第13図の48は下呂石製の円基錐である。49・50は下呂石製の凹基無茎錐で、側縁は鋸歯状である。51は片脚を欠く凹基無茎錐で、石材は黒曜石である。52の石錐は炉石を除去した際にその隙間から出土した。下呂石製で尖端を欠損している。側縁は鋸歯状で、両脚は長めである。53はチャート製の石錐で、尖端の錐部が欠損している。54の石錐は錐部が著しく短いタイプのものである。頭部は素材の剥片の形状を残していると考えられるが、欠損している。55は灰色チャート製の削器である。素材は肉厚な縦長剥片で、刃部は片面加工である。56はチャート製の両極石器で、辺縁部の剥離痕は2対である。57の両極石器は下呂石製で、クサビ形を呈しツブレを有する辺縁部は交差する位置関係にある。58~60は二次加工のある剥片である。石材はすべてチャートで、縦長剥片の側縁に連続剥離により刃部が形成されている。61・62は使用痕のある剥片と考えられるもので、側縁部に微細な剥離痕が観察される。石材は61が下呂石、62はチャートである。63は凝灰岩製の横刃形石器である。西区III層出土の他の同製品に比べると大型で厚手で、用途が異なることが考えられる。原石となった偏平な川原石の自然面の一部を両面に残している。64~66は打製石斧である。すべて10cm程の小型の製品である。64・66は凝灰岩製の短冊形で、刃部の一部は川原石の自然面をそのまま利用している。65は緑色片岩製の擦形で、表の右半面は節理面である。

第14図の67~74は磨石・凹石類である。67は大型の磨石で、表裏両面ともよく使用されている。68・69は表裏両面の使用痕が顕著な磨石である。69は被熱により変色している。70は表裏に浅い凹痕のある凹石である。磨石としてもよく利用された形跡が残る。71は断面が丸い大型の磨石である。使い込まれた結果丸くなつた様相を示しているが、浅い凹痕も数カ所認められる。72は表面にやや深めの凹痕が2ヵ所認められる。滑らかな磨痕を残しているが、被熱による変色と破損が顕著である。73は石窯炉のすぐ近く（北側）から出土した凹石兼磨石である。表裏に連続した凹痕があり、側面にも浅い凹痕が数カ所認められる。被熱により変色し、裏面の一部が欠損している。74は石窯炉の内側から出土した磨石である。表面には非常に滑らかな磨跡が残り、裏面はややザラつく磨痕を残している。SB 1出土の磨石・凹石類の石材はすべて凝灰岩である。75・76は石皿の接合資料である。炉石の一部として二次利用された形跡があり、被熱による変色と破損が顕著である。厚みのある凝灰岩製で、非常に滑らかな磨面を残している。

## 2 III層の不明遺構 (SX)

西区の不明遺構19基のうち SX 2 を除く18基は、III層を掘削中に検出したものである。ほとんどが SB 1周辺に位置し、SB 1と同時期と考えられるものが多い（第3表）。

### 焼土跡群（第15図、図版3）

SB 1周辺で14基の焼土跡を検出した（SX 1・SX 4~14・SX16・SX18）。すべてが、第III層中で確認されたが、SX 1はやや上層で、SX18は下層での検出であった。いずれも明赤褐色の焼土の堆積は2cm前後と浅いが、遺物が絡んでいるものが多かった。

第3表 不明遺構一覧表（西区）

西区No	No	遺構名	地 区	内 訳	出 土 遺 物
1	1	SX 1	H10III	焼土跡①	
2	2	SX 2	I 13II	縄文土器集中出土	縄文土器（復元）
—	欠番	SX 3			
3	3	SX 4	I 12III	焼土跡②	縄文土器片24 チャート剥片1
4	4	SX 5	I 12III	焼土跡③	
5	5	SX 6	I 12III	焼土跡④	縄文土器片26
6	6	SX 7	H11III	焼土跡⑤	縄文土器片20 打製石斧1
7	7	SX 8	H10~11III	焼土跡⑥	縄文土器片29 石鏃等2
8	8	SX 9	H10III	焼土跡⑦	
9	9	SX10	H10III	焼土跡⑧	
10	10	SX11	H11III	焼土跡⑨	縄文土器片9 石鏃等4
11	11	SX12	H11III	焼土跡⑩	縄文土器片2
12	12	SX13	H11III	焼土跡⑪	縄文土器片26 チャート剥片1 炭化クルミ片
13	13	SX14	H11III	焼土跡⑫	縄文土器片1
14	14	SX15	I 11III	玉髓剥片集中出土	縄文土器片5 石鏃1 玉髓剥片等36 (168g)
15	15	SX16	H10~11III	焼土跡⑬	縄文土器片14 炭化クルミ片
16	16	SX17	G12III	磨製石斧集中出土	磨製石斧3 打製石斧1
17	17	SX18	H11III	焼土跡⑭	
—	欠番	SX19			
—	欠番	SX20			
18	18	SX21	F10III	縄文後期水場	縄文土器片46 磨石等3 植物種子多數
—	東区	SX22			
19	20	SX23	SB I	土器出土	縄文土器片12 チャート剥片1
東区	SX24				
—	欠番	SX25			
—	東区	SX26			

### SX 1

H10区のII d 層直下で検出した。70×55cmの大きさで、楕円形である。周辺からは、IV期第5群6類の土器が出土している。

### SX 4

I 12区の第III層中で検出した。70×70cmの大きさで、ほぼ円形である。焼土内より縄文土器片24点とチャート剥片1点が出土した。

### SX 5

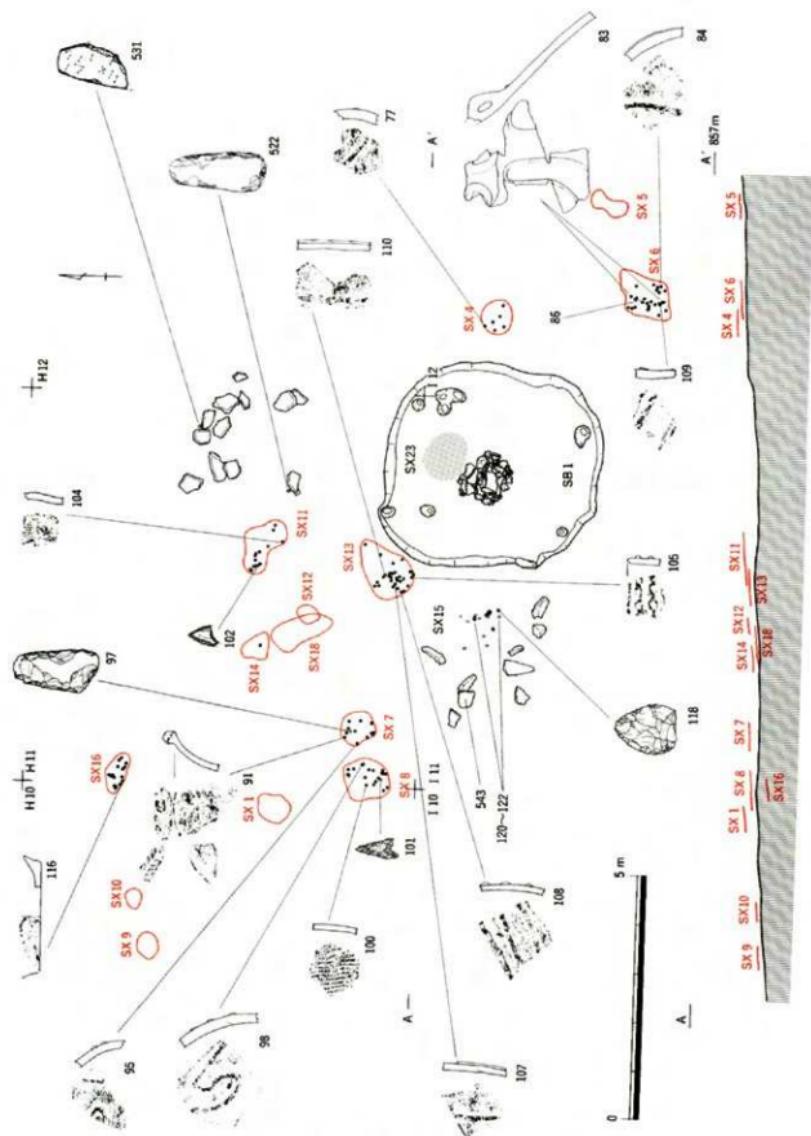
I 12区の第III層中で検出した。80×40cmの大きさで、不定形である。焼土内に遺物はなかったが、傾斜面にそって SX 4 と同一面と考えられる。

### SX 6

I 12区の第III層中で検出した。130×90cmの大きさで、不定形である。焼土内より縄文土器片26点が出土した。

### SX 7

H11区のIII層中で検出した。70×70cmの大きさで、ほぼ円形である。焼土内より二次焼成を受けた縄文土器片20点と打製石斧1点が出土した。



第15図 SB 1周辺図（焼土跡群、SX15, SX23）

**SX8**

H10~11区のIII層中で検出した。90×80cmの大きさで、不定形である。焼土内より縄文土器片29点と石器類およびチャート剥片が各1点出土した。

**SX9**

H10区のIII層中で検出した。55×45cmの大きさで、楕円形である。焼土内からの遺物の出土はなかった。

**SX10**

H10区のIII層中で検出した。40×35cmの大きさで、楕円形である。焼土内からの遺物の出土はなかった。

**SX11**

H11区のIII層中で検出した。120×60cmの大きさで、不定形である。焼土内より縄文土器片9点と石器類が4点出土した。

**SX12**

H11区のIII層中で検出した。40×35cmの大きさで、楕円形である。焼土内からの遺物の出土はなかった。

**SX13**

H11区からI 11区のIII層中で検出した。130×90cmの大きさで、不定形である。焼土内より縄文土器片26点とチャート剥片1点および炭化したクルミの殻が出土した。

**SX14**

H11区のIII層中で検出した。60×50cmの大きさで、不定形である。焼土内より縄文土器片1点が出土した。

**SX16**

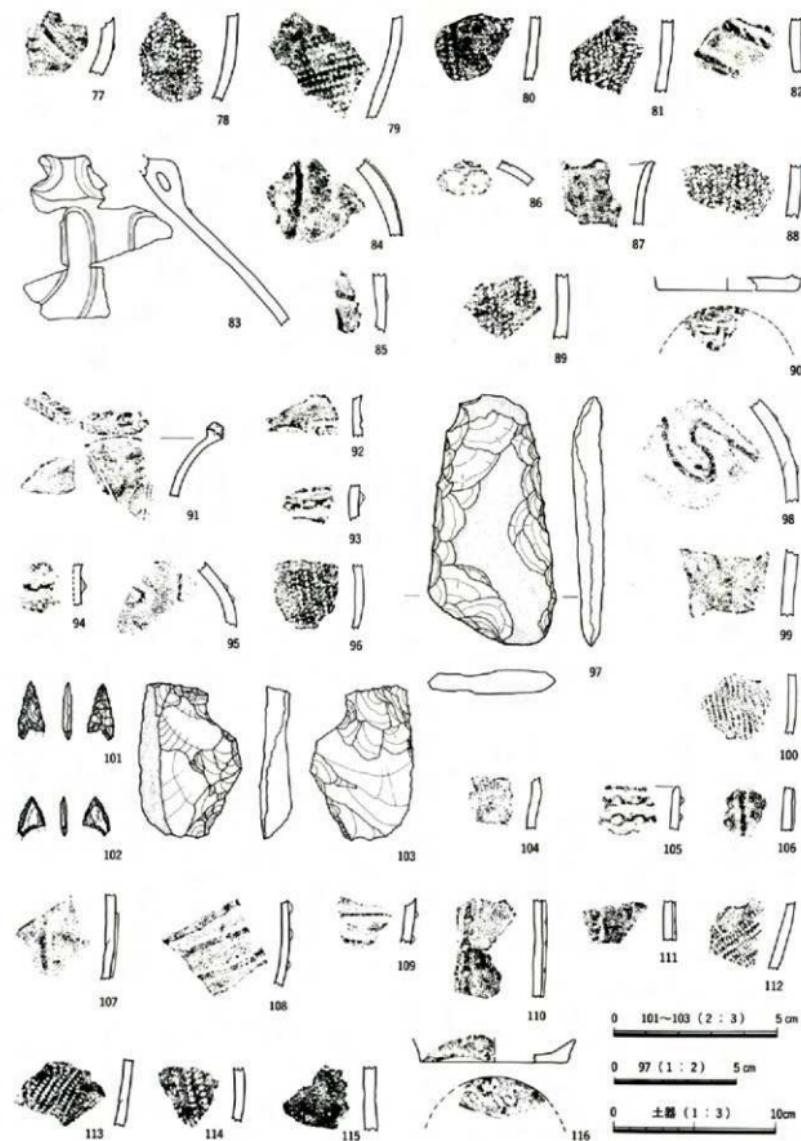
H10~11区のIII層中で検出した。85×45cmの大きさで、楕円形である。焼土内より縄文土器片14点と炭化したクルミの殻が出土した。

**SX18**

H11区のIII層中、SX12の下層で検出した。130×60cmの大きさで、不定形である。焼土内からの遺物の出土はなかった。

**焼土跡群の出土遺物（第16図、図版7・8）**

第16図の77~81はSX4の出土遺物である。77は微隆起線文の土器の胴部破片である。78~81は地文にRLの縄文が施された土器の胴部破片である。いずれも薄手で二次焼成を受けている。82~90はSX6から出土した。82は刻み入りの隆帯で施文された土器の胴部破片である。83~85は微隆起線で施文された橋状把手を伴う壺状土器の一部である。86は口縁部の2本の沈線間に右下がりの刻みを入れた鉢の一部で、包含層出土遺物から復元できた土器である（第33図-219）。87は無文の口縁部である。88~89はRLの縄文の施された土器の胴部破片である。90は底部破片である。いずれも二次焼成を受けている。91~97はSX7から出土した。91は口縁端部をハの字状に短沈線で刻む土器である。刺突のある小突起を有し、外反する頸部には縦方向の沈線がみられる。図の左側の破片はP73から出土した同一



第16図 焼土跡群出土遺物

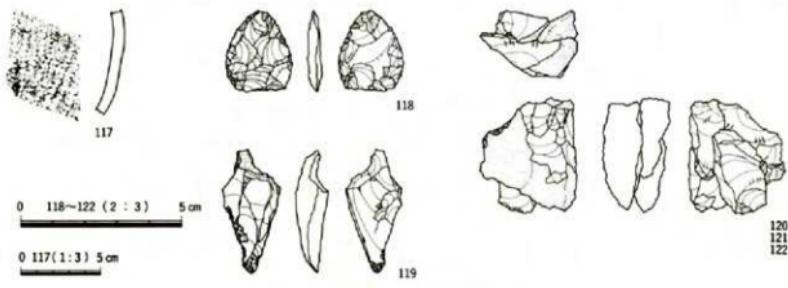
破片である。92は沈線文の土器である。93・94は丸い刻みのある隆帯が横走する土器である。95は微隆起線文の土器の胴部破片である。96はRLの縄文が地文に施された土器である。97は凝灰岩製の打製石斧である。撥形で薄手であるが、被熱の形跡はない。98～101はSX8から出土した。98は微隆起線文の壺状土器の胴部である。SX6出土の83～85と同一個体と考えられる。99は無文部分の胴部破片である。100は地文にRLの縄文が施された土器の胴部で、包含層出土で復元された深鉢と同一個体と考えられる(第34図-226)。101は下呂石製の石鎌である。側縁は鋸歯状で、一方の脚部を欠損している。被熱の形跡はない。102～104はSX11から出土した。102は灰白色のチャート製石鎌である。薄い板状の剥片の端部に丹念に調整を加えた凹基鎌である。103の石材はチャートで、側縁部に剥離痕のある剥片である。104は沈線で曲線文を描く土器の胴部破片で、二次焼成を受けている。105～113はSX13から出土した。105は丸い刻みのある隆帯が横に2本並ぶ土器口縁部である。106～109は微隆起線文を持つ薄手の土器の胴部破片である。110～111は縦の隆帯に刻みを有する胴部破片である。112・113は地文にLRの縄文を施した土器である。ほとんどの土器が二次焼成を受けている。114～115はSX16から出土した。114・115は地文に縄文を施す土器の胴部破片である。116は土器の底部である。いずれも二次焼成を受けている。

#### 玉髓剥片集中出土地点 (SX15) (第15図)

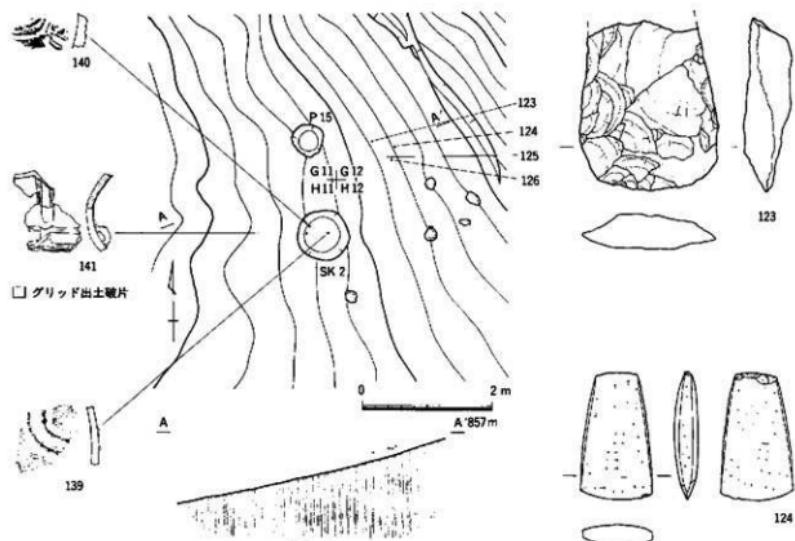
SB1の約1m西側(I11区III層)で、玉髓の剥片が80×80cmの範囲で集中して出土した。周辺には偏平な石の配置がみられ、作業台を想定させるような敲打痕のある石皿(第46図-543)が含まれていた。同様の偏平な石の配置はSB1の約3m北側でもみられ、石に絡んで磨製石斧と打製石斧が出土している(第15図)。SX15の出土遺物は、縄文土器片5点、石鎌1点、石錐1点、玉髓剥片32点、チャート剥片3点である。遺跡全体でみると、玉髓製の石器や玉髓剥片の出土は非常に少なく、玉髓剥片の大半はこのSX15からの出土である。なお、SX15より1m程北西の地点(I11区III層)で玉髓製の石錐が出土しているが、SX15の玉髓とは質が異なるようである(第41図-488)。

#### SX15出土の遺物 (第17図、図版6・8)

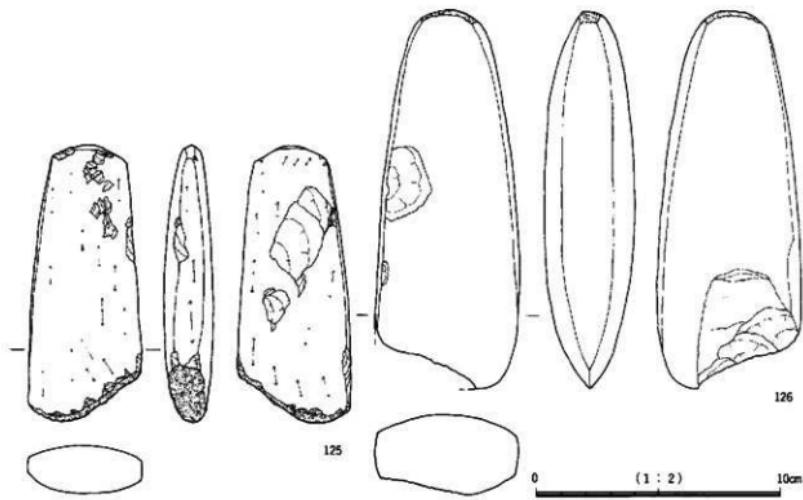
第17図の117は地文にRLの縄文を施す土器の胴部破片である。118は下呂石製の平基鎌である。薄手で尖端が丸いので、削器等に転用された可能性も考えられる。119は玉髓製の石錐である。素材剥片



第17図 SX15出土遺物



第18図 SX17周辺図



第19圖 SX17出土石器

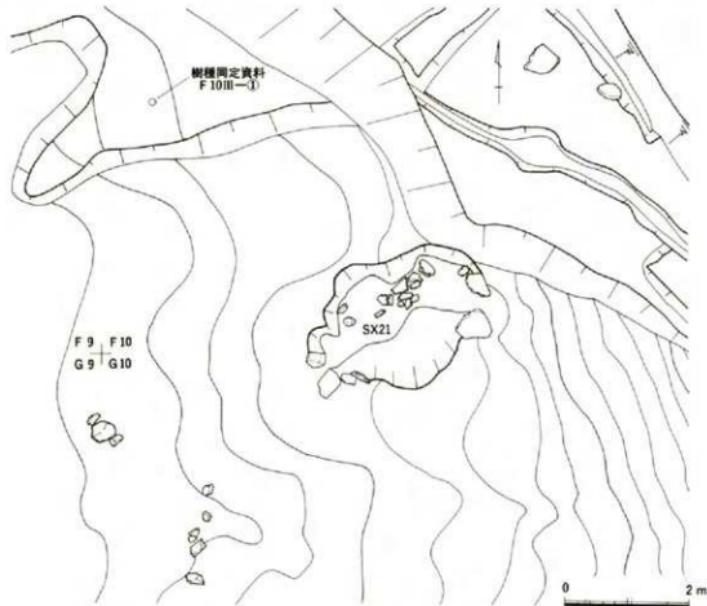
の形状をそのまま残し、側縁および尖端に粗い調整が加えられている。120~122は玉馴剥片の接合資料である。母岩は径4cm程度の小礫である。まとまって出土した多くの剥片と同様に、定型化した剥片取りを目指したような意図的な剝離の跡は見出せなかった。

#### 磨製石斧集中出土地点 (SX17) (第18図、図版3)

G12区III層を掘削中に、斜面に沿って磨製石斧3本と打製石斧1本が同時に出土した。ピット等の遺構を伴わず、斜面上に放置されたかあるいは意図的に置かれたものと考えられる。磨製石斧の大きい方2本は基部を斜面の下方に向けた形でV字状に重なり、小型の磨製石斧と基部を欠損した打製石斧は共にその刃先を北西方向に向けていた。斜面の下方約1.5m南西にSK2が位置し、IV期の土器片が出土している。

#### SX17出土の遺物 (第19図、図版8)

第19図の123は凝灰岩製の打製石斧片である。表裏に原石の自然面を残しており、偏平な川原石を原石としたと考えられる。124は緑灰色の蛇紋岩製の磨製石斧である。長さは52mmで刃こぼれが観察される。125は薄緑色の蛇紋岩製の磨製石斧である。現長は113mmで刃部は欠損している。欠損部分に著しい敲打痕があり、敲石として転用されたと推定される。126は薄緑色の凝灰岩製の磨製石斧である。現長は153mmで刃部を大きく欠いている。



第20図 SX21周辺図

### 水場遺構（SX21）（第20・21図、図版4）

G10区北端でIII層を掘削中に微隆起線文土器がややまとまって出土した。その下層の砂の層よりクルミが出土したので貯蔵穴を想定して、プランの検出を図った。周辺は掘り下げの進行と降雨により湧水が激しく、湧水点が切削面の上方にもあったので作業は困難を極めた。東側に排水溝を設置し水を迂回させながら精査を進めたが、遺構内の湧水は止むことがなかった。北西部分の黒褐色土中よりトチの果実および種子や数種の植物種子が出土したため、先のクルミ出土地点と合わせて2ヵ所で自然科学分析のためのサンプリングを行った（第5章）。

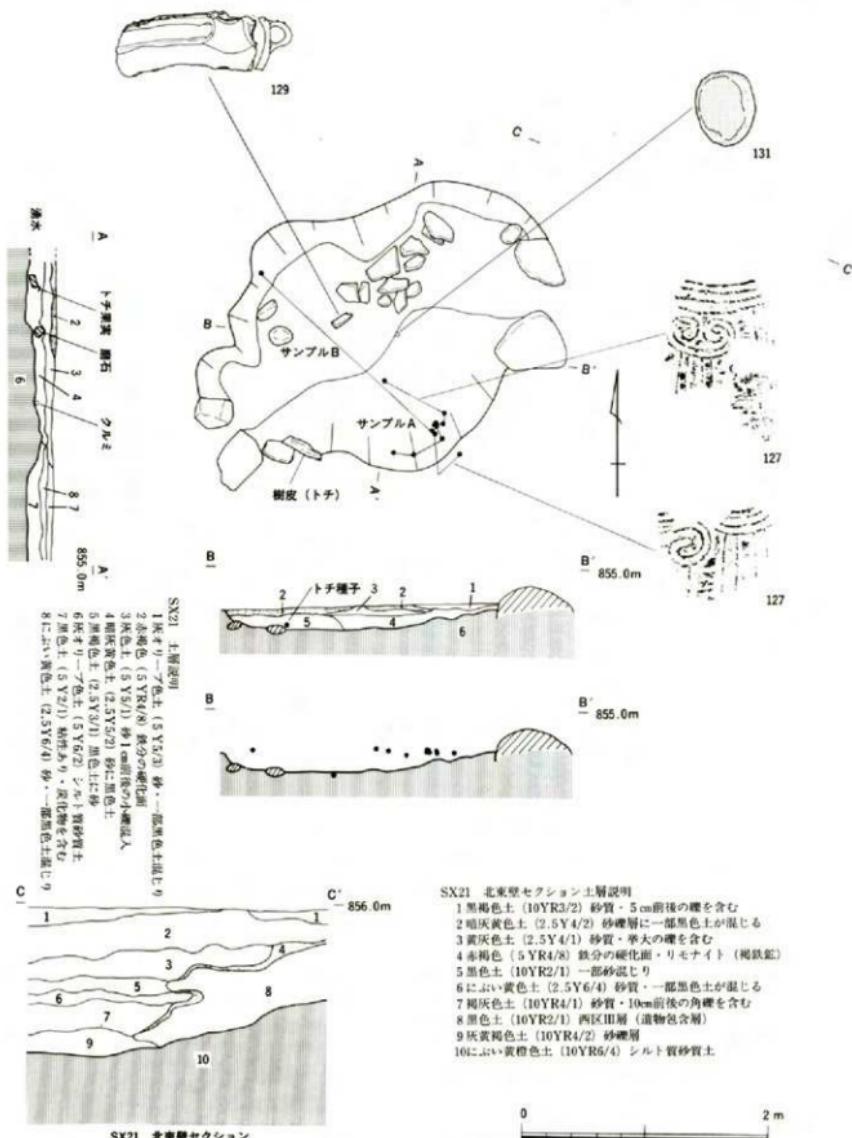
周辺の状況からちょうどこの辺りが旧地形の谷部分だったと考えられる。植物種子を含む土砂の堆積は、 $320 \times 230 \times 30\text{cm}$ の範囲に限定され、ここがかつての自然流路内の一帯だったと推定される。流れは北東方向から南西へと向かっており、両端に2個ずつ配置された石は入口と出口の水量調節を行う水門であったと考えられないこともない。

出土遺物は、縄文土器片46点、チャート剥片1点、磨石2点、木片2点、各種植物種子である。クルミはそのほとんどが南側の暗灰黄色土（砂質）中から出土し、内訳は完形7個（湿重量68g）、嘴跡付1個、2分の1破片40個（湿重量120g）、および碎片（湿重量80g）であった。同じ場所からミツバウツギの種子が多数出土している。検出時は真空パックされたように鮮やかな黄褐色を呈していた。トチの種子は、ほとんどが碎片で個数の推定は困難であるが湿重量で約200g、クリが約10g出土している。トチの果実や幼果が同時に出土し、すぐ際に柄の木があったことも想像される。出口手前の南側砂層の下層で検出された樹皮は分析の結果トチノキの根材であることが判明している。なお、同材の<sup>14</sup>C年代測定値は4,010±110yrBPであった。さらに、SX21の右岸に相当するF10III層出土のケヤキの根について<sup>14</sup>C年代測定を行った結果は、3,850±100yrBPではSB1と同数値を示している（第5章参照）。

SX21は明確な人工構築物を伴う遺構ではないが、周辺の状況や出土遺物等からSB1の時期には水場として利用された場所であったと考えたい。

### SX21出土の遺物（第23図、図版6・8・9）

第23図の127はSX21の直上から出土した土器片である。小破片が接合され大きく左右2ブロックを形成しているが、左右の接点は推定である。樽形を呈する大型の深鉢で、同一個体と思われる破片がG10区およびH10区III層より出土している（第35図-267-268）。波状口縁の土器であるが欠損部分が大きくその全貌はつかみ難い。口縁部を横走する3条の微隆起線は途中で文様帯となっている。上の2条がループ状になり、その先端を右回りに内側に巻き込んで止まっている。3条目の微隆起線はこのループにぶつかる所で止まっている。口縁部の微隆起線は細かな刻みを有する部分と刻み無しの部分が混在しているようである。左側の破片では、横走する3条の微隆起線の下にループによる文様が存在し、その両端を下から上へ内側に巻き込むような表現がなされている。それぞれループ文様の下端や口縁部の3条目の線から、縦に2条1対で微隆起線が垂下している。器厚は6mm前後で薄手である。器面は丁寧に磨かれており、色調は黒褐色である。左側の破片の一部には炭化物の付着が見られる。微隆起線の脇には木製等の工具を用いたナデと考えられ調整痕も残っている。128も微隆起線文の土器の胴部破片である。ループ状の曲線文の一部と思われる。129はSX21の内部のやや深い位置から出土



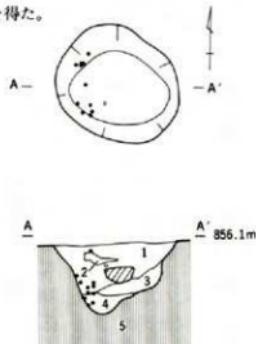
第21図 SX21（水場遺構）

した土器片である。橋状把手を有する大型の鉢形土器の口縁部破片である。推定径45cmで、幅広の把手部分の大きさは3×5×2.5cmである。口縁端部を下にして水没していたため文様部分の一部が失われている。2条の隆線が橋状把手とほぼ同じ幅で横走している。上方の隆線は橋状把手の上方付近で口縁端部の内側へ回り込んで終結している。左側には口縁端部を斜めに跨ぐ2条の隆線が存在する。橋状把手の上方は大きく欠損しているが、隆線文が渦状あるいは同心円状に施されていた形跡を留めている。さらに口縁端部には先の尖った棒状工具によると思われる刺突列が続いており、刺突痕は全部で12カ所確認できる。刺突の深さは5mm程度である。長期間水没していたためか、漆黒の器面は独特の様相を醸し出している<sup>1)</sup>。130は灰色のチャート剥片で、側縁部に不連続な剝離痕がみられる。131・132は凝灰岩製の磨石である。いずれもほぼ全面が使用されているが、表裏両面に顕著にザラつく磨痕を残している。131はSX21内部から、132は上層の鉄分が硬化した（褐鉄鉱）部分から出土した。133は出口付近からトチの種子等と共に出土した板状木片である。材はサワラで、大きさは110×27×7mm、湿重量5.48gである。表面は腐食しており、加工痕は確認できないが、両面とも部分的に炭化している。134はSX21内部の黒褐色土層からトチの種子等と一緒に出土した角棒状木片である。ヒノキ科の材で、大きさは141×10×7mm、湿重量4.48gである。やはり表面が腐食しており、先端の丸い部分が加工や使用に因るものなのかは、はっきりしない。なお、SX21の4m北西のF10区III層からも一部樹皮を残した34×12×5cmの木片が出土している（第20図、図版4）。樹種同定の結果、この材はカツラであった（第5章参照）。

1) 129の土器の表面および内面について岐阜県工芸試験場に依頼してIRスペクトル分析を行ったが、この土器の内外は塗装膜（春慶塗）とは異なるという分析結果を得た。

#### 縄文土器出土土坑（SX23）（第15・22図）

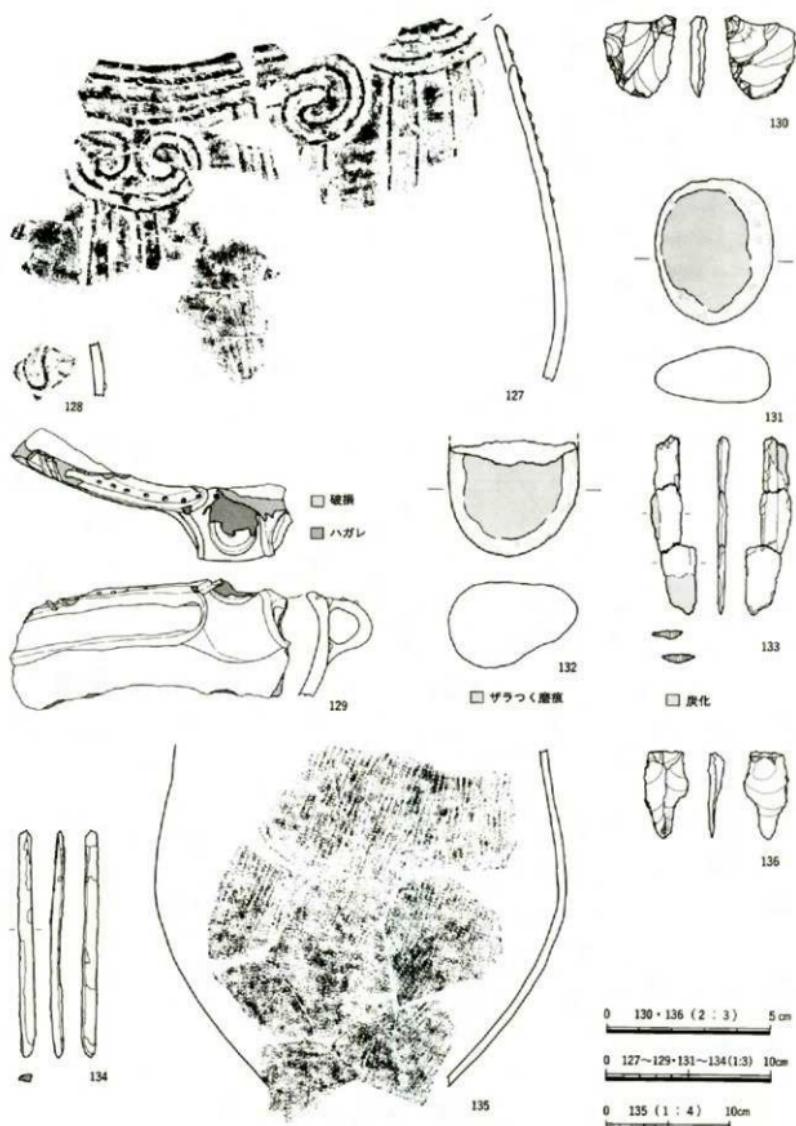
SX23はSB1の精査終了後に、I列北壁の土層観察のためのトレンチを掘削中に検出した遺構である。SB1の石圓炉に隣接して北東方向に100×80×56cmの土坑が存在したのであるが、土坑の上層部分は堅く住居跡の床面との判別は難しかった。上層部分は埋め戻して踏み固められたような状況の灰褐色土で、SB1の床面と同じIVa層の土に、黒色土や下層の明黄褐色土および角礫が混じり込んでいた。下層部分はIVa層とV層の土が混在し、掘り進み易い疎らな堆積状況を呈していた。遺物は土坑の西半分に集中し、一つに接合できる縄文土器片12片とチャート剥片1点が出土した。土器片の大半は土坑の中層より深い部分から出土し、その状況から埋められた時点ですでに破片であったと推定される。SB1内より同一個体と考えられる土器片が出土しており同時期の遺構と判断したが、その性格は不明である。遺物として残り難い物の埋納や、地鎮儀礼等を想定したいところであるが、類例の発見を期待したい。



SX23 土層説明  
 1 灰褐色土 (7.5YR4/2) IVa層の土に黒色土が混じる  
 2 明黄褐色土 (10YR7/6) V層と同じ土  
 3 にほい黄褐色土 (10YR6/4) V層の土にIVa層の土が混じる  
 4 にほい黄褐色土 (10YR5/4) IVa層の土にV層の土が混じる  
 5 黄褐色土 (10YR7/6) V層

0 1m

第22図 SX23



第23図 SX21・SX23出土遺物

**SX23出土の遺物（第23図、図版6・9）**

第23図の135はSX23出土の土器片を復元したものである。頸部付近がやや外反ぎみで胸部が丸く膨らむ深鉢の、全体の5分の1程の部分の胴部破片である。現存部分の大きさは最大径34.8cm、高さ28.2cmで、口縁部と底部は欠けている。地文にRLの繩文が施されており、内面調整は粗いナデが観察される。表面はよく使い込まれたものか磨耗が著しく、中央部を中心に広範囲に炭化物が付着している。器厚は6mm前後で薄手である。同一個体と考えられる破片1点がSB1内より出土している（第12図-36）。136は灰色のチャート剥片で、縦長剥片の左側縁部に微細な剝離痕を伴っている。

**3 土坑・ピット（SK・P）（第24図、第4表、図版3）**

径80cm以上の比較的大きい穴をSK、小さい穴をPとした。P3とP8はSKとすべきであったが、検出時の遺構名をそのまま用いてある。西区のSKおよびPはすべてIII層～IV層の掘削中に検出したもので、IV層表面が遺構検出面になっているものも多い。大きめの穴はSB1北側の斜面上に分布している。繩文土器片等の遺物が出土したものもあるが、用途等その性格は不明である。ピット群はSB1周辺に集中し焼土跡群の分布と共通する部分が多い。特にSX18周辺は、住居跡等の存在を想定させる配列となっているが、プランの検出には至らなかった。それぞれの遺構の概要は表にまとめ、代表的なものを図示した。

**SK2**

H11区のIII層中で検出した。81×75×27cmの大きさで、ほぼ円形である。磨製石斧集中出土地点（SX17）に近い斜面上に位置している（第18図）。炭化物を多く含む黒褐色土中より繩文後期前葉の土器片8点が出土した。

**SK10**

H10区のIV層上面で検出した。90×52×34cmの大きさで、楕円形である。北西部にやや偏平の石を配している。炭化物を多く含む黒褐色土中より繩文後期前葉の土器片12点、および下呂石剥片・綠色片岩製の打製石斧片・磨石各1点が出土した。

**P3**

I12区のIII層中で検出した。82×69×25cmの大きさで、楕円形である。内部に4個の石を配している。炭化物を多く含む黒褐色土中より多くの遺物が出土した。出土遺物は繩文後期前葉の土器片43点、石鏃1点、ヘラ形石器1点、石器剥片18点である。

**P5**

I12区のIII層中、P3の1m北東で検出した。48×40×43cmの大きさで、楕円形である。炭化物を含む黒褐色土中より繩文土器片2点、下層の黒褐色土中より凹石1点がそれぞれ出土した。

**P7**

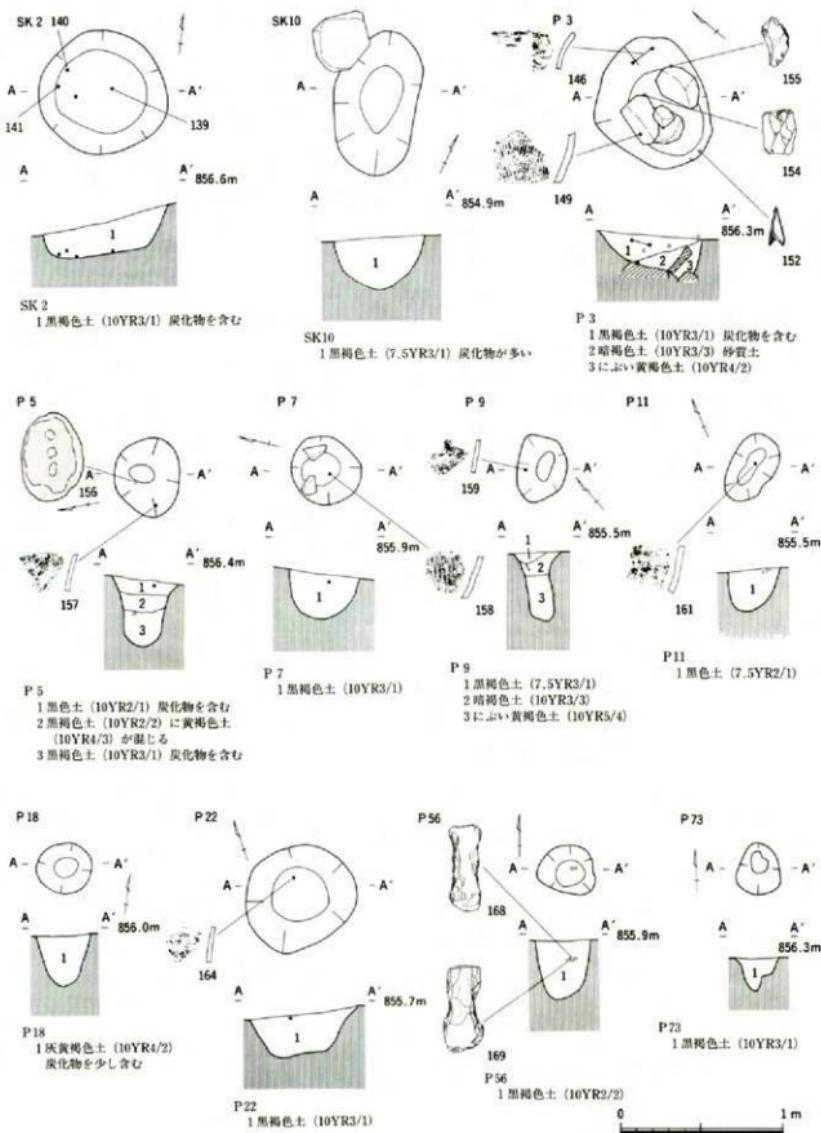
H11区のIII層中で検出した。45×40×28cmの大きさで、ほぼ円形である。黒褐色土中より器厚5mm前後の薄手の繩文土器片17点が出土した。

**P9**

H10区のIV層上面で検出した。40×30×42cmの大きさで、楕円形である。上層の黒褐色土および暗

第4表 土坑・ピット一覧表（西区）

西区No.	No.	遺構名	地区	長径×短径×深さ	遺物	種 団 番 号
1	1	SK 1	H12III	188×105×30	縄文土器片 7 下呂石剝片 2	25-137・138
2	2	SK 2	H11III	81×75×27	縄文土器片 8	25-139~142
—	欠番	SK 3				
—	東区	SK 4~7				
3	7	SK 8	H10III	104×84×26		
4	8	SK 9	H10III	100×88×23		
5	9	SK10	H10III	90×52×34	縄文土器片 12 打製石斧等 3	25-143・144
6	10	P 1	H11III	24×22×28	縄文土器片 6	25-145
7	11	P 2	H11III	28×24×30	縄文土器片 4 石器剝片 2	
8	12	P 3	H12III	82×69×25	縄文土器片 43 石器等 20	25-146~155
9	13	P 4	H11III	32×25×26	縄文土器片 3	
10	14	P 5	H12III	48×40×43	縄文土器片 2 磨石類 1	25-156・157
11	15	P 6	H11III	36×26×24	縄文土器片 1	
12	16	P 7	H11III	45×40×28	縄文土器片 17	25-158
13	17	P 8	H12III	100×42×38	縄文土器片 3	32-209
14	18	P 9	H10III	40×30×42	縄文土器片 29 石器等 4	25-159・160
15	19	P10	H10III	32×24×20	縄文土器片 13	
16	20	P11	H10III	43×26×27	縄文土器片 10 石器剝片 1	25-161
17	21	P12	H11III	36×32×12		
18	22	P13	H11III	28×25×18		
19	23	P14	H12III	44×42×49		
20	24	P15	G11III	52×44×25	縄文土器片 2 石器剝片 1	
21	25	P16	H11III	40×28×55	縄文土器片 3	25-162
22	26	P17	H11III	32×20×30		
23	27	P18	H11III	35×30×30	縄文土器片 7 下呂石剝片 1	25-163
24	28	P19	H11III	24×20×22	石器剝片 1	
25	29	P20	H11III	24×16×20	縄文土器片 5	
26	30	P21	H11III	44×28×20	縄文土器片 4 下呂石剝片 1	
27	31	P22	H11III	68×60×30	縄文土器片 16	26-164・165
28	32	P23	H11III	52×32×18		
29	33	P24	H11III	40×24×21	黒曜石剝片 1	
30	34	P25	H11III	32×20×18	縄文土器片 2	
31	35	P26	H11III	28×24×20	縄文土器片 2 下呂石剝片 1	
32	36	P27	H11III	24×20×20	縄文土器片 1	
33	37	P28	H11III	36×28×41	縄文土器片 5 石器剝片 1	
34	38	P29	H11III	36×25×23		
—	東区	P30~50				
35	60	P51	H10III	72×40×20	縄文土器片 3	
36	61	P52	H10III	76×32×22	縄文土器片 5	
—	欠番	P53				
37	62	P54	H12III	56×42×24	縄文土器片 1 石器 2	26-166・167
38	63	P55	H11III	34×30×21	縄文土器片 9 石器剝片 1	
39	64	P56	H11III	35×30×37	打製石斧 2	26-168・169
40	65	P57	H11III	45×30×35		
41	66	P58	H12III	28×25×26	縄文土器片 5	
—	欠番	P59				
—	東区	P60~70				
42	78	P71	G11III	40×32×30	縄文土器片 3 下呂石剝片 1	
43	79	P72	H11III	32×25×32	縄文土器片 2	
44	80	P73	H12III	32×28×20	縄文土器片 13 石器剝片 4	26-170~172
—	東区	FP1				



第24図 西区のおもな土坑・ピット

黒褐色土中より縄文後期前葉の土器片29点が出土した。さらに下層の黄褐色土中より下呂石剝片とチャート剝片が2点ずつ出土した。

#### P 11

H10区のIV層上面、P 9の北隣で検出した。43×26×27cmの大きさで、楕円形である。黒色土中より縄文後期前葉の土器片10点と玉髓剝片1点が出土した。

#### P 18

H11区のIII層中で検出した。35×30×30cmの大きさで、ほぼ円形である。炭化物を少し含む灰黄褐色土中より無文土器片7点と下呂石剝片1点が出土した。

#### P 22

H11区のIII層中で検出した。68×60×30cmの大きさで、楕円形である。炭化物を含む黒褐色土中より縄文土器片16点が出土した。

#### P 56

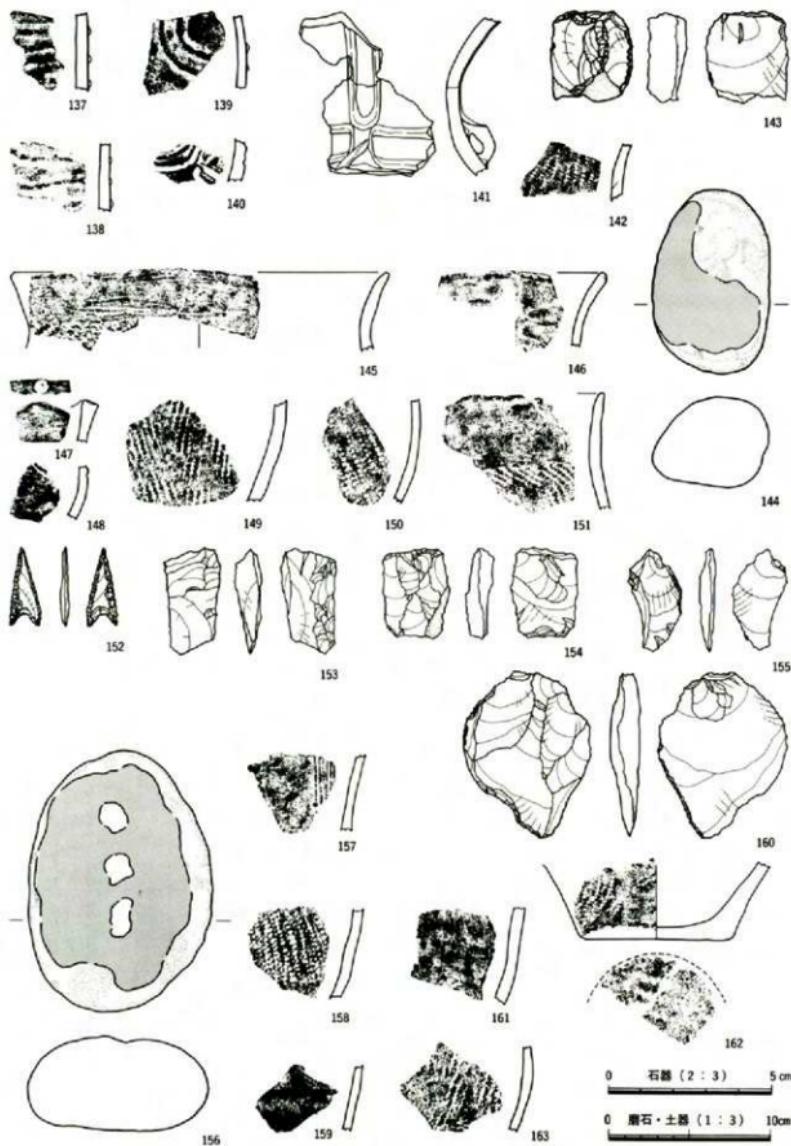
I 11区のIV層上面、玉髓剝片集中出土地点(SX15)の下層で検出した。35×30×37cmの大きさで、楕円形である。黒色土中より打製石斧が2点重なって出土した。

#### P 73

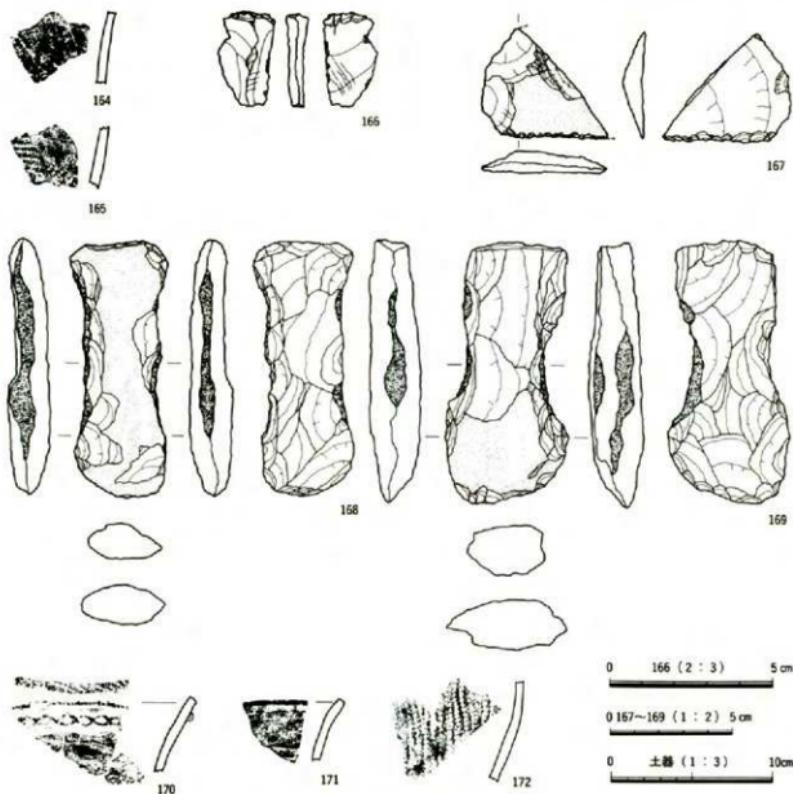
I 12区のIV層上面、P 3から1.2m西方で検出した。32×28×20cmの大きさで、楕円形である。黒褐色土中より縄文後期前葉の土器片13点、下呂石剝片2点、チャート剝片1点、黒曜石剝片1点が出土した。P 73からはSX 7出土の土器と同一と考えられる破片も出土している(第16図-91)。

### 土坑・ピット出土の遺物(第25・26図・図版6・8・10)

第25図の137・138はSK 1出土の縄文土器片である。微隆起線で曲線文を描く土器の胴部破片である。粗い砂粒を多く含み黄灰色を呈している。139~142はSK 2出土の縄文土器片である。139はループ状の微隆起線によって文様が構成される深鉢の胴部破片である。140は沈線で曲線文を描く土器の胴部破片である。141は微隆起線文を伴う橋状把手付きの壺状土器の破片である。破片の上方はH11区III層出土の破片が接合した部分である。同一個体と考えられる土器の破片が西区III層の広い範囲から出土している(第36図-295~297)。142は地文にLRの縄文を施す土器でやや外反する頸部付近の破片である。143・144はSK10出土の石器である。143は表面に一部原石の自然面を残す綫長の下呂石剝片である。右側縁部に片面加工の連続する剥離痕がみられる。144は凝灰岩製の磨石である。ほぼ全面に使用の痕跡がみられるが、特に表裏両面にややザラつく磨痕が残されている。145はP 1出土の縄文土器の口縁部である。破片が3点出土し、周辺のH11区III層出土の4点の破片と接合したものである。ゆるく外反する口縁部に無文帯をつくり、以下地文にLRの縄文が施されている。146~155はP 3出土の遺物である。146はゆるく外反する土器の無文の口縁部破片である。147は波頂部に圧痕のつく土器の口縁部で、現存部分は無文である。148は沈線で曲線文を描く土器の胴部破片である。149~151は地文に縄文を施す土器で、151は口縁部に無文帯を有している。152は下呂石製の凹基無茎鍬である。薄い板状の剝片の刃縁部に丹念な剥離調整がみられる鋸歯状側縁の石鍬である。153は両側に折り取り部分を持つチャート剝片である。下端部に微細な剥離痕が認められ、ヘラ形石器と考えられる。154はチャート剝片、155は下呂石剝片である。ともに右側縁部に微細な剥離痕が認められる。156~157はP



第25図 西区の土坑・ピット出土遺物(1)



第26図 西区の土坑・ビット出土遺物(2)

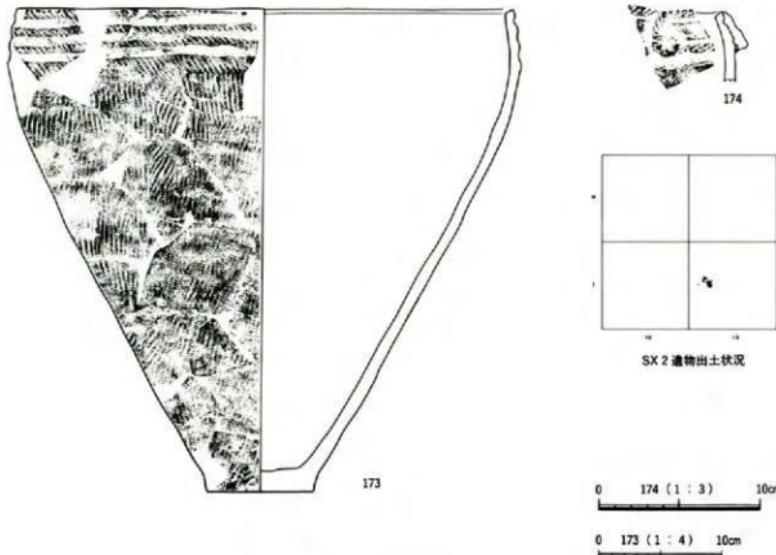
5 出土の遺物である。156は凝灰岩製の凹石で、表面に3ヵ所浅い凹痕を残している。表裏両面の磨痕も顕著である。157は縦に2条の沈線が確認できる土器の胴部破片である。薄手で器厚は5mm前後である。158はP7出土の土器で、地文にRLの縄文を施す胴部破片である。159はP9出土の縄文土器片である。SB1出土の口縁部に沈線文のみられる土器(第12図-12)と同質で、有文土器の無文部分と考えられる。160はP9出土の下呂石剥片である。辺縁部に連続して細かい剥離痕が認められる。161はP11出土の縄文土器の胴部破片である。表面はよく研磨されており、有文土器の無文部分と考えられる。162はP16出土の土器の底部破片である。胴部には地文にRLの縄文が施され、底部には網代圧痕が残る。163はP18出土の土器で、地文に無筋の縄文を施す胴部破片である。164・165はP22出土の縄文土器片で、地文にLRの縄文を施す胴部破片である。166・167はP54出土の石器類である。166はチャートの縦長剥片で、側縁部に微細な剥離痕がみられる。167は凝灰岩製の横刃形石器で、部分的に

欠損している。168・169はP56出土の打製石斧である。2点とも緑色片岩製で分銅形を呈し、全長10cm程の小型の製品である。抉り部分に敲打痕のようなツブレが認められる。装着痕とも考えられるが、168では痕跡が側縁部の広い範囲に及んでいる。170～172はP73出土の縄文土器片である。170はD字状の刻みのある隆帯が1条横走する土器口縁部で、幅4cm程の無文帯から下にはRLの縄文が施されている。口唇部にもRLの縄文が施されている。171は無文の土器口縁部、172は地文にRLの縄文が施された土器胴部である。

#### 4 II層の不明遺構 (SX)

##### 縄文土器集中出土地点 (SX 2) (第27図、図版10)

I 13区のII c層を掘削中に縄文後期後葉のものと考えられる土器片が1個体分まとめて出土した。直径1.2m程の範囲から120片余りの破片が炭化木片と一緒に出土し、本片の<sup>14</sup>C年代測定値は、3,430±130yrBPであった。第27図の173はSX 2出土の復元土器である。口径約41cm高さ約40cmの大型の深鉢で、底部径は8.8cmである。地文にRLの縄文が施され、口縁部に3本の凹線が巡っている。174は同時に出土した土器の口縁部である。隆帯と沈線により文様が構成される土器で口縁端部および隆帯上には縄文が施されている。表面の一部に炭化物が付着している。



第27図 SX 2 出土土器

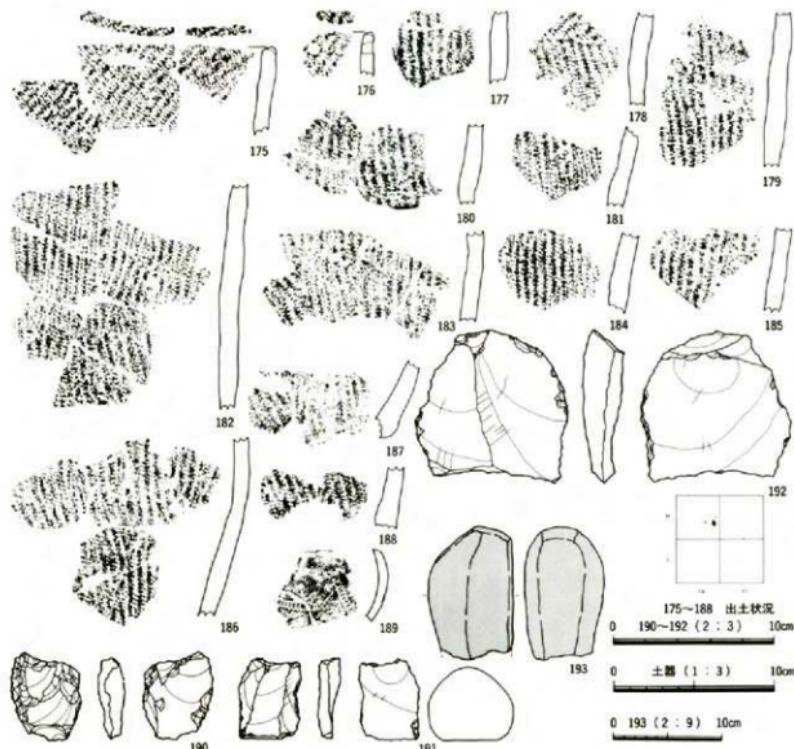
### 第3節 包含層出土遺物

今回の調査では、遺物包含層とそれに準ずる二次的な堆積層より早期から晩期までの各期の縄文土器や石器類が出土した。量的に最も多いのは縄文後期前葉（西区III層出土）のもので、次いで晩期のものが多い。

縄文土器については、便宜的に次の6期に大別し、細分および報告を進めることにした。

I期 縄文早期（東区）	IV期 縄文後期前葉
II期 縄文前期（西区）	V期 縄文後期中葉および後葉
III期 縄文中期	VI期 縄文晩期

石器類については、その分類は五味原遺跡群の西田遺跡（第1集）の報告例に準拠している。層位的に把握できた西区IV層およびIII層については、それぞれ別々に報告することとした。



第28図 西区II期の土器・IV層出土の石器

## 1 II期の土器（第28図175～189、図版11）

縄文前期前半に属すると考えられる土器が西区IV層より出土している。第28図の175～188はH10区IVb層（褐色土）からまとまって出土した土器で、胎土中に植物纖維を含んでいる。やや外反する器形の平底の深鉢で、色調は暗褐色および褐色である。縄文は前々段多条の原体が用いられ、口縁部では斜行し胴部では縱走している。なお、口唇部にも縄文が施文されている。補修孔を有する口縁部の破片も出土している（176）。

189はG8区III層の下層シルト層より出土した。小振りの爪形文を充填した平行沈線文がみられ、器厚は4mm前後である。部分的に朱色が残る塗彩土器で、北白川下層IIb式に比定できる。

## 2 III期の土器（第29図、図版11）

III層からIV層において確認できた縄文中期の土器は3個体である。第29図の194はIII層の下層およびIVa層（灰褐色土）より出土し、I12区からH10区の斜面に沿って破片の散らばりがみられた。中期前半の平出III類A式の土器と考えられる。口径22cm、高さ29cmである。195はG11区のIII層より出土した。口唇部直下に半截竹管状施文具で水平方向の沈線が施されている。地文はRLの縄文である。196の土器はH10区III層下層およびG10区III層の2地点から集中して出土した。口縁部の4分の3はH10区出土で、比較的大きい破片が重なるように埋まっていたが遺構は確認できなかった。地形的には、H10区の出土地点が尾根の先端部にあたりG10区は谷側の斜面上である。復元できた土器は、口縁部がやや外反し胴部が膨れる波状口縁の深鉢で、底部を欠いている。口縁部に文様帯を持ち、それぞれ大きさが異なる4個の隆帯による渦巻きを、横走する隆帯がつないでいる。胴部には櫛歯状工具による条線文が施されている。文様構成等から縄文中期後葉の土器と考えられる。西区III層出土の条線文の土器はこの1個体のみである。

## 3 西区IV層出土の石器（第28図、図版22・23）

西区IV層出土の石器類の総数は12点（0.7%）で、その内訳は二次加工のある剝片1点、使用痕のある剝片5点、磨石・凹石類2点、剝片4点である。層位的に縄文中期以前のものと考えられる。

第28図の190はH10区IV層よりII期の土器（第28図-175～188）に伴って出土したチャート剝片である。縦長剝片の辺縁部に微細な剥離痕が不規則に認められる。191・192は使用痕のあるチャート剝片である。191はH10区より、192はH11区よりそれぞれ出土した。193はF9区IV層から出土した凝灰岩製の磨石である。全面に顕著な使用痕を残し、断面は多角形を呈している。

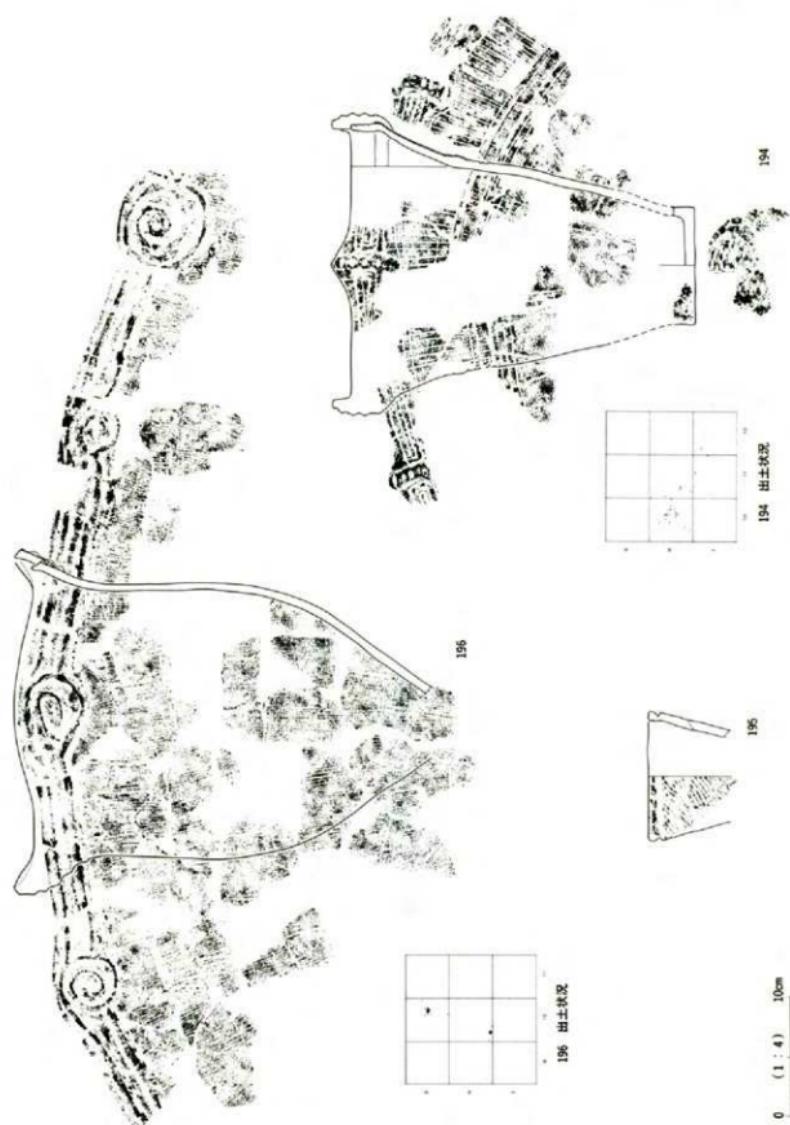
## 4 IV期の土器（第30～40図、図版12～21）

縄文後期前葉に属し、本遺跡の中心をなすと考えられる西区III層出土の土器群である。器形や文様構成等から9群に大別した。

### 第1群 微隆起線文の深鉢。6類に区分。（第30・31・35・36図、図版12～15）

#### 1類 椎形の器形でループ状の文様をもつもの（第30・35図）

口縁部がやや内傾し、胴部がふくらむ器形の深鉢である。粘土紐をループ状にして貼り付ける文様



第29図 西区III期の土器

が隨所にみられる。貼り付けた隆線の両脇がナデにより断面三角形の微隆起線に仕上げられている。

#### a類 (197・198・234~250)

波状口縁の土器で口縁部を2~3条の微隆起線が横走し、以下縦方向に文様が展開している。復元個体の単位数を4としたのは推定である。第30図の197はG10区III層を中心に出土した土器で、益田郡萩原町の桜洞遺跡出土の土器に類例がみられる(紅村1974)。198はH11区III層よりまとまって出土した器厚5mm程の薄手の土器である。縦に垂下する微隆起線を横につなぐ曲線文もみられる。第35図の234~237・239~242はH12区からH9区にかけて出土した薄手の同一個体と考えられる一群である。243は197の一部と考えられる胴部破片である。245~248は本群に特徴的なループの先端を上方に巻き込むような文様をもつ破片である。

#### b類 (251~262)

a類と同様の器形と文様構成の土器で、地文の一部にLRの網文が施されている。251~262は同一個体と考えられ、H11区を中心に広範囲から出土している。口縁部を巡る微隆起線は2条である。

#### c類 (267~270)

口縁部の微隆起線に刻みがある土器である。267~268はG10区およびH10区より出土し、SX21出土の土器と同一個体と考えられる(第23図-127)。口縁部を巡る3条の微隆起線の一部に右下がりの刻みをもち、そのうちの2条が1組みとなってループ状となり先端を上方に巻き込むような曲線文を描いている。波頂部の破片を欠き、文様構成が不規則なため全体像をつかみ難い土器である。270はH10区出土で、口縁部の2条は丸みのある刻みを有し、垂下する2条の微隆起線には刻みがない。

#### 2類 棒形の器形で1本線単位の文様をもつもの(第30図-199・200・36図-271~276)

第30図の199はH11区を中心にやや広い範囲から出土した破片をもとに復元できた土器である。第36図の271~273がその同一個体と推定される口縁部の破片である。1類と同様の波状口縁の棒形を呈するが、微隆起線はループ状にはならず、それぞれの線の末端がつながらないで完結するものが目立つ。274・275は同様の1本線単位の文様構成をもつと考えられる土器の口縁部破片で、それぞれが別個体である。第30図の200は底部付近で微隆起線が途切れている例である。

#### 3類 口縁部に垂下する微隆起線をもつもの(第36図-277~287)

1・2類よりもやや厚手の波状口縁の土器である。277~281は2条の微隆起線が斜め方向に垂下する口縁部で、SB1周辺から出土したものが多い。280~281は微隆起線の起点に貫通孔を伴っている。282・283は垂下する1条の微隆起線の起点となる波頂部に押圧痕がある。284~287は同類土器の胴部と考えられる破片である。第2群土器の胴部としたものの一部も本類に含まれる可能性がある。本類は器形および全体の文様構成が明確ではなく不安定な一群である。

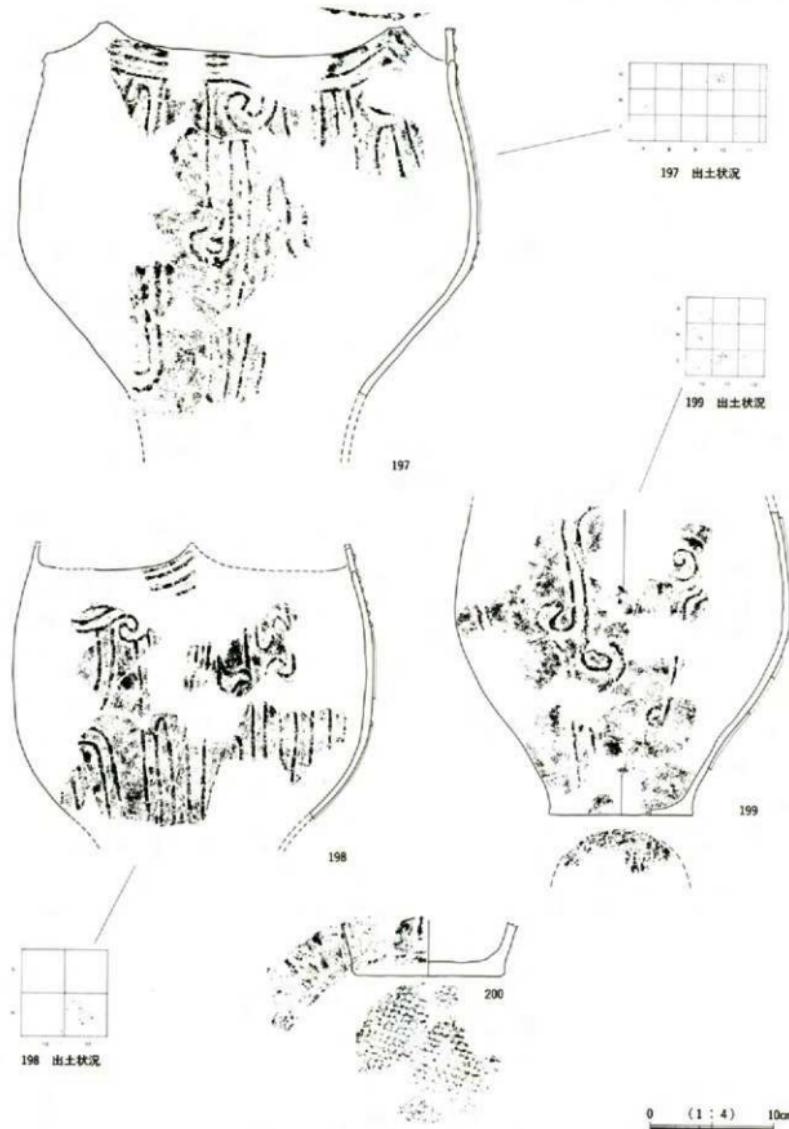
#### 4類 口縁部が外反する器形で口縁部に文様をもつもの(第36図-288)

288はG9区出土で、口縁の一部に微隆起線による渦状文が背中合わせに施文されている。器形や胎土等から第9群土器との関連が考えられる。

#### 5類 口縁部がやや内擗しているもの(第31・36図)

##### a類 (201)

第31図の201はH11区およびG10区を中心に出土し復元できた深鉢である。小破片で破片数も少なかったため、正確な波状口縁の形態や文様構成の全体像等は不明である。口縁端部を沈線が巡り、そ



第30図 西区IV期の土器(1) 第1群1類・2類

約1cm程下を刻みのある微隆起線が横走している。波頂部では2条の刻み入り微隆起線が弧を描き、そこを起点に8条の微隆起線が垂下している。脇の1条は途中でループ状となり、同群1類にみられた下から上へ巻き込むような渦状の文様を描いている。その内側の微隆起線には刻みが入っている。内側の4条がどう変化するかは不明であるが、別の部分の破片では内側の4条は途中で折り返しU字状に対向している。なお、この部分(201の右図)の微隆起線は全部で6条で、両端の文様を描く2条は見当たらない。頸部が括れ胴部が大きく膨らんでいるが、ちょうど膨らみが最大になる辺りに沈線文が施されている。縦に垂下する微隆起線の文様帯が幅の広い2条の平行沈線でつながれ、さらにその沈線間に斜位の沈線文が施されている。

#### b類 (289・290)

第36図の289は内側する口縁の波頂部に押圧痕があり、そこを起点に微隆起線文が施されている。290では垂下する微隆起線の起点に横位の微隆起線が存在するようであるが磨耗のため確認できない。

#### c類 (202・291)

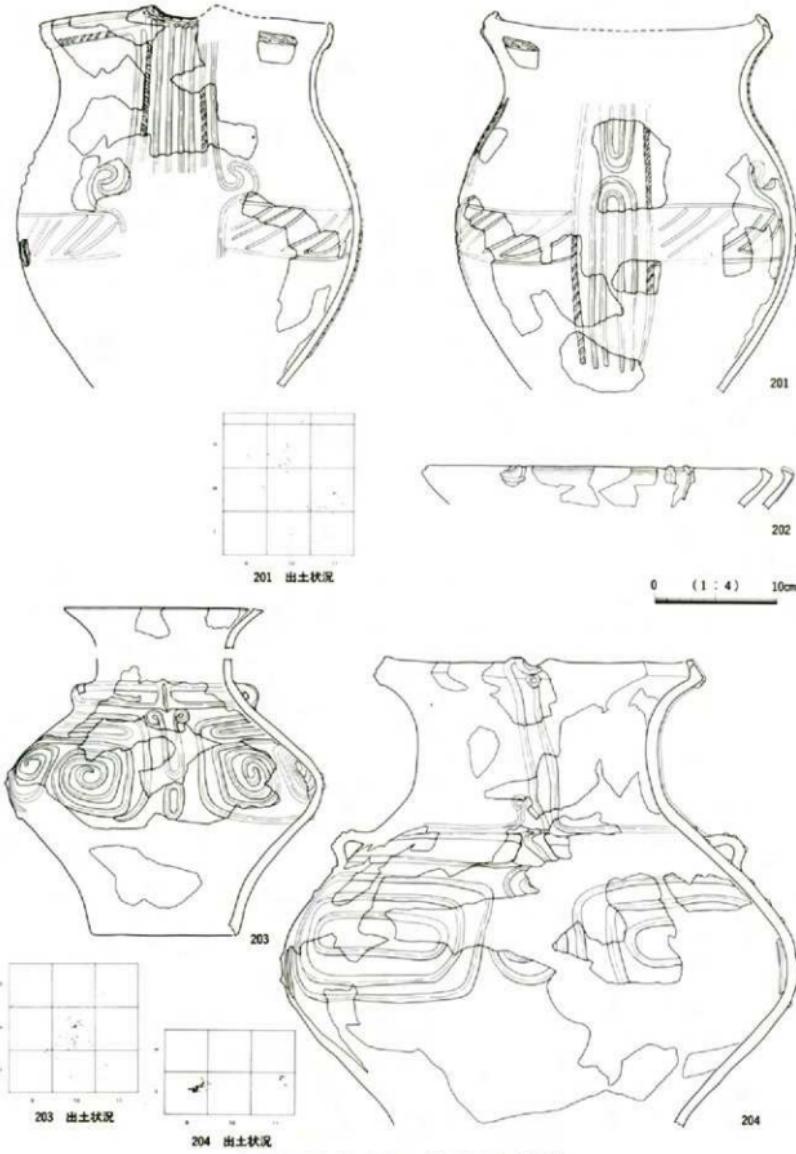
第31図の202は同様に内側する口縁部をもつ器厚が4mm程の非常に薄い土器である。口縁端部を沈線が1条巡っている。2条の微隆起線が垂下する部分は4箇所確認できた。さらに、微隆起線によって二重の弧を描くような文様部を伴っている。第36図の291は同一個体の胴部破片である。

#### 6類 地文に繩文が施されているもの (第36図-292~294)

第36図の292・293はH7区出土の薄手の土器の胴部破片である。1b類の土器と同様に繩文施文は部分的である。微隆起線が描く曲線文は1本線単位と考えられる。294はG10区より出土した。

### 第2群 微隆起線文の壺状土器 (第31・32図-203~205、36・37図-295~330、図版15~17)

微隆起線によって施文され橋状把手を伴う独特の形態を示す一群である。遺構出土分を含めて全部で7個体を確認した。第31図の203はH10区を中心に出土したやや小型のタイプである。橋状把手は3個出土し4単位と推定した。橋状把手部には縦に沈線が施され、把手間は平行する微隆起線で結ばれている。大きく張り出す胴部の上半分に微隆起線による文様帯をもっている。橋状把手の直下にはその端部を一周させて小円をつくってからU字状に垂下させる文様と縦長の楕円文が施されている。その間を埋める胴部文様は、まず外側に下が開く方形文様があり、その中に横長の楕円文と、最終的に上方で一本につながる2つのやや角張る渦巻き文を配している。地文は無文で器面はよく磨かれている。204はI9区でまとまって出土した破片にSB1出土の破片(第12図-21)が接合して復元できた土器である。口径約25cm、胴部最大径約40cm、底部を欠くが現高約38cmの大型の土器である。橋状把手は3個出土し前者と同様4単位と推定した。口縁部は内側し、単位ごとに飾りを有している。飾り状部分では口縁端部に半円状の窪みを作出し、その縁に弧状に微隆起線を配し左側からつなげて垂下させている。さらに弧状の微隆起線の中央付近から、その先端部分で小円を描く微隆起線を1条垂下させている。小円部分は押圧されボタン状を呈している。この微隆起線は橋状把手の上方で右方向に曲がり、隣の橋状把手の手前で上方に折れた後、再びその先端部で小円を描き終結している。口縁部から垂下する左側の微隆起線は橋状把手の上を通り胴部の文様帯につながると考えられる。橋状把手の下方は一部に渦巻き状の文様がみられるが詳細は不明である。把手間の胴部文様は、三重の隅に丸みをもつ方形文である。203と同様に胴下半部は無文で、器面は丁寧なナデ調整がなされている。第32



第31図 西区IV期の土器(2) 第1群5類・第2群

図の205はH10区を中心に出土した土器で、胴部の下半分は未確認の個体である。確認できた橋状把手部は2ヵ所であるが、文様展開等から4単位と考えられる。口縁部は大きく外反し、ループ状の粘土紐を貼り付けた後に微隆起線に仕上げる痕跡を残す単位文が観察できる。橋状把手間は203・204の土器と同様に平行する2条の微隆起線で結ばれている。胴部文様は偏平の角張った満巻き状の文様とみなせるが、欠損部分があり確実ではない。第36図の295~297はSK2出土の橋状把手部分（第25図-141）と同一個体と考えられる土器の一群である。298・299は小振りの橋状把手をもつタイプで、I12区出土である。SK1出土の土器（第25図-137・138）と同一個体と考えられる。300~306はH7区より出土した一群である。やや複雑な文様構成の土器であるが、磨耗が著しく復元は困難であった。308~329は本群土器の胴部と考えられる破片である。324・325はSK6出土の橋状把手をもつ土器（第16図-83~85）と同一個体と考えられる破片である。326~329はやや薄手の土器である。文様展開から本群としたが、第1群土器にふくまれる可能性がある。330は本群に類似したミニチュア土器である。微隆起線が施されているが、橋状把手の有無は確認できなかった。

### 第3群 緑帯文系の土器。6類に区分。（第32・37図、図版17・18）

#### 1類 口縁部が内外に肥厚し口縁端部に沈線文をもつもの（第32・37図）

##### a類（206~208・331~333）

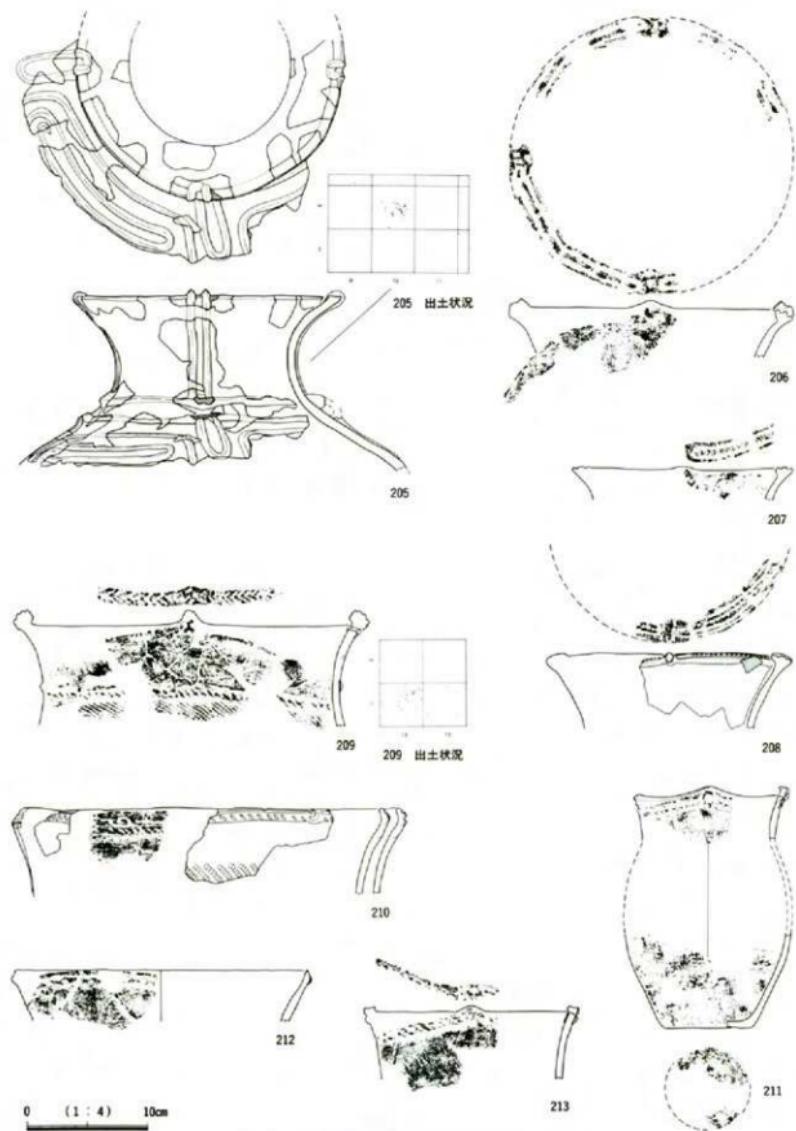
口縁端部に2~3条の沈線が巡り、途中に小突起をもつ。第32図の206では肥厚した口縁端部の突起間に沈線で輪を描いているので、部分的には2条の沈線が巡っているように見える。小突起は3個が現存で、内外を押圧しその間を内側に向かって刺突している。頸部は無文、胴部は不明である。出土区はG10区を中心にH9~11区と広範囲に及んでいる。207はG11区およびH9~10区より出土した。肥厚した口縁端部の突起間に沈線で輪を描き、その間の部分をD字状の刺突文で充填している。小突起部分は外側に伸び、頸部文様へと展開しそうな部分で破損している。H12区出土の第37図の333が同一個体の胴部と考えられる破片で、丸みのある2条の隆帯を伴い、器面はよく磨かれている。208はG9区より出土した。207と同様に沈線間をD字状の刺突文で充填している。継に細長い小突起部分は磨耗している。頸部は無文、胴部は不明である。331はF9区より出土した。口縁端部に輪を描く沈線の間にさらに1条の沈線を加えている。小突起には刻みがみられる。I11区出土の332では2条の沈線の末端を刺突している。

##### b類（209・334）

口縁端部にハの字状の刻みがみられるタイプで、遺構出土分を含めて3個体を確認した。第32図の209はI12区を中心に出土し部分的に復元できた土器で、P8出土の破片を1片含んでいる。ハの字状の刻みをもつ口縁端部の肥厚は弱めである。刻みのある小突起は3個が現存で、4単位と考えられる。ゆるく外反する頸部は無文で、胴部との境に右下がりの刻みのある隆帯が1条巡っている。ややふくらむ胴部にはLRの繩文が施されている。第37図の334はH11区出土で、肥厚した口縁端部に刺突によるハの字状の文様が刻まれている。SX7およびP73出土の土器（第16図の91）では、ハの字に刻んだ中央部に沈線を加えている。

##### c類（335・336）

肥厚した口縁端部を1条の沈線が巡り、突起部に装飾を加えている。第37図の335・336は同一個体



第32図 西区IV期の土器(3) 第2群・3群・8群

で、H 9 区出土である。台形状に張り出した突起部に沈線文を描き、外側に隆帯を回して貼り付けている。

#### d 類 (337・338)

第37図の337は I 10区より出土した。内外に肥厚させた口縁端部を 2 条の沈線が巡り、途中に短沈線による曲線文がみられる。沈線間および外端部に右下がりの刻みが加えられている。頸部には沈線文の一部が残っている。338は I 11区出土の同一個体と考えられる無文部分の頸部破片である。

#### 2 類 口縁端部がやや内聳しているもの (第32図-210)

第32図の210は G 9 区および H 12 区を中心に広範囲から破片が出土した土器である。内聳気味の口縁端部を 1 条の沈線が巡っている。横走する沈線の途中でその端を渦巻き状にして終結させたり、その端を弧を描く短沈線で開んでいる部分が 6 カ所みられる。さらに沈線の下を刻み入りの 1 条の隆帯が巡っている。刻みは短沈線によるもので、その向きは右下がりである。やや外反する頸部は無文帯となり、胴部には RL の繩文が施されている。

#### 3 類 幅広の口縁端部に文様帶をもつもの (第37図-339～349)

##### a 類 (339・347)

第37図の339・340は H 10 区および I 10 区出土で、同一個体と考えられる土器である。幅広の口縁端部に横走する 4 条の沈線がみられ、下端部を右下がりの刻みが巡っている。突起状の部分には沈線による渦状文や弧状文がみられる。341～346は H 11 区を中心に出した同一個体の土器である。口縁端部には 3 条の横走沈線と突起部を飾る曲線文がみられる。下端部を刻みが巡り、頸部以下には無節の繩文が施されている。頸部が大きく外反し、胴部が膨らむ器形と考えられる。頸部と胴部の境目辺りを右下がりの刻みがある隆帯が巡っている。その隆帯の上下に横方向に展開する曲線文風の沈線がみられる。347は G 9 区と I 10 区から出土した。やや幅広の口縁端部を 1 条の沈線が横走している。沈線の末端は刺突され、沈線内には刺突列が続いている。突起部には刻みのある半円状の隆帯が付き、その中央部分に押圧を加えている。隆帯内外は沈線で開まれ、外側の沈線は 2 条である。大きく外反する頸部は無文で、よく磨かれている。胴部との境目に刻みのある隆帯がみられる。

##### b 類 (348・349)

内聳気味の口縁で頸部の外反は緩めである。突起部に相当する部分に沈線による曲線文がみられる。348は F 9 区出土で、頂部に押圧痕がある。349は SX 7 の周辺から出土し、二次焼成を受けている。上端部に横走する 1 条の沈線がみられ、その下に渦巻状の文様が展開している。

#### 4 類 刻みのある隆帯を伴うもの (第37図-350・351)

1 類と同様に肥厚した口縁端部に沈線を横走させた輪が描かれ、結果的に 2 条の沈線がみられる土器である。突起部に相当する部分には押圧痕がある。右下がりの刻みがある隆帯を伴い、頸部の外反は緩めである。350は H 10 区、351は I 11 区より出土し、同一個体と考えられる。

#### 5 類 口縁部に刺突のある平行沈線文をもつもの (第32図-211)

第32図の211は緩やかな波状口縁で、胴部がやや膨らむ器形と推定される小型の深鉢である。口縁部を 2 条の沈線が巡り、沈線間を D 字状の刺突で充填している。間にボタン状の小突起を有し波頂部を形成している。頸部は無文で、胴部には RL の繩文が施されている。1 a 類の207・208と同様の施文形態がみられ、器形は異なるが関連の深い個体と考えられる。G 9 区から出土した土器である。

**6類 胸部破片（第37図—352～354）**

地文が縦文で沈線文がみられる薄手の胸部破片である。G10区出土で、本群の胸部と考えられる。

**第4群 垂下降帯をもつ土器（第33図—214・37図—355～358、図版17）**

口縁部は波状で、頸部が大きく外反する器形の土器である。刻みのある垂下降帯を主軸に文様が構成されると考えられる。口縁端部にはハの字状の刻みがみられ、波頂部は小突起状に盛り上がりしている。波頂部の仕上げは短沈線で弧を描いたものと、押圧されたものがみられる。2条の垂下降帯は波頂部を起点とし、無文の頸部を通り胸部で左右に分岐している。下降帯の刻みはハの字を意識したような部分とそうでない部分がみられる。胸部文様は刻み付きの隆帶文と沈線による曲線文が組み合わされているようである。部分的に復元できた図33の214については、その出土区はH11区を中心にG10区とH7区およびSB1出土の1点を含んでいる（第12図—9）。同一と考えられる第37図の355はG9区およびF9区より出土し、356はI16区より出土した。357・358は沈線文をもつ同質の胸部破片ということを本群に含めたが、他群の土器である可能性がある。

**第5群 沈線文の土器。7類に区分。（第33・38図、図版18・19）****1類 樽形の器形のもの（第38図—359～361）**

359・360はH10区およびG11区出土の土器である。3条の沈線が口縁部を巡り、その下に弧状の沈線や縱方向の沈線がみられる。樽形の器形で第1群土器との関連を考えられるが、小破片のため全体像はつかみ難い。361も3条の沈線が口縁部を巡る土器であるが、第6群に属する可能性もある。

**2類 口縁部が内脣するもの（第38図—362・363・第40—456）**

362はI12区より出土した。沈線が2条垂下し、口唇部にも沈線がみられる。363はH12区出土で、垂下する沈線の上に短沈線による刻みがみられる。第40図の456は同じ土器の底部破片と考えられる。

**3類 口縁部が外反するもの（第38図—364）**

364では外反する口縁部に縱方向の沈線文がみられる。H7区出土である。

**4類 口縁部に幅広の文様帯をもつもの（第33図—215）**

第33図の215はI11区出土の小型の深鉢で、口縁部が外反し胸部が膨らむ器形の土器である。口縁部から頸部にかけて3条の沈線が垂下し、その横にはコの字状の区画沈線がその開いた部分を上下にして縱に並んでいる。区画内には刺突文がみられ、文様帯の下端となる頸部と胸部の境目辺りを沈線が巡っている。地文は無文で、網代压痕を有する底部は磨耗している。

**5類 横展開の文様帯をもつもの（第33図—216）**

第33図の216の土器は口縁部がやや外に開き胸部が膨らむ器形の小型の深鉢である。全面にRLの縦文が施され、口唇部にも縦文がみられる。3条の沈線が口縁部を巡り、その1ヵ所から5回の蛇行を経て下に降りた3条の沈線が途中で部分的に4条に変化しながら頸部を一周している。底部には、平行脈の葉脈压痕がみられる。G9区III層出土であるが、第3群土器の210（第32図）等同グリッド内の大半の土器の出土部分より約40cm程上層からの単独出土である。

**6類 Z字状文を伴うもの（第38図—365～367）**

第38図の365～367はH10区III層上層（SX1周辺）から出土した。胸部に少し膨らみをもつ波状口縁の

深鉢と考えられる。地文は RL の縄文で、途中で Z 字状になりながら垂下する沈線が口縁部から頸部を巡っている。波頂部には内側へ押し込むような圧痕がみられる。

#### 7類 脊部破片（第33図-217・38図-368-375）

第33図の217はG12区出土で、破片の上端部に横走する1条の沈線がみられる。第38図の368-375は本群土器の脊部破片であるが、第1・2群に比べて出土点数は少ない。

#### 第6群 鉢形土器。3類に区分。（第33・38図、図版18・19）

##### 1類 磨消縄文の土器（第33図-218）

第33図の218はG-H列より破片が出土した鉢形の土器である。口縁部が丸みをもって大きく内屈する器形で、底部は不明である。2条の沈線が口縁部を巡り、斜行する3条の沈線が途中に渦巻き文を配しながら脇部文様を形成している。沈線間にはRLの縄文が充填され、器面は丁寧なナデによる調整がなされている。SB1より同一個体と考えられる破片が1点出土している（第12図-16）。

##### 2類 沈線文の土器（第33・38図）

###### a類（219）

第33図の219は同群第1類と同様の器形をとると考えられる鉢形の土器である。口縁部を2条の沈線が巡り、沈線間に右下がりの短沈線が充填されている。脇部は無文で、器面はよく磨かれている。破片はI12区を中心にI11・H11・H10区およびSX6・SX8・P3から出土した。

###### b類（376・377）

第38図の376・377も同様の器形の土器と考えられる。口縁部を沈線が1条巡り、その下に刻み入りの隆帯がつく。脇部には斜行する沈線文が施されている。

##### 3類 地文に縄文が施されたもの（第33図-220）

第33図の220は口縁部がやや内脅する鉢形の土器で、I12区出土である。2条の沈線が巡る口縁部の地文は無文で、沈線より下の脇部にはLRの縄文が施されている。

#### 第7群 その他の有文土器。6類に区分。（第38図、図版19）

##### 1類 刻みのある隆帯で施文されるもの（378-380）

刻みを伴う低い隆起の隆帯で施文される外反器形の土器である。

##### 2類 沈線文と刺突文に貼付隆帯をもつもの（381・382）

口縁部に横走する沈線や刺突列がみられ、隆帯を貼り付けた部分は突起部とも推定できる。

##### 3類 沈線の上に刺突を加えるもの（383-389）

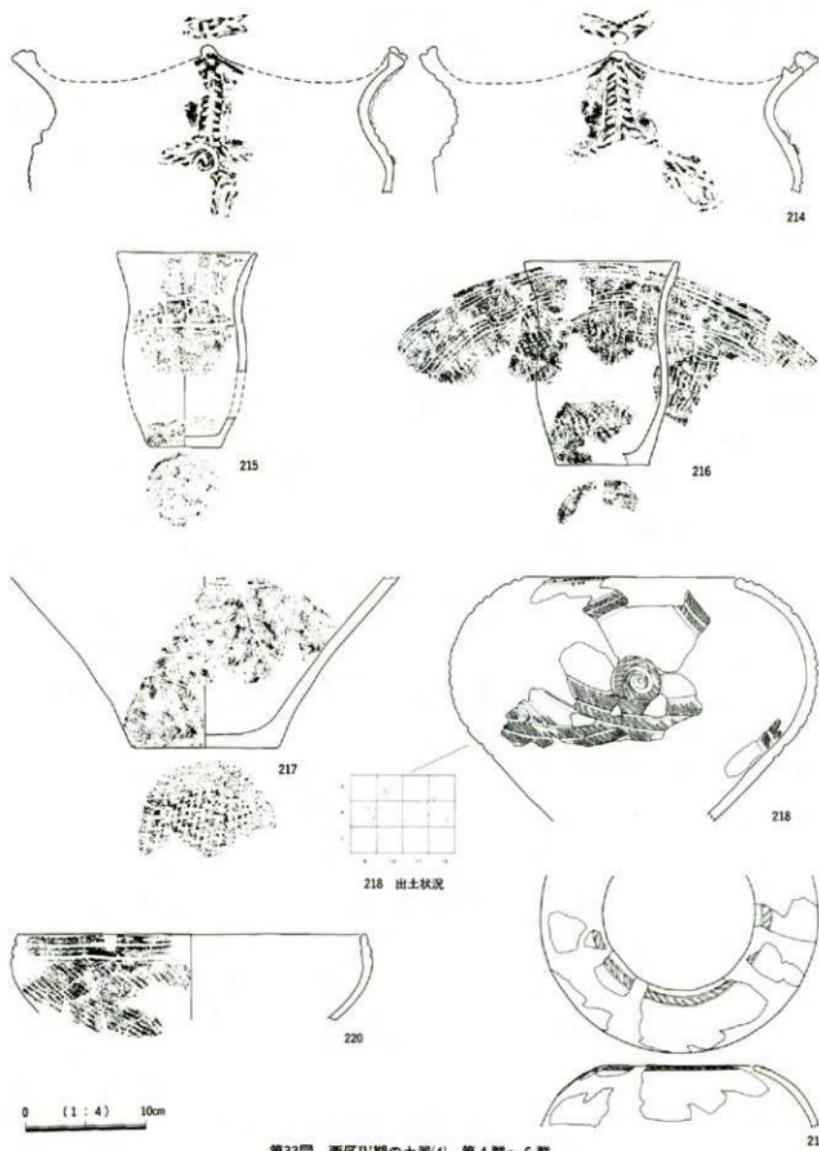
第38図の383-389は内脅する口縁部に文様帶をもち、頸部が外反し脇部がやや膨らむ器形になるとみられる深鉢の破片である。口縁部には4条の横走する沈線と弧状の沈線が施され、沈線上に丸みのある刺突列が充填されている。384は突起状の破片、388・389は脇部破片で無文である。

##### 4類 口唇に刻みをもち隆帯で施文されるもの（390）

口唇にハの字状の細い沈線による刻みがみられる。3群1b類との関連が考えられる土器である。

##### 5類 磨消縄文の土器（391-399）

第38図の391-399は同一個体と考えられる破片である。頸部が括れ脇部に膨らみをもち口縁部が内



第33図 西区IV期の土器(4) 第4群～6群

骨する小型の深鉢と推定される。2条の沈線によって文様が構成され、沈線間にLRの細かい縄文を充填している。391・397・398では沈線の端をループ状に閉じている。396では渦巻き状の文様がみられる。西区III層で確認できた磨消縄文系の土器はこの土器と第6群の218(第33図)の2点である。

#### 6類 突起をもつもの (400)

H10区出土の沈線を多用して飾る口縁の突起部分である。

#### 第8群 口縁部に隆帯等をもつ土器。3類に区分。(第32・34・38図、図版20・21)

##### 1類 微隆起線が横走するもの (第38図-401~405)

口縁部を1~2条の微隆起線が横走しているが、破片が小さいため途中で文様を描くかどうかは不明である。401はH10区出土、402はI11区出土で、胎土等から同一個体と考えられる。口縁部の2条の微隆起線より下は縄文施文である。H10区出土の403も同様に地文に縄文が施されている。404はH12区より出土し、405はH10区から出土した。本類はいずれもIII層の上層部からの出土である。

##### 2類 刻み入りの隆帯が口縁部を巡るもの (第32図-213・第34図-221・第38図-406~408)

###### a類 (第32図-213・第38図-406・407)

頸部がやや外反する器形で、隆帯は短沈線によって刻まれている。第32図の213はG10区より出土した。小突起を有し、その頂部を押圧している。胴部には縄文が施されている。

###### b類 (第34図-221・第38図-408)

隆帯貼付によって肥厚した口唇にも刻みを加えている土器である。第34図の221はH10区より出土し、頸部は無文で胴部には縄文が施されている。刻みはD字状である。第38図の408では隆帯の刻みはD字状で、口唇の刻みは右下がりの短沈線である。

###### c類 (第32図-212・第38図-409~414)

隆帶にD字状の刻みや丸い押圧状の刻みがみられる土器である。第32図の212はI12区出土で、隆帶に丸い刻みを有している。第38図の409~413では、隆帶にD字状の刻みがみられる。

##### 3類 口縁部を沈線が巡るもの (第38図-415)

H10区出土の土器で、口縁部を1条の沈線が巡り、口唇には刻みが加えられている。

#### 第9群 無文土器。5類に区分。(第34・39図、図版20・21)

##### 1類 口唇に刻みをもつもの (第34図-222~227・第39図-416~419)

###### a類 (222・223・416・417)

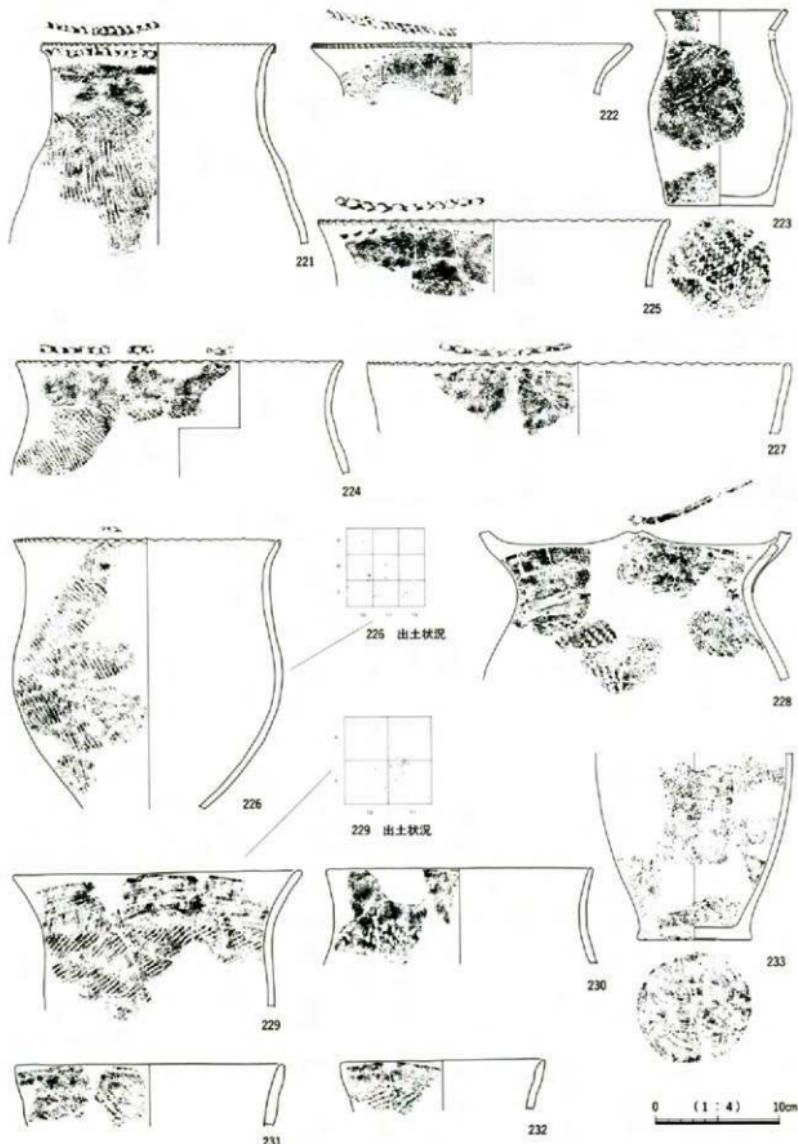
口唇に短沈線による刻みがみられる。第34図の222~223はH9区より出土した。外反の強い222の口縁部は無文である。223の口縁部も無文で、膨らみをもつ胴部には縄文が施されている。

###### b類 (224~226・418・419)

口唇がD字状や押圧痕状に刻まれ、外反する口縁部は無文で胴部には縄文が施されている。第34図の224~225はI12区より出土した。224の刻みはD字状で、225は押圧痕状である。226の土器は広範囲から破片の出土がみられたが、口唇の刻みは押圧痕状で胴部の縄文はRLである。

###### c類 (227)

口唇の刻みは押圧痕状で、口縁部が直立する器形である。I12区およびH12区より出土した。



第34図 西区IV期の土器(5) 第8群・9群

## 2類 外反する器形で口縁部に無文帯をもつもの（第34図—228～230・第39図—420～435）

## a類 (228・420・421)

波状口縁の波頂部を押圧している。228（H10区出土）の胸部地文は大粒のRL縄文である。

## b類 (229・422～428)

口縁部に最大径をもち胴部の膨らみは弱めである。

## c類 (230・429～435)

膨らみの大きい胴部に最大径をもつ土器である。

## 3類 口縁部が内彎あるいは直立するもの（第34図—231・232・第39図—436～445）

## a類 (436～442)

内彎する口縁部の土器で、口縁部は無文である。胸部地文には縄文を施しているものがある。

## b類 (231・232・443～445)

直立する口縁部の土器で、口縁部は無文である。胸部地文に縄文がみられる。

## 4類 胸部破片 (446～452)

頸部と胴部の境目辺りから縄文が施されるものが目立つ。

## 5類 ミニチュア土器 (453)

I 12区出土の手捏ねによって整形された土器である。

## 底部（第34図—233・第40図—454～470）

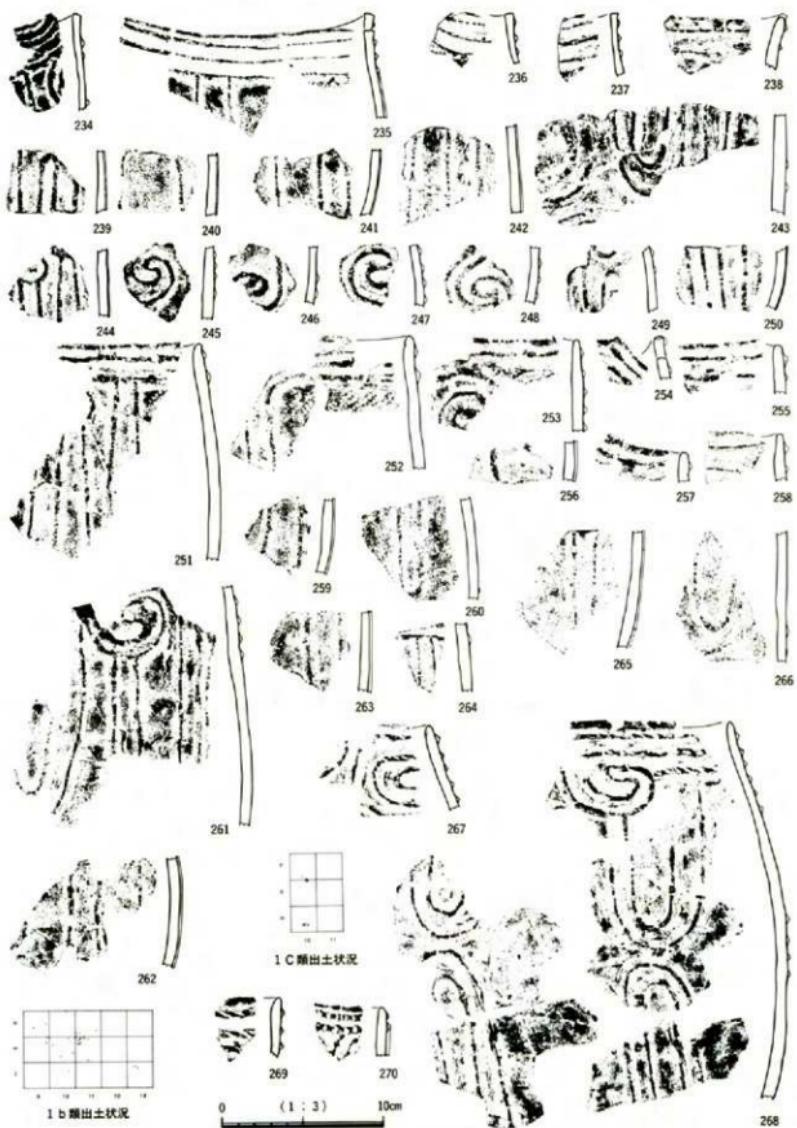
西区III層からは174点の土器底部が出土している。その内の127点（73%）が網代圧痕を伴っている。

網代の編み方については、その半数近くが「2本越え2本潜り1本送り」である。

## 5 西区III層出土の石器（第41～46図、図版22～24）

西区III層からは、981点（55.1%）の石器類が出土している。内訳は、石鎌53点、石錐11点、削器4点、ヘラ形石器2点、両極石器17点、抉入石器3点、二次加工のある剥片13点、使用痕のある剥片21点、石核4点、石錘3点、打製石斧54点、横刃形石器3点、礫器2点、磨製石斧10点、磨石・凹石類51点、石皿2点、砥石1点、剥片類727点である。土器の出土状況や遺構との関わりからその大部分がIV期に属すると考えられる。

第41図の471～486はIII層出土の石鎌である。471はG11区出土で、緑灰色のチャート製である。472はH10区、473はG10区出土で、ともに下呂石製である。474～485はI 11～12区出土の基部の抉りが大きい凹基無茎鎌で、鋸歯状側縁のものが多い。やや角ばった深い抉りに幾分華奢な脚部という組み合せの製品が目立つ（477、481～485）。石材は478と479が黒曜石、475・477・482・485が下呂石で、他は灰白色および緑灰色のチャートである。486はG10区出土の下呂石製で、基部が丸みを帯びて突出するタイプである。石錐は6点図示した。487はI 11区出土のチャート製で、調整が施されたつまみ状の頭部を有している。488は同じくI 11区出土の玉髓製で、頭部は素材の剥片の形状を留めている。489・490はH11区出土のチャート製で、つまみ状の頭部を持つが錐部が著しく短いタイプである。491・492は錐部と頭部の区分が不明瞭なタイプの石錐で、全面加工のチャート製である。弓形に反った薄い剥片の形状をそのまま利用している。493はH11区のIII層の下層部から出土したチャート製削器である。



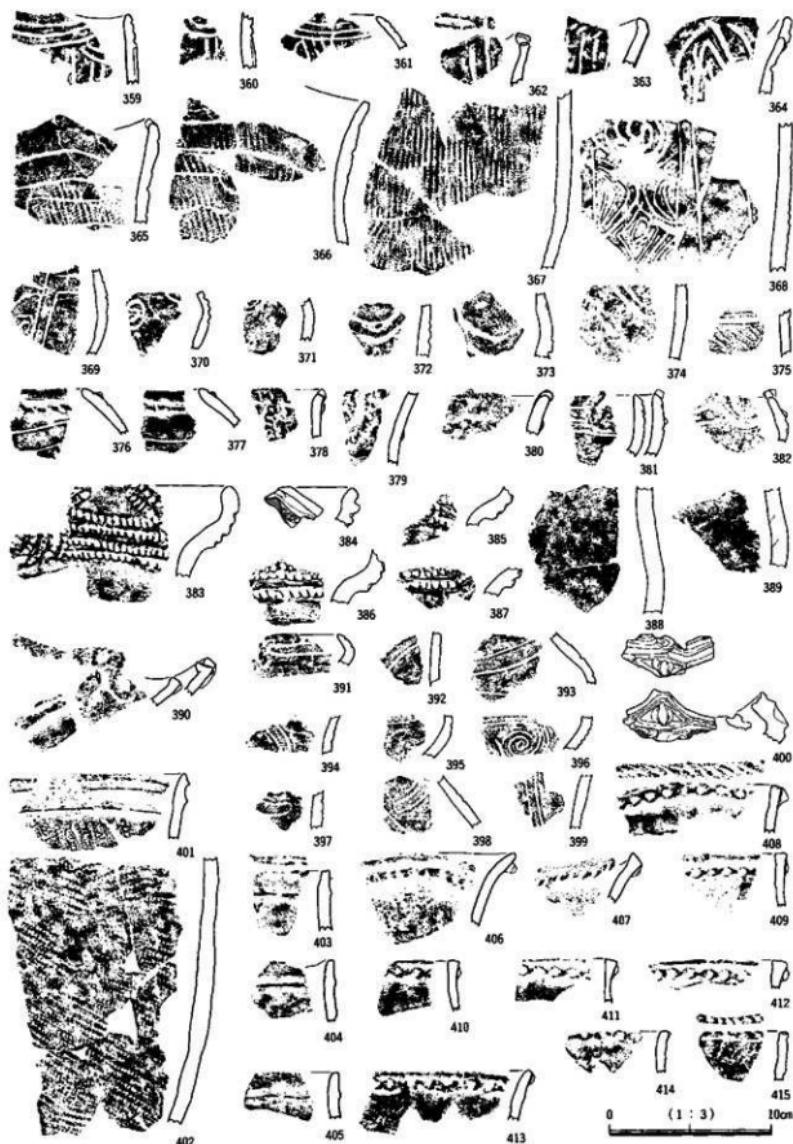
第35図 西区IV期の土器(6) 第1群1類



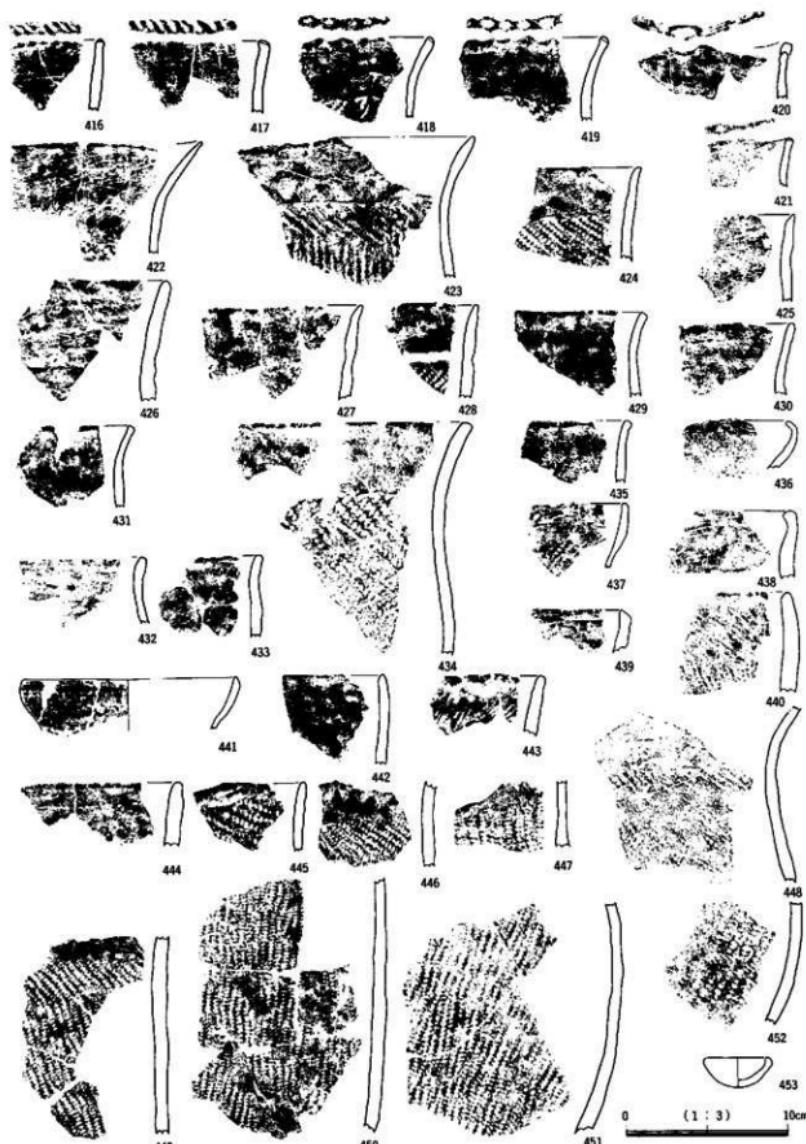
第36図 西区IV期の土器(7) 第1群2類～第2群



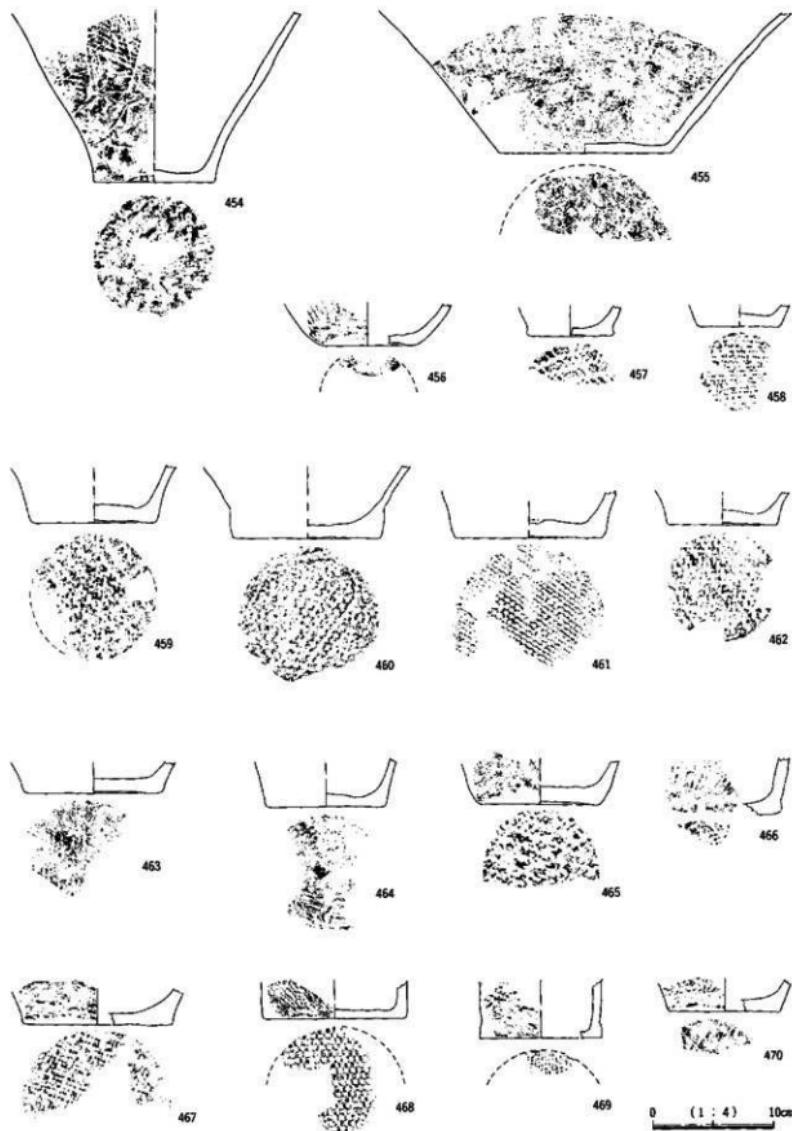
第37図 西区IV期の土器(8) 第2群～4群



第38図 西区IV期の土器(9) 第5群～8群



第39図 西区IV期の土器(10) 第9群



第40図 西区IV期の土器(II) 底部

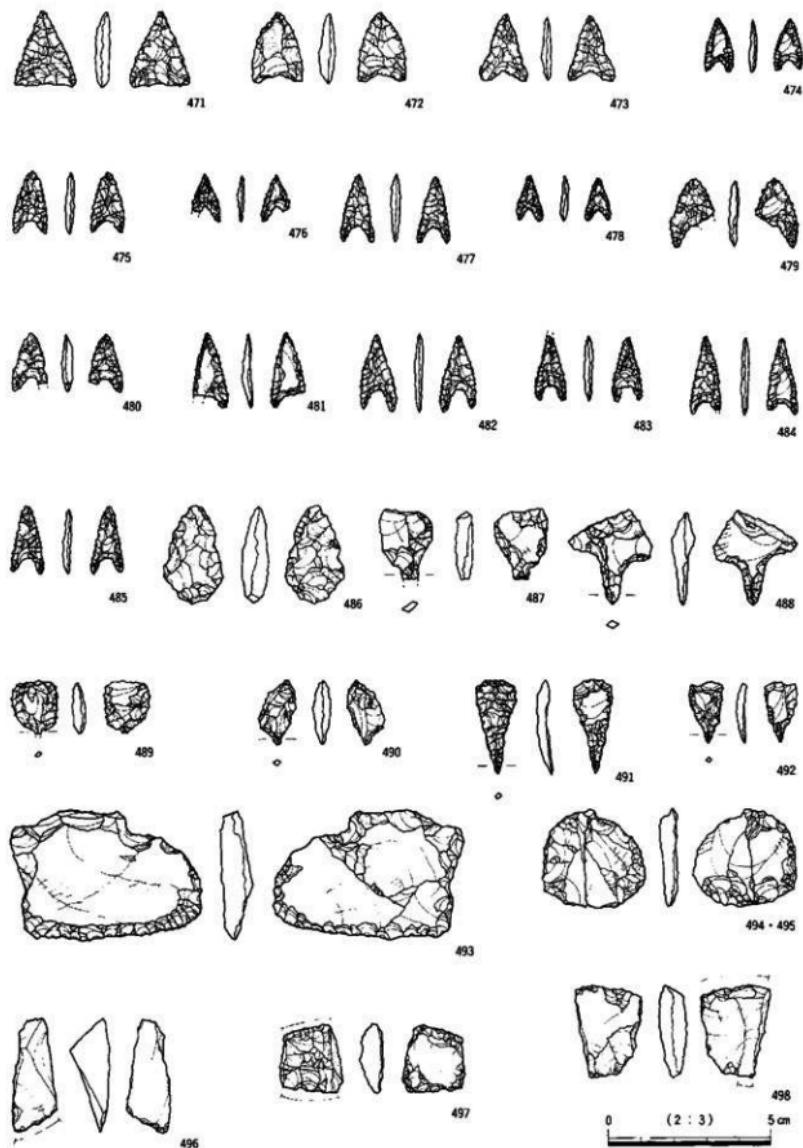
つまみを意図したような抉りの作出がみられ、刃部は両面加工である。494・495はI 11区内で約3m離れて出土し、接合できた下呂石製の削器である。側縁の刃部の加工は494が片面、495が両面である。496はH10区出土のチャート製のヘラ形石器である。497~500は両極剥離痕のある石器で、いわゆるクサビ形石器と考えられるものである。497はチャート製で、向かい合った二辺にツブレが認められる。その形態から石錐あるいは石錐の破損品を転用した可能性がある。498はチャート製の縱長タイプ、499は横長タイプの下呂石製である。500の石材は玉髓で、三辺の辺縁部に剥離痕とツブレが認められる。

第42図の501~503は抉入（ノッチ）状の加工を有するもので抉入石器としたもの3点である。501はチャート製で、細かい連続剥離によって大きい弧の抉りを作り出している。502は表裏に3ヶ所の抉りの作出が確認できるチャート剥片である。503の石材は下呂石で、縱長剥片の側辺部に浅い抉りが認められる。504~506は側縁部に急角度に調整された連続剥離痕をもつ剥片で、小型の搔器の可能性もある。507~508は側縁に大小の連続剥離痕が認められ、二次加工のある剥片としたものである。509~511は使用痕のある剥片としたものである。510の石材は下呂石で、縱長剥片の左側縁に微細な剥離痕が密接している。石核は2点掲示した。512は下呂石、513はチャートである。514~516は凝灰岩製の有溝石錐である。SX21の周辺から2点出土している（514~516）。517は全面に研磨痕を残す厚さ6mm前後の砂岩製品である。砥石と分類したが、他に用途を持つ磨製石器あるいは石製品とも考えられる。

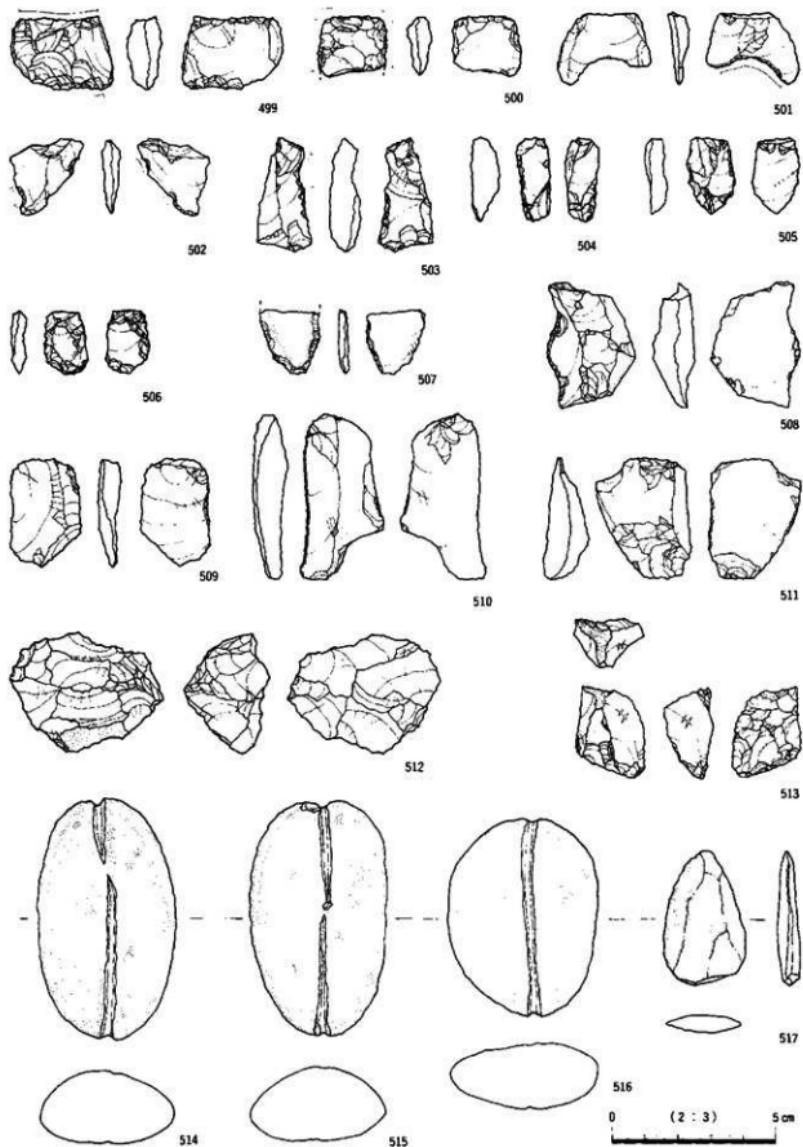
第43図に打製石斧を6点図示した。518はF 9区出土の短冊形で、凝灰岩製である。519~523は撥形のタイプである。521はH10区出土の緑色片岩製で、両側縁部のツブレがP56出土の2本とよく似た状況を呈している（第26図-168・169）。522はH11区出土（第15図）で、打製石斧の未製品と考えられる。石材は緑灰色の凝灰岩で、偏平な川原石を原石として利用している。辺縁部には敲石として転用されたような敲打痕を残している。524~526は横刃形石器である。薄い板状の剥片の長辺に粗い調整を加えて刃部を作り出している石器で、すべて凝灰岩製である。

第44図の527~528は飛驒ヒスイ（軟玉）製の礫器である。527はH12区より出土した。クサビ形の形状をした自然礫の端部に剥離調整が加えられ、刃部を形成していると考えられる石器である。重さ約574gの528はH11区より出土し、ハンマーとして使われたと考えられる使用痕を残している。529はI 12区出土の大型磨製石斧の破片で、砂岩製である。530はH 9区より出土した定角式磨製石斧である。蛇紋岩製で基部を欠損している。

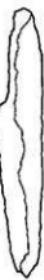
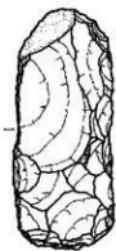
第45図の531~533は小型の磨製石斧である。531はH11区より出土（第15図）し、薄緑色の蛇紋岩製で刃部を大きく欠損している。一方の側面に敲打痕および磨耗痕を残している。532はI 11区出土で531と同色調で同質の石材を用いた製品である。基部を欠く533はI 10区出土、ほぼ完形の534はG 10区出土である。磨石・凹石類は7点図示した。535はG 9区出土で、断面形が円形のタイプである。表面にすりばち状の凹痕1ヶ所と裏面に浅い凹痕2ヶ所が残されている。536はH11区出土で、表裏両面のややザラつく磨痕と右側面の敲打痕が顕著である。H 9区出土の537は、表面の磨痕は滑らかで、裏面の磨痕はザラついている。538はH10区出土で、表裏両面のザラつく磨面上に5個の明確な凹痕が残されている。539はI 10区出土で、全面に顯著な磨面が観察される。特に上面は大きく面取りがなされ、中央部に深い抉りを有している。540~541は同一グリッド内より出土した資料である（H11区）。断面形が六角形で幅の広い面を磨面にし、その間の幅の狭い面を敲打面にしている。542はH11区のIII層の下層部から出土した磨石で、一方の側面に広く敲打痕を残している。



第41図 西区Ⅰ層出土石器(1)



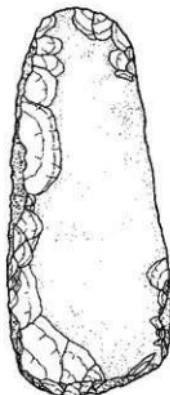
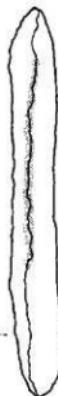
第42図 西区III層出土石器(2)



518

519

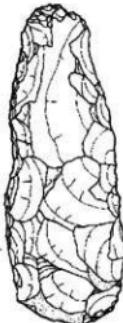
520



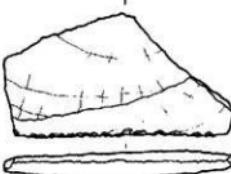
ツブレ

521

敲打痕

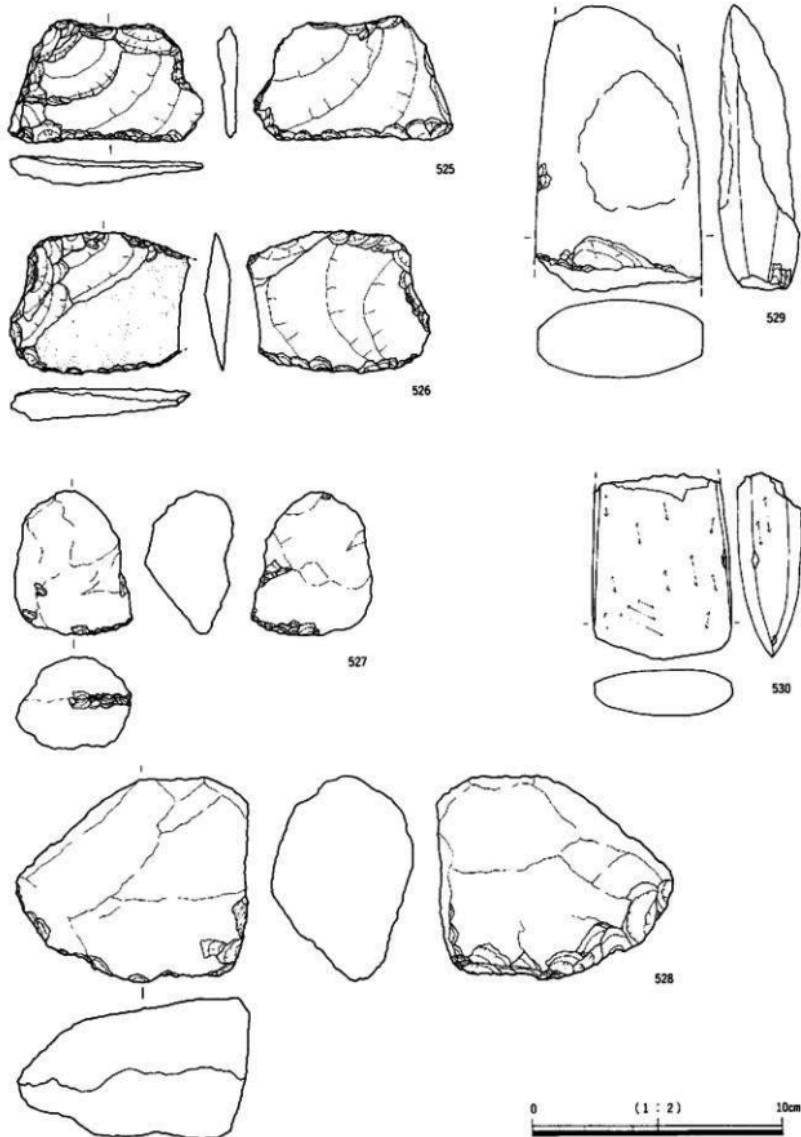


523

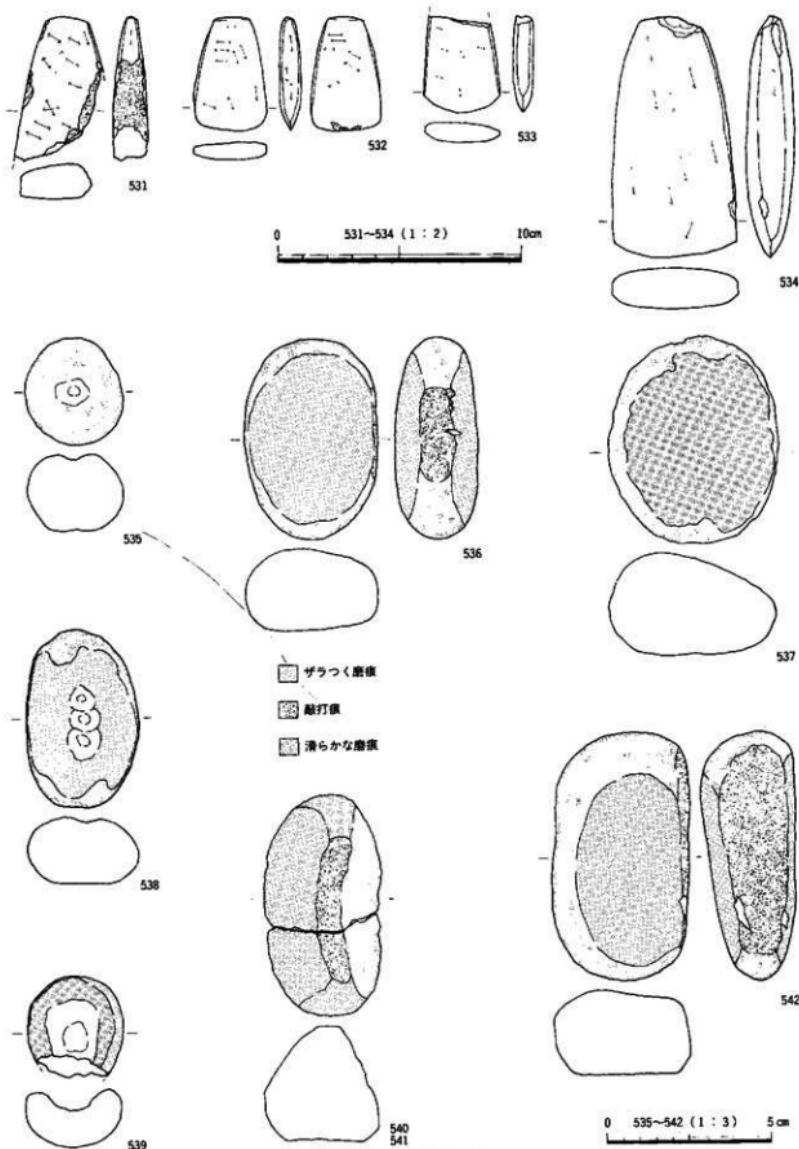


0 (1 : 2) 10cm

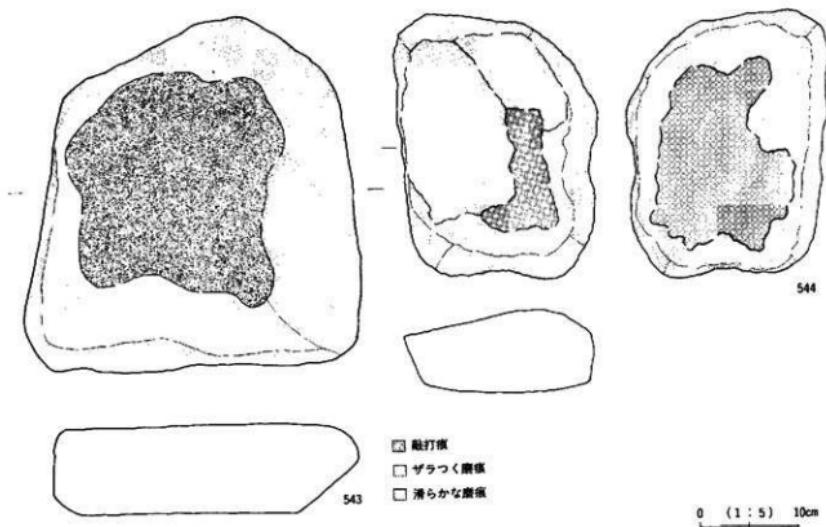
第43図 西区III層出土石器(3)



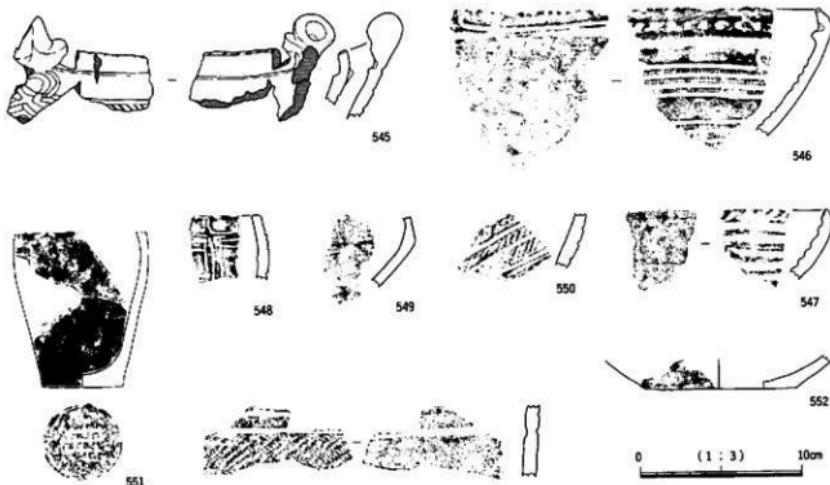
第44圖 西區III層出土石器(4)



第45図 西区III層出土石器(5)



第46図 西区III層出土土石器(6)



第47図 西区V期の土器

第46図の543はSX15周辺より出土した石皿である(第15図)。偏平な凝灰岩の上面に細かい傷を無数に伴う敲打痕が観察できる。石器製作等に使用された作業台の可能性がある。544はI 11区より出土した石皿で、表裏両面に滑らかな磨面とややザラつく磨面を有している。

### 6 VI期の土器(第47図、図版24)

西区のII c層では縄文後期中葉から後葉の土器が出土している。第47図の545はI 9区から出土した。突起部を含む土器口縁部の破片である。沈線による曲線文がみられ、口唇に刻みを有している。546・547はI 13区出土の内面施文の浅鉢である。割れ口部分は磨耗が顕著で、ローリングによるものと考えられる。548はI 11区出土の沈線文を有する土器の口縁部である。以上の4点は加曾利B 1式に比定できる。549・550はH12区出土の土器の胴部破片である。551はI 12～13区出土の小型土器の胴部で、黒褐色の器面はよく磨かれている。552はI 11区出土の浅鉢の底部破片である。553はI 9区出土の地文に縄文を施す土器である。沈線が2条横走し、裏面にも沈線が1条巡っている。

### 7 VI期の土器(第48図、図版25)

#### 第1群 晩期前半の土器(554～558・560～562)

##### A類 隆筋文の上器(554)

第48図の554はF 11区 II a層より出土した。口縁部に1条の圧痕付隆帯が貼付されている深鉢である。粘土紐を貼り付けた突起の頂部を刺突している。胴部は無文で輪積み痕を残している。

##### B類 中屋式段階の土器(555～558)

555はF 10区 II a層より出土した。口縁部がくの字状に屈曲して外反する深鉢で、口唇に2条の沈線がみられる。頸部と胴部を連続刺突文が巡り、胴部文様帶には鍵手文がみられる。地文は擬縄文と条線文である。556はG 8区 II層出土、557はF 9区 II層出土、558はH 12区 II層出土である。

##### C類 刺突文のある土器(560)

560はI 9区 II層より出土した小型の土器で、内外に小刺突文と凹線文がみられる。

##### D類 縫線文の上器(561・562)

細い沈線によって施文される土器の口縁部である。第2群に含まれる可能性もある。561はH 11区 II a層より、562はI 12区 II a層よりそれぞれ出土した。

#### 第2群 晩期後半の土器(559・563～569)

##### A類 三叉状の文様をもつ土器(563～566・569)

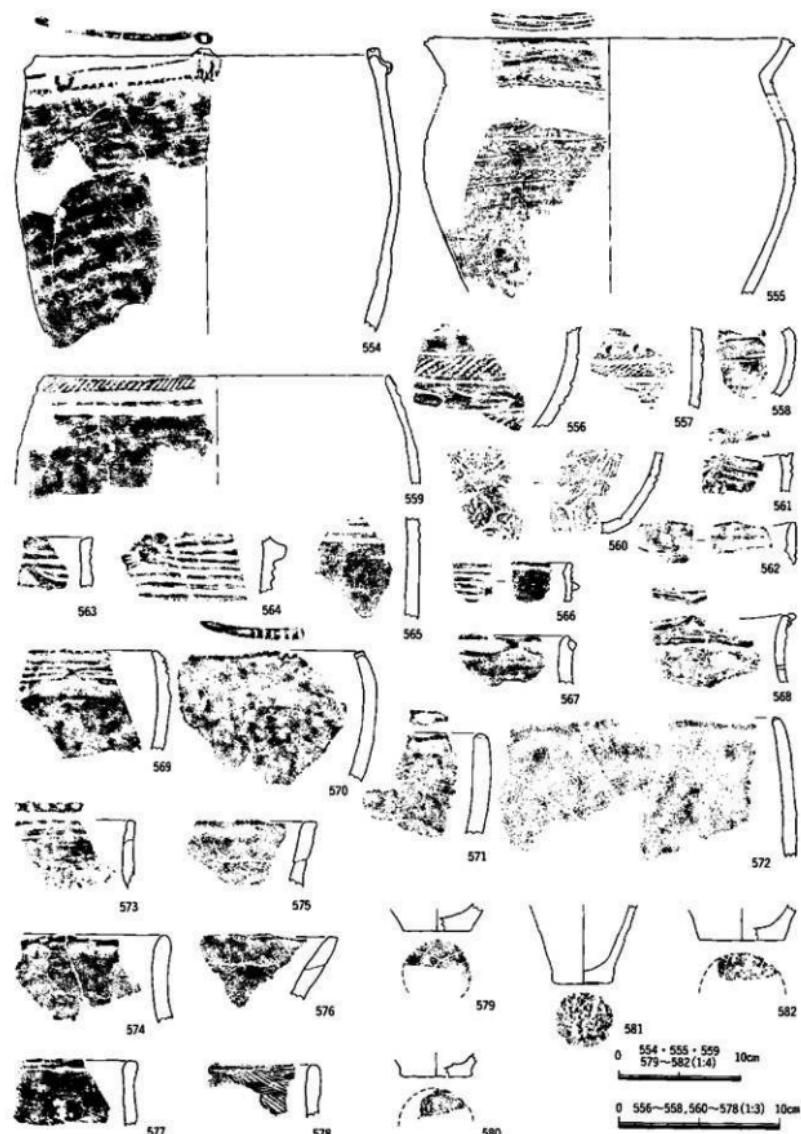
I 12区出土で、564・566は瘤状の突起を有している。566は磨き込んで隆線部を作り出す浮線的な土器である。569は沈線内に朱が残る塗彩土器である。

##### B類 口縁外帶をもつ土器(567・568)

567はI 13区 II層出土、568はH 10区 II a層出土の口縁部破片である。568は薄手の土器で、右下に補修孔を有している。口縁端部内面には凹線がみられる。

##### C類 短沈線文の土器(559)

F 9区 II a層出土の土器である。口縁部を右上がりの短沈線で刻み、その下を2条の凹線が巡って



第48図 西区IV期の土器

いる。胸部には条痕文がみられる。

### 第3群 晩期の無文土器 (570~582)

#### A類 口唇に刻みのある土器 (570)

I 13区II a層出土の鉢形の土器である。口唇の一部を縦に刻んでいる。

#### B類 口唇を押圧する土器 (571~573)

3点出土している。571はH11区II a層、572はI 13区II a層、573はF 9区II a層出土である。

#### C類 厚手の無文土器 (574)

574はF10区およびI1区のII a層から出土した。口縁部が直立する厚手の無文土器である。

#### D類 輪積み痕の残る上器 (575・576)

F10区およびF 9区のII a層から出土している。

#### E類 条痕文の土器 (577・578)

I 12区II a層から出土している。それぞれ別個体と考えられる。

### 底部 (579~582)

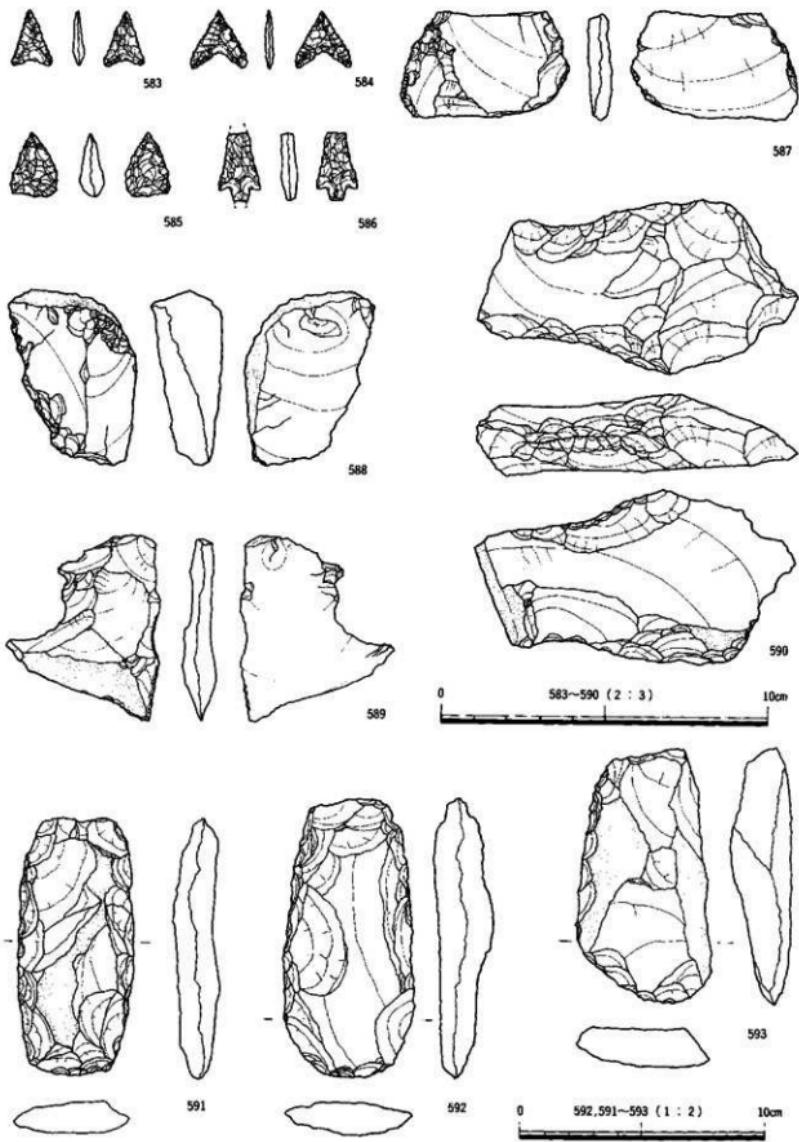
西区II層からは39点の土器底部が出土している。V期のものも含まれるが、その出土状況から大半はVI期に属するものと考えられる。葉脈状痕のつくものが目立った。

## 8 西区 I・II層出土の石器 (第49~50図、図版26)

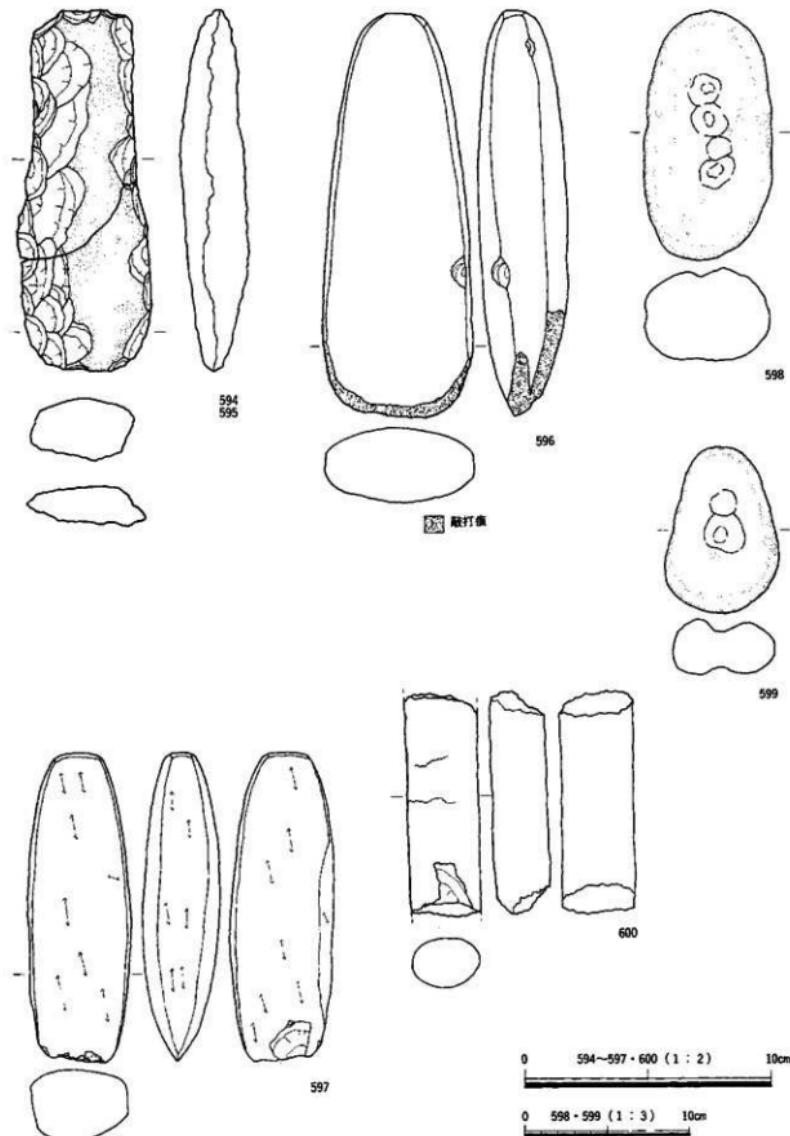
西区I・II層からは、142点(8%)の石器類が出土している。内訳は、石鎌5点、削器1点、二次加工のある剝片4点、使用痕のある剝片4点、石核1点、打製石斧41点、磨製石斧2点、磨石・凹石類19点、剥片類65点である。土器の出土状況からその大部分がV期~VI期に属すると考えられるが、15~16区出土のものはIV期以前に創られたものも含まれると思われる。

第49図の583はI 13区II層出土の石鎌である。下呂石製で基部の抉りが浅めの凹基無茎鎌である。584はI 16区III層より出土した。灰色チャート製の基部の抉りが大きい厚手のタイプで、丁寧な仕上げの製品である。585 F10区II層より出土した肉厚な平基鎌である。586はI 13区II層より出土した。欠損部位が目立つが、下呂石製の凹基有茎鎌である。587はH11区II d層より出土した赤色チャート製の削器で、側縁部に刃部を有している。588は側辺部に二次加工のあるチャート剝片である。I 12区II層出土で、原石の礫の自然面を残している。589はI 8区II層出土の使用痕のある下呂石剝片である。辺縁部に微細な剝離痕が密接している。590はG10区II層出土の下呂石の石核である。打製石斧は4点図示した。591はI 12区II d層から出土した。薄手の凝灰岩製で短冊形を呈している。592はG10区II層から、593はI 12区II層よりそれぞれ出土したものである。594~595はI 13区II層出土で、破片同士は隣接していた。周辺からはVI期の無文土器が出土している。

第50図の596はI 12区II d層より出土した磨製石斧である。凝灰岩製で、刃部は欠損し磨耗している。もう1点の597はG10区II c層より出土した。蛇紋岩製の細長いタイプで、刃こぼれがみられる。磨石・凹石類は2点図示した。598はH 7区II層より出土し、表面に4個、裏面に3個、側面に1個の凹痕がみられる。F10区II層出土の599は、表裏両面に2個ずつの凹痕が残されている。600はH 9区II層よ



第49圖 西區II層出土石器(1)



第50図 西区II層出土石器(2)・石製品

り出土した石剣の破片資料である。緑色片岩製で被熱による変色が認められる。

### 9 土偶（第51図、図版24）

西区では3点の土偶破片が出土している。

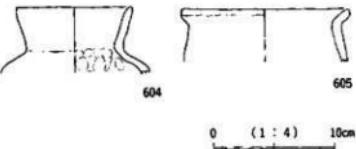
第51図の601は土偶左腕部と考えられる破片である。G11区III層より出土したものであるが、出土地点は段丘の上段へ続く斜面上で、近くからはIII期の土器（第29図-195）も出土している。段丘上段からの流れ込みの可能性があり、正確な所属時期の比定は困難である。破片は上面と側面をわずかに離ませ、周縁に沿って刺突列文が施されている。また、上面は正面と考えられる側が低く作り出されている。他方、下面が簡単な整形にとどまり文様が省かれているのは同箇所が視覚的におあまり重要ではなかったためと考えられ、本土偶について腕を左右に水平に広げたような形態であると想定した。施文は沈線により、棒状文が認められる。部分的にナデによる調整箇所を確認できるが、全体としてはあまり丁寧な整形はなされていない。胸部との接合面付近で折損したと考えられるが、破損面には粘着接合痕は認められない。淡黄色を呈し、焼成は普通である。602は土偶の右腕部の破片である。F9区II層より出土した。出土地点はSX21に近い谷の部分であるが、遺物整理過程で土偶と判明したため出土状況の詳細は不明である。淡黄色を呈し、焼成は普通である。胎土等から601と同一個体である可能性が高い。603はI13区IIc層より出土した。周辺からはV期の土器が出土している。肩部もしくは股間部（この場合には実測図の天地は逆になる）に近い胸部碎片と考えられるが断定はできない。破損面に直径2.5~3mm程の棒状工具によると思われる貫通孔が一部認められる。孔は円の上方へ抜けており、焼成時における木芯の有無については判断できなかつたが、製作技法に関わるものとは考え難い。にぶい黄色を呈し、焼成は普通である。



第51図 西区出土の土偶

### 10 歴史時代の遺物（第52図、図版25）

平安時代のものと考えられる、土師器が2点出土している。604はI12区IIa層より出土し、605はI15区II層出土である。



第52図 西区の歴史時代の遺物

## 第4章 東区の遺構と遺物

### 第1節 基本的層序

たのもと遺跡の東区は、西区から約50m上流側に位置し、標高は865m前後である。調査範囲は、西側の牧草地と水路を挟んだ東側の水田部分である。東側の水田では、水田造成時に斜面に沿って黒色土層がほとんど削り取られたようである。西側の牧草地では、4段9枚の階段状の水田であった場所が、トラクターを使って削平や埋土によって再造造成されており、擾乱が著しい状況であった。表面に遺物が散乱していたので、重機による表土の剥ぎ取りは雑草の除去程度に止めた。以下、第54図に示した土層断面図を補説したい。

**第I層 摆乱層**である。再造造成時に崩され埋め戻された部分が大半で、遺物を含んでいる。

**第II層 旧耕作土**、および開墾時に斜面上部より削り取られ埋め戻されたと考えられる部分である。遺物を含むが、やはり擾乱層である。

**第III層(10YR2/1 黒色土)** 開墾等の人为的な影響を受けていないと考えられる黒色土層である。縄文時代の遺物包含層であるが、削平され部分的にしか残っていない。西区のような砂礫の堆積層は、この層にも、埋め戻されたI・II層にも見当たらなかった。

**第IV層(10YR3/2 黒褐色土)** 一部に縄文早期の遺物を含む黒褐色土層である。III層と同様に削平により消失したと考えられる部分が目立った。

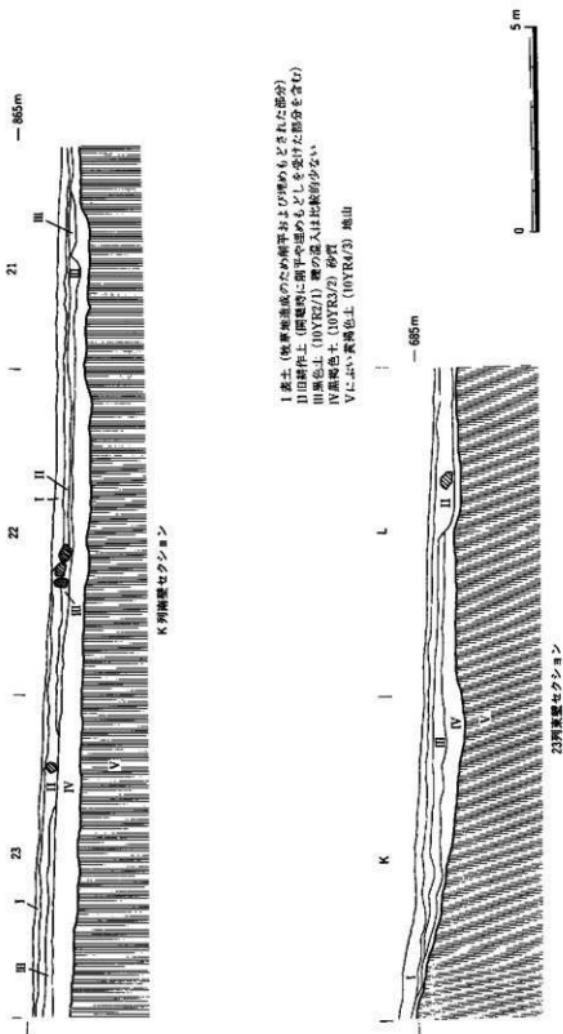
**第V層(10YR4/3 にぶい黄褐色土)** 小さな礫を多く含む砂質土で、地山と判断した層である。

### 第2節 遺構と出土遺物

日当たりの良い南向きの緩斜面である東区からは、西に白山を遠望することができる。ここからは、約10,000点の遺物（全体の3分の1）が出土した（第55図）。遺物包含層の大半が消失しており、開墾等により遺物が大きく移動しているようである。縄文時代の遺物包含層が比較的よく残っていたのは、K22区・M22区・N23区である。縄文晩期の遺物の出土が顕著であった。

東区で確認できた遺構は、縄文早期のが穴(FP)1基、不明遺構(SX)3基、土坑(SK)4基、ピット(P)32基である（第53図）。調査区の中央を南北方向に流れる水田の水路に平行するようにかつての湧水路が存在し、SXは水場に関連する遺構と考えられる。土坑・ピット群は、水路の北側、水の流れを基準にすると右岸側に集中している。





第54図 土層断面図（東区）

## 1 炉穴

### FP 1 (第56図、図版31)

L20区IV層を掘削中に縄文早期後葉の遺構と考えられる炉穴1基を検出した。大きさは84×72×40cmで、掘り込みはすり鉢形を呈し、平面形は梢円形である。底部に偏平な石を配し、底部の石や壁面の土には被熱による変色の跡がみられた。なお、周辺および埋土に焼難は見られなかった。壁面および下層に残っていた炭化材の<sup>14</sup>C年代測定値は、6,670±160yrBPであった。K25区IV層より只殻条痕文の土器が出土しており、同時期の遺物と判断した(第61図-625)。第56図の606はFP 1の東方約1.4mの地点で同遺構検出面より出土した石錠である。灰白色のチャート製で、基部のU字形の抉りが特徴的な鍬形錠である。

## 2 不明遺構 (SX)

東区の不明遺構3基はすべて旧水田用水路の近辺で検出したものである(第53図、第5表)。

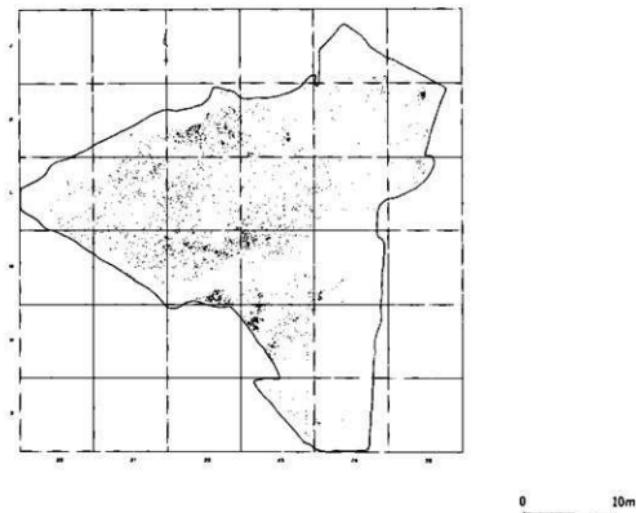
### 水場闇連遺構 (SX22・SX24) (第57・58図、図版5)

M23区の中央辺りからM22区の南側に向けて用水路があり、周辺ではやや粘り気があり木の根等を多く含む黒色土(10YR2/1)の堆積がみられた。この層は耕作土(II層)の下に30cm程の厚さで続いており、縄文土器片と灰釉陶器片が混在していたので搅乱層と考えられた。最初にM22区と23区の境目付近でトチの種子が出土し、ピット等を想定し精査を行ったがプランの確認には至らず搅乱による混入と判断した。掘削が進み下層近くになって縄文晩期の土器の出土が目立ち出した頃、M22区の中央部でトチの種子が出土した。精査の結果、下層の砂礫層(明黄褐色2.5Y7/6)を掘り込んだ90×70×22cmの長方形のプランを確認した。内部の黒褐色土(10YR2/2)中にトチの種子が多く含まれているようだったので、自然科学分析のためのサンプリングを行った(第5章)。湿式の貯蔵穴とも考えられたが、その時点では時期および性格不明の遺構であったのでSX22とした。中から一端に焦げ跡のある半割丸太(直徑6cm、長さ35cm)と分割材(11×8×0.8cm)が出土したが、ともにクリ材であった。南側に同じような大きさの角礫が3個、落ち込むように入り込んでいた。底部の灰オリーブ色(5YR6/2)の砂層からは、完形のクルミがまとまって出土した。

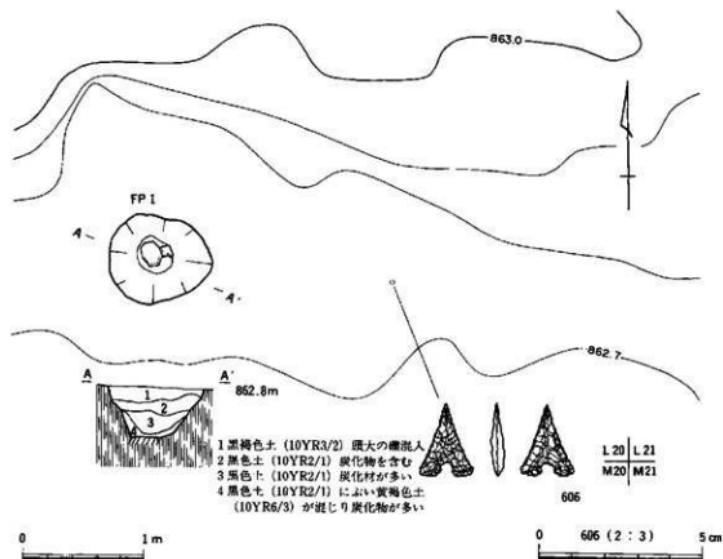
SX22から出土したおもな植物種子は、トチが湿重量で約360g、クリ同12g(8個体)、完形のクルミ28個(湿重量260g)である。なお、遺構内出土のトチの種子95.3g(乾燥重量21.03g)を用いた<sup>14</sup>C年代測定の結果は、2,810±110yrBPであった。周辺の状況からこの場所がかつての湧水路または小谷の一部であったと考えられる。SX22は水を利用した堅果類の処理に関する縄文晩期の遺構と考えたい<sup>11</sup>。

第5表 不明遺構一覧表(東区)

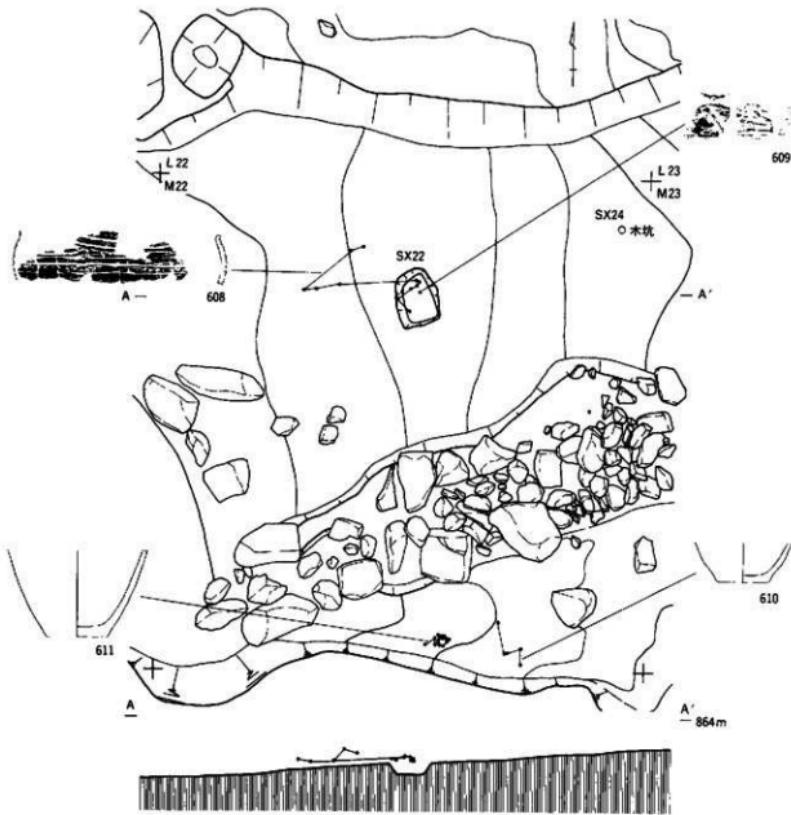
東区No	遺構名	地区	内 訳	出土遺物
1 19	SX22	M22III	縄文晩期水場	木片 植物種子(トチ・クルミ等)
2 21	SX24	M22III S	木杭	木杭片
3 22	SX26	M23II	種子出土ピット	灰釉陶器片1 植物種子(スマモ他)



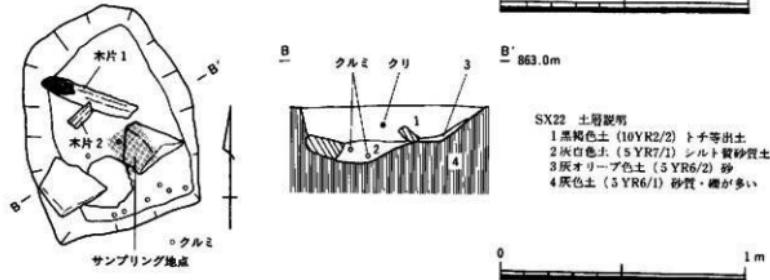
第55図 東区の遺物出土状況



第56図 FP 1周辺図および周辺出土石器



第57図 SX22周辺図



第58図 SX22

また、SX22の東方3mの地点の砂疊層中で、木杭の一部と考えられる直立木片を検出した。堅い砂疊層の中に埋没しており、掘り込み等は認められなかった。杭列を想定してSX24としたが、確認できたのはこの1本のみであった。直径10cm、現存部の長さは20cmで、材はクリであった(第5章)。層位的にSX22と同時期かそれ以前のものとするのが妥当と思われるが、用途等は不明である。なお、M22区では上層の黒褐色土中からも時期は限定できないが、一端に焦げ跡のある長径約15cm、長さ45cmのヒノキ属の丸木が出土している。

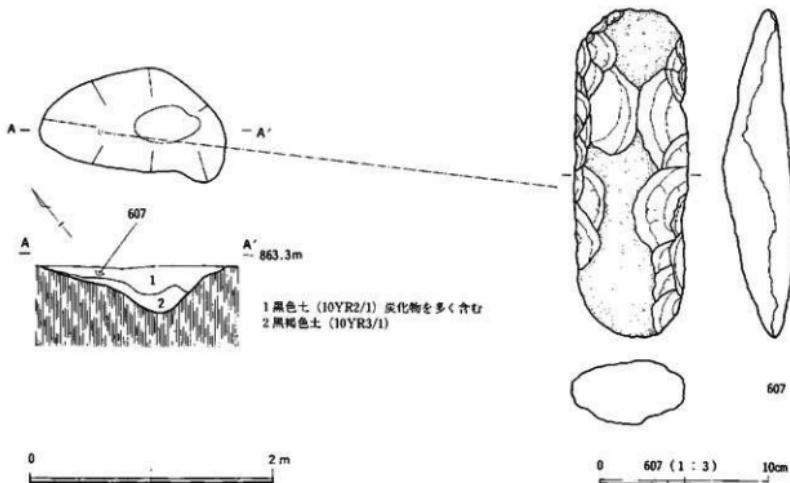
1) 対岸のカクシクレ跡で検出された縄文晩期前半の「水さらし場遺構」と比較すると、周間に木組みの造構を伴わないことや、遺構内の堆積状況が泥炭質土と砂質土の互層でない点などが異なる。

#### スモモ種子出土ピット (SX26)

SX26は、M23区のII層に掘削中に水路の南側で検出した不明遺構である。40×40×33cmの方形のピット内より灰釉陶器片1点、炭化木片、スモモの種子17点および少量のトチの種子が出土した。出土遺物より平安時代の遺構と考えられる。第60図の612はSX26出土の灰釉陶器である。口径11.6cmの碗で、色調は灰白色、焼成は良好である。

#### 3 土坑・ピット (SK・P) (第53図、第6表)

東区のSKおよびPの遺構検出面はほとんどが第III層最下层ないし第IV層上面である。後世の削平や攪乱が多いためか、明確なプランが確認できるものや用途が推定できるものは見当たらない。打製石斧が出土したSK5を図示し、他は西区と同様にその概要を表にまとめて報告する。



第59図 SK 5

第6表 土坑・ピット一覧表(東区)

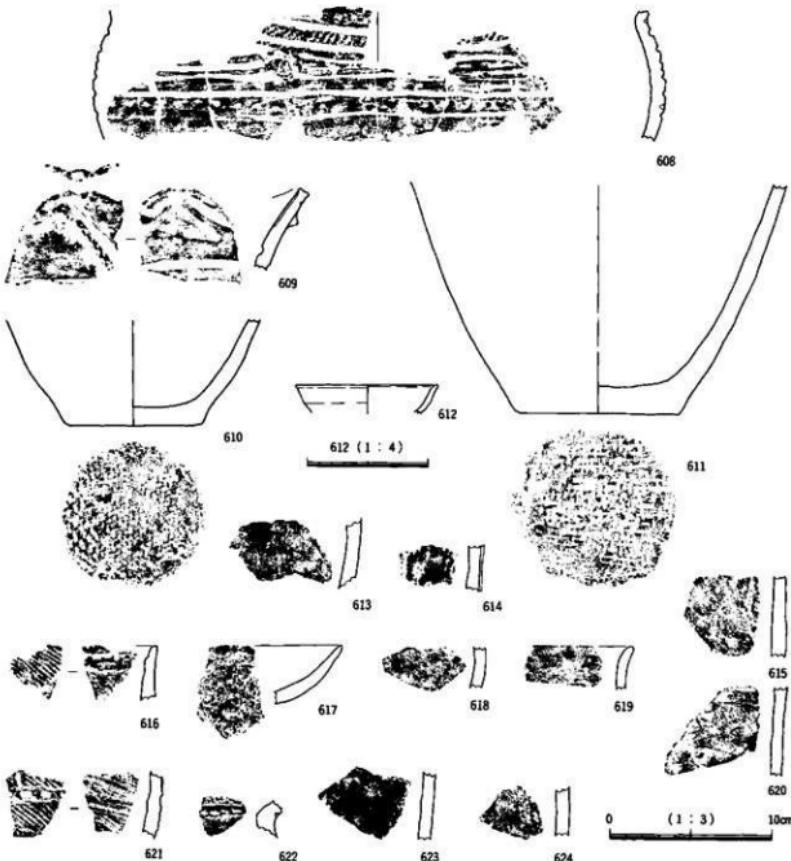
東区No	No	遺構名	地区	長径×短径×深さ	遺物	採図番号
1	3	SK 4	L21III	252×127×26	縄文土器片22	60-613~615
2	4	SK 5	L21III	150×84×38	縄文土器片2 打製石斧1	
3	5	SK 6	L21III	96×68×30	縄文土器片1	
4	6	SK 7	L22III	120×100×28		
5	39	P30	L23III	40×28×24	縄文土器片1	
6	40	P31	L23III	50×40×23	縄文土器片3	60-616
7	41	P32	L23III	28×25×20		
8	42	P33	L23III	25×22×23	縄文土器片1	
9	43	P34	L23III	28×25×18	縄文土器片1	
10	44	P35	L23III	28×28×17	縄文土器片1	
11	45	P36	L23III	32×24×20		
12	46	P37	L23III	28×24×19	縄文土器片1	
13	47	P38	L22III	32×25×20		
14	48	P39	L22III	28×28×24		
15	49	P40	L22III	60×40×20		
16	50	P41	L22III	56×52×24		
17	51	P42	L22III	76×45×18		
18	52	P43	L21III	36×32×22		
19	53	P44	L21III	48×40×23	縄文土器片1 炭約10g	60-617
20	54	P45	L21III	17×15×20	縄文土器片1	
21	55	P46	L21III	36×32×20	縄文土器片1	60-618
22	56	P47	L21III	28×20×18		
23	57	P48	L22III	92×40×20		
24	58	P49	L22III	40×38×18		
25	59	P50	K23III	50×45×20	縄文土器片2	60-619~620
26	67	P60	L23III	38×32×20	縄文土器片5 石器剥片1	60-621~623
27	68	P61	K23III	40×30×26	縄文土器片1	60-624
28	69	P62	L23III	32×25×18		
29	70	P63	L23III	28×20×20		
30	71	P64	L23III	48×36×21		
31	72	P65	K23III	52×25×30		
32	73	P66	K23III	30×28×40		
33	74	P67	K23III	36×32×26		
34	75	P68	K23III	36×25×21		
35	76	P69	K23III	28×24×25		
36	77	P70	K23III	38×28×45		
37	81	FP 1	L20IV	84×72×40	炭	

## SK 5 (第59図、図版31)

SK 5はL21区で検出した土坑である。大きさは150×84×38cmで、楕円形である。炭化物を多く含む黒色土中から、縄文土器片2点と打製石斧1点が出土した。縄文土器片は磨耗した無文土器で時期ははっきりしない。第59図の607はSK 5出土の打製石斧である。やや風化の目立つ凝灰岩製で、大きさは19.7×6.8×3.9cmである。比較的小型の製品が多い同遺跡の出土品の中では際立つ大きさである。表面に原石の自然面を残し、丸い大きめの川原石が原石として使用された形跡を留めている。

## 東区の遺構出土の遺物（第60図、図版27）

第60図の608~611はSX22周辺より出土した土器である（第57図）。608は粗大な工字文と列点文で飾られた胴部破片である。609は列点文を伴う口縁部で、裏面に凹線による施文がある。610~611は無文の粗製土器で、網代圧痕を伴う底部は磨耗している。SX22周辺の土器は大洞C 2式段階と考えられる。613~615はSK 4から出土した。614が微隆起線文の西区IV期第1群の土器で、他は無文である。616はP31出土の網文施文の口縁部破片である。617はP44出土の晩期の粗製浅鉢、618はP46出土の晩期の無文土器である。619はP50出土のやや外反するII縁部の破片で無文である。620は同じくP50出土で晩期の無文土器である。621~623はP60より出土した。621には押引き刺突文が、622には列点文がみられ、623は無文である。624はP61出土の晩期の無文土器である。



第60図 東区の遺構出土土器

### 第3節 包含層出土遺物

東区では遺物包含層の大半が失われていたので、ほとんどの遺物は擾乱層からの出土である。層位的な追跡は困難であるが、縄文土器については西区と同様にⅣ期に大別して報告することとする（第3章第3節参照）。なお、東区ではⅡ期の土器は確認できなかった。

#### 1 Ⅰ期の土器（第61図-625、図版27）

縄文早期後葉の上器が調査区の北東部より出土している。第61図の625はK25区IV層より出土した口径約27cm、高さ約40cmの貝殻条痕文系の土器である。胎上に植物纖維を含み、暗褐色を呈する尖底の深鉢である。グリッドの北側に大きさ $1.5 \times 1 \times 0.8$ m程の岩があり、ちょうどその手前の地点から1個体分の破片がまとまって出土した。周辺では他の遺物の出土は見られなかったが、約40m南西のL20区IV層で検出した炉穴（FP1）が同期のものと推定される（第56図）。

#### 2 Ⅲ期の土器（第61図-626～634、図版28）

KおよびL列のIII層より縄文中期後半の土器が出土している。第61図の626はK～L22区より出土した厚手の土器口縁部で、横位の楕円形区画文がみられる。627はL22区周辺より出土した口縁部が直線的に広がり胸部が少し膨らむ器形の土器である。椭圓状工具による条線が縦方向に施され、口縁部は



第61図 東区Ⅰ期・Ⅲ期の土器

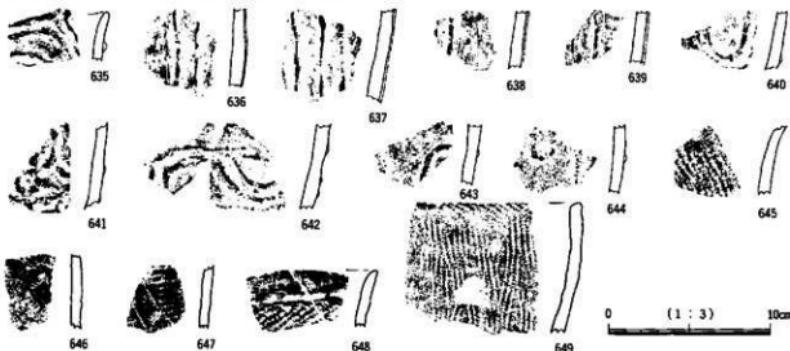
有段の無文帯となっている。630～632はK23区を中心に出土した地文に縄文を施す土器である。幅の広い隆帯の両脇に沈線を加え曲線的な文様を描く上器で、口縁部の破片を含んでいるがその全体像はつかみ難い。628はK21区II層より出土した。構形文の一部と考えられる胴部破片である。629はK23区III層より出土した。地文に縄文を施す土器で、蛇行沈線が縦に1条垂下している。633はK24区III層より出土した。リボン状突帯が巡る土器の胴部破片である。634も同じくK24区III層より出土した。RLの縄文が施され、隆帯で飾られた土器の一部である。

### 3 IV～V期の土器（第62・63図、図版28）

東区出土の縄文後期の土器は西区に比べると非常に少なく、また破片の劣化や磨耗が顕著である。東区からは西区のIV期第1群に含まれる微隆起線文の土器が全部で20点出土している。そのうちの10点を第62図の635～644に図示した。635はK23区III層出土の口縁部破片で、IV期第1群1類または2類の上器である。636～640はK～M区の広い範囲で出土し、IV期第1群1c類の土器によく似た胎土と文様の土器である。641～644は劣化が著しい胴部破片で、横位の文様展開を含む。642はM23区III層より出土し、他の3点はL21区II層より出土した。645～647は西区の第IV期第9群の土器と同じと考えられる。645はK22区III層出土の破片で、外反する口縁部の無文帯部分がみられる。K22区III層出土の646・647は西区H11区III層出土の454（第40図）と同質で同様の調整痕をもつ土器である。648は口縁部に無文帯を持つ土器で、境目部分に浅い門線状のナデを作っている。胴部には縄文が施されている。649はL21区III層出土の土器である。縄文の施文方向が口縁部は斜位で、胴部では縦位となっている。後期後葉に属すると考えられる。第63図の650はJ24区I層出土の土器で、胴部および底部は無文である。上方に細い2条の沈線による方形の文様の一部を残している。

### 4 VI期の土器（第63～65図、図版29・30）

東区出土の縄文土器の大半は無文の粗製土器の破片である。その胎土等からほとんどが晩期の土器と考えられる。ここでは、東区出土の縄文晩期のおもな土器を3群に大別して報告する。西区VI期と同様の群分けをしたが、類分けは共通ではない。



第62図 東区IV～V期の土器

## 第1群 晩期前半の土器（第64図、図版29）

## 1類 沈線文や刺突文をもつ土器（第64図-665～669）

第64図の665はL22区II層出土の口縁部破片で、口唇および内面が沈線で刻まれている。666は矢羽状沈線と2条の沈線が巡る破片で、M23区III層より出土した。667はM22区II層より出土した。横走する沈線がみられ、縦文が施されている。668は横に巡る沈線の下に、斜め方向の沈線が数条垂下し、さらに列点文を伴う胸部破片である。M22区II層より出土した。669は刺突による方形の列点文が口縁部を巡る土器である。M23区II層より出土し、一部に刻みのある小突起を伴っている。

## 2類 内面に凹線をもつ土器（第64図-670～683）

口縁端部内面に1～2条の凹線が巡る土器である。波状口縁の波頂部の内面では凹線の部分が三角形に拡張するものや、文様を描くものがみられる。670・671では口縁部に隆帯を貼付け肥厚させ、その上側に沈線を加え文様を描いているようである。ほとんどがSX22周辺のM22区II層出土であるが、小破片のためその全体像はつかみ難い。

## 第2群 晩期後半の土器（第63・64図、図版29・30）

## 1類 三叉状の文様をもつ土器（第64図-684～697）

沈線による横展開の文様をもつ土器である。第64図の685～693は三叉文の連結部に瘤状の突起を伴っている。M22～24区より出土したが、全体が磨耗しているものが多い。694・695は同一個体と考えられる口縁部破片で、炭化物が付着している。694はK24区III層出土、695はL23区III層出土である。696・697は部分的に丹彩が残る土器で、炭化物の付着もみられる。696はL24区III層より、697はL23区III層より、それぞれ出土した。

## 2類 浮線文系の土器（第63図-651～653・第64図-698～713）

磨き込んで隆線部を作り出す浮線文的な土器を「浮線文系の土器」とした。

## a類（第63図-652・第64図698～707）

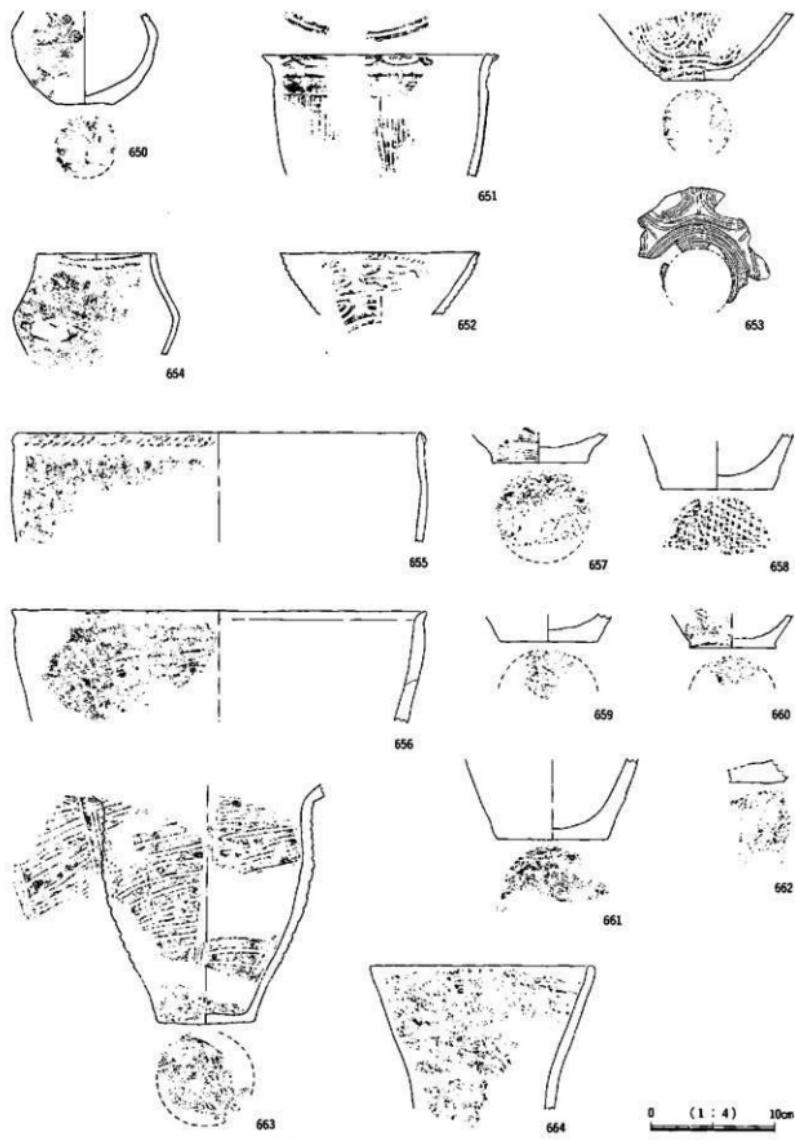
沈線部に彫刻的な手法がみられ、器面がよく磨き込まれた土器である。第63図の652はK22区III層より出土した。鉢形の土器の口縁部で、端部を右上がりの短沈線で刻んでいる。文様部分は工字状文や多重円状の文様が交錯する複雑な構成とみられる。第64図の698はやや口縁部が外反する器形の土器である。K22区III層出土の口縁部破片にL21区III層出土の破片が接合したものである。壺形の土器と考えられ、補修孔を有している。口縁端部を短沈線で刻み、その下を3条の沈線が巡っている。無文帯が続き、その下を再び沈線が巡っている。小破片の699～707のほとんどはK22区III層より出土している。707は底部付近の破片で、8条の沈線が巡り隆線部を形成している。

## b類（第64図-708～712）

沈線と短沈線によって施文され、磨き込みが弱い一群である。短沈線は、右上がりのものがほとんどであるが、712では右下がりのものを併用している。708はK22区III層、709・710はL22区III層、711はK23区III層、712はM23区III層より、それぞれ出土した。

## c類（第63図-651・第64図-713）

図63の651は口縁外帯をもつ深鉢である。K22～23区III層出土で、平口縁の口唇部を1条の沈線が巡っている。器面はよく磨かれており、頸部を浮線状の細隆線が巡っているようにみえる。頸部には縱方



第63図 東区VI期の土器(1)・時期不明の土器

向の沈線が施されている。第64図の713は口唇部の処理が同様と考えられる口縁部破片で、K22区I層とM22区II層より出土した。口縁部を横走する3条の沈線のうち2条は幅広である。

#### d類 (第63図-653)

第63図の653は沈線によって曲線文が描かれる土器の下半部である。底部周辺を5条の沈線が巡り、下から6および7条めの沈線は渦巻状の文様につながっているようである。渦巻状の文様は対向しており、間に1条の縱の沈線を挟んでいる。N23区II層より出土し、部分的に復元できた土器である。

#### 3類 突帯文をもつ土器 (第63図-654)

第63図の654は肩部で屈曲する器形の鉢形の土器である。M22区II層出土で、口縁部を1条の突帯が巡っている。その隆起は低めで、右下がりの刻みを有している。器厚4mm前後の薄手の土器で、内外には範状工具によると考えられる調整痕がみられる。

#### 4類 沈線や短沈線で施文される土器 (第64図-714-730)

##### a類 (714~718)

第64図の714~717はK22区およびL22区III層から出土した。716は底部に近い部分の胴部破片で、2~3条の縱走する沈線と、縱方向の短沈線列がみられる。715では縱走する沈線の横で斜位の短沈線が対向しながら縱方向に並んでいる。718は同様のモチーフをもつ表採資料である。器面はよく磨かれ2類の土器との関連が考えられるが、その全体像がつかみ難い七器である。

##### b類 (719~727)

第64図の719~727はN23区II層より出土し、同一個体と考えられる土器である。724は口縁部の破片で、4条の沈線が横走し、口唇部には範状工具等によると考えられる刻みがみられる。内面には施文具を下から上へ動かしたような跡のみられる沈線が5条残っている。胴部の破片では、斜位の沈線が無造作に交差しているような印象を受ける。本類は、破片が小さく器形や文様構成が不明の不安定な一群である。

##### c類 (728~729)

728はK22区II層出土の土器口縁部である。1条の沈線が巡る下側に、右下がりの細い短沈線が引かれている。729はM23区III層出土の口縁部破片である。3条の沈線が横走し、沈線間を押圧気味に右下がりに刻んでいる。

### 第3群 無文土器 (第63~65図、図版30)

#### 1類 口縁部を飾る土器 (第63図-655・第64図-730~733・第65図734~738)

##### a類 (730)

K23区III層出土で、2条の沈線が横走している。第2群の土器に多い胎土や調整の土器である。

##### b類 (731)

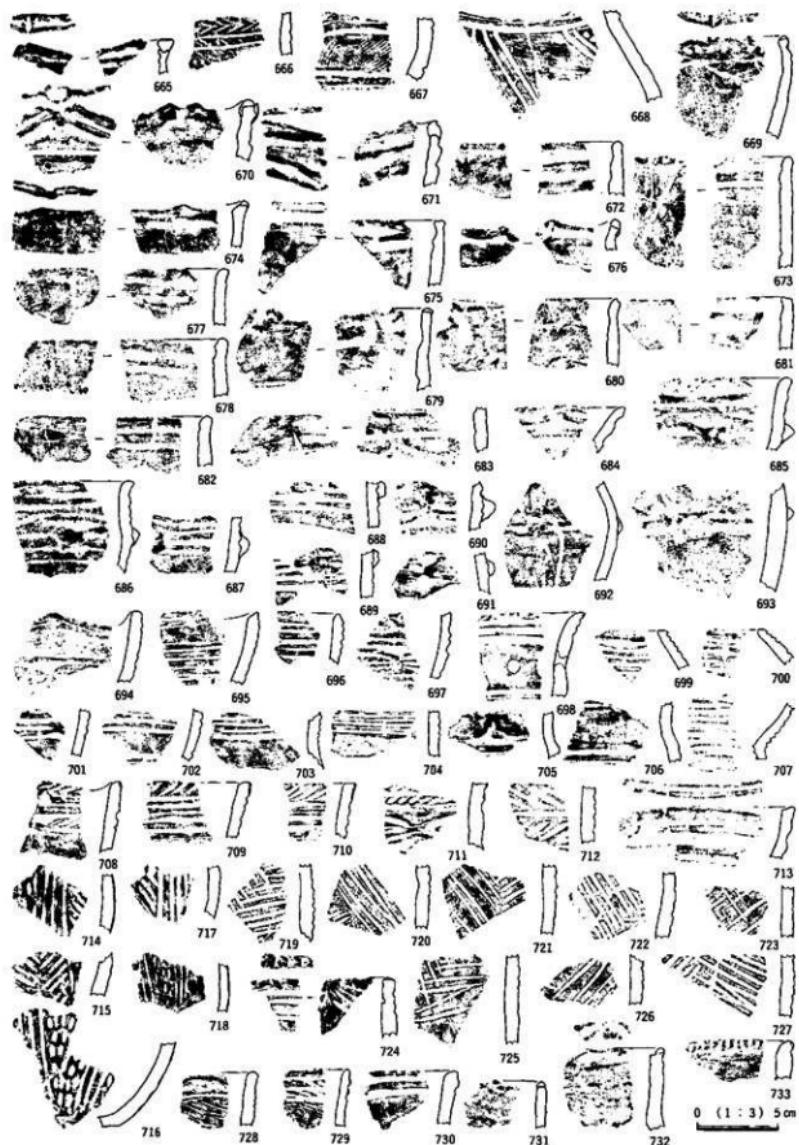
M22区のII層より出土した。小突起をもち、地文は擬繩文である。

##### c類 (732)

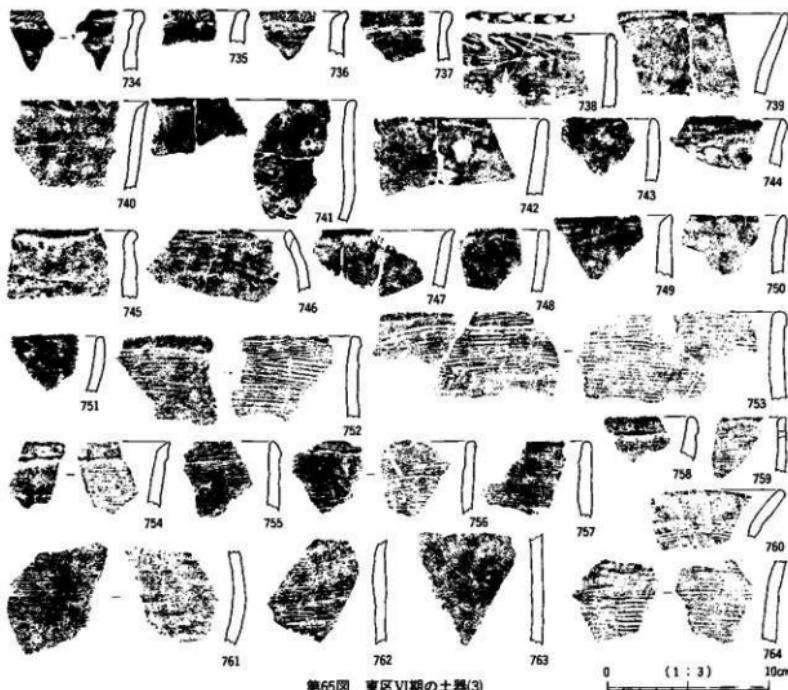
L22区III層より出土した。II層に内側で交差する方向で2条の斜位の刻みがみられる。

##### d類 (733)

N23区II層出土で、口縁端部に縱位の刻みがみられる。第1群土器に多い胎土の土器である。



第64図 東区VI期の土器(2)



第65図 東区VI期の土器(3)

## e類 (734)

肥厚した口縁端部に縄文を施し、内面には凹線が2条みられる。M22区II層出土である。

## f類 (735~737)

M22区出土で、肥厚した口縁端部に細かい刺突文を施している。737の肥厚部は無文である。

## g類 (738)

L21III層出土で、端部は右下がりの短沈線で刻まれている。口唇は押圧されている。

## h類 (第63図-655)

肥厚した口縁端部を右上がりの短沈線で刻んでいる。器面の調整は範状工具によると考えられる。

K22区III層、M22区III層およびM20区II層より出土した破片が接合できたものである。

## 2類 無文の粗製土器 (第63図-656・第65図-739~750)

## a類 (656・739~746)

粗い調整の粗製土器である。第63図の656はN24区より出土した。端部を少し外反させている。739~746は小破片が多く全体像はつかみ難い。口縁部が直立するものが多いようである。

**b類 (747~751)**

第65図の747~750は器面が内外とも丁寧に磨かれており、第2群2類の土器と関連が深いと考えられる一群である。K22区III層を中心に周辺から出土している。

**3類 条痕文の土器 (第65図-752~764)**

内外に条痕文がみられる土器である。口縁端部が若干肥厚しているものが多い。752はM21区II層出土、753・759・760・764はL22区II層出土である。L23区III層出土の755・757・758・761~763とK24区III層出土の756には炭化物が付着している。

**底部 (第63図-657~662)**

東区からは63点の土器底部が出土している。第63図の657はL21区II層出土の第3群3類土器の底部である。658はL22区II層出土で胸部は無文である。どちらも底部の網代圧痕は「2本越え1本潜り1本送り」である。659~662の底部には、葉脈圧痕がみられる。

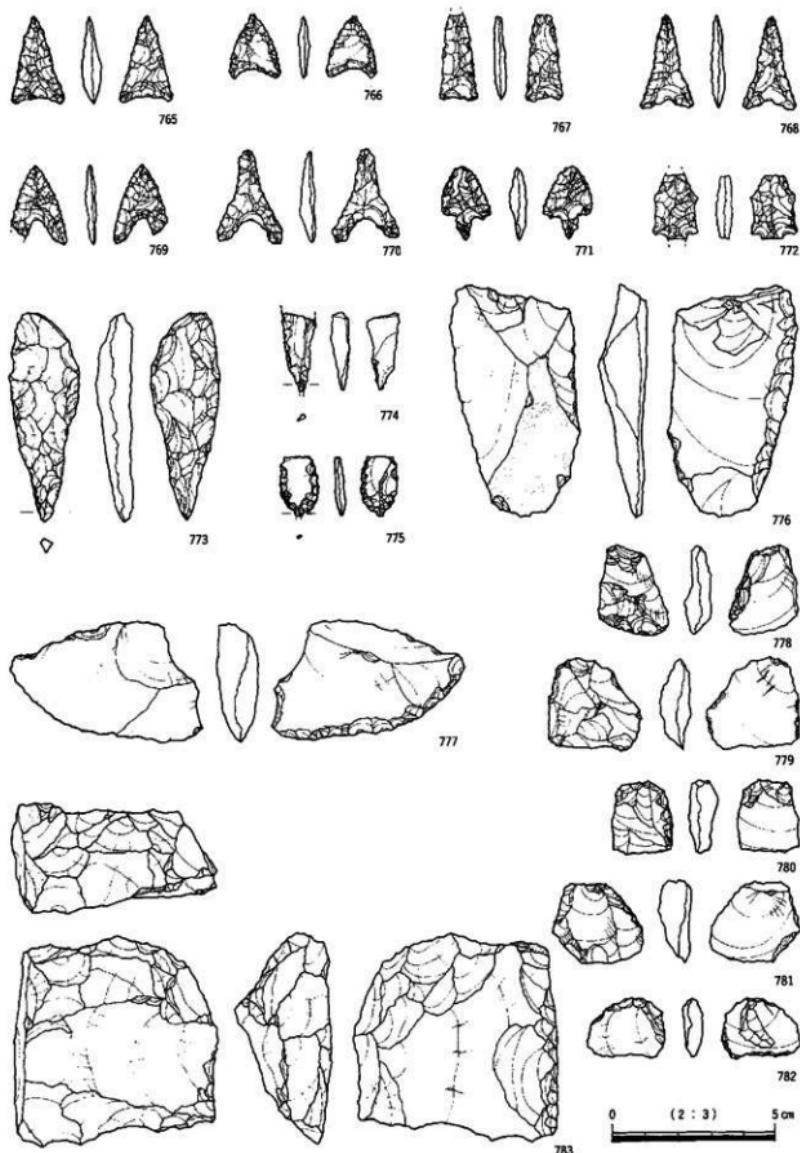
**5 時期不明の土器 (第63図-663・664)**

第63図の663はL25区およびL23区III層から出土した口縁部を欠く深鉢である。丸みをもつ胸部には全面に沈線文が施されている。2条単位の沈線が縦に垂下し、その間をやや右上がりの横位の沈線が埋めている。664はN22区でVI期の土器が出土した肩(II層)のやや下層から出土した無文の深鉢である。口縁部がやや開く器形で、口縁端部を半截竹管状の工具によると考えられる細い平行沈線が巡っている。

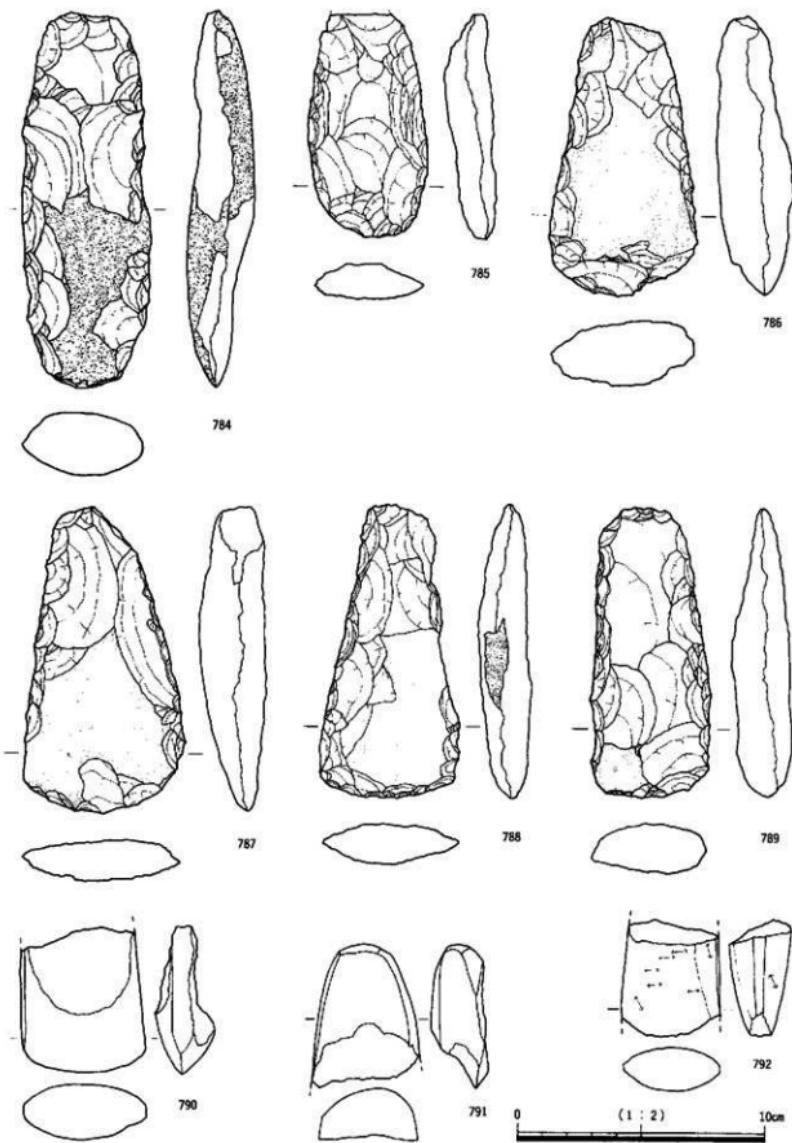
**6 東区出土の石器・石製品 (第66~69図、図版31・32)**

東区からは、425点(23.9%)の石器類が出土している。内訳は、石鋸17点、石斧5点、削器3点、両極石器3点、二次加工のある剝片6点、使用痕のある剝片7点、石核2点、打製石斧112点、磨製石斧11点、磨石・凹石類50点、砥石3点、剝片類206点である。土器の出土状況からその大部分がVI期に属すると考えられるが特定は困難である。

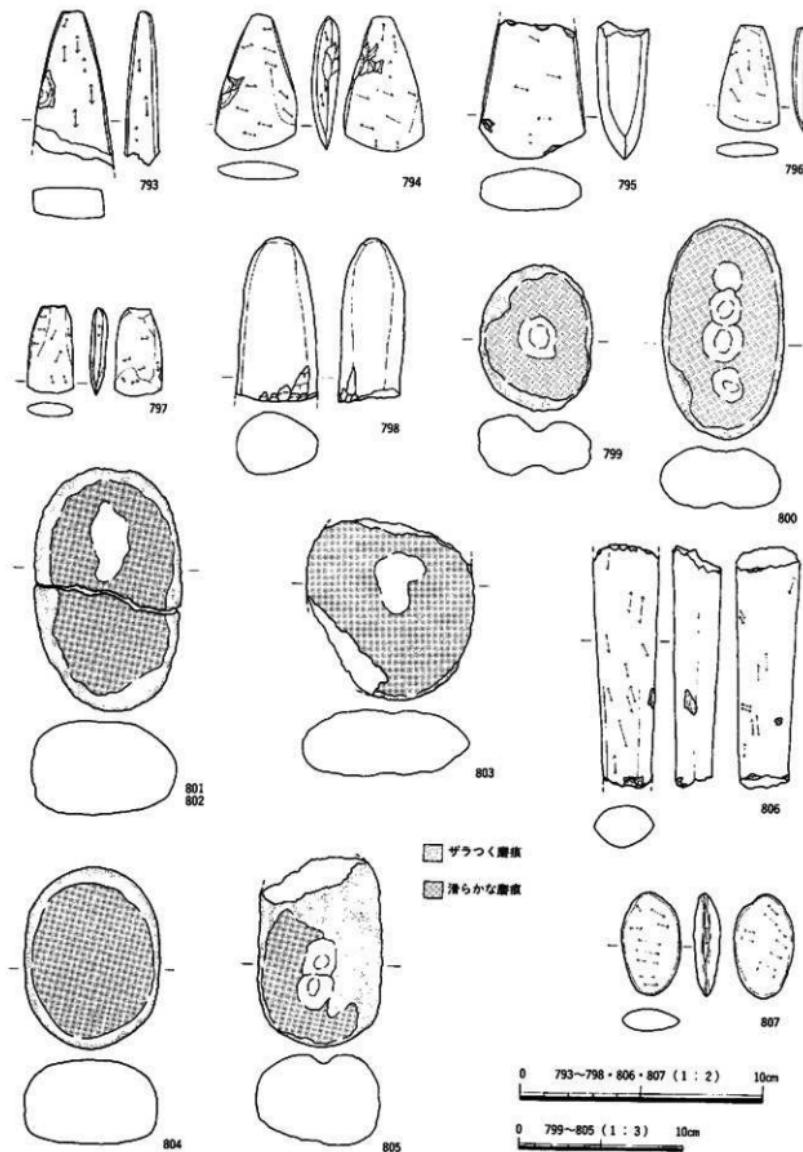
第66図の765~772は東区出土の石鋸である。765・766はともにチャート製で、I層から出土した。基部の抉りが浅いタイプで、765は肉厚である。767はL22区II層より出土した。下呂石製で両側縁に1カ所ずつ抉りを意図的に入れているようである。768はM22区II層出土の下呂石製である。769は基部の抉りが大きい薄手の四基無茎鍬である。灰色チャート製で、L22区II層より出土した。770はL22区II層出土で、石材は下呂石である。先端は丸く、側面部が凹状の独特の形態を呈している。771はM21区の砂層より出土した黒曜石製の有茎鍬である。772はL22区II層出土の下呂石製の有茎鍬で、破損しているがいわゆる飛行機鋸の形態を保っている。石錐は3点図示した。773はK22区II層出土の下呂石製で、大型の棒状タイプである。774はM22区III層出土の棒状の石錐で、下呂石製である。775はL22区III層出土のチャート製で、つまみ状の頭部を持つが錐部が著しく短いタイプである。776はK22区III層から出土した下呂石製の削器である。縦長剝片の一方の側辺部に片面加工の刃部を有している。777はM21区II層出土の削器である。横長の下呂石剝片を用い、長辺に片面加工の刃部を作り出している。778はM21区III層出土の削器である。黒曜石製で、辺縁部に2カ所やや急角度に調整された片面加



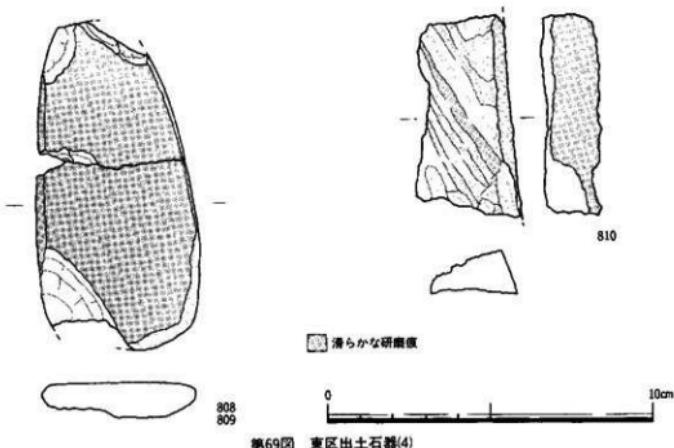
第66図 東区出土石器(1)



第67図 東区出土石器(2)



第68図 東区出土石器(3)・石製品



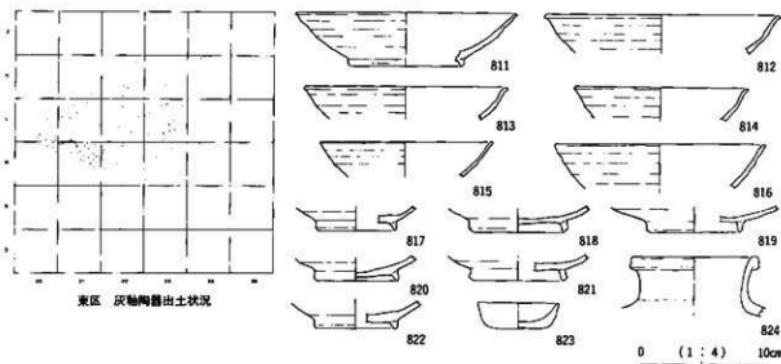
第69図 東区出土石器(4)

工の刃部を有する。779は両極削離痕のある石器で、M21区III層より出土した。780は側縁に迷続剝離痕が認められる黒曜石剝片で、二次加工のある剝片としたものである。781・782は使用痕のある剝片としたもので、781は下呂石、782は玉髓である。783はL22区III層より出土した下呂石の大型石核である。

第67図に打製石斧を6点図示した。784はL21区II層より出土した。表裏両面に敲打により整形がなされた面を多く残し、磨製石斧の未製品を転用した可能性が考えられる。785~789の石材はすべて凝灰岩である。西区の山層では小型で偏平な川原石を原石として利用しているものが目立ったが、東区出土のものは比較的大きめの礫から素材剝片を得たと考えられるものが多い。790~792はK区およびL区のIII層より出土した磨製石斧である。ともに砂岩製で、変色が認められる。被熱により破損したものと考えられる。

第68図の793の磨製石斧はM21区II層出土で、直線的で急入りな面取り加工が施されている。794はM22区II層出土で、素材剝片の形状を留めていると考えられる。795はM22区II層出土で基部を欠損している。796・797は完形の小型磨製石斧である。796はN22区I層より出土し、797はM21区II層より出土した。とともに蛇紋岩製で色調は前者が薄緑色、後者は濃灰色である。798はM22区I層より出土した。磨製石斧の分類に含めたが石棒の可能性もある。磨石・凹石類は6点図示した。磨石と凹石の両機能を兼用するものも多い。799・800は磨面がややザラつくタイプで、801~805は滑らかな磨面を有する一群である。806はK22区III層より出土した粘板岩製の石劍の破片である。807はM23区II層より出土した石製品である。薄緑色の蛇紋岩製で、全面研磨されているが穿孔はない。

第69図の808~810は東区出土の砥石である。808・809はともにK25区II層より出土し、石材は砂岩である。同一個体であるが色調がやや異なり、被熱による変色も認められる。板状の偏平な石のはば



第70図 東区の歴史時代の遺物

全面に磨面を残している。810はM22区のII層出土で、石材は砂岩である。破片資料であるが、細い溝状部分と側面に顯著な磨面を残している。ともに擾乱層出土のため縄文時代に限定はできない。

## 7 歴史時代の遺物（第70図、図版32）

東区から出土した古代～中近世の遺物は、接合前の破片数で灰釉陶器212点、土師器2点、古瀬戸15点である。人為的な削平や埋め戻しが繰り返されたため、散逸したり小破片となつたものが多く、接合できるものは僅かであった。第70図に灰釉陶器の出土状況を図示したが、水路の右岸側の広い範囲から出土している。なお、灰釉陶器とスモモ種子が一緒に出土した SX26はM23区内である。

第70図の811～822が東区出土の灰釉陶器のおもなものである。口縁部から底部までを全体に復元できたのは811の碗1点のみである。器厚は4mm前後で、口縁に近づくにつれて薄くなっている。口縁端は外反気味で、部分的に外へ曲げまるめている。同様の口縁端部の処理は812ではより顕著である。811では、外面に刷毛かけと考えられる施釉がみられる。815では内外につけかけをしている。図示した他の3点の口縁部では施釉は確認できなかった。付高台の外面は付根部分から外傾させ、下部を面取りしているものも日立。全体に胎土はやや粗く、色調は灰白色～灰色を呈している。美濃窯の編年に比定すると、光ヶ丘1号窯式から大原2号窯式に該当すると考えられるが、当地方の古窯の調査研究が十分に行われていない現状では時期の特定は困難である。823はL23区出土の土師器皿である。824はL22区から出土した瀬戸美濃の瓶子類の口縁部である。胴部の破片も出土したが小破片のため全体の復元はできなかった。14～15世紀のものと考えられる。

## 第5章 自然科学分析

たのもと遺跡の自然科学分析として、遺構出土の遺物を中心に大型植物化石の同定、放射性炭素年代測定、出土材の樹種同定を行った。以下、(株)パレオ・ラボに委託した自然科学分析の報告を掲載する。

### たのもと遺跡から出土した大型植物化石

新山雅広 (パレオ・ラボ)

#### 1. はじめに

たのもと遺跡は岐阜県大野郡丹生川村に所在する。本遺跡は、荒城川右岸の段丘上に立地しており、繩文時代後期の住居跡や繩文時代早期から晩期の遺物が検出されている。今回は、本遺跡周辺の栽培状況や古植生を明らかにする目的で大型植物化石群集の検討を行った。

#### 2. 試料と方法

大型植物化石の検討は、SX21、SX22、SX26の3遺構（地点）より出土した大型植物化石について行った。これら3遺構はいずれも不明遺構であるが、水場に関連した遺構である可能性が高い。時代については、SX21が出土遺物から繩文時代後期、SX22が繩文時代晩期（放射性炭素年代測定で2,810±110yrBPの年代が得られている）と考えられている。大型植物化石の採集は、SX21(A)、SX21(B)、SX22は堆積物試料を0.25mm目の篩を用いて水洗篩分けをすることにより行った。処理量はSX21(A)、SX22は約100cc、SX21(B)は、大型植物化石の出土個数がやや少ないため約400ccについて行った。SX21(共通)、SX26は現地で取り上げて洗い出しをした大型植物化石を採集した。なお、SX21の堆積物は、一部砂が卓越した所があり、砂が卓越した所をA地点 [SX21(A)]、砂が少ない所をB地点 [SX21(B)]として堆積物を採取した。SX21(共通)は、A地点、B地点の区別なく、SX21から出土した大型植物化石を採集した。

#### 3. 出土した大型植物化石（図版33）

全試料から出土した大型植物化石は木本17分類群、草本15分類群である。木本ではヒノキ、オニグルミ、カバノキ属、クリ、コナラ属、クワ属、ホオノキ、スモモ、キイチゴ属、フジ属、キハダ、ミツバウツギ、カエデ属、トチノキ、マタタビ属、タラノキ、ミズキが出土した。草本ではスゲ属、クワクサ、タデ属A、タデ属B、シロザ近似種、ナデシコ科、キケマン属、ヘビイチゴ属、オランダイチゴ属、またはキジムシロ属、カタバミ属、ツリフネソウ、スマレ属、ウド、キランソウ属、ナス属、メナモミが出土した。これら出土した大型植物化石の一覧を表1に示す。以下に各試料から出土した大型植物化石について記載する。

・SX21(A)の大型植物化石：木本ではオニグルミ、カバノキ属、クワ属、フジ属、ミツバウツギ、カエデ属、タラノキが出土し、フジ属はやや多産する。草本ではスゲ属、クワクサ、タデ属A、ナデシコ

科、キケマン属、カタバミ属、ツリフネソウ属、スミレ属、ナス属が出土し、スゲ属、タデ属A、ツリフネソウはやや多産する。

・SX21(B)の大型植物化石：木本ではクリ、コナラ属、キハダ、マタタビ属、タラノキが出土し、タラノキはやや多産する。草本ではタデ属A、タデ属B、シロザ近似種、ナデシコ科、キケマン属、カタバミ属、ウド、ナス属、メナモミが出土し、ウドはやや多産する。

・SX21（共通）の大型植物化石：木本のみで、オニグルミ、クリ、ホオノキ、ミツバウツギ、トチノキ、ミズキが出土した。

・SX22の大型植物化石：木本ではヒノキ、オニグルミ、カバノキ属、キイチゴ属、トチノキ、タラノキが出土し、カバノキ属、キイチゴ属、トチノキ、タラノキは比較的多産する。草本ではタデ属A、ナデシコ科、ヘビイチゴ属、オランダイチゴ属、またはキジムシロ属、ツリフネソウ、スミレ属、ウド、キランソウ属、ナス属が出土し、タデ属Aは比較的多産する。

・SX26の大型植物化石：木本のみでスモモ、トチノキが出土した。

#### 4. 考察

##### a. 栽培・利用植物

出土したもののうち栽培植物と思われるものは、SX26から出土したスモモである。オニグルミ、クリ、トチノキなども食用として利用可能であり、貯蔵用とされていた可能性がある。他に、コナラ属、クワ属、キイチゴ属、マタタビ属、ミズキなども食用にはなる。

##### b. 周辺植生

###### 〔縄文時代後期の古植生〕

木本で出土した分類群は、概ね落葉広葉樹であり、遺跡周辺にはカバノキ属、クリ、コナラ属、クワ属、ホオノキ、キハダ、ミツバウツギ、タラノキ、ミズキなどからなる落葉広葉樹林が成立していたものと思われる。オニグルミ、カエデ属、トチノキなどは谷筋といった場所に生育していたのであろう。こうした森林にフジ属、マタタビ属といったつる性植物が絡みついていた。一方、SX21付近にはスゲ属、クワクサ、タデ属A、タデ属B、シロザ近似種、ナデシコ科、キケマン属、カタバミ属、ツリフネソウ、スミレ属、ウド、ナス属などが生育しており、ツリフネソウなどは幾分湿った所に、クワクサ、シロザ近似種、ナデシコ科、カタバミ属、スミレ属などは幾分乾き気味の所に生育しているのであろう。

###### 〔縄文時代晚期の古植生〕

周辺には針葉樹のヒノキ、落葉広葉樹のカバノキ属が生育していたものと思われる。オニグルミ、トチノキは主として谷筋に、キイチゴ属は林縁にみられたであろう。一方、SX22付近にはタデ属A、ナデシコ科、ヘビイチゴ属、オランダイチゴ属、またはキジムシロ属、ツリフネソウ、スミレ属、ウド、キランソウ属、ナス属などが生育しており、ヘビイチゴ属、オランダイチゴ属、またはキジムシロ属、ツリフネソウなどは幾分湿った所に、ナデシコ科、キランソウ属などは幾分乾き気味の所に生育していたものと思われる。

## 5. 大型植物化石の記載

**ヒノキ** *Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Sieb. et Zucc. 小枝

小枝には鱗片状の葉が10字対生に付き、葉は鈍頭で先端は茎に着生する。

**オニグルミ** *Juglans ailanthifolia* Carr. 核

核は完形であれば、側面観は卵形から円形、先端は鋭頭、上面観は円形。表面は縦に不規則な隆起があり、明瞭な1本の縫合線が縦に走る。

**カバノキ属** *Betula* 果実

果実は茶褐色で広楕円形、長さ2.7~3.4mm、縁辺は翼状となり、翼は果体の長さの半分程度。

**クリ** *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. 果実

果実は黒褐色で完形であれば、扁円形。表面には縦に細かな筋が多数走る。

**コナラ属** *Quercus* 果実

果実は茶褐色、表面には縦に細かな筋が多数走る。

**クワ属** *Morus* 種子

種子は黄褐色、側面観は扁楕円形、上面観は扁三角形。表面はややざらつく。

**ホオノキ** *Magnolia obovata* Thunb. 種子

出土したものは破片であったが、完形であれば種子は広楕円形、腹面は中央部が溝状にくぼみ、下部に小さなへそがある。表面は、腹面にやや著しい凹凸があり、ざらつく。背面は線状のくぼみがある。径10mm程度。

**スモモ** *Prunus salicina* Lindl. 核

核は淡褐色でやや扁平な楕円形。一方の側面には縫合線が発達する。出土したスモモの核は、げっ歯類による食害を受けたものが多くみられた。

**キイチゴ属** *Rubus* 核

核は淡褐色、側面観は腎形、上面観は狭楕円形。表面には隆起があり、網目模様をつくる。

**フジ属** *Wistaria* 芽

芽は黒色ないし黒灰色、基部はこぶ状に膨らみ、表面は縦方向の隆起がある。

**キハダ** *Phellodendron amurense* Rupr. 種子

種子は黒色、歪んだ狭倒卵形で一方の側面にはやや細長いへそがある。表面には全体に微細な網目が発達する。

**ミツバウツギ** *Staphylea bumalda* (Thunb.) DC. 種子

種子は黄褐色ないし淡褐色で強い光沢があり、倒卵形。

**カエデ属** *Acer* 果実

果実は灰褐色で翼の一部が僅かに残っており、鋭角に開く。果柄に付着する部分の長さは3.3mm程度。果体は扁平で長さ7mm程度(翼を含めると14mm以上)、幅4.5mm程度。表面には弱い隆起がある。イタヤカエデの可能性が高いものと思われる。

**トチノキ** *Aesculus turbinata* Blume 種子

種子は光沢のある黒色の部分と光沢のない黒灰色の部分がほぼ半分ずつある。

マタタビ属 *Actinidia* 種子

種子は完形であれば、側面観は楕円形、上面観は両凸レンズ形。表面には穴が規則的に配列する。

タラノキ *Aralia elata* (Miq.) Seemann 核

核は褐色ないし茶褐色、側面観は半月状で上面観は扁平。背軸側にはやや明瞭な溝が2~3本ある。

ミズキ *Cornus controversa* Hemsley 核

核は淡褐色、扁円形で基部に大きなへそがあり、表面には浅い縱方向の溝が走る。

スゲ属 *Carex* 果実

果実は褐色で三棱形。

クワクサ *Fatoua villosa* (Thunb.) Nakai 果実

扁三角形で背面の中央はややへこむ。

タデ属 *Polygonum* 果実

タデ属Aは黒色の二面形、タデ属Bは黒色の三稜形。

シロザ近似種 *Chenopodium cf. album* Linn. 種子

種子は黒色で鈍い光沢がある。側面観は円形、上面観は楕円形。1本の不明瞭な筋が中央付近まで入る。

ナデシコ科 *Caryophyllaceae* 種子

側面観は円形、上面観は楕円形。表面には多数の突起がある。

キケマン属 *Corydalis* 種子

種子は光沢のある黒色で円形。表面には長方形から六角形の模様がある。

ヘビイチゴ属、オランダイチゴ属、またはキジムシロ属 *Duchesnea, Fragaria, and/or Potentilla* 核

核は淡褐色、側面観は歪んだ狭倒卵形、上面観は狭楕円形。

カタバミ属 *Oxalis* 種子

種子は黒色で側面観は卵形、上面観は扁平。表面は両側面に横長の網目が三列に並ぶ。

ツリフネソウ *Impatiens textori* Miq. 種子

種子は光沢のある黒色で側面観は長倒卵形、上面観は楕円形。表面には不規則な不連続な網目模様がある。

スミレ属 *Viola* 種子

種子は淡褐色で側面観は下端が尖る倒卵形、上面観は円形。

ウド *Aralia cordata* Thunb. 果実

果実は淡褐色で側面観は半月状、上面観は扁平。

キランソウ属 *Ajuga* 果実

果実は楕円形、表面には網目模様があり、腹面の下半部には大きなへそがある。

ナス属 *Solanum* 種子

種子は扁平な円形で表面は網目模様。

メナモミ *Siegesbeckia pubescens* (Makino) Makino 果実

果実は黒色で歪んだ倒卵形。

第7表 大型植物化石一覧表

数字は個数、( )内は破片の数、Bはかみあと

分類群	部位	SX21(A)	SX21(B)	SX21(共通)	SX22	SX26
木本						
ヒノキ	小枝				1	
オニグルミ	核	(3)		1(1)		(1)
カバノキ属	果実	1				7
クリ	果実			(3)	(7)	
コナラ属	果実			(2)		
クワ属	種子	1				
ホオノキ	種子				(2)	
スモモ	核					7B10
キイチゴ属	核					7
フジ属	芽	6		1		
キハダ	種子					
ミツバウツギ	種子	(1)		4(1)		
カエデ属	果実	1				
トチノキ	果実				1(2)	
	幼果				4(6)	
	種子				(1)	(31) (2)
マタタビ属	種子			(1)		
タラノキ	核	1(1)	7(2)			17(1)
ミズキ	核				5(4)	
草本						
スゲ属	果実	3				
クワクサ	果実	1				
タデ属A	果実	4(1)		1		9
タデ属B	果実			2		
シロザ近似種	種子			1		
ナデシコ科	種子	(1)		1		1
キケマン属	種子	1(1)		(1)		
ヘビイチゴ属、オランダイチゴ属、 またはキジムシロ属	核					1
カタバミ属	種子	1		1		
ツリフネソウ	種子	(4)				2
スミレ属	種子	1				1
ウド	果実			3		1
キランソウ属	果実					2
ナス属	種子	1		1		1
メナモミ	果実			1(1)		

## 放射性炭素年代測定

山形秀樹（パレオ・ラボ）

## 1. 放射性炭素年代測定について

試料は、アルカリ・酸処理を施して不純物を除去し、炭化処理をした後リチウムと混合して反応管に入れ、真空ポンプで引きながら800°Cまで加熱して炭化リチウム（カーバイド）を生成後、加水分解によりアセチレンを生成した。

測定は、約一ヶ月放置した後、精製したアセチレンを比例計数管(400cc)を用いて、 $\beta$ -線を計数して年代値を算出した。その結果は下記に示す。なお、年代値の算出には $^{14}\text{C}$ の半減期として Libby の半減期5,570年を使用した。また、付記した年代誤差は、計数値の標準偏差 $\sigma$ に基づいて算出し、標準偏差 (One sigma) に相当する年代である。試料の $\beta$ -線計数率と自然計数率との差が $2\sigma$ 以下の時は、 $3\sigma$ に相当する年代を下限の年代値として表示し、試料の $\beta$ -線計数率と現在の標準炭素 (Modern standard carbon) の計数率との差が $2\sigma$ 以下の時は、Modern と表示し、 $^{14}\text{C}$  (Sample)/ $^{14}\text{C}$  (Modern) の値を付記し、 $^{14}\text{C}$  (Sample)/ $^{14}\text{C}$  (Modern) < 1 であれば、yrBP の値を付記する。

曆年代の補正は、大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された $^{14}\text{C}$ 年代値 (yrBP) に対し、過去の宇宙線強度の変動による大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度の変動および半減期の違い ( $^{14}\text{C}$ の半減期5,730±30年) を補正して、より正確な年代を求めるものであり、具体的には年代既知の樹木年輪の $^{14}\text{C}$ 年代の詳細な測定値を用いて補正曲線を作成し、これを用いて曆年代を算出する。補正曆年代の算出に CALIB3.0 (Stuiver and Reimer, 1993; IBM-PC 用: Reference (Pearson & Stuiver, 1993)) を使用した。なお、交点年代値は $^{14}\text{C}$ 年代値に相当する補正曲線上の年代値であり、 $1\sigma$ 年代幅は $^{14}\text{C}$ 年代誤差に相当する補正曲線上の年代範囲を示す。年代を検討する場合は、68%の確率で $1\sigma$ 年代幅に示すいずれかの年代になる。曆年代の補正是約一万年前から AD 1,950 年までが有効であり、該当しないものについては補正曆年代を \*\*\* または Modern と表示する。また、AD 1,955\* は Modern を意味する。

## 2. 放射性炭素年代測定結果 (第8表)

測定 No	試 料	$^{14}\text{C}$ 年代 値	補 正 曆 年 代
PLD-160	炭化材 (SX 2)	$3,430 \pm 130\text{yrBP}$ (BC 1,480年)	交点年代値 BC 1,740, 1,710, 1,700年 $1\sigma$ 年代値 BC 1,890 to 1,530
PLD-161	炭化材 (SB 1)	$3,860 \pm 120\text{yrBP}$ (BC 1,910年)	交点年代値 BC 2,320年 $1\sigma$ 年代値 BC 2,470 to 2,140
PLD-162	炭化材 (FP 1)	$6,670 \pm 160\text{yrBP}$ (BC 4,720年)	交点年代値 BC 5,580, 5,540, 5,530年 $1\sigma$ 年代値 BC 5,670 to 5,440
PLD-176	トチノキ種子 (SX22)	$2,810 \pm 110\text{yrBP}$ (BC 860年)	交点年代値 BC 930年 $1\sigma$ 年代値 BC 1,120 to 830
PLD-201	ケヤキ根 (F10III)	$3,850 \pm 100\text{yrBP}$ (BC 1,900年)	交点年代値 BC 2,290年 $1\sigma$ 年代値 BC 2,460 to 2,140
PLD-202	樹皮 (SX21)	$4,010 \pm 110\text{yrBP}$ (BC 2,060年)	交点年代値 BC 2,550, 2,540, 2,490年 $1\sigma$ 年代値 BC 2,850 to 2,830 BC 2,660 to 2,640 BC 2,620 to 2,490 BC 2,370 to 2,360

&lt;引用文献&gt;

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended  $^{14}\text{C}$  database and revised CALIB3.0  $^{14}\text{C}$  Age Calibration Program.

## たのもと遺跡の樹種同定

植田弥生（バレオ・ラボ）

### 1.はじめに

当遺跡は岐阜県大野郡丹生川村大字折敷地字西田に所在する。荒城川右岸の標高850～870mの段丘上に位置し、縄文時代早期～晚期のピット群や土坑などの遺構や多くの遺物が出土しており、縄文時代後期の住居跡も検出されている遺跡である。ここでは、主に縄文時代後期～晚期の遺構から出土した木材の樹種同定結果を報告する。

### 2.方法

材の組織標本は、片刃の剃刀を用いて材の横断面（木口）・接線断面（板目）・放射断面（柾目）の3方向を薄く削ぎ取りスライドグラスの上に並べ、ガムクロラールで封入し永久プレパラートを作成した。光学顕微鏡を用いてこれらの材組織を観察し同定を行った。

組織標本はバレオ・ラボに保管してある。

### 3.結果

SX21から出土した薄い板状の材はサワラ、細い角棒状はヒノキ科、放射性炭素年代測定に用いられた材はトチノキの根材であった。

SX22から出土した2点はともにクリであり、SX24の杭もクリであった。

SX21の西側に位置するF10区III層から出土した材はカツラであり、F10区III層から出土し放射性炭素年代が測定された材はケヤキの根材であった。

M22区II層から出土した一端に焦げ跡のある丸木はヒノキ属であった。

以上の同定結果を表にまとめ（第9表）、同定の根据となった組織観察結果を下記に記載する。

#### 1. サワラ *Chamaecyparis pisifera* (Sieb. et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図版34 1a.-1c. (SX21出口薄板状)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の量は少なく、樹脂細胞は年輪後半に散在する。分野壁孔は大きなヒノキ型で、孔口はやや大きく開き、1分野におもに2個が水平に整然と配列する。孔口の開口がヒノキより水平に近い角度で大きく開いていることからサワラと同定した。

#### 2. ヒノキ属 *Chamaecyparis* ヒノキ科 図版34 2a. 2c. (M22II層)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材部の量は非常に少なく狭い。樹脂細胞は年輪の後半に接線状・散在状に分布する。分野壁孔はやや小さく、外形は丸いヒノキ型で1分野に1～3個、孔口の開き具合は狭いものからやや広いものまで変化する。ヒノキまたはサワラと思われるが、年輪が非常に詰まっており、典型的な形質を観察できないのでヒノキ属としておく。

樹脂道を持たず、樹脂細胞を持ち、仮道管にらせん肥厚がない、似たような形質を持つ他の分類群とは次の点で識別した。同じヒノキ科のネズコは晩材部の量がやや多く分野壁孔も2～6個あり多い。アスナロは分野壁孔がヒノキ属のそれより小型で数も2～4個とやや多く放射組織は5細胞高以下が

多い点で区別した。スギは晩材部の量が多く分野壁孔の輪郭は大きな橢円形で孔口は水平に大きく開いており、モミ属は晩材部の量が多く樹脂細胞は無く放射柔細胞の接線壁に数珠状の肥厚があることで容易に区別できる。

ヒノキ属は温帯に生育し高木となる常緑針葉樹でヒノキとサワラがある。ヒノキは本州の福島県以南・四国・九州の山中のやや乾燥した尾根や岩上に生育し、サワラはヒノキより分布域が狭く東北地方南部から中部地方の沢沿いの岩上に生育する。いずれの材も耐朽性・耐水性・切削性・割裂性にすぐれる。

### 3. ヒノキ科 Cupressaceae 図版34 3a.-3c. (SX21 角棒状)

仮道管・放射組織・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材部の仮道管は厚壁で晩材の量はやや多い。樹脂細胞は晩材部に散在する。分野壁孔は1分野に2~4個、壁孔の外形は丸いことからヒノキ科の材であることが判るが、細胞壁の不均により分野壁孔の特徴が十分確認できないので分類群を絞ることはできなかった。

### 4. クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. プナ科 図版35 4a.-4c. (SX22—①)

年輪の始めに中型~大型の管孔が密に配列し除々に径を減じ、晩材部では非常に小型の管孔が火炎状に配列し、接線状の柔組織が顕著な環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は單一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状・櫛状である。

北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。果実は食用になり、材は加工はやや困難であるが狂いは少なく粘りがあり耐朽性にすぐれている。

### 5. ケヤキ (根材) *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 図版35 5a.-5c. (F10III層—②)

材の中心部に節がないことから根材であることが判る。単独または2~3個が接合した中型の管孔が不規則に分布し、所々にやや小型~非常に小型の孔径の異なる管孔の集合が見られ、年輪界は不明瞭である。道管の壁孔は交互状、穿孔は單一、小道管は層階状で内腔にらせん肥厚がある。放射組織は異性、1~5細胞幅の大きく背も高い筋錐形、上下端や縁に結晶細胞があり、道管との壁孔は交互状である。

ケヤキは暖帯下部から温帯の山中や川岸の陽光地に生育する落葉高木である。

### 6. カツラ *Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc. カツラ科 図版35 6a.-6c. (F10III—①)

小型で多角形の管孔が年輪内に密在し年輪界ではやや径を減じ、管孔の占有面積が多い散孔材。道管の壁孔はまばらな交互状あるいは水平に開いた孔口の長さが不揃いの階段状、穿孔は横棒の数が非常に多い階段穿孔、内腔には水平のチロースがある。放射組織は異性、1~2細胞幅、多列部の上下端に方形・直立細胞からなる単列部が1~3細胞高ある。

カツラは北海道から九州の暖帯から温帯の渓谷に生育する落葉高木である。材は均質でやや軽軟、割裂性・切削性は良く、狂いは少ないが保存性はあまり良くない。

### 7. トチノキ (根材) *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科 図版36 7a. 7c. (SX21 PLD-202)

小型~中型の管孔が単独または2個が複合して散在する散孔材。道管の壁孔は交互状に接合して配列、穿孔は單一、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は単列同性で層階状配列の傾向が見られ、道管と放射組織の壁孔はやや大きく、円形で交互状に密在する。幹材に比べ、管孔の分布は粗で少なく、繊維細胞と放射柔細胞が大きいことから根材と同定した。

トチノキは北海道以南の温帯の谷間に生育する落葉高木である。種子はアクリ抜きが必要だが食用となり、材は軽軟で緻密で加工し易いが耐久性は低い。

#### 4.まとめ

不明遺構である SX21と SX22はオニグルミ核とトチノキの実がまとまって出土し、SX21ではクリの実も出土することから、これらの遺構は水場関連の遺構と考えられており、大型植物遺体の分析も行われている。SX21は縄文時代後期の遺物を伴い、出土した材の放射性炭素年代値は $4,010 \pm 110$ yrBP (PLD-202) で同様な時期を示す値が得られている。放射性炭素年代測定を行った材は、外形と外観から根材と見られ組織観察からもトチノキの根材であると同定された。この根材の放射性炭素年代測定値は出土遺物の示す縄文時代後期に近い値であることから、縄文時代後期の遺構周辺にはトチノキが生育していたといえる。またほぼ同時期の放射性炭素年代値を示すケヤキの根材も出土している。縄文時代後期から出土したトチノキ・ケヤキ・カツラ・サワラはやや湿った谷筋に生育する樹種であり、縄文時代後期の遺構の古地形が谷部であった発掘状況と非常によく一致する結果であった。

SX22からは縄文時代晩期の土器が出土しており、出土したトチノキの実の放射性炭素年代測定値も $2,810 \pm 110$ yrBP (PLD-176) で遺物の時期と一致していた。この遺構のサンプリング資料からは、クリ果実は検出されなかったがクリの材が出土している。

今回の分析で当遺跡から出土した針葉樹を挙げると、材では SX21からサワラ・ヒノキ科が、M22区II層からはヒノキ属が出土した。すべてヒノキ科に属するものであり、ヒノキ属に属するものが多い。中部地方は現在もヒノキ属のサワラとヒノキが豊富に生育することで知られており、このような植生の特徴を縄文時代後期から晩期の遺構の分析からも読み取ることができ、また現在でも有用材として用いられているヒノキ属の材が縄文時代においても利用されていたことを知ることができた。

第9表 たのもと遺跡出土木材の樹種同定結果

出土遺構等	樹種	備考（形状・出土遺物時期・ <sup>14</sup> C測定値など）
SX22	クリ	ø 7 cm 半截 平面圓木片-1 縄文時代晩期
SX22	クリ	平面圓木片-2 縄文時代晩期
SX24	クリ	杭 ø15cm
SX21	サワラ	出口 傷い板状（厚み 5 mm） 縄文時代後期
SX21	ヒノキ科	細い角棒状（厚み 5 mm） 縄文時代後期
SX21	トチノキ（根材）	8 cm <sup>14</sup> C測定 (PLD-202) 4,010 ± 110 yrBP
F10III層-①	カツラ	ø 10cm 縄文時代後期
F10III層-②	ケヤキ（根材）	ø 6 cm <sup>14</sup> C測定 (PLD-201) 3,850 ± 100 yrBP
M22II層	ヒノキ属	ø 15cm 一部焦げ跡あり (遺物番号10911)

## 第6章 まとめ

### 1 西区III層出土のIV期の土器について

たのもと遺跡から出土した縄文土器のうち碎片等のため未報告の資料は、約22,000点(111.8kg)で、そのうち約63%の14,000点(54kg)が西区III層出土である。実測図を掲載した縄文土器は約580点で、そのうち約63%が西区III層出土のIV期の土器である。また、完形に近い形まで復元を試みた個体は12点で、そのうちの8点が西区III層出土のIV期の土器である。今回の発掘調査において、その出土遺物の中心的存在といえる西区III層出土のIV期の土器について、若干考察を加えてみたい。

西区III層は上層に厚い砂礫層を挟み、縄文後期中葉以降の遺物包含層との分層が可能な比較的安定した遺物包含層である。出土した土器はほとんどが小破片で、その復元が困難なものが多かった。地下水等の影響によるものか、同一個体でその色がそれぞれ異なる破片が目立つが、全体に破片自体の残り具合は良好なものが多い。西区III層出土の土器は一部に縄文中期のものを含むが、そのほとんどは一括性の高い縄文後期の上器と考えられる。本文中では西区III層出土の縄文後期の土器を、後期前葉に属するものと想定して、器形や文様構成から9群に大別し分類している(第3章第3節4)。

第1群上器は微隆起線によって施文される深鉢である<sup>1)</sup>。縦方向に文様が展開し、微隆起線の一部がループ状になりその先端を下から上へ巻き込むような処理が特徴的な一群である。微隆起線文をもつ椎形の器形の土器については、1類は桜洞遺跡(紅村1974)に、2類は寺東遺跡(吉朝1988)にその類例がみられる<sup>2)</sup>。口縁部がやや内側する5類は、沈線文の併用等もみられ、時期差を想定すべきであろう。第1群土器の造構における他群の土器との共伴関係を示す確実なものはSK2の事例で、1a類の土器胴部と第2群土器の橋状把手部が同じ土坑より出土している(第18図・第10表)。

第2群土器は微隆起線文によって施文される壺状の土器である。3個体が復元でき、全部で7個体

第10表 遺構出土のIV期の土器(西区)

遺構名	第1群土器	第2群土器	第3群七器	第4群土器	第5群土器	第6群土器	第7群土器	第8群七器	第9群上器
SB 1	2類? (1-7) 3類? (19) 3類? (22-23)	(20) (21)	3b類(12)	(9)	7類(13-15)	1類(16) 2類? (25)	1a類(10) 2c類(28) 2c類(29)	2c類(8) 4類(32) 5類(44)	
SX 4	3類? (77)								
SX 6		(83-85)		?	(82)		2a類(86)		
SX 7			1b類(91)		7類(92)			?(93-94)	
SX 8		(98)							1b類(100)
SX11						2類? (104)			
SX13	? (106-109)						(110-111)	2c類(104)	
SX21	1c類(127)								4類(135)
SX23									
SK 1		(137-138)							4類(142)
SK 2	1a類(139)	(141)		?	(140)				2c類(145)
P 1						7類(148)			2a類(147) 2c類(146) 2c類(151)
P 3						7類(157)			
P 5						7類(157)			
P 8			1b類(209)						
P73			1b類(91)					2c類(170)	

以上の存在が確認できる重要な土器群である。第1群土器と比較すると、1本線を基調とした施文法やモチーフは2類土器に共通するものがあり、胎土や器厚等では3類土器に同質のものが含まれている。類例は少なく、吉城郡上宝村の大柄遺跡出土の胴部破片（大江1958）や益田郡小坂町の水口遺跡出土の橋状把手破片（大江1965）などが同類かと類推される程度である<sup>3)</sup>。遺構出土では、SB1およびSX6で、第6群の鉢形土器との共伴がみられた。

第3群土器は西日本系の縁帶文土器に比定できる一群で、成立期のものを含んでいると考えられる。剥部文様が不明のものが多いが、口縁端部の肥厚具合や口縁部の文様帶のあり方等から、ある程度の時期幅を想定すべきであろう。遺構からの出土が確認できたものは、3b類(SB1)と1b類(SX7・P8・P73)で、第8群の2c類と共伴である。

垂下隆帯をもつ第4群土器については、確認できたのは1個体のみである。SB1出土の破片が1点含まれ、第2群土器や第6群土器と共に關係にある。垂下隆帯や沈線による渦巻文と斜行文などの胴部文様から壇之内1式段階と想定できそうであるが、口縁端部の文様や頸部が大きく外反し胴部が膨らむ器形は、第3群土器に通じるものもある。

第5群の沈線文が主体の土器では、第5類および第6類の口縁部から頸部にかけて横方向の文様が展開する土器が、ともに上層部分から出土している（216・365～367）。また、第6類土器と同質の胎土で、微隆起線をもつ口縁部破片（第8群1類403～405）が、同様に上層部分より出土している。これらの土器は、III層出土の大半の土器に後続する様式である可能性が大きい<sup>4)</sup>。

第6群の1・2類は口縁部の内屈が強い鉢形土器である。SB1およびSX6では、第2群土器と一緒に出土している。類例は、真脇遺跡（加藤1986）、気屋遺跡（米澤1996）、吉野ノミタニ遺跡（米澤1997）など北陸の遺跡において、後期前葉の土器群の中にみられる。

第8群および第9群は、その大半がいわゆる粗製土器の範疇に含まれる土器群である。口縁部から頸部にかけて無文帶を残し、縄文の施された胴部は丸く膨らみ、器厚が5mm前後の薄手の土器という特徴がみられる。頸部の外反具合や口唇部の施文等の違いは時期差と考えられる。

一応 SB1からは第1群から第9群までの全群の土器が出土しているが、破片が小さく特定が困難なものが多い。従って、住居跡内の土器のセット関係も不明確な部分が多い。本遺跡の所在する丹生川村に隣接する吉城郡上宝村の大首遺跡では、縦展開の微隆起線文がみられる樽形の深鉢（第1群1類）と、口縁部が内屈する鉢形土器（第6群1・2類）、口縁部には丸い刻み付きの隆帯を有し外反する頸部は無文で胴部は縄文の土器（第8群2c類）等が出土している（大江1958）<sup>5)</sup>。これらは本遺跡の西区III層出土の土器群と同様のセット関係が類推可能な資料である。

本遺跡の西区III層から出土した在地色の強い第1群および第2群土器を後期前葉に位置づけた根拠は、第3群土器の存在である。今後さらに検討を加える必要があるが、現時点では同層出土の土器群の中で指標となり得る有力な土器群は縁帶文系の第3群土器群である。その器形等から第3群土器については1類→2・3類、第1群土器については1・2類→5類、第9群土器については2b類→2c類→3類といった変遷を類推し、その中心時期は後期前葉の前半と推定しておく。

たのもと遺跡出土の縦展開の微隆起線文をもつ深鉢（IV期第1群土器）および微隆起線文の壺状土器（同第2群）は、資料の希薄なこの地方の縄文後期前葉の様相を明らかにする上で重要な土器群である。関連する前後の時期の土器が出土している周辺の遺跡との関係等を探りながら、今後の研究を

深めていきたい。

## 2 石器について

たのもと遺跡の石器類の出土総点数は、1,779点である。地区別の組成は第30表に示したとおりである。前述したように石器類の分類については、五味原遺跡群報告書の第1集「西田遺跡」(谷川1997)に準拠している。卷末の第11表から第29表に器種別の計測表を掲載した。本文中では個々の石器について出土地区や層位に応じて順次報告しているので、最後に遺跡全体について概観しておきたい。

石錐は86点出土し、遺構出土分も含めてその約70%がIV期の土器に伴うものと考えられる。この時期の特徴としては、鋸歯状削線が顕著で、基部の抉りが深めで薄手の凹基無茎錐が多いことを指摘できる。石材はチャートが半数以上を占め、下呂石が多い西田遺跡の後晩期とは様相が異なっている。

石錐の出土は全部で22点で、そのうち約68%が西区III層出土である。西田遺跡で多数出土した棒状タイプ(1類)については西区III層からの出土は皆無で、東区より3点が出土したのみである。IV期の土器に伴うものは、そのほとんどがチャート製である。その他の剥片石器や使用痕のある剥片等でも、同様に西区III層ではチャートの占める割合が大きい傾向にある。

石錐の出土は五味原遺跡群では全般に少なく、本遺跡でも西区III層より有溝石錐が3点出土しただけである。本遺跡出土のものは、長さが7cm前後で、重さ70~100gのやや大型の製品である。

打製石斧の出土総数は226点である。そのうち西区II層出土が41点(18.1%)、東区出土が112点(49.6%)と、西区III層からの出土が顕著な剥片石器類とは異なる分布状況を示している。製品は全般的に小振りなものが多いが、本文中で触れたように、西区III層出土のものと東区出土のものに時期差によると考えられる違いが一部認められる。後期前葉が主体と考えられる西区III層出土の打製石斧では、表裏両面や刃先に原石の自然面を残すものがあり、偏平な小型の川原石(凝灰岩)が原石として用いられたようである(64・66・123・522・523)。また、緑色片岩製で側縁部に敲打痕のようなツブレを伴うものも立つ(168・169・521)。晩期が主体の東区出土の打製石斧は、比較的大きめの礫から素材剥片を得たと考えられるものが多い。横刃形石器は遺構分を含めて5点すべてが西区III層出土である。SB1出土のものは厚手で(63)、他は薄手の製品である。

西区III層からは、飛驒ヒスイ製の礫器が2点出土している(527・528)。荒城川上流原産のこの石はヒスイより硬度の低い軟玉で、縄文時代の装飾品にはあまり用いられなかったようである。原産地に近い五味原遺跡群では、各遺跡から原石の出土がみられるが、製品の出土は稀である。

磨製石斧は全部で27点出土している。西区III層出土で特徴的なものは、欠損部分に顕著な敲打痕を残す2点である(125・531)。東区出土のものでは長さ4cm前後の小型の磨製石斧が晩期に属すると考えられる(796・797)。

磨石・臼石類は全部で137点出土しているが、約半数が後期前葉と考えられる遺構および西区III層からの出土である。特にSB1出土のものは顕著な使用痕を残している(67~74)。水槽遺構などから出土したトチやクルミ等の堅果類の加工処理等との関連を考えたい。

## 3 遺跡の変遷について

たのもと遺跡出土の最古の資料は、東区出土の縄文早期後葉の貝殻条痕文系の土器である(625)。

同区で検出した炉穴の炭化材の年代測定値は $6,670 \pm 160$ yrBPを示している。約500m下流の西田遺跡では、早期の焼窯集積遺構が多数検出されているが、本遺跡の炉穴とは形態が異なるものである。西田遺跡や牛垣内遺跡などで押型文土器が出土しているが、本遺跡では確認できなかった。

縄文前期（II期）の資料は西区の西側の部分から出土している。繊維土器と北白川下層II b式に比定できる破片で、ともに単独出土である。前者は西田遺跡との関連が考えられる上器で、後者は五味原遺跡群内では希薄な時期の資料である。丸山遺跡の主体をなす前期末から中期初頭の遺物について、本遺跡からの出土は未確認である。

縄文中期（III期）の資料は断片的なものが多い。西区では前半の平出III類A式土器（194）や後葉と考えられる隆蒂文の土器（196）などが単発的に出土し、東区でも5~6個体分の破片が確認できたに過ぎない。この時期の遺物がまとまって出土した牛垣内遺跡や対岸のカクシクレ遺跡などとの関連を探る必要があるが、今回の発掘範囲内に中期の居住域があった可能性は低いと考えられる。

縄文中期末から後期初頭に特定できる資料は現段階では見当たらない。西区III層の主体をなす時期は縄文後期前葉（IV期）と考えられる。今回の発掘調査では、この時期の豊穴住居跡1軒と周辺の焼土跡群・土坑・ピット群および水場遺構等を確認した。背後（東側）が急斜面となるわずかな平地（緩斜面）に住居が設けられ、その前方（西側）は再び急斜面となっている。比較的多くの上器片が出土したG9区・G10区は、住居の北西の谷部にあたり、その先に水場（SX21）が位置している。居住区の南側は現在の道路によって削り取られているが、等高線をみると平地は限られていたようである。現在の荒城川は、遺跡の約12m下流を流れているが、地形的には當時も同程度の高低差があったと考えられ、生活用水には谷水や湧き水を利用していたと考えるのが妥当であろう。I16区やK23区などからも僅かではあるがIV期第1群の土器などが出土しているので、西区の上段に相当する遺跡の東側の部分も同時に活用されていたようである。同時期と考えられる遺物の出土は、五味原遺跡群の他の遺跡では希薄である。続く後期中葉（V期）との間に本遺跡の西区では、背後の谷の氾濫等により砂礫の堆積が起り、埋没谷のように地形が変更したと考えられる。その後の西区は、谷水や湧水の流路が定まらない不安定な斜面となり、居住区は東区へと移り変わったと考えられる。

本遺跡の後期中葉以降の遺構面は、この地域の多くの縄文後晩期の遺跡と同様に、後世の開墾等によって失われた可能性が高いが、特に東区はその出土遺物や自然流路内の遺構等から、縄文晩期中葉から後葉には居住域であったと推測される。周辺の遺跡で晩期の遺物がまとまって出土したのは、牛垣内遺跡と西田遺跡およびカクシクレ遺跡A地点である。

東区はその出土遺物から、平安時代の中頃に再び居住区として利用された可能性が高く、その時点での縄文時代の遺構や包含層の多くが失われたことも推測される。同時期のものと考えられる住居跡が牛垣内遺跡で検出され、同時期の遺物が西田遺跡やカクシクレ遺跡C地点より出土している。

たのもと遺跡の変遷を五味原遺跡群の他の遺跡と関連づけながら概観してみたが、今後は各遺跡の発掘結果を比較検討しながら、遺物編年や集落の変遷および集落構造等についての研究を深めることを課題としたい。

1) 隆線の両端がナデにより断面三角形に仕上げられた微隆起線によって文様が描かれるこの地方の土器

は、「宮田式」として報告されることが多い。たのもと遺跡出土のIV期第1群土器は、設定時の「宮田式」土器に含まれる土器（紅村・増子1978）であるが、縦方向の文様展開をもつ深鉢主体というより限定される要素が強いので、本文中では「宮田式」という形式名は用いてない。戸田論文では「宮田古式」と位置づけられた土器（戸田1993）、および増子論文の「宮田式1段階」に含まれる土器（増子1992）との関連が考えられる。なお、本遺跡の土器では粘土紐を貼り付けた後に、その両脇を工具で調整した工程が推測されるものも目立つ。出来上がった断面三角形の隆線は、隆起線あるいは隆線という表現の方が適切と思われるものもあったが、本文中ではそのほとんどを微隆起線と表記したことを断つておく。

- 2) 第10図-50（紅村1974）、挿図62—5-77-56（吉朝1988）。寺東遺跡出土のものは口部が橢円形の橢型で山並状突起を有している点などが特徴的である。
- 3) 図版15上図で上から2段目の左から2点目（大江1958）、図版23上図の右上（大江1965）。第2群土器については、その系譜を西日本系の双耳（四耳）壺や東日本系の瓢形注口土器等の中に見出せないかと考えたが軽論を出せないのが現状である。橋状把手の位置等が類似の土器は、真船遺跡第13群土器（前田式）図3-28（加藤1986）にみられる。
- 4) 口縁部から頸部にかけて主に横方向に微隆起線文が展開する土器は、萩原町宮田遺跡・禪昌寺遺跡（増子・紅村1978）等から出土し、「宮田式」設定のきっかけになった土器である。また、「宮田」式には、L字なしT字状に内屈した口縁部に微隆起線文がみられる土器（南垣内型鉢）が存在するが、たのもと遺跡からは出土をみなかった。
- 5) 図版15の下図（大江1958）。土器は現在、上宝村教育委員会に保管されている。なお、上宝村上地ヶ根大首遺跡出土の縄文後期土器については、「後期の土器は氣屋式土器比定のものが目立ち注目すべきである。（中略）その他後期の土器は磨消縄文、ミミズ張り状の隆起線文を有するもののがかなり見られる。口縁部が肥厚して、その部分に縄文が施された縁帶文を有するもの、又、外反する器形の口縁部で、口唇部が平であり、その上に工具で幾枚状の文様が洗線で施文されているものなどが出上している。」（大江1958）というように微隆起線文の土器とともに、たのもと遺跡のIV期第3群1b類と考えられる土器の記述がみられるが、現物は確認できなかった。
- 6) 発掘調査により縄文後期前半の土器が出土した周辺の遺跡としては、同じ荒城川沿いの西川遺跡（谷口1997）や荒城神社遺跡（本永1993）、古川町の中野山越遺跡（戸田1993）、高山市の中垣内遺跡（田中1991）などがあげられる。

第11表 石礫計測表

No	地點	層位	遺物番号	石 材	長さmm	幅 mm	厚さmm	重量g	分類	折損	標因番号	備 考
1	SB1		2317	下呂石	18.5	14	3.3	0.8	1E		13-48	
2	SB1		3045	下呂石	15.6	7.5	2.2	0.2	2C		13-49	鋸齒状
3	SB1		3139	下呂石	(16.2)	9	2.5	(0.4)	1C	b	13-50	鋸齒状
4	SB1		3334	下呂石	(15)	(4)	1.2	(0.2)	1C	f		鋸齒状
5	SB1		3483	黒暎石	(13.8)	(7)	1.5	(0.2)	1C	b	13-51	
6	SB1		10881	下呂石	(15)	9.5	2.5	(0.4)	1C	a	13-52	鋸齒状
7	SX8		2545	下呂石	(15.9)	(7.2)	1.5	(0.2)	2C	b	16-101	鋸齒状
8	SX11		2831	チャート	(13)	(7.6)	1.1	(0.2)	1C	b	16-102	
9	SX15		4302	下呂石	23.5	19.7	3	2	1E		17-118	
10	P3		4508	下呂石	22.9	8.6	1.7	0.4	2C		25-152	鋸齒状
11	F10	II	3742	下呂石	19.3	13.3	6.3	1.7	1D		49-585	
12	G8	II	-1	下呂石	(18.6)	(12.1)	2.5	(0.5)	1C	b		
13	I13	II	754	下呂石	(20.1)	11.9	4.8	(1)	2F	e	49-586	
14	I13	II	3307	下呂石	16.7	11.9	2.9	0.5	1B		49-583	
15	I16	III	3308	チャート	17.3	16.7	1.6	0.4	1C		49-584	
16	G9	III	5414	チャート	25.5	15	2.7	1.6	1E			鋸齒状
17	G10	III	6345	下呂石	21.3	12.3	4.5	1.1	1E			鋸齒状
18	G10	III	6702	下呂石	(22.2)	(9)	3.7	(0.6)	1C	g		鋸齒状
19	G10	III	8675	チャート	(13.1)	(14.1)	1.6	(0.6)	-	d		
20	G10	III	8809	下呂石	28.9	17.5	7.8	3.6	1E		41-486	
21	G10	III	9901	下呂石	19.1	13.8	2.8	0.5	1C		41-473	
22	G11	III	5325	チャート	21.8	17.8	4.1	1.7	1B		41-471	
23	H9	III	5988	チャート	(15.4)	(6.6)	1.5	(0.2)	1C	f		鋸齒状
24	H9	III	6416	下呂石	(12.9)	(10.5)	2.4	(0.4)	1C	c		鋸齒状
25	H10	III	969	下呂石	(14.4)	(5.5)	1.8	(0.2)	1C	e		鋸齒状
26	H10	III	2461	チャート	(9.2)	(4.6)	1.3	(0.1)	d			
27	H10	III	3239	チャート	(13.9)	(9.5)	1.9	(0.3)	1C	b		
28	H10	III	3410	下呂石	(26.6)	(7.4)	3.1	(0.6)	1C	e		鋸齒状
29	H10	III	4106	下呂石	(15.2)	(8.8)	3.4	(0.5)	1B	a		鋸齒状
30	H10	III	4739	下呂石	(18)	(10.6)	2.9	(0.6)	1C	a		
31	H10	III	6354	チャート	(16)	(6.7)	1.7	(0.3)	1C	e		
32	H10	III	8365	下呂石	20.5	14.7	4.1	1.2	1B		41-472	
33	H11	III	1859	チャート	(15.3)	(7.2)	1.7	(0.3)	-	c		
34	H11	III	2129	下呂石	(15.7)	(11.2)	1.4	(0.4)	d			
35	H11	III	2181	チャート	(22.1)	(10.9)	2.2	(0.5)	2C	b	41-481	鋸齒状
36	H11	III	2194	下呂石	(15.5)	12.5	1.6	(0.6)	1B	a		
37	H11	III	2476	チャート	16.2	8.2	1.4	0.2	1C		41-474	鋸齒状
38	H11	III	2616	下呂石	(16.5)	(15)	6	(1.2)	1B	b		被熱
39	H11	III	2713	下呂石	19.4	9.5	1.9	0.3	5C		41-485	鋸齒状
40	H11	III	2714	チャート	(13.3)	(6.1)	1.6	(0.3)	1C	e		
41	H11	III	2738	下呂石	18	9.8	2.2	0.4	1C		41-475	鋸齒状
42	H11	III	2912	チャート	(11.1)	(6.2)	3	(0.3)	d			
43	H11	III	2922	下呂石	(14.9)	(9.2)	2.5	(0.3)	1C	g		鋸齒状
44	H11	III	2965	チャート	(6.3)	(5.4)	1	(0.1)	-	d		
45	H11	III	3102	チャート	(13.6)	(7.7)	1.5	(0.2)	1C	b	41-476	鋸齒状
46	H11	III	3112	チャート	(1.5)	(5.3)	1.4	(0.2)	-	c		
47	H11	III	3188	チャート	(15.1)	(10.9)	2.7	(0.5)	1C	a		
48	H11	III	3235	下呂石	19.2	9.5	2.1	0.4	1C		41-477	鋸齒状
49	H11	III	3537	下呂石	(13.9)	10.9	2.9	(0.6)	1B	a		鋸齒状
50	H11	III	6265	下呂石	(15.7)	(13.5)	1.7	(0.5)	-	b		未製品
51	H11	III	10543	チャート	23.7	20.7	5.2	2.6	1E			未製品
52	H11	III	-2	下呂石	(17.5)	15.6	4.2	(1.4)	1B	a		

No	地点	層位	遺物番号	石材	長さmm	幅 mm	厚さmm	重量g	分類	折損	揮毎番号	備考
53	I 10	III	836	下呂石	(21.4)	10.9	2.7	(0.5)	1C	a		鋸歯状
54	I 10	III	927	チャート	(12.4)	(10.2)	1.9	(0.3)		d		鋸歯状
55	I 10	III	994	チャート	(16)	(7.2)	1.5	(0.1)	2C	g		鋸歯状
56	I 10	III	1191	チャート	(18)	(9.5)	2.5	(0.5)	1C	e		鋸歯状
57	I 11	III	256	チャート	(11.5)	9.1	2.1	(0.3)	1C	a		鋸歯状
58	I 11	III	287	下呂石	22.7	10.4	2.2	0.4	2C		41-482	鋸歯状
59	I 11	III	295	チャート	(18.9)	9.1	2.6	(0.4)	2C	a	41-483	鋸歯状
60	I 11	III	314	チャート	14.9	9.6	1.7	0.3	1C			鋸歯状
61	I 11	III	608	黒曜石	(13)	7.4	1.7	(0.2)	1C	a	41-478	
62	I 11	III	1588	黒曜石	(19.3)	(11.3)	1.9	(0.5)	1C	b	41-479	鋸歯状
63	I 11	III	2339	チャート	(17)	(9.7)	2.8	(0.5)	1C	b	41-480	
64	I 12	III	3145	チャート	(22.9)	(8.5)	1.7	(0.4)	2C	b	41-484	鋸歯状
65	I 12	III	3287	下呂石	(17.5)	(9.7)	2	(0.3)	1C	b		鋸歯状
66	I 12	III	3392	チャート	16.1	8.7	2.9	0.4	1B			
67	I 12	III	3555	チャート	(12)	10.1	3.1	(0.5)	1C	a		
68	I 12	III	-6	チャート	(13.3)	(11.7)	4.8	(0.8)	-	d		
69	K 22	II	1	下呂石	(18.5)	17.2	3.8	(1.5)	1D	a		以下東区
70	K 22	III	1817	下呂石	25.9	14.9	5.1	1.3	1F			
71	K 24	II	6993	下呂石	(15.1)	(11.3)	2.1	(0.3)	1C	b		
72	L 20	IV	7584	チャート	21.7	15.8	2.9	0.7	1A			
73	L 22	I	6752	チャート	26.7	15.5	5.2	1.5	1B		66-765	
74	L 22	II	7073	チャート	(23.9)	15	2.4	(0.8)	1C	b	66-769	
75	L 22	II	7459	下呂石	27.4	19.2	4.2	1.2	5C		66-770	
76	L 22	II	7460	下呂石	(18.4)	13.5	14.5	(1.4)	4F	c	66-772	
77	L 22	II	8545	下呂石	(25.4)	11.1	13.4	(1)	2B	a	66-767	
78	L 23	II	8751	チャート	(16.8)	16.9	5	(1.7)	1B	a		
79	L 23	III	8149	下呂石	(19.4)	14	2.9	(1)	1C	a		
80	M 21	III S	9496	黒曜石	21.1	14.7	14.6	1.1	1F		66-771	
81	M 22	II	9367	下呂石	28	15.7	3.5	1.1	1C		66-768	
82	M 22	II	9370	チャート	24.9	12.7	13	1	1B			
83	M 23	II	9147	黒曜石	25.2	13	3.9	1.1	1B			
84	P 23	I	7581	チャート	(19.5)	14.8	2.9	(0.8)	1B	a	66-766	
85	P 23	II	-1	下呂石	(19.4)	11.8	3.8	(1.1)	2D	a		
86	表採	-1	下呂石	(16.8)	(19.4)	5.6	(1.6)	d			出土区不明	

第12表 石錐計測表

No	地点	層位	遺物番号	石材	長さmm	幅 mm	厚さmm	重量g	分類	折損	揮毎番号	備考
1	SB1		2464	チャート	(11)	0.9	1.7	(0.2)	3B	基部		
2	SB1		3332	チャート	(15.4)	(10.2)	3.7	(0.7)	4B	尖端	13-53	
3	SB1		3385	チャート	(14.4)	(9.4)	2.4	(0.4)	3B	基部	13-54	
4	SX15		4582	玉髓	38.2	17.7	4.9	3	5		17-119	
5	H 11	III	1532	チャート	27.4	11.3	2.4	0.9	4A		41-491	
6	H 11	III	2357	チャート	22.5	19.8	7	2.6	4A			
7	H 11	III	2834	チャート	(15)	13.7	3	(0.9)	3A	尖端	41-489	
8	H 11	III	3707	チャート	18.8	8.9	4.3	0.9	3B		41-490	
9	H 11	III	-3	チャート	19.9	19.4	4	2	3A			
10	H 11	III	-7	チャート	(30.3)	17.7	8.3	(5.2)	4A	尖端		
11	I 11	III	449	チャート	(20.8)	15.4	5.1	(1.9)	2A	尖端	41-487	
12	I 11	III	6408	玉髓	28	25.1	5.7	2.1	2B		41-488	
13	I 12	III	2346	チャート	13.6	5.4	1.5	0.2	4B			
14	I 12	III	2349	チャート	17.2	9	1.6	0.4	4A		41-492	
15	I 12	III	1	下呂石	28.8	17.4	6.6	2.3	4B			

No.	地點	層位	遺物番号	石 材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	分類	折損	捕獲番号	備 考
16	K22	II	7679	下呂石	62.5	19.9	10.1	12.4	1B		66-773	以下東区
17	L21	II	-1	下呂石	36.4	16.4	5.6	3.2	4A			
18	L22	III	-1	チャート	17.4	11	2.2	0.7	3A		66-775	
19	M22	III	9972	下呂石	(22.6)	(9.6)	4.7	(0.9)	1B	基部	66-774	
20	N22	II	-1	下呂石	(22.9)	7.6	4.3	(1)	1B	基部		
21	表採		-2	下呂石	(56.4)	22.1	16.3	(13.9)	5	尖端		西区
22	表採		3	チャート	29.7	14	3.9	1.6	2B			出土区不明

第13表 刨器計測表

No.	地點	層位	遺物番号	石 材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	分類	捕獲番号	備 考
1	SB1		3330	チャート	43	29	9	14.8	1	13-55	
2	H11	II d	-1	チャート	31	50	6	15.3	1	49-587	
3	H11	III L	10679	チャート	39	55	7	22.3	3	41-493	
4	I10	III	980	チャート	31	28	7	7.9	3		
5	I11	III	2116	下呂石	30	(18)	5	2.9	2	41-495	Na 6と接合
6	I11	III	10528	下呂石	28	(12)	3	1.9	2	41-494	Na 5と接合
7	K22	III	9127	下呂石	71	36	14	31	1	66-776	以下東区
8	M21	II	10753	下呂石	35	58	12	21.1	1	66-777	
9	M21	III	9278	黒曜石	26	21	7	3.6	1	66-778	

第14表 ヘラ形石器計測表

No.	地點	層位	遺物番号	石 材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	分類	捕獲番号	備 考
1	P3		1	チャート	30	17	6	4.1	1	25-153	
2	H10	III	5647	チャート	32	13	10	3.9	2	41-496	
3	H11	III	5	下呂石	18	13	3	0.8	2		

第15表 両刃剣離痕のある石器計測表

No.	地點	層位	遺物番号	石 材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	分類	捕獲番号	備 考
1	SB1		3548	チャート	21	19	6	2.8	3	13-56	
2	SB1		4348	下呂石	17	10	6	1.3	1	13-57	
3	G10	III	6547	チャート	21	18	6	3.4	1	41-497	
4	G10	III	8890	下呂石	23	20	11	6.5	1		
5	G11	III	4997	チャート	18	19	4	2	3		
6	H10	III	3407	下呂石	24	20	7	3.3	1		
7	H10	III	3419	チャート	26	18	7	3.5	1		
8	H10	III	4405	下呂石	22	30	8	6.7	2	42-499	
9	H11	III	2715	下呂石	25	15	7	2.7	1		
10	H11	III	3028	下呂石	39	24	10	10	1		
11	H11	III	3514	チャート	23	26	6	3.5	3		
12	H11	III	4380	チャート	28	19	8	5	1	41-498	
13	H11	III	4575	玉髓	17	20	7	2.5	3	42-500	
14	H11	III	4576	下呂石	22	27	9	5.8	2		
15	H11	III	10675	下呂石	27	24	5	3.5	3		
16	H11	III	-4	下呂石	18	25	6	1.7	1		
17	I12	III	2	下呂石	22	15	8	3.3	1		
18	I12	III	3	下呂石	22	17	8	8.1	1		
19	I12	III	-4	下呂石	18	14	4	3.8	1		
20	M21	II	7870	下呂石	27	28	19	6.4	2	66-779	以下東区
21	M22	II	9971	下呂石	37	29	18	7.7	1		
22	M22	II	10172	下呂石	22	17	5	2.3	1		

第16表 捜入石器計測表

No	地点	層位	遺物番号	石材	長さmm	幅 mm	厚さmm	重量g	捲図番号	備考
1	H11	III	1533	チャート	22	27	3	2.9	42-501	
2	H11	III	3095	チャート	18	22	6	5.7	42-502	
3	I 12	III	1631	下呂石	32	15	9	8.7	42-503	

第17表 二次加工のある剝片計測表

No	地点	層位	遺物番号	石材	長さmm	幅 mm	厚さmm	重量g	捲図番号	備考
1	SB1		2998	チャート	(21)	(14)	6	(2.4)	13-58	欠損
2	SB1		3781	チャート	36	33	11	12.2	13-60	
3	SB1		10886	チャート	25	18	4	2.5	13-59	
4	SK10		-1	下呂石	26	24	11	8.5	25-143	
5	P9		1	下呂石	49	39	8	13.5	25-160	
6	F8	II	30	黒曜石	11	16	3	0.5		
7	I 12	II	1046	チャート	49	37	17	36.5	49-588	
8	I 13	II	157	黒曜石	14	15	2	0.4		
9	I 13	II	1364	下呂石	21	29	8	4.7		
10	G10	III	8805	チャート	37	26	8	8.2	42-508	
11	G10	III	9329	チャート	24	9	8	2.2	42-504	
12	G10	III	9900	下呂石	40	28	7	7.5		
13	H10	III	1897	チャート	(28)	(13)	5	(1.9)		欠損
14	H10	III	6000	黒曜石	22	14	5	5.2	42-505	
15	H10	III	6117	チャート	55	34	11	18.6		
16	H10	III	-1	チャート	(18)	(11)	6	(1.9)		欠損
17	H10	IV	5231	チャート	25	21	9	5	28-190	
18	H11	III	2818	チャート	(13)	16	2	(0.7)		欠損
19	H11	III	3765	チャート	24	15	6	2.1		
20	I 11	III	316	チャート	26	24	4	2.5		
21	I 11	III	1712	下呂石	(19)	17	2	(0.9)	42-507	欠損
22	I 11	III	4052	チャート	19	12	3	3.5	42-506	
23	I 12	III	4345	チャート	(19)	(16)	8	(2.7)		欠損
24	L22	II	-2	黒曜石	24	11	5	1.3		以下東区
25	M22	II	10458	チャート	17	13	3	1.1		
26	M22	II	-1	黒曜石	21	18	8	3.1	66-780	
27	M23	II	10917	下呂石	26	24	6	4.1		
28	P23	II	-2	下呂石	28	18	5	2.7		
29	P24	II	660	黒曜石	(15)	(15)	4	(0.9)		欠損
30	表採		4	黒曜石	18	9	2	0.5		出土区不明

第18表 使用痕のある剝片計測表

No	地点	層位	遺物番号	石材	長さmm	幅 mm	厚さmm	重量g	捲図番号	備考
1	SB1		470	下呂石	31	22	9	4.6	13-61	
2	SB1		2390	チャート	33	12	4	2.1		
3	SB1		2639	チャート	23	17	7	3.3		
4	SB1		2640	チャート	28	17	4	1.9	13-62	
5	SB1		2687	チャート	26	12	2	1.2		
6	SX11		2807	チャート	33	17	5	2.9		
7	SX11		2808	チャート	23	21	5	2.9		
8	SX11		2832	チャート	46	32	8	12.5	16-103	
9	SX15		4468	玉髓	23	13	5	1.4		
10	SX21		-1	チャート	24	20	4	2.4	23-130	
11	SX23		10688	チャート	25	13	4	1.1	23-136	
12	P3		4516	下呂石	30	14	4	1.6	25-155	
13	P3		4517	チャート	41	17	7	5.5		
14	P3		4519	チャート	26	20	6	4	25-154	
15	P9		-2	下呂石	46	32	10	11.9		
16	P28		-1	チャート	50	19	9	3.1		

No	地點	層位	遺物番号	石 材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	押岡番号	備 考
17	P'54		10430	チャート	28	15	6	2.7	26-166	
18	G10	II	6018	下呂石	40	15	7	5.5		
19	I 8	II	1833	下呂石	54	46	8	14.3	49-589	
20	I 15	II	1	玉髓	29	17	6	3.4		
21	I 16	II	937	チャート	7	8	4	1		
22	G 9	IV	5931	チャート	34	44	10	15.3		
23	G 10	III	8849	チャート	32	20	4	3.8	42-509	
24	H 9	III	3950	チャート	33	33	7	6.1		
25	H 10	III	968	下呂石	24	16	8	3.1		
26	H 10	III	2409	チャート	41	20	5	4.4		
27	H 10	III	4101	チャート	43	21	8	7.9		
28	H 10	III	4816	チャート	27	30	6	6.8		
29	H 10	IV	5643	チャート	23	17	6	3.2	28-191	
30	H 11	III	1998	チャート	50	24	10	10.1	42-510	
31	H 11	III	2212	チャート	24	17	5	2.7		
32	H 11	III	2363	玉髓	29	16	3	1.3		
33	H 11	III	3883	下呂石	26	14	7	2.3		
34	H 11	III	4780	チャート	36	27	8	6.3		
35	H 11	III	4908	玉髓	27	37	13	9.9	42-511	
36	H 11	IV	5643	チャート	23	17	6	3.2		
37	H 11	IV	10887	チャート	48	46	11	21.1	28-192	
38	H 12	III	2720	下呂石	37	27	16	7.7		
39	I 10	III	523	チャート	36	19	5	3.3		
40	I 10	III	1000	チャート	41	34	11	14.9		
41	I 10	IV	-2	チャート	33	23	7	5.5		
42	I 11	III	2300	玉髓	34	20	10	4.9		
43	I 11	III	2308	下呂石	33	23	6	3.4		
44	I 11	III	4135	下呂石	29	21	8	4.7		
45	I 11	III	4154	下呂石	24	13	6	2		
46	I 11	III	4315	下呂石	21	8	3	0.4		
47	I 12	III	1222	チャート	63	41	14	37.2		
48	L 21	III	-2	黒曜石	21	12	5	1.5		以下東区
49	L 23	III	8570	玉髓	17	23	3	1.7	66-782	
50	M 21	II	1	下呂石	22	38	4	3.7		
51	M 22	I	-2	黒曜石	15	20	4	1.4		
52	M 23	III	9591	下呂石	23	15	3	1.1		
53	M 23	III	9697	黒曜石	24	26	8	5.2	66-781	
54	P'23	II	7756	黒曜石	15	22	5	1.7		

第19表 石縫計測表

No	地點	層位	遺物番号	石 材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	押岡番号	備 考
1	G 10	II	5844	下呂石	95	54	22	121.3	49-590	
2	G 10	III	6184	チャート	24	20	15	7	42-513	
3	H 11	III	2136	チャート	32	26	9	7		
4	H 12	III	1525	下呂石	29	39	11	11.3		
5	I 9	III	9556	下呂石	35	46	24	34.8	42-512	
6	L 22	III	8396	下呂石	61	62	28	124.2	66-783	東区
7	P'24	III	9139	黒曜石	29	23	10	6.4		東区

第20表 石縫計測表

No	地點	層位	遺物番号	石 材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	押岡番号	備 考
1	F 10	III	10132	凝灰岩	72	42	24	97.3	42-514	
2	G 11	III	6256	凝灰岩	59	45	22	68.7	42-516	
3	H 11	III	4975	凝灰岩	70	41	24	87.6	42-515	

第21表 接合制片(SX15)計測表

No	地點	層位	遺物番号	石 材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	持因番号	備 考
1	SX15		4583	玉髓	27	16	12	4.4	17-120	
2	I 11	III	4043	玉髓	34	31	13	10.9	17-121	
3	I 11	III	-7	玉髓	25	13	9	1.8	17-122	

第22表 打製石斧計測表

No	地點	層位	遺物番号	石 材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	分類	折損	持因番号	備 考
1	SB1		2323	凝灰岩	97	41	16	88.1	1		13-64	
2	SB1		3143	凝灰岩	95	44	18	115.1	1		13-66	
3	SB1		3452	凝灰岩	(52)	(34)	(9)	(21)	-	e		
4	SB1		5853	綠色片岩	97	47	20	106.2	3		13-65	
5	SX7		4451	凝灰岩	95	54	11	79.7	3		13-97	
6	SX17		4763	凝灰岩	(69)	56	16	(89.5)	3	b	19-123	
7	SK5		9395	凝灰岩	197	68	39	612	1		59-607 東区	
8	SK10		9754	綠色片岩	(90)	43	18	(71.5)	1	a		
9	P56	-1		綠色片岩	104	40	16	88.8	2		26-168	
10	P56	-2		綠色片岩	(107)	50	20	(146.3)	2	b	26-169	
11	F9	II	2778	凝灰岩	(106)	(66)	28	(235.6)	3	a		
12	F10	II	5533	凝灰岩	(92)	47	17	(120)	1	a		
13	F10	II	-1	綠色片岩	(40)	(57)	(16)	(54.4)	-	b		
14	G9	II	1692	凝灰岩	(106)	69	29	(290.5)	3	b		
15	G9	II	3865	凝灰岩	(111)	54	25	(205.1)	1	b		
16	G9	II	4869	凝灰岩	(79)	48	11	(70.7)	1	a		
17	G10	II	3465	凝灰岩	(100)	62	26	(177.8)	3	a		
18	G10	II	4593	綠色片岩	(40)	48	12	(27.7)		b		
19	G10	II	5846	凝灰岩	114	53	22	158.9	1		49-592	
20	G10	II	-1	凝灰岩	(53)	48	22	(74.6)	1	b		
21	G11	II	2	凝灰岩	(80)	(40)	23	(81.1)	1	d		
22	H7	II	10658	凝灰岩	(63)	58	22	(102.9)	1	a		
23	H7	II	10660	凝灰岩	(135)	63	26	(239.1)	3	a		
24	H7	II	10670	凝灰岩	(42)	(49)	11	(36.6)	-	b		
25	H12	I	18	凝灰岩	(46)	49	17	(54.4)	1	b		
26	I 10	II	25	綠色片岩	118	41	26	155.9	1			
27	I 11	II	42	凝灰岩	(67)	88	22	(173.2)	-	b		
28	I 11	II	-2	凝灰岩	(95)	55	11	(112.3)	3	b		
29	I 11	II	3	綠色片岩	(97)	43	14	(80.6)	1	c		
30	I 11	II	-4	凝灰岩	(84)	48	20	(98.2)	3	a		
31	I 12	II	19	凝灰岩	101	54	23	153.6	3		49-593	
32	I 12	II d	910	凝灰岩	106	47	17	113.7	1		49-591	
33	I 13	II	72	凝灰岩	(82)	(56)	19	133.7	1	d		
34	I 13	II	122	凝灰岩	(99)	(45)	26	(156.1)	3	a	50-594	No.35と接合
35	I 13	II	123	凝灰岩	(72)	52	25	(85.7)	3	b	50-595	No.34と接合
36	I 13	II	132	綠色片岩	118	59	27	245.5	3			
37	I 13	II	1115	凝灰岩	73	47	19	47	1			
38	I 13	II	1	凝灰岩	(54)	(42)	(14)	(29.9)	-	e		
39	I 13	II	-2	凝灰岩	(67)	(56)	20	(100.9)	1	a		
40	I 15	II	-2	凝灰岩	(128)	81	28	(380.9)	3	b		
41	I 15	II	-3	凝灰岩	(80)	68	17	(111.3)	3	b		
42	I 15	III	2223	凝灰岩	(62)	(46)	(26)	(89.2)	1	a		
43	I 15	III	4539	凝灰岩	(76)	(52)	(16)	(73.8)	3	a		
44	I 16	III	1644	凝灰岩	(54)	(55)	15	(55.5)	-	d		
45	I 16	III	1292	凝灰岩	(49)	(51)	(16)	(47.6)	-	b		

No	地點	層位	遺物番号	石 材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	分類	折損	挿図番号	備 考
46	J 16	III	-1	凝灰岩	(58)	(38)	(13)	(34.5)	-	e		
47	J 16	III	2	凝灰岩	(51)	43	19	(51.6)	1	a		
48	J 16	III	3642	凝灰岩	(96)	77	27	(219.4)	3	d		
49	J 16	III	4484	凝灰岩	(80)	64	18	(133.4)	1	b		
50	J 16	III	4546	凝灰岩	102	48	25	134.1	3			
51	J 16	III	-1	凝灰岩	(44)	(53)	17	(45.6)	-	e		
52	F 9	III	5029	凝灰岩	96	41	23	114.6	1		43-518	
53	F 9	III	5726	凝灰岩	114	54	25	199.9	1			
54	F 9	III	-1	凝灰岩	(90)	45	14	(81)	1	d		
55	F 9	III	-2	凝灰岩	(71)	80	29	(201.9)	3	b		
56	F 10	III	10695	緑色片岩	(69)	48	18	(87.3)	2	d		
57	G 9	III	3652	凝灰岩	(80)	59	12	(63.0)	3	d		
58	G 9	III	4422	凝灰岩	(97)	58	23	(155.5)	3	a	43-519	
59	G 9	III	5596	凝灰岩	107	43	25	152.5	1			
60	G 9	III	5246	凝灰岩	(95)	46	25	(158.4)	1	b		
61	G 9	III	5879	緑色片岩	109	51	18	105.5	3		43-520	
62	G 10	III	5797	凝灰岩	(56)	47	19	(53.2)	3	a		
63	G 10	III	6457	凝灰岩	(107)	(54)	15	(94.9)	3	b		
64	G 10	III	9191	凝灰岩	(85)	50	18	(112.6)	1	b		
65	G 10	III	9217	緑色片岩	(49)	(61)	(15)	(48.7)	-	e		
66	G 10	III	9256	凝灰岩	(70)	(48)	33	(106.8)	3	a		
67	G 10	III	10300	緑色片岩	(82)	50	12	(73.7)	1	d		
68	G 11	III	4918	緑色片岩	(96)	55	16	(91.7)	3	a		
69	G 11	III	5144	凝灰岩	(94)	41	17	(83.2)	1	a		
70	G 11	III	5162	緑色片岩	90	44	18	89.3	3			
71	G 11	III	5936	凝灰岩	83	51	21	115	1			
72	G 12	III	6269	凝灰岩	(72)	51	14	(68.4)	1	d		
73	H 7	III	2397	凝灰岩	(126)	66	24	(246.8)	1	b		
74	H 9	III	5835	凝灰岩	(64)	(36)	(14)	(32.7)	-	e		
75	H 10	III	342	泥岩	130	65	25	(232.1)	3	c		
76	H 10	III	2899	緑色片岩	(81)	(59)	15	(107.2)	1	d		
77	H 10	III	3077	緑色片岩	(62)	(38)	12	(38.3)	2	d		
78	H 10	III	3090	緑色片岩	157	63	18	241.1	3		43-521	
79	H 10	III	3397	凝灰岩	(116)	80	34	(368.8)	1	b		
80	H 10	III	5461	凝灰岩	117	43	13	86.5	3			
81	H 10	III	6244	凝灰岩	83	42	16	76	3			
82	H 10	III	-4	凝灰岩	(45)	(47)	(17)	(45)	-	e		
83	H 11	III	2478	凝灰岩	157	66	26	410.6	3		43-522	未製品
84	H 11	III	3005	凝灰岩	111	45	19	112.3	1			
85	H 11	III	3461	凝灰岩	(102)	59	21	(162.7)	3	b		未製品
86	H 11	III	3610	凝灰岩	127	45	21	145.6	1			
87	H 11	III	4352	凝灰岩	(71)	(47)	(22)	(95.2)	1	a		
88	H 11	III	4578	緑色片岩	(81)	51	(12)	(54.6)	1	a		
89	H 11	III	4696	緑色片岩	(85)	(46)	(11)	(60.9)	1	d		
90	H 11	III	5024	緑色片岩	107	40	17	90.2	3			
91	H 11	III	5397	凝灰岩	(52)	(52)	(15)	(46.3)	-	d		
92	H 11	III	6011	凝灰岩	(58)	(50)	(15)	(55.6)		a		
93	H 12	III	2259	凝灰岩	101	48	19	126.4	3			
94	H 12	III	2420	凝灰岩	(58)	(53)	(15)	(65.7)	1	a		
95	H 12	III	3144	緑色片岩	87	51	14	76.2	3			
96	H 12	III	3622	緑色片岩	108	47	15	99	3			
97	I 9	III	1683	凝灰岩	(87)	69	23	(198)	1	b		
98	I 9	III	6467	凝灰岩	(118)	54	(25)	(193.9)	1	c		

No.	地 点	層位	遺物番号	石 材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	分類	折損	掉落番号	備 考
99	I 9	III	9271	凝灰岩	(123)	77	(26)	(363.2)	1	b		
100	I 9	III	1	凝灰岩	(59)	(55)	(30)	(137.8)	-	d		
101	I 10	III	1450	緑色片岩	(74)	48	13	(57.5)	1	a		
102	I 11	III	315	凝灰岩	131	148	25	160.2	3		43 523	
103	I 11	III	4307	凝灰岩	(132)	68	(31)	(375.2)	1	b		
104	I 11	III	5804	緑色片岩	(73)	34	7	(24.3)	3	c		
105	I 12	III	3165	凝灰岩	(104)	52	14	(79.9)	1	a		
106	J 25	III	1474	緑色片岩	116	49	19	131.4	1			以下東区
107	K 22	II	585	凝灰岩	(90)	(59)	30	(214.2)	3	a		
108	K 22	II	2	凝灰岩	(99)	61	23	(150.2)	1	a		
109	K 22	III	6913	凝灰岩	118	59	18	(132.1)	1	c		
110	K 22	III	1947	緑色片岩	(88)	54	18	(131.7)	1	b		
111	K 22	III	6760	凝灰岩	(75)	82	24	(180.8)	1	b		
112	K 22	III	7040	緑色片岩	99	46	19	137.1	3			
113	K 22	III	7119	凝灰岩	(53)	61	21	(104.5)	1	b		
114	K 22	III	7221	凝灰岩	(133)	(73)	35	(406.1)	3	a		
115	K 23	II	6986	凝灰岩	(70)	44	14	(56.6)	1	b		
116	K 23	III	7365	凝灰岩	(106)	75	17	(167.6)	1	b		
117	K 24	II	6787	凝灰岩	137	45	30	220.4	1			
118	K 24	II	9603	凝灰岩	(41)	(49)	13	(32.7)	1	b		
119	K 24	III	7350	緑色片岩	(79)	65	15	(104)	1	d		
120	L 20	II	7455	凝灰岩	(91)	47	16	(90.5)	3	c	67-785	
121	L 20	II	7457	凝灰岩	(73)	(47)	16	(68.1)	3	d		
122	L 20	III	7509	凝灰岩	(70)	(47)	10	48.1	3	d		
123	L 20	III	7794	凝灰岩	(74)	(51)	14	(72.4)	3	d		
124	L 21	II	6892	凝灰岩	(78)	60	15	(111.9)	1	b		
125	L 21	II	6956	凝灰岩	(75)	47	18	(84.3)	1	b		
126	L 21	II	7137	凝灰岩	151	52	26	251.7	1		67-784	
127	L 21	II	7138	凝灰岩	(112)	53	21	(173)	1	a		
128	L 21	III	7066	凝灰岩	(104)	(65)	15	(108.3)	3	a		
129	L 21	III	7072	凝灰岩	(80)	(59)	20	(116.9)	3	a		
130	L 21	III	7203	凝灰岩	(47)	44	12	(35)	-	b		
131	L 21	III	7215	凝灰岩	(68)	48	24	(87.2)	3	b		
132	L 21	III	7216	凝灰岩	(24)	(51)	10	(17.5)	-	e		
133	L 21	III	7247	凝灰岩	(92)	(57)	22	(163.4)	1	a		
134	L 22	II	649	凝灰岩	(96)	(61)	21	(152)	1	a		
135	L 22	II	7204	緑色片岩	(45)	63	17	(67.2)	-	b		
136	L 22	II	7465	凝灰岩	(92)	(58)	23	(129.7)	1	a		
137	L 22	II	7467	凝灰岩	(65)	(52)	26	(118.6)	-	a		
138	L 22	II	7541	凝灰岩	(109)	45	20	(95.7)	1	a		
139	L 22	III	8028	砂岩	134	61	16	183	1			
140	L 22	III	8101	凝灰岩	(55)	(37)	9	(26.1)	1	d		
141	L 22	III	8102	緑色片岩	(94)	(51)	17	(102.8)	3	a		
142	L 22	III	8111	凝灰岩	(99)	60	29	(231.7)	1	b		
143	L 23	II	3	凝灰岩	(37)	(37)	6.1	(11.3)	1	b		
144	L 23	III	7233	凝灰岩	(86)	52	25	(144.4)	1	a		
145	L 23	III	8399	緑色片岩	(79)	(55)	11	(63.8)	-	d		
146	L 23	III	8916	凝灰岩	(82)	43	19	(61.5)	1	d		
147	L 23	III	10016	凝灰岩	(102)	(54)	23	(142.9)	3	d		
148	L 24	III	7161	凝灰岩	(76)	(56)	17	(85)	-	a		
149	L 24	III	8050	凝灰岩	102	42	19	101	1			
150	L 25	III	6748	凝灰岩	(93)	57	25	(147.7)	3	b		
151	L 25	III	6879	緑色片岩	(69)	56	11	(66)	1	d		

No	地 点	層位	遺物番号	石 材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	分類	折損	挿図番号	備 考
152	L 25	III	6880	凝灰岩	112	52	23	203.4	1			
153	M21	II	7913	凝灰岩	(86)	58	18	(118.6)	3	b		
154	M21	II	8746	凝灰岩	150	65	28	303.1	3			
155	M21	II	8759	緑色片岩	73	37	9	39.1	3			
156	M21	II	8903	凝灰岩	(77)	(48)	21	(88.3)	3	a		
157	M21	II	9273	凝灰岩	113	60	28	219.3	3		67-786	
158	M21	II	10723	緑色片岩	(98)	53	24	(153.7)	1	a		
159	M21	III	9470	凝灰岩	(111)	61	24	(220.7)	3	d		
160	M21	III	10035	凝灰岩	(61)	50	17	(67.9)	1	b		
161	M21	III	10037	凝灰岩	139	57	23	251.1	1			
162	M21	III S -2		緑色片岩	(67)	46	7	(39.7)	1	b		
163	M22	II	9705	緑色片岩	(78)	43	14	(66.5)	1	a		
164	M22	II	9958	緑色片岩	(69)	41	11	(42.6)	1	a		
165	M22	II	9961	凝灰岩	141	43	32	220.6	1			
166	M22	II	9705	緑色片岩	(78)	43	14	(66.5)	1	a		
167	M22	II	9958	緑色片岩	(69)	41	11	(42.6)	1	a		
168	M22	II	9961	凝灰岩	141	43	32	220.6	1			
169	M22	II	9963	緑色片岩	(99)	(42)	14	(68.8)	-	b		
170	M22	II	9975	凝灰岩	(65)	(51)	25	(71.6)	3	a		
171	M22	II	9976	凝灰岩	124	66	25	239.1	3		67-787	
172	M22	II	10095	凝灰岩	(102)	91	28	(328.9)	3	b		
173	M22	II	10163	凝灰岩	(97)	69	22	(193.8)	3	a		
174	M22	II	10191	凝灰岩	114	59	19	150	3			
175	M22	II	10255	凝灰岩	(89)	(53)	24	(154)	3	a		
176	M22	II	10335	凝灰岩	(55)	49	23	(73.6)	1	b		
177	M22	II	10338	凝灰岩	(74)	76	22	(166.8)	3	b		
178	M22	II	10356	凝灰岩	(68)	46	16	(69.8)	3	b		
179	M22	II	10371	凝灰岩	(102)	60	16	(110)	1	b		
180	M22	II	10491	緑色片岩	(61)	(45)	10	(29.6)	3	d		
181	M22	II	10505	凝灰岩	119	62	16	138.5	3			
182	M22	III S	9499	凝灰岩	91	48	19	95	1			
183	M23	I	9134	凝灰岩	100	48	16	103.7	3			
184	M23	II	8567	凝灰岩	(99)	54	20	(135.2)	3	b		
185	M23	II	9624	凝灰岩	96	46	21	103.9	1			
186	M23	II	-1	凝灰岩	118	53	25	188.9	3			
187	M23	III	9587	凝灰岩	112	48	18	143	1			
188	M23	III	9867	凝灰岩	109	50	12	86.3	3			
189	M23	III	10101	緑色片岩	89	45	47	(90.9)	1	c		
190	M23	III	10119	凝灰岩	97	54	10	64	1			
191	M23	III	10178	緑色片岩	(96)	56	21	(176.1)	1	a		
192	M23	III	10513	緑色片岩	(63)	(51)	10	(60.4)	1	b		
193	M23	III	10770	凝灰岩	(89)	(49)	15	(85.7)	1	a		
194	N22	II	9622	緑色片岩	(114)	60	19	(139.1)	3	c		
195	N22	II	9623	緑色片岩	84	49	17	80.4	1			
196	N22	II	10633	凝灰岩	(80)	(32)	21	(105.9)	3	a		
197	N22	II	10635	砂岩	(95)	50	17	(103.3)	3	c		
198	N22	II	10638	凝灰岩	(87)	49	26	(114.1)	3	b		
199	N23	II	7572	凝灰岩	(106)	49	26	(158.1)	1	a		
200	N23	II	7575	凝灰岩	118	56	20	131.4	3		66-788	
201	N23	II	7578	凝灰岩	(86)	66	17	(106.1)	3	b		
202	N23	II	7813	凝灰岩	92	45	16	83.4	3			
203	N23	II	7880	凝灰岩	(117)	(70)	22	(246.6)	1	a		
204	N23	II	8060	凝灰岩	(80)	70	21	(151.1)	3	b		

No	地 点	層位	遺物番号	石 材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	分類	折損	捕獲番号	備 考
205	N23	II	8129	流紋岩	124	68	18	184.3	3			
206	N23	II	8131	凝灰岩	(103)	48	24	(148.9)	1	a		
207	N23	II	8133	綠色片岩	(103)	54	24	(146.5)	3	a		
208	N23	II	8786	凝灰岩	117	47	23	158.8	3		67-789	
209	N23	II	10589	綠色片岩	89	48	10	71.8	1			
210	P23	II	9038-1	凝灰岩	(100)	(51)	25	(163)	3	a		
211	P23	II	9308-2	凝灰岩	(70)	57	12	(57)	3	b		
212	P23	II	9308-3	綠色片岩	85	47	14	59.9	1			
213	P23	II	9308-4	綠色片岩	(57)	(43)	18	(52.4)	3	a		
214	P23	II	9308-5	綠色片岩	(59)	(53)	12	(50.7)	1	d		
215	P23	II	9308-6	綠色片岩	(68)	(45)	11	(37)	-	d		
216	P23	III	8134	凝灰岩	(99)	52	27	(189.3)	1	a		
217	P23	III	8136	凝灰岩	(65)	52	22	(95.9)	1	b		
218	表探	-5		綠色片岩	(79)	(40)	9	40.1	-	e	以下出土区不明	
219	表探	-6		凝灰岩	(71)	(47)	14	(55.8)	3	a		
220	表探	-7		凝灰岩	(89)	54	23	(153.3)	1	a		
221	表探	-8		凝灰岩	102	74	21	144.3	3			
222	表探	-9		綠色片岩	(69)	55	21	(100.2)	1	b		
223	表探	-10		凝灰岩	(87)	(54)	25	(127.5)	3	a		
224	表探	-11		凝灰岩	(120)	63	20	(189.3)	1	a		
225	表探	-12		凝灰岩	(89)	(61)	21	(121.2)	-	d	未製品	
226	表探	-13		凝灰岩	(65)	(77)	25	(192)	-	d		

第23表 横刃形石器計測表

No	地 点	層位	遺物番号	石 材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	捕獲番号	備 考
1	SB1		2458	凝灰岩	104	78	42	351	13-63	
2	P54	-1		凝灰岩	(52)	(45)	8	(6.9)	26-167	
3	II9	III	4611	凝灰岩	49	90	9	44.4	43 524	
4	H10	III	-3	凝灰岩	48	76	9	37.6	44-525	
5	I12	III	1267	凝灰岩	56	68	9	45.3	44 526	

第24表 砂器計測表

No	地 点	層位	遺物番号	石 材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	捕獲番号	備 考
1	H11	III	2712	飛騨ヒスイ	81	93	55	573.5	44-528	
2	H12	III	2230	飛騨ヒスイ	57	46	33	113.4	44-527	

第25表 磨製石斧計測表

No	地 点	層位	遺物番号	石 材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	分類	折損	捕獲番号	備 考
1	SB1	P22	-1	蛇紋岩	(10)	(22)	(2)	(0.9)	-	e		刃部
2	SX17		4760	蛇紋岩	(113)	(47)	20	(190.8)	2A	a	19-125	
3	SX17		4761	蛇紋岩	52	29	10	28.7	2B		19-124	
4	SX17		4762	凝灰岩	(153)	59	37	(498.9)	2A	a	19-126	
5	G10	II c	3975	蛇紋岩	125	41	31	289.3	2A		50-597	刃こぼれ
6	I12	II d	903	凝灰岩	163	60	35	539.5	2A		50-596	刃こぼれ
7	G10	III	9110	蛇紋岩	(97)	51	20	(146.7)	2B	c	45 534	
8	I19	III	3958	蛇紋岩	(74)	56	26	(191.9)	2A	b	44-530	
9	I19	III	4654	凝灰岩	81	39	19	93.2	1			刃こぼれ
10	H11	III	1946	蛇紋岩	(54)	(29)	14	(43.4)	2B	a	44-531	
11	H11	III	2377	砂岩	(51)	(65)	(7)	(31.2)	-	e		
12	H11	III	3187	蛇紋岩	(11)	(13)	(1)	(0.3)	-	e		
13	H11	III	-6	蛇紋岩	(14)	(14)	(6)	(1.5)	-	e		刃部
14	I10	III	-2	斑れい岩	(37)	29	8	(18.8)	2B	b	45-533	

No	地點	層位	遺物番号	石 材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	分類	折損	挿図番号	備 考
15	I 11	III	317	蛇紋岩	46	29	9	20.5	2B		44-532	刃こぼれ
16	I 12	III	3814	砂岩	(114)	(68)	(31)	(282.5)	2A	d	44-529	被熱
17	K 22	III	6823	砂岩	(47)	(40)	(24)	(64.2)	2B	d	67-792	被熱 以下來区
18	K 24	III	7294	砂岩	(59)	50	(21)	(65.6)	2B	b	67-790	被熱
19	L 23	III	7517	砂岩	(58)	(43)	(17)	(57.9)	2B	a	67-791	被熱
20	M 21	II	8083	蛇紋岩	(63)	(31)	(13)	(39.3)	2B	a	68-793	
21	M 21	II	8753	蛇紋岩	34	20	6	7.7	2D		68-797	
22	M 22	I	9481	凝灰岩	(65)	(33)	24	(83.1)	3	a	68-798	
23	M 22	II	10087	蛇紋岩	53	32	10	22.9	2B		68-794	
24	M 22	II	10835	蛇紋岩	(54)	42	20	(75.4)	2B	b	68-795	
25	M 22	III	3	砂岩	(12)	(31)	(10)	(3.5)	-	e		刀部
26	N 22	I	10545	蛇紋岩	41	23	7	11.5	2B		68-796	
27	N 23	II	7754	蛇紋岩	(17)	(19)	(7)	(3.3)	-	e		刀部

第26表 磨石・凹石類計測表

No	地點	層位	遺物番号	石 材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	分類	円の数と形状等	挿図番号
1	SB1		475	凝灰岩	184	119	70	1820	2B	ザラつく磨痕	14-67
2	SB1		2637	凝灰岩	75	73	55	366	1B	ザラつく磨痕	14-68
3	SB1		3375	凝灰岩	78	62	40	221	2B	ザラつく磨痕	14-69
4	SB1		3446	凝灰岩	128	120	116	2260	2A	ザラつく磨痕	14-71
5	SB1		3447	凝灰岩	115	87	51	649	2B	1・1・0 ア	14-70
6	SB1		3448	凝灰岩	(116)	(67)	45	(437)	2D	2・0・0 イ	14-72
7	SB1		3679	凝灰岩	124	111	60	1087	2B	滑らかな磨痕	14-74
8	SB1		4327	凝灰岩	144	77	43	617	2B	4・3・3 アイ	14-73
9	SB1	P14	-1	凝灰岩	121	114	59	956	2B	ザラつく磨痕	
10	SB1	P14	-2	凝灰岩	120	(84)	61	(735)	2B	ザラつく磨痕	
11	SK10		9753	凝灰岩	113	74	56	567	2B	ザラつく磨痕	25-144
12	P5		4910	凝灰岩	161	113	56	984	2B	3・0・0 ア	25-156
13	SX21		10814	凝灰岩	89	73	37	253	2B	ザラつく磨痕	23-131
14	SX21		-2	凝灰岩	(71)	79	52	(364)	2B	ザラつく磨痕	23-132
15	F9	II	3212	凝灰岩	125	102	73	1200	2B	ザラつく磨痕	
16	F9	II	10802	凝灰岩	86	71	40	238	2B	2・2・0 アイ	
17	F10	II	4330	凝灰岩	99	69	32	286	2B	2・2・0 アイ	50-599
18	H6	II	10905	凝灰岩	115	70	47	419	2C	1・2・0 イウ	
19	H7	II	10659	凝灰岩	150	77	54	749	2B	4・3・1 アイ	50-598
20	H9	II	3862	凝灰岩	105	81	50	749	2B	ザラつく磨痕	
21	H10	II	-1	凝灰岩	110	59	41	316	2C	3・3・0 ア	
22	H10	II	5	花崗岩	142	122	74	2100	2B	滑らかな磨痕	
23	H10	II	-6	凝灰岩	111	71	59	519	2B	1・0・0 ア	
24	H11	I	66	凝灰岩	119	72	58	723	4	長軸一端に敲打痕	
25	H11	II	149	凝灰岩	125	81	59	701	2B	ザラつく磨痕	
26	I 8	II	228	凝灰岩	104	92	51	663	2B	2・2・0 ア	
27	I 8	II	1882	凝灰岩	93	77	22	179	2C	1・2・0 ア	
28	I 10	II	24	凝灰岩	105	54	43	304	4	0・2・0 ア	
29	I 10	II	68	凝灰岩	120	117	68	1250	1B	ザラつく磨痕	
30	I 12	II	-5	凝灰岩	88	81	55	496	1B	ザラつく磨痕	
31	I 13	II	269	凝灰岩	116	80	29	329	2C	ザラつく磨痕	
32	I 13	II	-3	凝灰岩	143	137	71	1800	1B	ザラつく磨痕	
33	J 16	II	-2	凝灰岩	85	(67)	45	290	2B	ザラつく磨痕	
34	F9	III	5614	凝灰岩	82	60	39	258	2B	1・1・0 イ	
35	F9	III	5826	凝灰岩	106	94	48	674	2B	0・2・0 ア	
36	F9	IV	6135	凝灰岩	(119)	78	71	(993)	4	ザラつく磨痕	28-193

No	地點	層位	遺物番号	石 材	長さmm	幅 mm	厚さmm	重量g	分類	凹の数と形状等	押送番号
37	F 10	III	10056	凝灰岩	98	77	52	454	2B	ザラつく磨痕	
38	F 10	III	10682	凝灰岩	(54)	(80)	40	(227)		1・1・0 アウ	
39	G 8	III	5964	凝灰岩	118	82	60	739	2B	ザラつく磨痕	
40	G 8	IV	3868	凝灰岩	116	100	59	856	2B	ザラつく磨痕	
41	G 9	III	4871	凝灰岩	(79)	46	45	(179)	2A	ザラつく磨痕	
42	G 9	III	4872	凝灰岩	59	56	37	162	2B	ザラつく磨痕	
43	G 9	III	5749	凝灰岩	90	88	52	515	1B	0・1・0 ウ	
44	G 9	III	5822	凝灰岩	66	59	48	218	2A	1・2・0 アイ	45-535
45	G 9	III	6101	凝灰岩	99	90	52	647	2B	ザラつく磨痕	
46	G 10	III	6391	凝灰岩	87	64	43	289	2B	ザラつく磨痕	
47	G 10	III	9202	凝灰岩	82	54	32	167	2B	1・1・0 イ	
48	G 10	III	9958	凝灰岩	134	100	100	828	2B	ザラつく磨痕	
49	G 10	III	10697	凝灰岩	122	96	39	654	2C	ザラつく磨痕	
50	G 11	III	5336	凝灰岩	105	75	50	506	2B	ザラつく磨痕	
51	H 7	III	2519	凝灰岩	80	57	49	284	2A	ザラつく磨痕	
52	H 9	III	3818	凝灰岩	119	102	68	972	2B	1・2・0 ア	
53	H 9	III	4098	凝灰岩	113	98	64	976	2B	3・2・0 アウ	
54	H 9	III	4163	凝灰岩	125	102	61	1031	2B	滑らかな磨痕	45-537
55	H 9	III	6461	凝灰岩	110	98	65	859	2B	ザラつく磨痕	
56	H 10	III	341	凝灰岩	144	53	33	316	2C	1・1・0 ア	
57	H 10	III	407	凝灰岩	107	69	40	356	2B	3・2・0 イ	45-538
58	H 10	III	521	凝灰岩	106	95	48	613	2B	ザラつく磨痕	
59	H 10	III	2855	凝灰岩	94	65	50	339	2B	2・2・0 イ	
60	H 10	III	2890	凝灰岩	175	163	88	3200	2C	ザラつく磨痕	
61	H 10	III	4194	凝灰岩	96	92	44	485	1B	ザラつく磨痕	
62	H 10	III	4808	凝灰岩	117	91	48	682	2B	ザラつく磨痕	
63	H 10	III	4892	凝灰岩	172	149	84	2900	2B	ザラつく磨痕	
64	H 10	III	6052	凝灰岩	125	94	67	983	2B	ザラつく磨痕	
65	H 11	III	3725	凝灰岩	90	83	58	539	1B	ザラつく磨痕	
66	H 11	III	3901	凝灰岩	97	(58)	50	(329)		ザラつく磨痕	
67	H 11	III	4029	凝灰岩	106	84	55	652	2B	ザラつく磨痕	
68	H 11	III	4030	凝灰岩	99	78	61	530	2B	ザラつく磨痕	
69	H 11	III	6062	凝灰岩	58	71	68	346	4	長軸端部に敲打痕	45-541
70	H 11	III	4642	凝灰岩	111	(88)	53	(580)	2B	ザラつく磨痕	
71	H 11	III	4782	凝灰岩	107	58	40	407	2B	ザラつく磨痕	
72	H 11	III L	6116	凝灰岩	84	78	40	339	1B	ザラつく磨痕	
73	H 11	III	10540	凝灰岩	119	81	49	563	2B	2・1・1 ア	45-536
74	H 11	III	10698	凝灰岩	149	82	58	903	4	長軸一端に敲打痕	45-542
75	H 12	III	10135	凝灰岩	130	93	54	813	2C	ザラつく磨痕	
76	I 9	III	-2	凝灰岩	67	57	29	130	2C	ザラつく磨痕	
77	I 10	III	842	凝灰岩	(62)	58	35	125	-	1・0・0 イ	45-539
78	I 11	III	4129	凝灰岩	65	72	68	524	4	No69と接合	45-540
79	I 11	III	3225	凝灰岩	97	93	59	695	2B	2・1・0 ア	
80	I 11	III	3810	凝灰岩	118	99	63	905	2B	ザラつく磨痕	
81	I 11	III	-5	花崗岩	(89)	(105)	56	(703)	2B	滑らかな磨痕	
82	I 12	III	1045	凝灰岩	(121)	(108)	71	(1069)	2B	ザラつく磨痕	
83	I 12	III	1630	凝灰岩	102	76	48	504	2B	1・1・0 ウ	
84	I 13	III	987	凝灰岩	165	113	72	1650	2B	ザラつく磨痕	
85	I 13	III	1291	花崗岩	(97)	(104)	69	(773)		滑らかな磨痕	
86	I 13	III	1323	凝灰岩	57	50	37	129	2B	ザラつく磨痕	
87	K 22	III	6815	凝灰岩	(88)	105	63	(679)	2B	ザラつく磨痕	
88	K 22	III	9061	凝灰岩	90	64	33	248	2B	1・1・0 ウ	
89	K 22	III	9301	凝灰岩	148	98	62	1154	2B	ザラつく磨痕	

No	地点	層位	遺物番号	石 材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	分類	円の数と形状等	押印番号
90	L20	II	575	凝灰岩	117	64	42	361	2B	ザラつく磨痕	
91	L20	II	576	凝灰岩	(71)	(86)	54	(456)	2B	No92と接合	68-802
92	L21	II	6961	凝灰岩	(74)	89	55	(516)	2B	1・1・0 ア	68 801
93	L21	II	9068	凝灰岩	112	105	52	787	1B	ザラつく磨痕	
94	L21	III	7238	凝灰岩	(108)	102	38	(598)	2C	1・1・0 ア	68-803
95	L22	III	7387	凝灰岩	55	49	29	81	2B	ザラつく磨痕	
96	L22	II	6975	凝灰岩	107	98	48	526	1B	1・1・0 イ	
97	L22	III	7787	凝灰岩	128	80	57	717	2C	ザラつく磨痕	
98	L22	III	8042	凝灰岩	(115)	75	55	(620)	2D	2・1・0 アイ	68-805
99	L22	III	8305	凝灰岩	90	75	47	436	2B	ザラつく磨痕	
100	L22	III	10495	凝灰岩	81	80	48	400	1B	ザラつく磨痕	
101	L22	III	10771	凝灰岩	(102)	(95)	36	(358)	1B	ザラつく磨痕	
102	L23	II	6928	凝灰岩	94	61	46	342	2B	0・2・0 ア	
103	L23	II	9382	凝灰岩	103	93	59	691	2B	ザラつく磨痕	
104	L23	III	7235	凝灰岩	(117)	78	58	(663)	2B	ザラつく磨痕	
105	L23	III	9702	凝灰岩	71	64	36	206	2B	ザラつく磨痕	
106	L24	II	6999	凝灰岩	75	67	33	203	2B	ザラつく磨痕	
107	L24	III	8082	凝灰岩	(130)	69	66	732	2A	ザラつく磨痕	
108	M21	II	596	凝灰岩	128	103	95	1600	2A	ザラつく磨痕	
109	M21	II	8743	凝灰岩	106	59	30	298	2B	1・2・0 イ	
110	M21	II	9056	凝灰岩	92	81	40	356	2B	ザラつく磨痕	
111	M22	II	6899	凝灰岩	88	68	35	229	2B	1・1・0 イ	68-799
112	M22	I	9703	凝灰岩	98	78	39	370	2B	2・3・0 イ	
113	M22	II	9825	凝灰岩	129	65	42	471	2B	ザラつく磨痕	
114	M22	II	9964	凝灰岩	(100)	73	50	(502)	2B	1・1・0 ア	
115	M22	II	9966	凝灰岩	94	70	40	335	2B	1・1・0 ア	
116	M22	II	9967	花崗岩	(67)	(82)	42	(354)	2B	No134と接合	
117	M22	II	10337	凝灰岩	72	64	50	255	2B	ザラつく磨痕	
118	M23	II	-2	凝灰岩	(79)	(37)	42	(145)	-	ザラつく磨痕	
119	M23	II	-3	凝灰岩	(54)	(43)	44	(115)	-	滑らかな磨痕	
120	M23	III	7483	凝灰岩	128	96	54	732	2B	2・2・0 ア	
121	M23	III	7557	凝灰岩	(102)	99	50	(669)	2B	2・3・0 アウ	
122	M23	III	9453	凝灰岩	107	86	45	390	2B	2・2・0 ア	
123	M23	III	9588	凝灰岩	132	73	36	391	2B	4・2・0 イ	68-800
124	M23	III	10001	凝灰岩	169	80	66	865	2A	全面敲打痕	
125	M23	III	10113	凝灰岩	(76)	(69)	59	(330)	-	ザラつく磨痕	
126	M24	II	657	凝灰岩	141	83	65	1068	2B	ザラつく磨痕	
127	M24	III	7127	凝灰岩	89	68	24	175	2C	ザラつく磨痕	
128	M24	III	7132	凝灰岩	125	87	43	626	2B	ザラつく磨痕	
129	M24	III	7214	凝灰岩	66	53	29	130	2B	ザラつく磨痕	
130	N22	II	10654	凝灰岩	127	115	59	1166	1B	ザラつく磨痕	
131	N22	II	10760	凝灰岩	(88)	52	36	(162)	2B	1・1・0 ア	
132	N22	II	10761	凝灰岩	133	92	60	946	2D	ザラつく磨痕	
133	N22	II	-2	凝灰岩	(123)	(74)	47	(485)	2B	1・2・0 ア	
134	N23	II	7763	花崗岩	(75)	(81)	40	(344)	2B	0・1・0 ア	
135	P23	II	7759	花崗岩	110	81	52	808	2D	滑らかな磨痕	68-804
136	P23	III	8137	凝灰岩	133	105	66	1131	2B	ザラつく磨痕	
137	表様		-14	凝灰岩	112	92	61	850	2B	ザラつく磨痕	

第27表 石皿計測表

No.	地 点	層位	遺物番号	石 材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	掲図番号	備 考
1	SB1		3658	凝灰岩	(15)	(23)	(12)	(3.35)	14-76	No.2と接合
2	SB1		10812	凝灰岩	(12)	(16)	(11)	(1.95)	14-75	No.1と接合
3	I II	III	4303	凝灰岩	28	19	9	7.35	46-544	
4	I II	III	-6	凝灰岩	36	35	9	16.25	46-543	

第28表 砂岩計測表

No.	地 点	層位	遺物番号	石 材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	掲図番号	備 考
1	H11	III	2337	砂岩	40	25	6	7.5	42-517	
2	K25	II	1423	砂岩	(46)	(43)	9	(21.8)	69-808	No.3と接合 東区
3	K25	II	1986	砂岩	(56)	49	12	(51)	69-809	No.2と接合 東区
4	M22	II	10189	砂岩	(60)	(31)	(16)	(31.2)	69-810	東区

第29表 石製品計測表

No.	地 点	層位	遺物番号	石 材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	掲図番号	備 考
1	H9	II	2395	緑色片岩	(90)	(29)	(23)	(115.7)	50-600	石剣
2	K22	III	6725	粘板岩	(97)	(26)	(19)	(79.1)	68-806	石剣 東区
3	M23	II	7962	蛇紋岩	41	24	9	14.6	68-807	玉 東区

第30表 石器組成表

種 別	遺 構	西区IV層	西区III層	西区 I・II層	東 区	地點不明	合 計
石 鋸	10	0	53	5	17	1	86
石 錐	4	0	11	0	5	2	22
削 器	1	0	4	1	3	0	9
ヘラ形石器	1	0	2	0	0	0	3
両極石器	2	0	17	0	3	0	22
抉入石器	0	0	3	0	0	0	3
二次加工剥片	5	1	13	4	6	1	30
使用痕剥片	17	5	21	4	7	0	54
石 核	0	0	4	1	2	0	7
石 銼	0	0	3	0	0	0	3
打製石斧	10	0	54	41	112	9	226
横刃形石器	2	0	3	0	0	0	5
櫛 穂	0	0	2	0	0	0	2
磨製石斧	4	0	10	2	11	0	27
磨石・四石類	14	2	51	19	50	1	137
石 盤	2	0	2	0	0	0	4
砥 石	0	0	1	0	3	0	4
合 計	72	8	254	77	219	14	644
下呂石剥片	40	2	397	32	121	1	593
チャート剥片	31	0	246	25	27	2	331
黒曜石剥片	3	0	36	2	41	0	82
その他の剥片	55	2	48	6	17	1	129
総合計	201	12	981	142	425	18	1779

## 主要参考文献

- 赤木 清 1936 「江名子ひじ山の石器時代遺跡 その四」『ひだびと』第4年—第7号
- 池谷信之 1990 「網取・堀之内型注口土器」『縄文時代』第1号
- 石井 寛 1993 「堀之内1式土器群に関する問題」『牛ヶ谷遺跡・華藏台南遺跡』
- 石井 寛 1995 「原出口遺跡20号住居址出土土器群をめぐって」『川和向原遺跡・原出口遺跡』
- 石川日出志 1985 「中部以西の縄文晚期浮線文土器」『信濃』第37巻第4号
- 泉 拓良 1981 「後期の土器 一近畿地方の土器一」『縄文文化の研究』4
- 泉 拓良 1989 「縁帶文土器様式」『縄文土器大観』第4巻
- 植田文雄 1996 「正楽寺遺跡」(能登川町埋蔵文化財調査報告書 第40集)
- 大江 命・下形 武 1958 「上宝村の先史時代」
- 大江 命 1965 「飛驒の考古学 I 一益田川流域の縄文文化ー」
- 加藤三千雄ほか 1986 「真脇遺跡」(能登町教育委員会)
- 金子直行 1997 「戸崎前遺跡」(埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第187集)
- 木下哲夫ほか 1985 「右近次郎遺跡II」(大野市文化財調査報告書 第3冊)
- 木下哲夫 1993 「氣屋式以降(1)」「先史考古学研究」第4号
- 工藤俊樹ほか 1987 「鳴鹿手島遺跡」(福井県埋蔵文化財調査報告書 第15集)
- 河野典夫ほか 1996 「杉原瑞穂遺跡発掘調査報告書」(宮川村教育委員会)
- 紅村 弘・増子康眞ほか 1978 「東海先史文化の諸段階 資料編II」
- 紅村 弘ほか 1974 「飛驒桜洞遺跡発掘調査報告書」(萩原町教育委員会)
- 上嶋善治ほか 1994 「阿弥陀堂遺跡・深作裏垣内遺跡」(岐阜県文化財保護センター調査報告書 第18集)
- 上嶋善治ほか 1997 「カクシクレ遺跡」(岐阜県文化財保護センター調査報告書 第32集)
- 鈴木徳雄 1992 「縄文後期注口土器の成立、形態変化と文様帶の問題ー」『縄文時代』第3号
- 鈴木徳雄 1993 「称名寺式の変化と中津式 一型式間交渉の一過程ー」『縄文時代』第4号
- 田中 彰ほか 1991 「垣内遺跡」(高山市埋蔵文化財調査報告書 第19号)
- 谷口和人ほか 1997 「西田遺跡」(岐阜県文化財保護センター調査報告書 第29集)
- 田村清一郎ほか 1997 「見藏岡遺跡 其の二」(竹野町文化財報告書 第11集)
- 丹野雅人 1985 「注口土器小考」(東京都埋蔵文化財センター 研究論集III)
- 千葉 豊・仁保晋作 1989 「名張市赤日町中戸遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告I』(三重県埋蔵文化財調査報告79)
- 千葉 豊 1989 「縁帶文土器の成立と展開」『史林』第72巻第6号
- 千葉 豊 1991 「病院構内の先史時代遺跡」(京都大学埋蔵文化財調査報告IV)
- 千葉 豊ほか 1990 「小森岡遺跡」(兵庫県城崎郡竹野町教育委員会)
- 戸田哲也 1993 「飛驒を中心とした縄文後期前半土器の様相」『先史考古学研究』第4号
- 戸田哲也ほか 1993 「中野山越遺跡発掘調査報告書」(古川町埋蔵文化財調査報告書 第3集)
- 長沢宏昌ほか 1996 「中谷遺跡」(山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 台116集)

- 長屋幸二ほか 1995『西乙原遺跡・勝更白山神社周辺遺跡』(岐阜県文化財保護センター調査報告書 第22集)
- 西田泰民 1989「堀之内・加曾利B式土器様式」「縄文土器大観」第4巻
- 森沼邦彦 1989「亀ヶ岡式土器様式」「縄文土器大観」第4巻
- 穂積裕昌 1992「縄文時代後期の壺形土器」「考古学と生活文化」(同志社大学考古学シリーズV)
- 増子康眞 1992「宮田式土器細別(試論)」「どっこいし」第40号
- 松田真一 1983「山添村広瀬遺跡発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報(第一分冊) 1981年度」
- 南 久和 1989「北陸晚期土器様式」「縄文土器大観」第4巻
- 本永義博・野村宗作ほか 1994「荒城神社遺跡」(岐阜県文化財保護センター調査報告書 第16集)
- 柳沢清一 1997「西日本における縄紋時代後期中葉編年の検討」「古代」第103号
- 山本正敏ほか 1990「安居五百歩遺跡1」(福野町教育委員会)
- 吉朝則富ほか 1988「寺東遺跡・西保木(対岸)遺跡」(高山市埋蔵文化財調査報告書 第13号)
- 吉田 稔 1995「修理山遺跡」(埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第158集)
- 米澤義光ほか 1996「字ノ気町気屋遺跡」(石川県河北郡字ノ気町教育委員会)
- 米澤義光ほか 1997「古野谷の石器時代III」(石川県石川郡古野谷村教育委員会)
- 領塙正浩ほか 1992「堀之内貝塚資料図譜」(市立市川考古博物館)

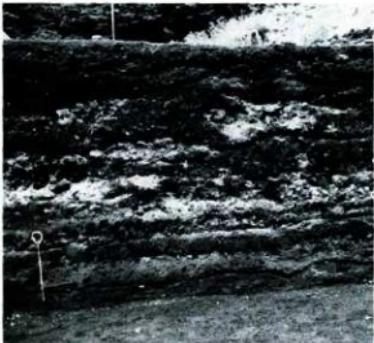
# 図 版



1



2



3



4

1. 通景 2. 遺跡全景 3. I列北壁セクション 4. 西区作業風景

图版2



5



6



7



8



9



10

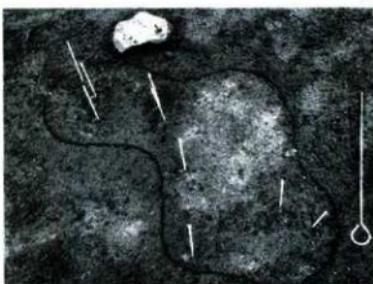
5. 西区全景    6. SB 1 (挖出前)    7. SB 1 石圈炉    8. SB 1  
9. 石铲出土状况 (SB 1)    10. 刮器出土状况 (SB 1)



11



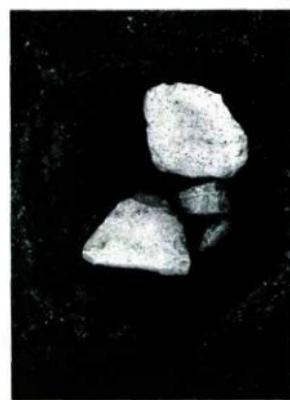
12



13



14



15

11. 土器出土状況(SB 1 炉内)  
12. 焼土址①(SX 1)  
13. 焼土址⑨(SX11)

14. SX17遺物出土状況  
15. P 3

図版 4



16



17



18



19

16. クルミ出土状況(SX21) 17. 水場遺構(SX21)

18. 木片出土状況(F 10区III層) 19. IV期第5群5頃土器出土状況(G 9区III層)



20



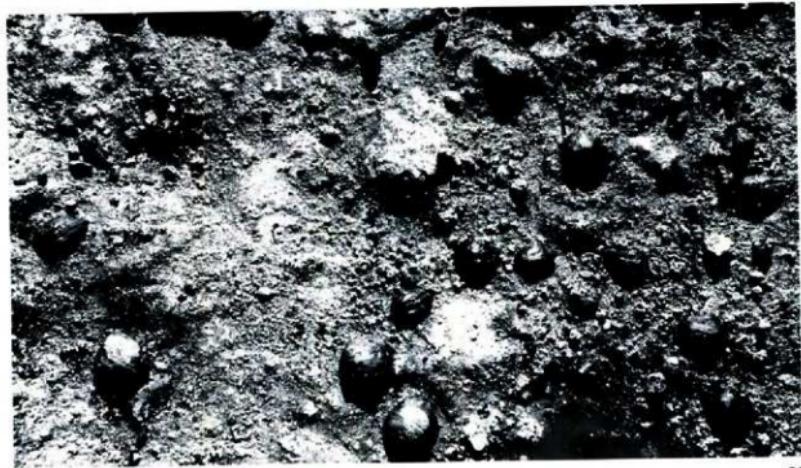
21



22



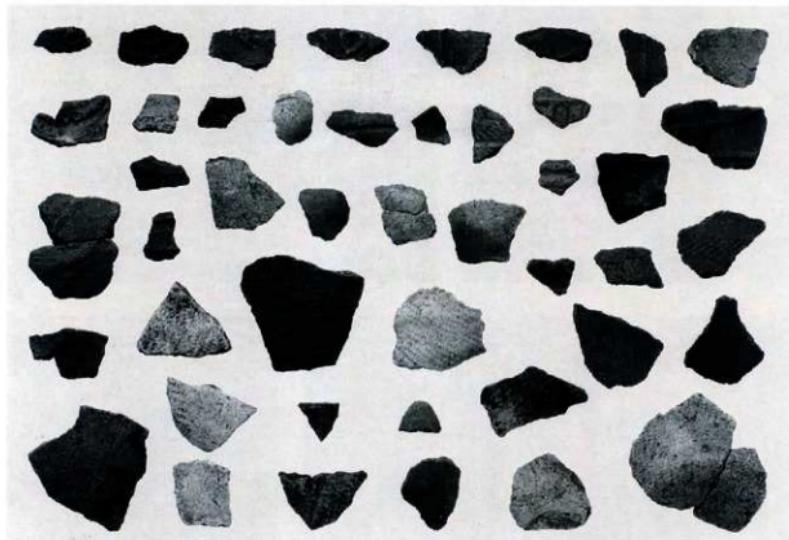
23



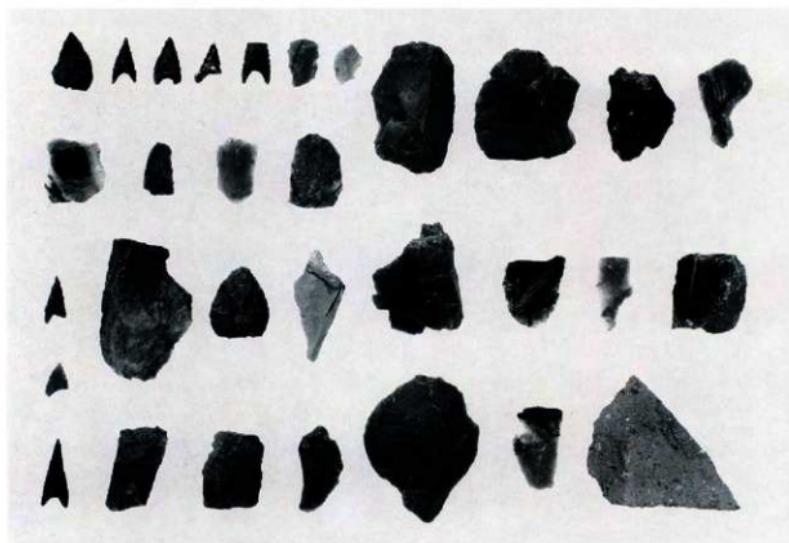
24

20. 東区全景 21. 東区作業風景 22. SX22  
23. 木杭(SX24) 24. クルミ出土状況(SX22)

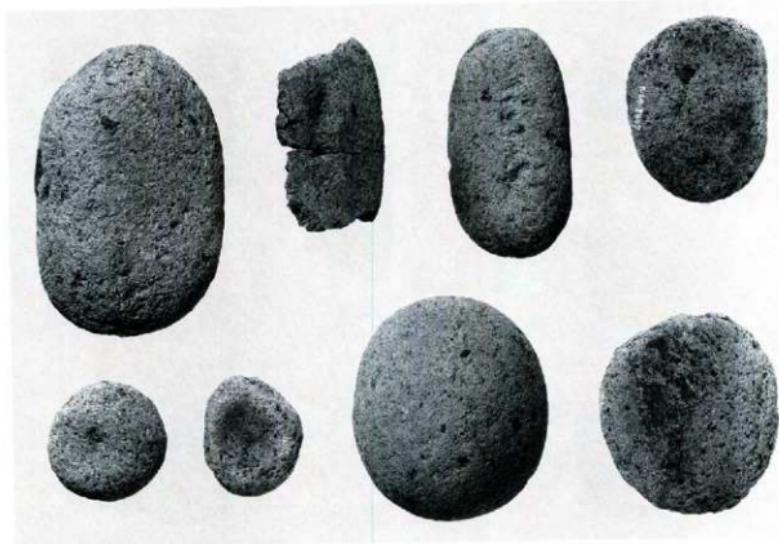
图版 6



25. SB 1 出土土器



26. SB 1 出土石器 1 · 西区遗物出土石器 1



27. SB 1 出土石器 2

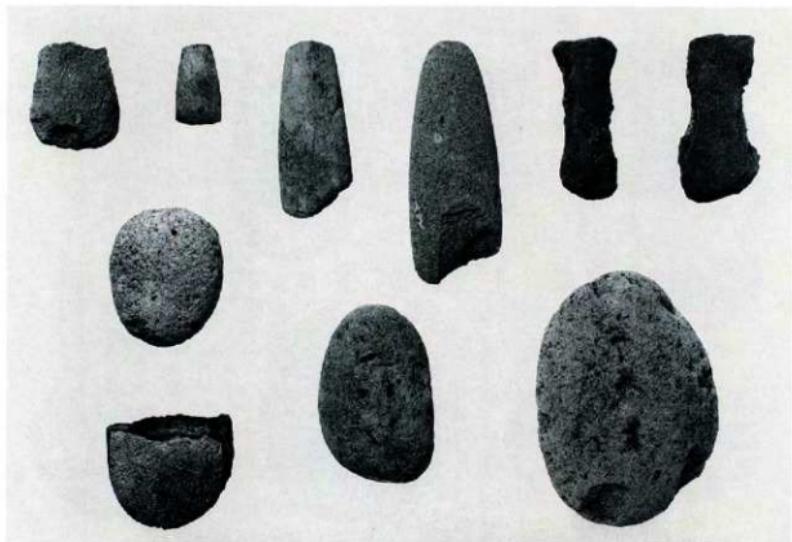


28. SB 1 出土石器 1

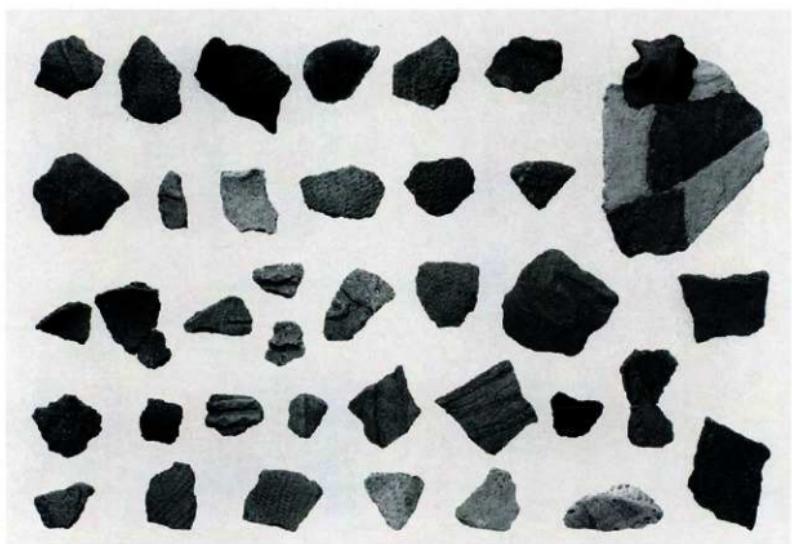


29. SB 1 出土石器 3・西区遺構出土石器 2

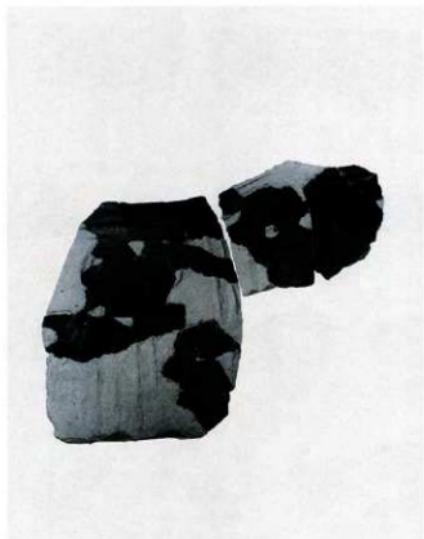
图版 8



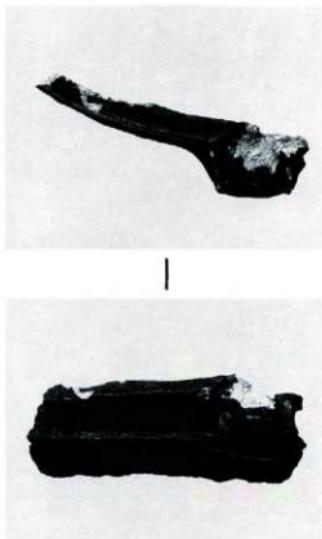
30. 西区遗物出土石器 3



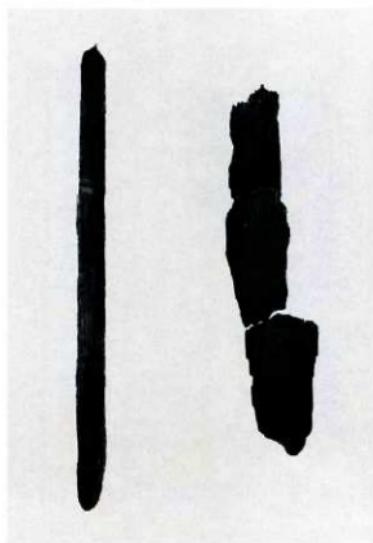
31. 西区遗物出土土器 1



32. SX21出土土器 1



33. SX21出土土器 2

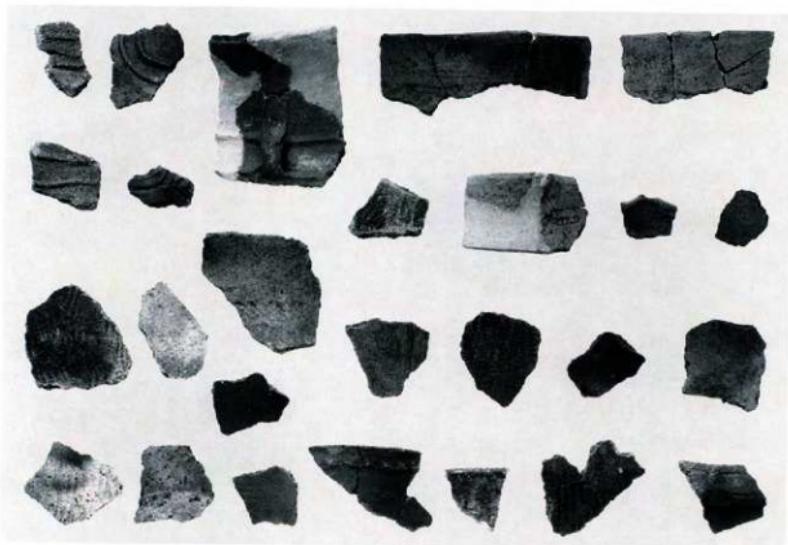


34. SX21出土木片



35. SX23出土土器

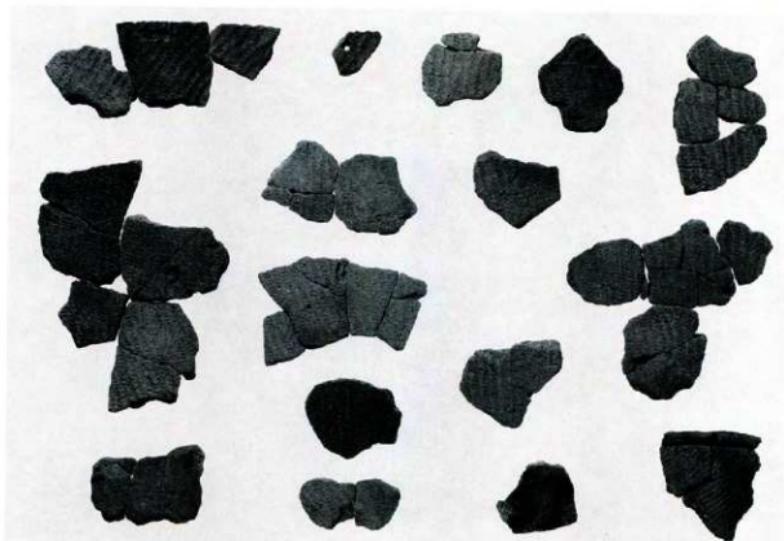
图版10



36. 西区遗物出土土器 2



37. SX 2 出土土器



38. 西区Ⅲ期の土器



39. 西区Ⅲ期の土器 (第29図-194)

40. 西区Ⅲ期の土器2 (196)



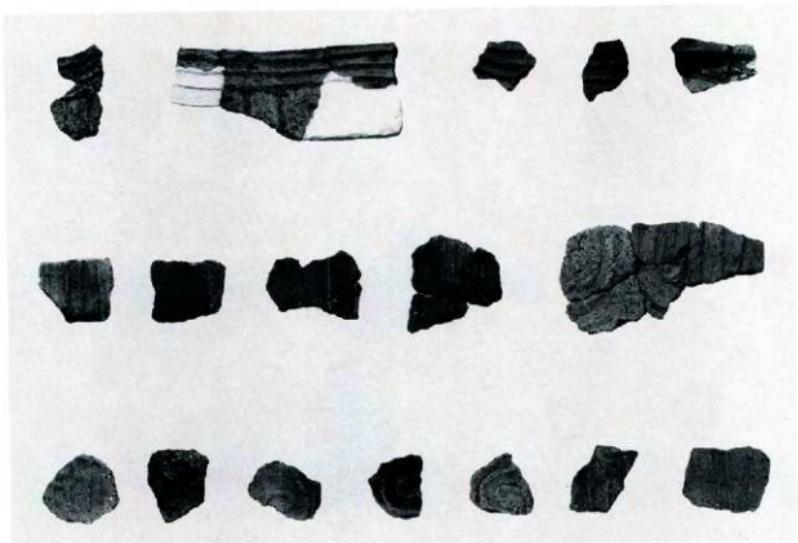
41. 西区IV期の土器 1 (第1群1a類197)



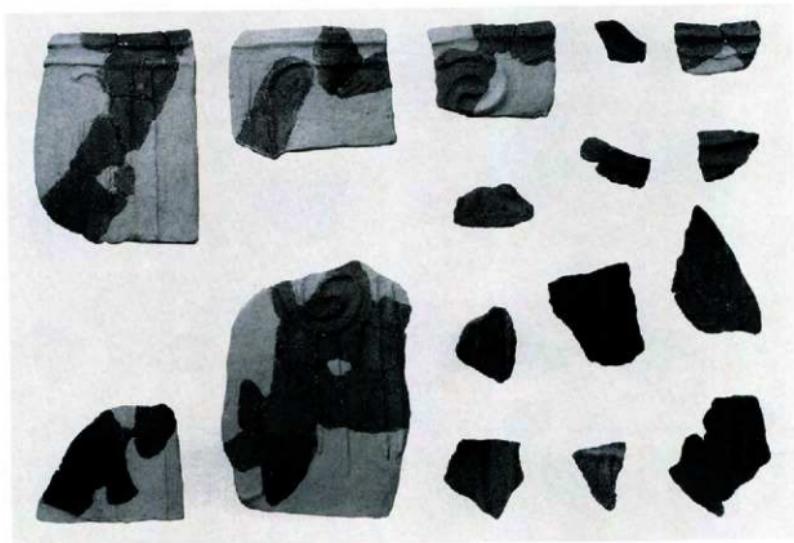
42. 同2 (同198)



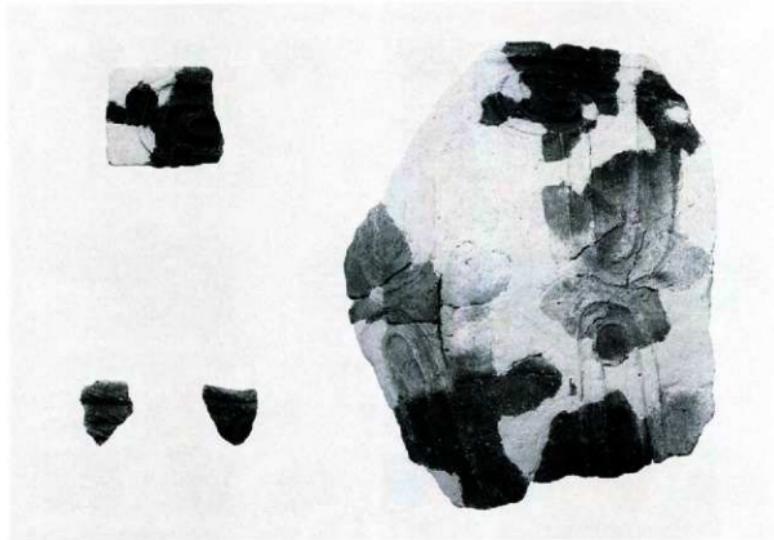
43. 同3 (同2類199)



44. 同4 (第1群1a類)



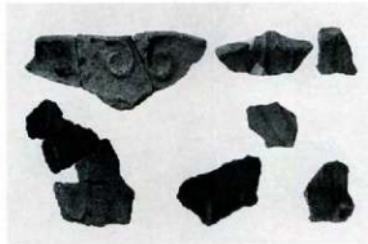
45. 同5 (第1群1b類)



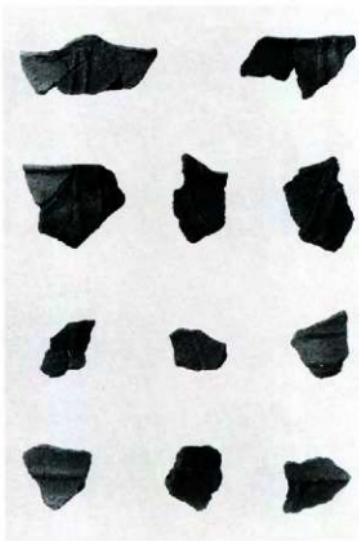
46. 同 6 (第 1 c 類)



47. 同 7 (同 2 類)



49. 同 9 (同 4 ～ 6 類)



48. 同 8 (同 3 類)



50. 開10 (開5類201)



51. 開11 (開202)

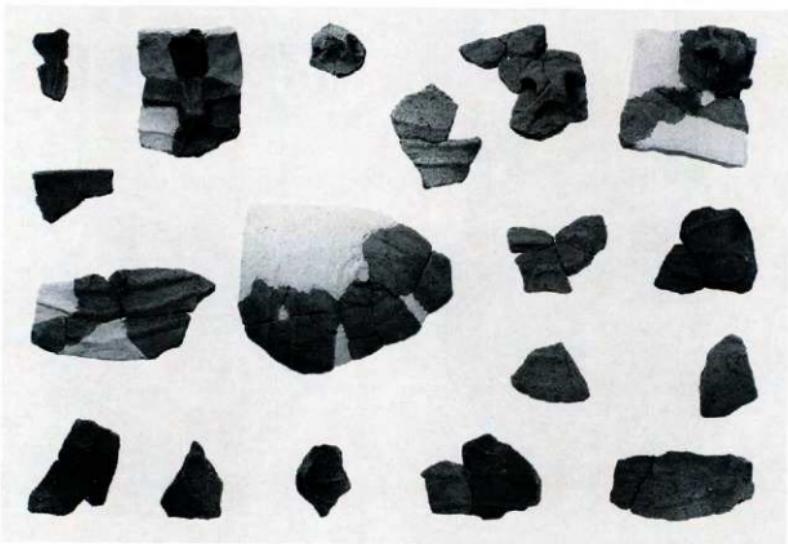


52. 開12 (第2群203)

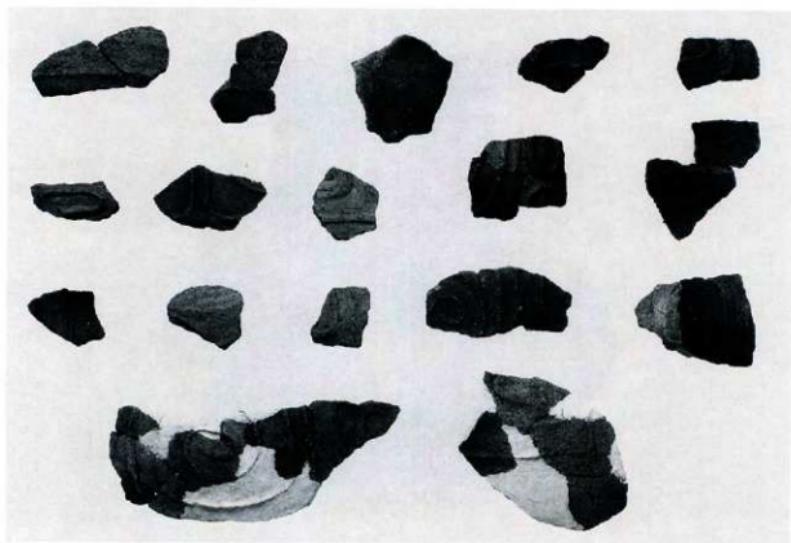


53. 開13 (開204)

図版16



54. 同14（第2群）



55. 同15（同）



56. 同16 (同205)



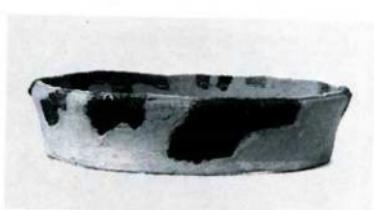
57. 同17 (第3群1a類206)



58. 同18 (同207)



59. 同19 (同208)



60. 同20 (同1b類209)



61. 同21 (同2類210)



62. 同22 (同6類211)

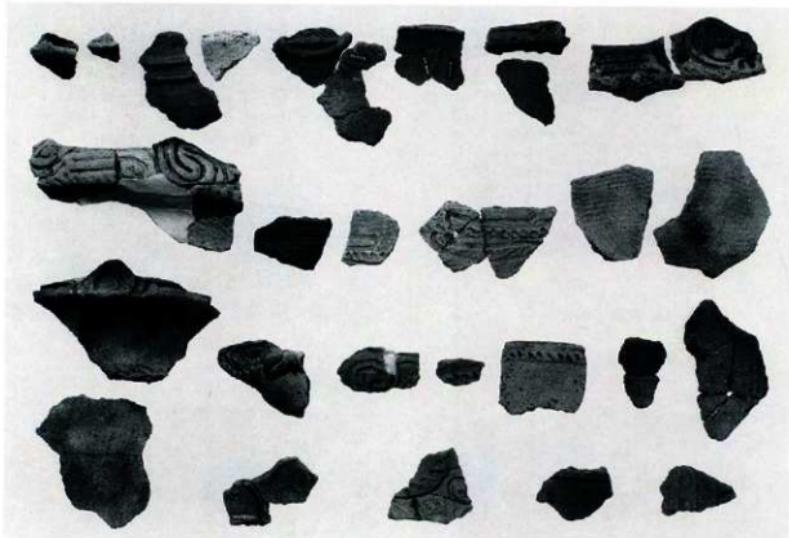


63. 同23 (第4群214)

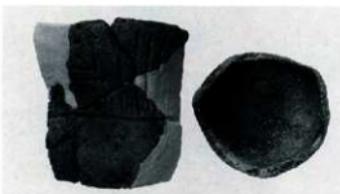


64. 同25 (第2群330)

图版18



65. 同26 (第3・4群)



66. 同27 (第5群4類215)



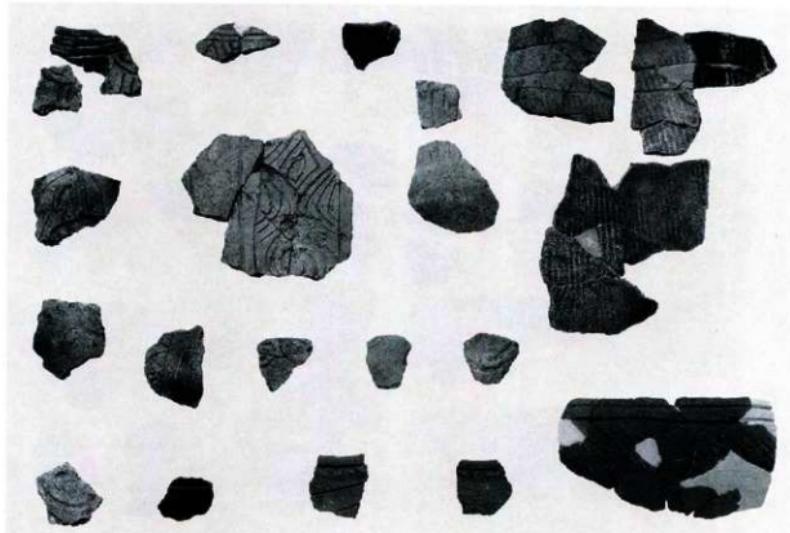
68. 同29 (第6群1類218)



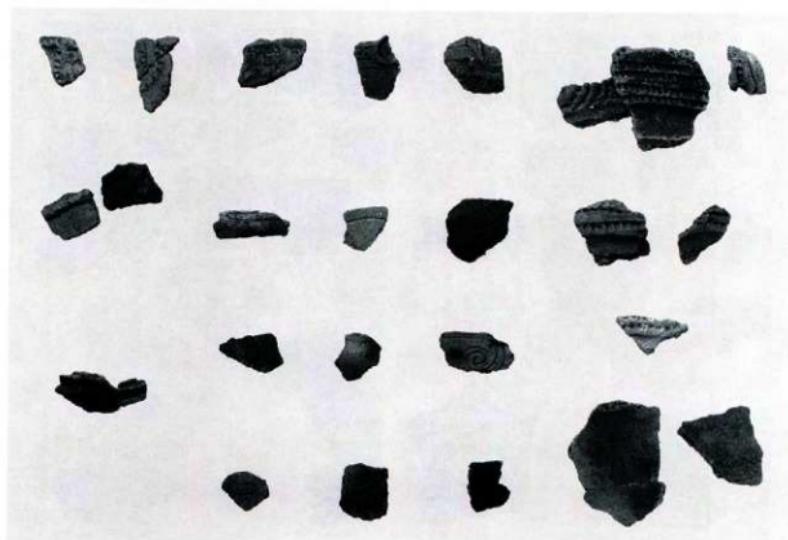
67. 同28 (同5類216)



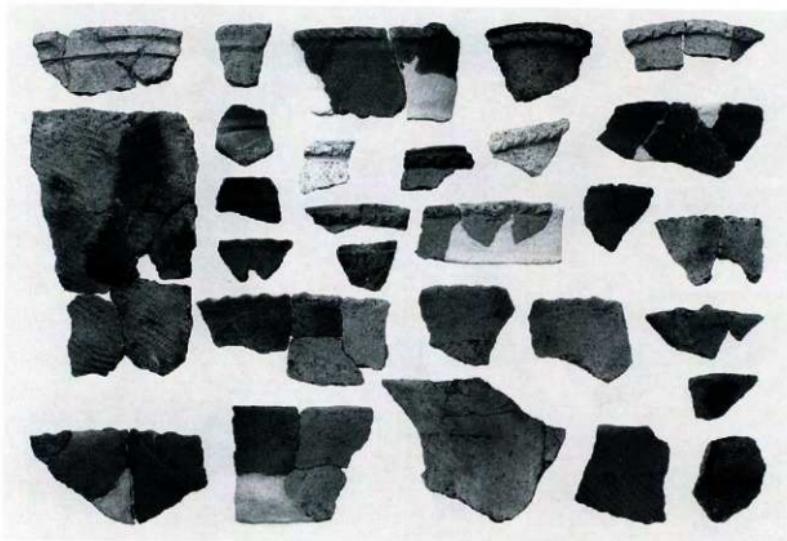
69. 同30 (同2a類219)



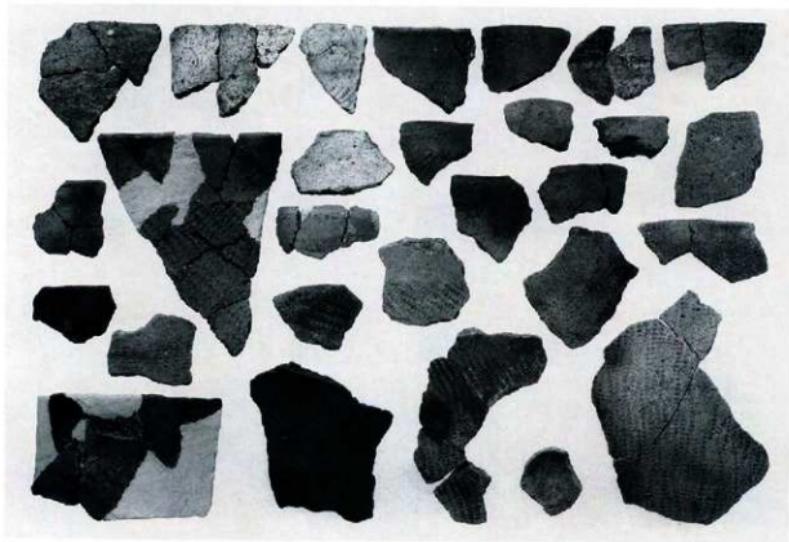
70. 図31(第5～6群)



71. 図32(第7群)



72. 同33（第8～9群）



73. 同34（第9群）



74. 同35 (第8群2 b類221)



75. 同36 (第9群1 a類222・同1 b類224)



76. 同37 (同1 b類226)



77. 同38 (同2 a類228)



78. 同39 (同1 a類223)

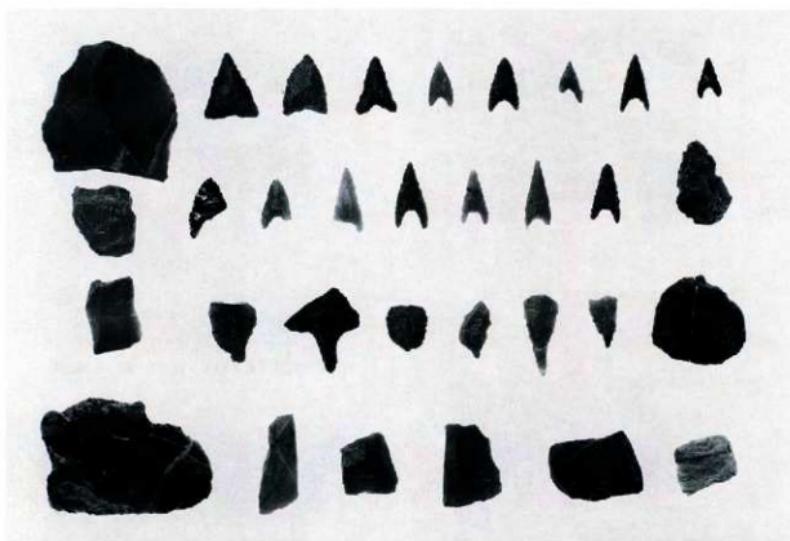


79. 同40 (同2 b類229)



80. 同41 (同3 b類231・232)

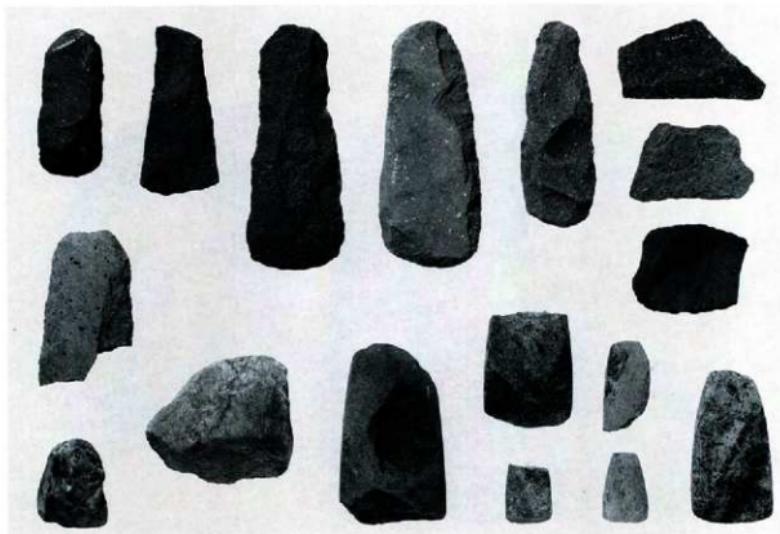
图版22



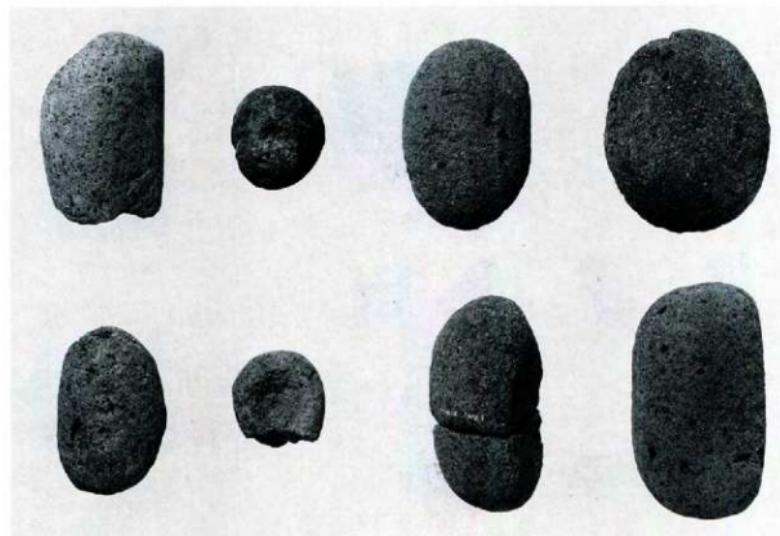
81. 西区Ⅲ层出土石器 1 (一部Ⅳ层出土石器)



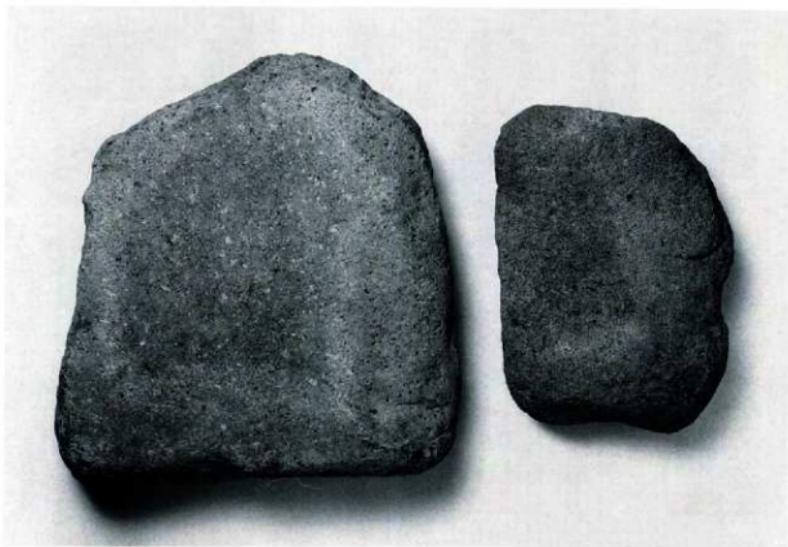
82. 西区Ⅲ层出土石器 2



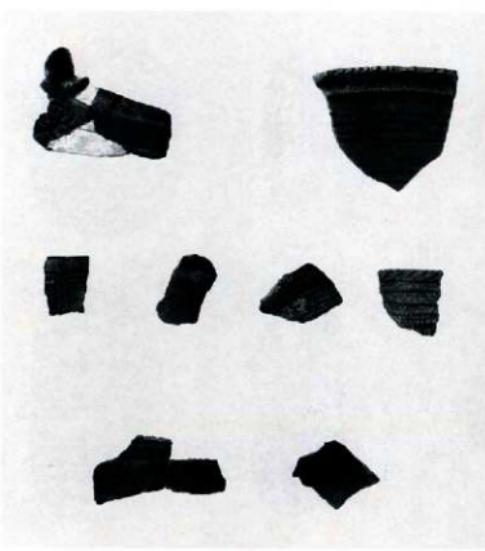
83. 西区III層出土石器 3



84. 西区III層出土石器 4 (一部IV層出土石器)



85. 西区III層出土石器5（石皿）



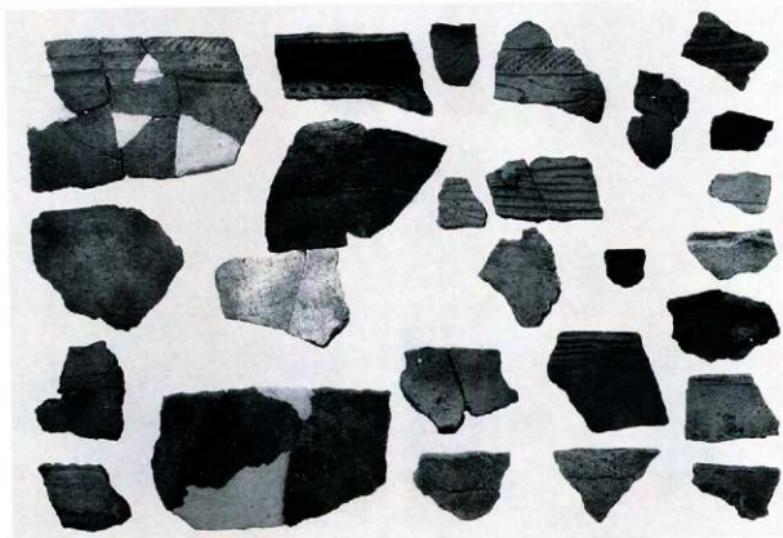
86. 西区V期の土器1



87. 同2(551)



88. 西区出土の土器



89. 西区VI期の土器 1



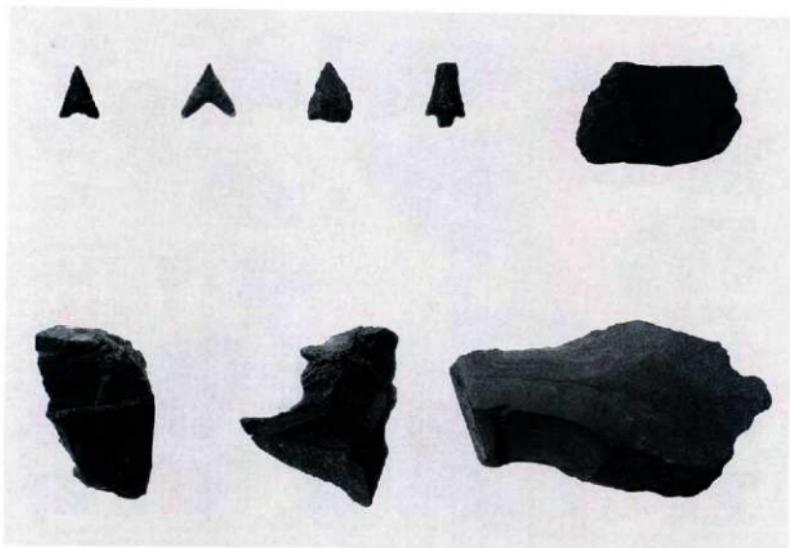
90. 同 2 (554)



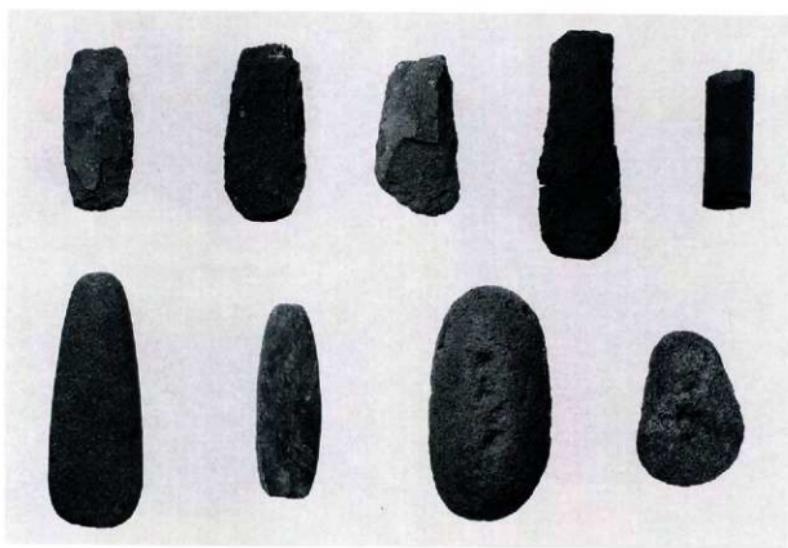
91. 歴史時代の遺物 1 (604)



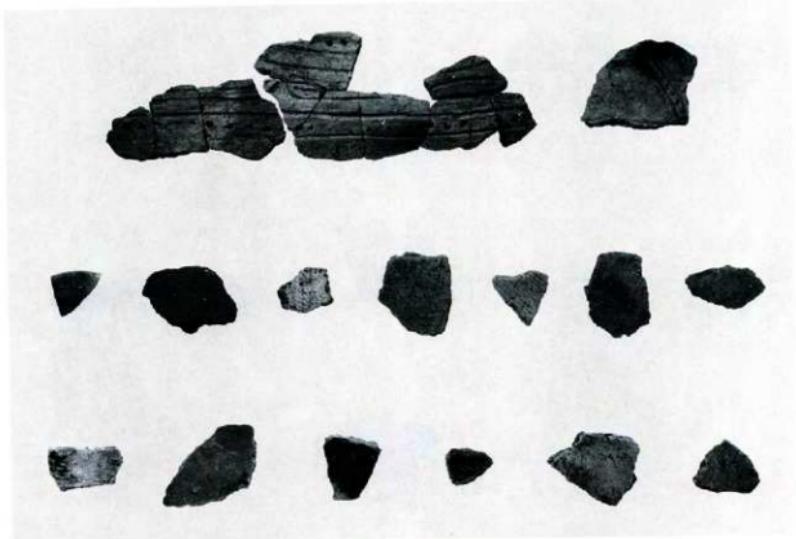
92. 同 2 (605)



93. 西区II层出土石器 1



94. 西区II层出土石器 2



95. 東区の遺構出土遺物



96. 東区遺構出土土器 (611)

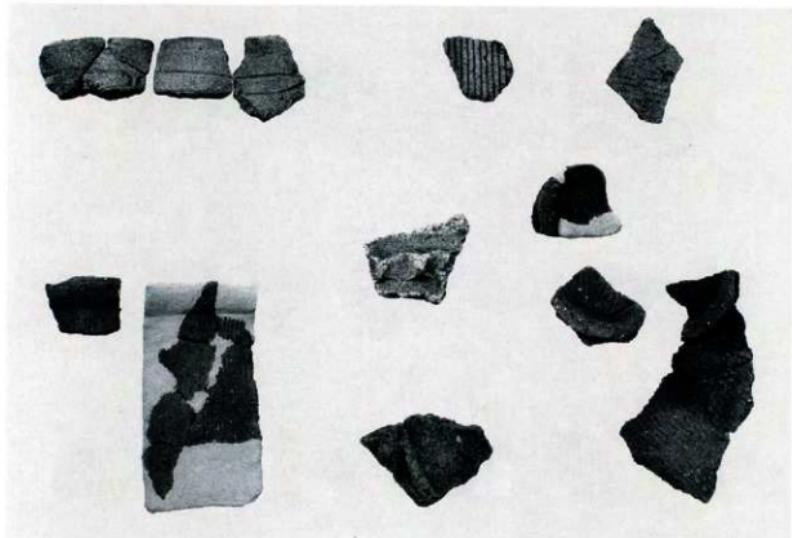


98. 東区I期の土器 (625)

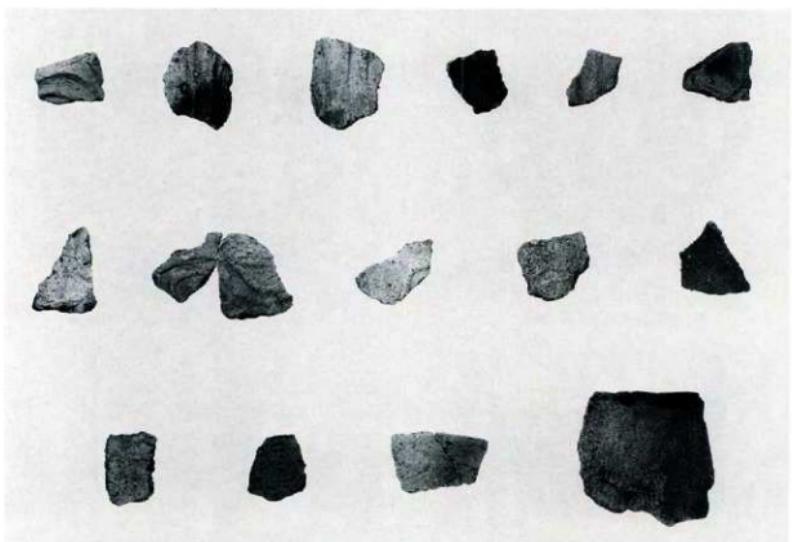


97. 東区遺構出土土器 (610)

図版28



99. 東区III期の土器



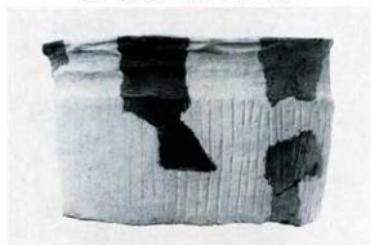
100. 東区IV~V期の土器



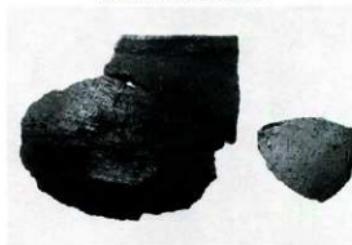
101. 東区IV～V期の土器 (650)



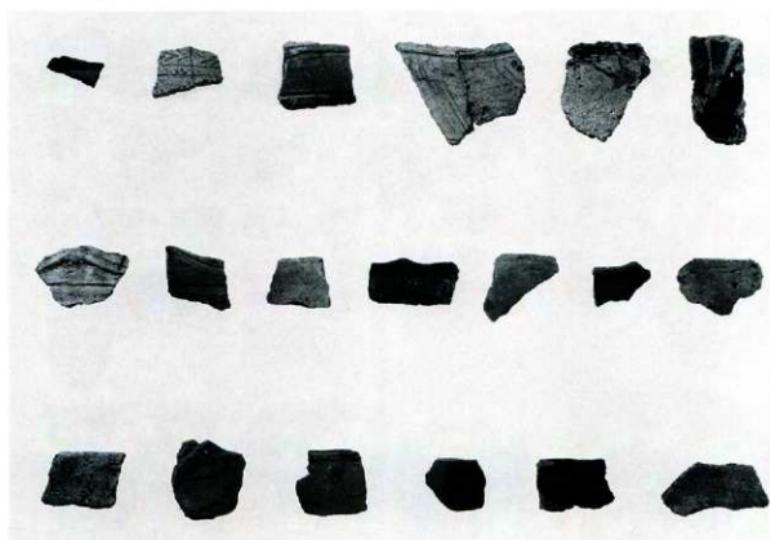
103. 同2 (同2 d類653)



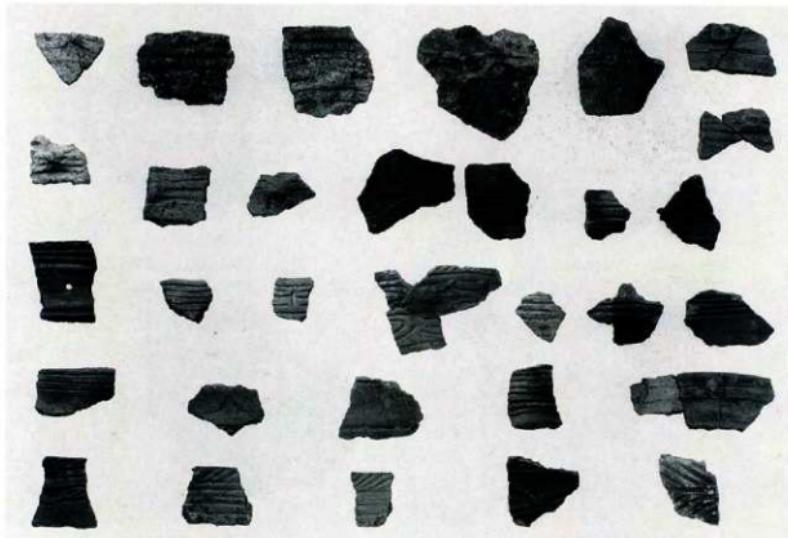
102. 東区IV期の土器1 (第2群2c類651)



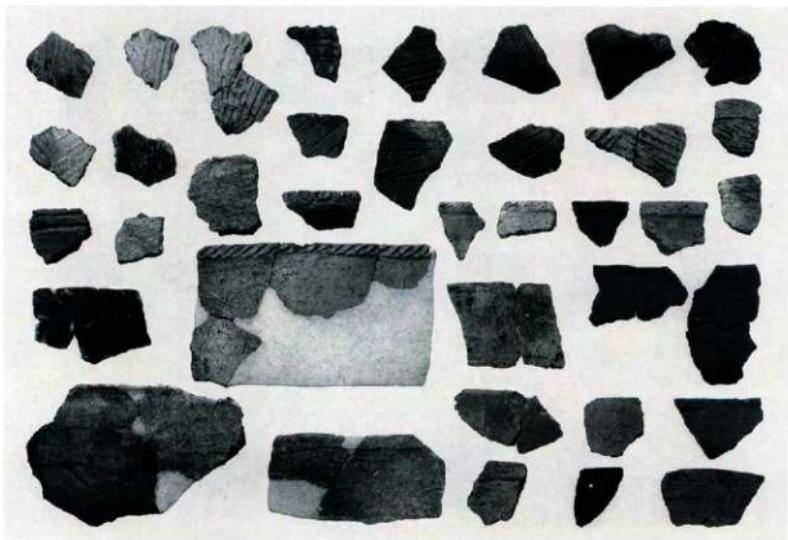
104. 同3 (同3類654)



105. 同4 (第1群)



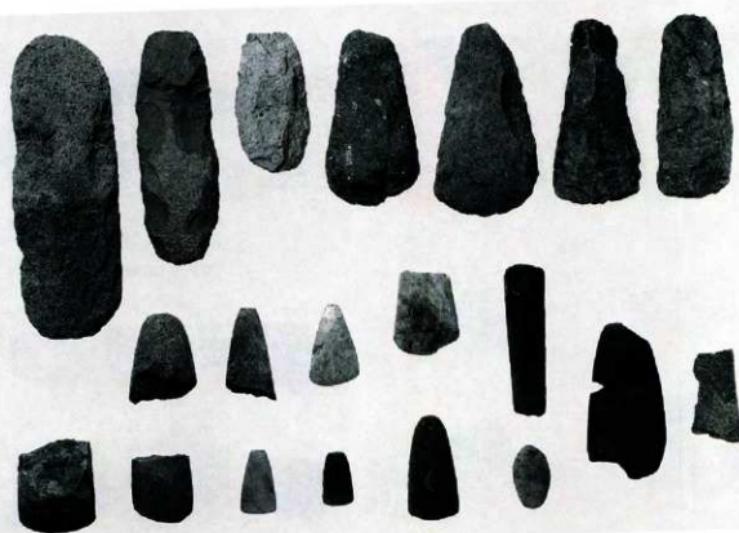
106. 同5 (第2群1類～2類)



107. 同6 (第2群4類・第3群)



108. 東区出土石器 1

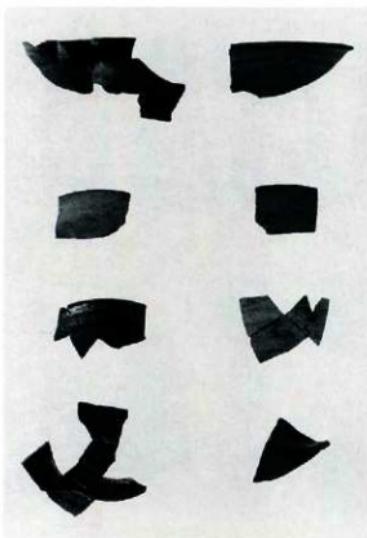


109. 東区出土石器 2

図版32



110. 東区出土石器 3



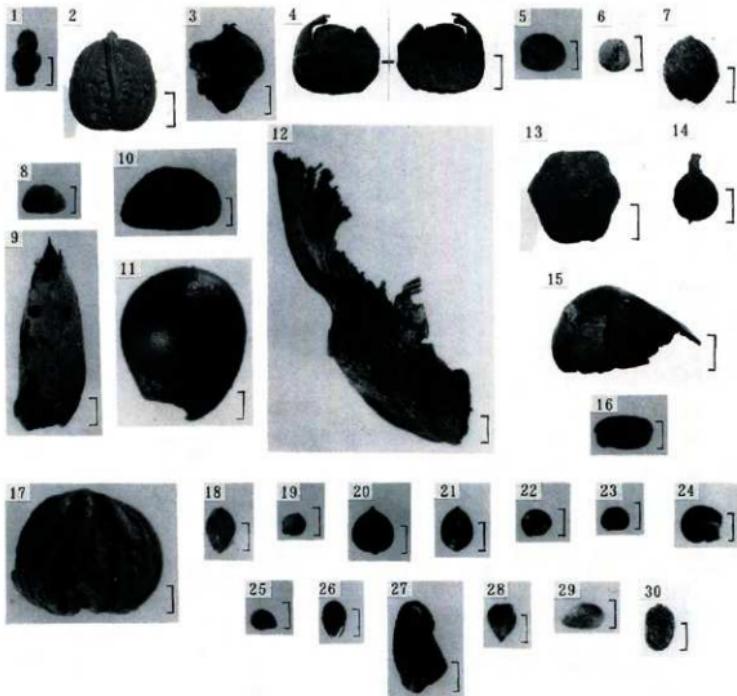
111. 東区出土灰釉陶器 1



112. 東区出土灰釉陶器 2



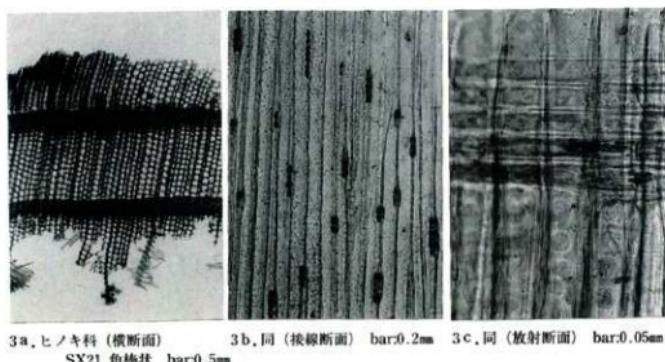
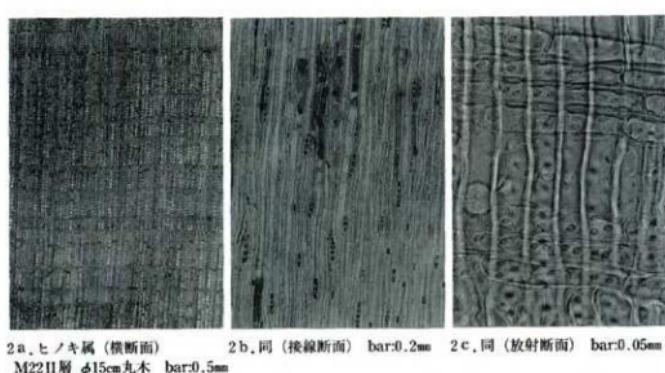
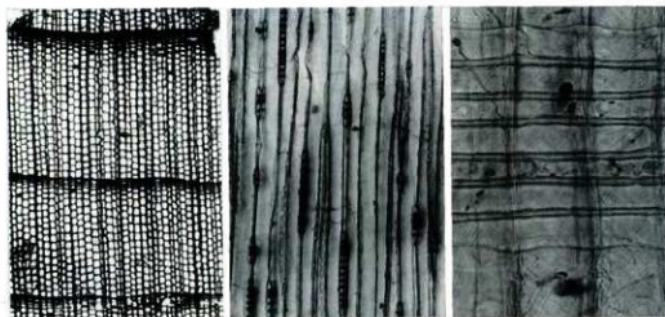
113. 東区出土陶器



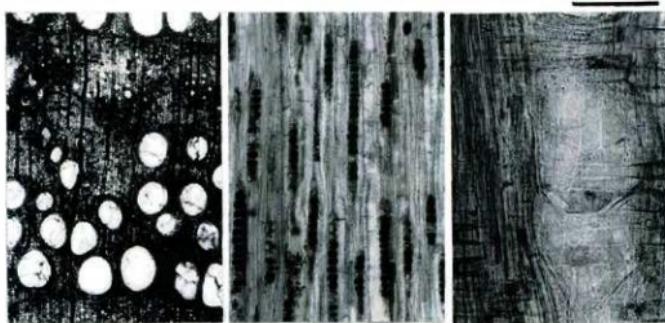
図版33 出土した大型植物化石（スケールは1、3、5、8~12、16~30は1mm、2、4、6、7、13~15は1cm）  
 1. ヒノキ、小枝(SX22) 2. オニグルミ、核(SX21共通) 3. カバノキ属、果実(SX22) 4. クリ、果実(SX21共通)  
 5. クワ属、種子(SX21A) 6. ホオノキ、種子(SX21共通) 7. スモモ、核(SX26) 8. キイチゴ属、核(SX22) 9.  
 フジ属、芽(SX21A) 10. キハダ、種子(SX21B) 11. ミツバウツギ、種子(SX21共通) 12. カエデ属、果実(SX21A)  
 13. トチノキ、果実(SX21共通) 14. トチノキ、幼果(SX21共通) 15. トチノキ、種子(SX21共通) 16. クラノキ、核  
 (SX21B) 17. ミズキ、核(SX21共通) 18. スケ属、果実(SX21A) 19. クワクサ、果実(SX21A) 20. タデ属A、  
 果実(SX22) 21. タデ属B、果実(SX21B) 22. シロザ近似種、種子(SX21B) 23. ナデシコ科、種子(SX22) 24.  
 キケマン属、種子(SX21A) 25. キジムシロ属、オランティナゴ属またはヘビイチゴ属、核(SX22) 26. カタバミ属、  
 種子(SX21B) 27. ツリワネソウ、種子(SX21A) 28. スミレ属、種子(SX21A) 29. ウド、果実(SX21B) 30. キ  
 ランソウ属、果実(SX22)

図版34

図版34 たのもと遺跡出土木材の顕微鏡写真(1)



図版35 たのもと遺跡出土木材の顕微鏡写真(2)



4a, クリ (横断面)      4b, 同 (接線断面) bar:0.2mm    4c, 同 (放射断面) bar:0.1mm  
SX22-① bar:0.5mm



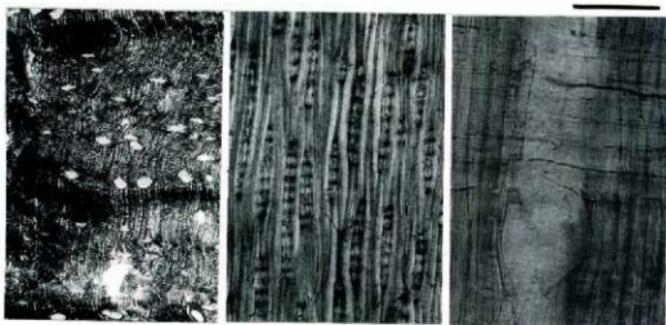
5a, ケヤキ根材 (横断面)      5b, 同 (接線断面) bar:0.2mm    5c, 同 (放射断面) bar:0.1mm  
F10III-② (PLD-201) bar:0.5mm



6a, カツラ (横断面)      6b, 同 (接線断面) bar:0.2mm    6c, 同 (放射断面) bar:0.1mm  
F10III-① bar:0.5mm

図版36

図版36 たのもと遺跡出土木材の顕微鏡写真(3)



7a. トチノキ根材（横断面） 7b. 同（接線断面） bar:0.2mm 7c. 同（放射断面） bar:0.1mm  
SX21 (PLD-202) bar:0.5mm

## 報告書抄録

ふりがな	たのもといせき						
書名	たのもと遺跡						
副書名	丹生川ダム水没地区（五味原遺跡群）埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次	第5集						
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書						
シリーズ番号	第46集						
編著者名	上原真昭 岩田修 古田奈緒子 新山雅広 山形秀樹 植田弥生						
編集機関	財団法人岐阜県文化財保護センター						
所在地	〒500-8708 岐阜県岐阜市司町1(岐阜総合庁舎内)TEL058-(264)-1111(814)						
発行年月日	西暦1998年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在名	コード		北緯	東経	調査期間 調査面積	調査原因
	市町村	遺跡番号					
たのもと遺跡	岐阜県大野郡 丹生川村折敷地	21601	08762	36° 12' 55"	137° 23' 00"	19960430 19961115 1,900m <sup>2</sup>	丹生川ダム 建設事業に 伴う事前調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
たのもと遺跡	集落	縄文 平安	竪穴住居跡1軒 炉穴 1基 水場遺構 2基 焼土跡群 ピット群	縄文土器 石器 土偶 植物遺体 (トチ他) 灰釉陶器	竪穴住居跡は縄文後 期前葉。縄文後期前葉 および晩期の遺構や遺 物が中心。		

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第46集

## たのもと遺跡

丹生川ダム水没地区（五味原遺跡群）  
埋蔵文化財発掘調査報告書 第5集

1998年3月25日 印刷

1998年3月31日 刊行

編集・発行 財團法人 岐阜県文化財保護センター  
岐阜県岐阜市司町1（岐阜総合庁舎内）

印 刷 西 濃 印 刷 株 式 会 社